

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

謠
曲
集
上

野上豐一
田中允郎
解說校註

野上豊一郎(のがみとよいちろう)

明治十六年大分縣生。昭和二十五年歿。明治四十一年東京大學英文學科卒業。文學博士、法政大學總長。主著―能―研究と發見、能の再生、能の幽玄と花等。

田中 允(たなかまこと)

大正二年三重縣生。昭和十二年東京大學國文學科卒業。青山學院大學教授。主著―校本四座役者目錄、日本古典文學全集謠曲、アテネ文庫世阿彌、能樂鑑賞、古典文庫未刊謠曲集等。

日本古典全書

「謠曲集」上 野上豊一郎解説
田中 允校註

昭和三十二年一月二十五日初版發行

昭和四十八年五月三十日第十三刷發行

印刷所 株式會社精興社

發行所 朝日新聞社(東京都千代田區有樂

町・大阪市北區中之島・北九州市

小倉區砂津・名古屋市中區榮)

定價 六四〇圓

目次

解 說 三

一、能の臺本 一七

二、序破急の理論 二三

三、謡曲の種別 三〇

凡 例 四七

本 文 五三

初番目物（協能物）

相生（高砂） 五三

放生河 六〇

白樂天 六六

難波梅 七二

白鬚 七九

矢立鴨 八五

鷓鴣羽（鷓鴣） 九一

吳羽 九七

西王母 一〇三

二番目物(修羅物)

田村	一〇七
屋嶋	一一四
兼平	一三三
忠度	一二九
通盛	一一六

三番目物(鬘物)

軒端梅(東北)	一七三
井幹(井筒)	一七九
野宮	一八五
采女	一九一
夕顔	一九八
江口	二〇三
楊貴妃	二一〇
二人閑(二人靜)	二二六
千壽(千手)	二三三
芭蕉	二三九
定家	二四五
鶺鴒小町	二四三

頼政	一四三
實盛	一四九
朝長	一五七
清經	一六五

關寺小町	二四九
檜墻(檜垣)	二五九
伯母捨	二六二
葛城	二六八
誓願寺	二七四
權(朝顔)	二八〇
杜若	二八五
羽衣	二九一
湯谷(熊野)	二九六
松風村雨	三〇四
源氏供養	三一二
大原御幸(小原御幸)	三二八

謠
曲
集
(上)

野上豐一郎
田中允

解 説

一、能の臺本

謡曲は能の臺本として書かれたものであり、今日でもさういふものとして存在してゐるのであるから、それを正しく讀むにはどうしてもさういふものとして理解してかからねばならない。いひ換へると、謡曲はうたひものとして鑑賞するのが最も正しい讀み方である。うたひものであるから、初めから吟唱に適するやうに措辭も工作されており、節博士ふしはかせの施されてゐない對話の部分とても一定の抑揚でいはれるやうにできてゐるくらゐだから、すべて句法に制限があり、その句法についても、殊に吟唱の部分は、本來七五調を基準とするけれども、またかならずしもそれによらないで、かへつて基準から離れようとする意向によつて構成されたところもあり、それらはみな吟唱の様式によつて變化が生ずるわけで、吟唱の様式は直接はなせ囃子はやしと關係を持つものである。

さうして、囃子は管樂器くわんがくき（笛ふえ）と打樂器だつがくき（小鼓こつづみ・大鼓おほつづみ・太鼓たいこ）によつて奏され、前者は旋律を司り、後者は拍子ひょうしを刻むために打たれるもので、主として吟唱の「時」を支配する。だから、謡曲の詞章は囃子に

ついで、すくなくとも大體の知識なしには、十分の鑑賞はできないであらう。

それだけではなく、謠曲は初めにいつたやうに能の臺本として書かれたもので、それが上演される場合を豫想しないで書かれたものはないはずであるから、ことごとく役者の行動と關係してゐるのである。事實、能の上演を見馴れてゐる讀者は、たとへば、あるクセではシテがどの邊から立ち上つてどんな舞ひかたをするとか、またあるクセではシテは舞臺中央の一定の場所に坐つたきりですこしも動かず、當然自分の物語りすべき詞章を地謡ぢうたひに合唱させてゐるきりであるとか、さういつたやうなことを十分によく心得てゐると、謠曲を読む場合にも、それが單なる文字の羅列として受け取られるのではなく、いちいち舞臺上の役者の行動が實感されるので、ひとつの立體的形像としての演技が想像されるわけであり、したがつてそれに伴ふ影像も音感も容易に再生され、それから興へられる情緒が多過ぎることもなく、すくな過ぎることもなく、その詞章によつて感得されるのである。さうなると、ほとんど理想的な読みかたであるが、ただし、それはすべての讀者に期待できることでもないから、われわれはただ謠曲を読む場合には、すこしでもそれに接近した読みかたをしようと努力することを、讀者に對して希望するだけで我慢しなければならぬだらう。

しかし、さらに立ち入つて考へると、謠曲がさういつたやうに構成されてあることも、決して作者のそのときそのときの思ひつきとか氣まぐれとかでできたものではなく、初めから確乎たる藝術理論を立てて

その方針によつて構想されたものであることを知つたならば、たとへ演技の實際知識には暗くとも、ある程度まで理論的に考へて謡曲を正しく理解する方法も發見しうるであらう。いまそれについてすこし説いて見ようと思ふ。

二、序破急の理論

謡曲構成の理論は、これを序破急じよはきゅうの理論といふ。もとは舞樂と共に中國から學び取つたものであるが、それを能の構成原理として取りあげたのは、室町時代の初期に能を完成した世阿彌ぜあみ元清もときよであつた。あるひは世阿彌の父、觀阿彌くわんあみ清次きよつぐであつたかも知れないが、文獻のうへではつきりと證明のつくのは世阿彌である。世阿彌の書き遺したものにそのことはいろいろの形で出てゐるなかで、最もよく整頓された形で記載されてゐるのは「能作書のうさくしよ」である。

言葉の意味は、序は冒頭の部分、破は表現の細やかなことを意味して主體の部分、急は表現のテンポの急速を意味して結末の部分、この三つの部分によつて能は構成されるのが妥當であるといふのが大體の法則であつて、これは能に限つたことではなく、すべての藝術的表現に適用できるもので、初めの部分は出發したばかりで早く目的の部分へ到達しようとするので長たらしくないやうにし、中ほどの部分は主要部であるから十分の長さを持つてよく、終りの部分はすでに目的を達したのちであるから手短かに切りあげ

る必要がある。これは表現の分量のことであるが、同時に表現の密度もそれに準じて、初めの序の部分はやや粗く、中ほどの主體は最も精緻に（だから破と呼ばれるので、破は本來入破の意で、表現の細碎に入ることをさういつた）、結末の急の部分はその餘勢である。また表現の密度は同時に表現の速さとも一致することは當然の理で、密度の粗い部分は速さが粘らず、密度の細やかな部分は速さが緩漫になり、最後の部分は結末を急ぐので最も急速になる。さういつた三つの部分がまとまつた一つの全體を構成することは表現意欲の自然の發露から來るもので、假りに世阿彌は中國傳來の理論を知らなかつたとしても、當然そのくらゐのことはひとりで理論づけられただらうと思はれる。

かれの理論づけの特長は、それを能の構想に利用して、すこぶる妥當な調和を具體的に示したところに存する。「能作書」によると、一つの能は五つの部分から成立するやうに作られるのが妥當で、初めの序の部分が一段、中ほどの破の部分が三段（それを破の前段、破の中段、破の後段と呼ぶことにする）、結末の急の部分が一段、これを序破急五段と稱して、表現の根本原則となるものである。これをかれの説明にしたがつて、能の形態の本源的な種類である脇能物について具體的に見るとつぎのやうである。

一、序の段Ⅱワキ（ワキヅレ同伴）が次第で登場し、次第、名宣、道行、着ゼリフ。

二、破の前段Ⅱシテが（ツレとともに）一聲で登場し、一聲、サン、下歌、上歌。

三、破の中段Ⅱワキ・シテの問答、掛合、初同（最初の地謡の同吟）。

四、破の後段Ⅱ地謡のクリ・サシ・クセ。(サシはシテが発聲して地謡に謡はせ、引きつづき地謡はクセを謡ふが、クセの半ば過ぎて變調する部分をばシテが誘導する。) それにつづいてロンギ(地謡とシテの掛合)となり、シテの中入。(ツレ退場)

五、急の段Ⅱワキ(とワキヅレ)の待謡。後シテが出演で登場し、サシを謡ひ、地謡の掛合などあつて、舞(神舞など)を舞ひ、キリは地謡と掛合のロンギなどで舞ひ納める。

この五つの部分は、一つの演技を構成するものとして、いづれも重要でないものはない。序の段はワキが開口人としてまづ登場して一曲の調子を準備する部分であり、破の前段は主役が登場する部分であり、破の中段はワキと主役の交渉が始まつて、それに地謡が発動する部分であり、破の後段は地謡が主役に代つて一曲の主題の敘述されるクセを吟唱する部分であり、急の段は初め人間の姿(主役)に假装してゐた神が、その本體を現はしてワキの訪問をねぎらふために舞踊する部分であり、それぞれ重要でない部分とてはないけれども、しかし、最も重要な部分といへば(謡物としては)破の後段であり、また(舞物としては)急の段である。前者は主として耳に訴へる要所、後者は主として目に訴へる要所といふ意味で、世阿彌はそれを開聞・開眼の要所と呼んでゐる。

尤も、それは能が演出される場合のことで、能から音樂的要素と舞踊的要素を取り除いて、單に讀みものとしてその詞章(謡曲の本文)だけを問題にする場合は、開眼の要所は存在を失ふことになる。

つぎに注意すべきことは、上掲の序破急五段の説明は、能のなかでも最も本源的軌範的といふべき種類について一例として述べたのであつて、すべての能(謡曲)がことごとくそれに準じて構成されてあるといふわけではない。かへつて反對に、能(謡曲)はあとからあとからと作られるごとに、すこしでも變化を求め、新奇をねらつて構想された形跡があるだけに、嚴密にいふと、曲目の數だけ構成様式の數があるといへるくらゐである。また段數についても、すべての曲が序破急五段でできてゐるといふわけではなく、世阿彌自身も長いのは六段でもよいし、短いのは四段でもよいといつてゐるくらゐで、まして、そのあとで作られたものにはもつと複雑な構成を持つものもあれば、もつと單純な構成を持つものもあるのはいふまでもない。しかし、いづれにしても、全體を序破急の三部分に區分するやうにできてゐることと、長くなる場合は破の部分が長くなるといふことだけは變りはない。

三、謠曲の種別

序破急の理論は能のすべての表現を支配するグランマーであるから、一曲の構成がその原則でできてゐるといふだけでなく、一曲のなかのどの部分について見ても、みな序破急の原則で表現されるやうになつてゐる。たとへば、クセだけについて見ても、そのなかに序の部分があり、破の部分があり、急の部分があつて、それぞれ序の部分は序の部分らしく、破の部分は破の部分らしく、急の部分は急の部分らしく表

現されなければならぬといふ風になつてゐる。そのほか、クセとか、サシとか、次第とか、一聲とか、下歌とか、上歌とか、さういつた一定の形式のものでなくても、一つのまとまつた部分であればかならずそれは序破急の三段に區分されるやうになつてゐる。たとへば、「安宅」のなかの「勸進帳」について見ると、初めの「それつらつら、おもんみれば……」からが序の部分であり、「爰こゝに中頃なかごろみかどおはします……」からが破の部分であり、「かほどの靈場の……」からが急の部分であり、吟唱のときはその區分が殊にはつきりと區別して表現されなければならない。そんな風にして、一つの首尾完結した部分に限らず、もつと立ち入つていふと、それだけではまとまつてゐないただの一句についても、それが序破急的表現でいはれるやうな習慣さへできてゐる。それほどに序破急の原則は能（謡曲）の表現をやかましく支配してゐるのである。

だから、能が幾番か組み合はされて一つの番組を作成する場合にも、それが同じやうに序破急の理論で裏づけられることになつてゐると聞いても、讀者はよくその理由を理解するであらう。能の番組は三番にも二番にも、あるひは六番にも七番にも編成されうるが、最も妥當な番組は昔から五番といふことになつてゐる。正式の儀禮的な演出ではその前に「翁」を付け、最後に附加として祝言物（半能）を添へるから七番の形式になるけれども、普通の正規の番組は五番にするのがきまりである。

その五番は同時にまた能（謡曲）の種類を表示するものでもあり、序破急五段の原則の適用されたもの

であつて、つぎのやうである。

一 脇能物 序の能

二 修羅物

三 鬘物 破の能

四 四番組物

五 切能物 急の能

脇能物といふのは、初めにワキが(ワキヅレを同伴して)眞の次第といふ儀式張つた淀みない囃子で儀禮的な登場をし、ついでシテが(ツレを同伴して)同じく儀式張つた莊重な眞の一聲で登場し、あとで神としての本體を現はして舞ふもので、随つて神物ともいふ。神のなかには常若の形をした神(一)もあり、蕩たけた形をした神(二)もあり、若い美しい女神(三)もあり、異様な魁偉な形をした神(四)や、また、精悍な物凄しい形をした神(五)もあつて、それらの特長でそれぞれ別別の舞踊を見せる。(一)は神物のなかでも代表的なもので神舞を舞ひ、(二)は老神にふさはしい眞の舞を舞ひ、(三)は女體らしく中の舞を舞ひ、(四)は異邦的な樂を舞ひ、(五)は第二流の神體として働を舞ふ。(働は本來が切能物にふさはしい動作で、能の創成の當初は脇能物では舞はれなかつたのではないかとも思はれる。)脇能物は番組の初番に置かれるのが原則であるから、俗に初番物とも初能ともいふ。

例を挙げると、神舞物(一)には「高砂」(相生)「弓八幡」「養老」などがあり、眞の序の舞物(二)には「放生川」「老松」「白樂天」などがあり、中の舞物(三)には「吳服」「西王母」があり、樂物(四)には「難波」(難波梅)「白鬚」(道明寺)などがあり、働物(五)には「加茂」(矢立鴨)「氷室」などがある。

修羅物はまた軍體物ともいふ。佛教の傳説で、この世で戦争にたづさはつた者は死んで修羅道に墮ち、斷え間のない苦患を見るといはれてゐる。修羅道に墮ちる者は、勝利者と戰敗者との區別がなく、また、人を殺した者と人に殺された者との區別もなく、戦争に参加した者は悉く、そこへ行くやうに運命づけられてゐる。能の修羅物のほとんどすべては源平の武將で、そのなかにも身分の差異があり、剛勇の將軍もあれば、優雅な公達もあり、やや階級の低い部將もあれば、老武者もあり、また女武者もある。といつたやうなありさまであるが、概して、修羅道の苦患に堪へないでその魂魄がこの世に戻つてきて、往來の僧に成佛の回向を願ふといふやうに登場の理由ができてゐるだけに、その心境には楽しんで舞踊するといふ餘裕がないから、舞踊的なものを見せるとしてもカケリを舞ふ(一)くらゐである。それも多くは修羅道の苦患を表現するとか、たまに戦場の勇躍を表現するとかで、またそれと同數ぐらゐのカケリを舞はないもの(二)さへもある。カケリを舞ふにはあまりに悲痛な心情が描き出されてゐるからである。カケリ物(一)の例としては「田村」「屋島」「忠度」「通盛」などがあり、カケリなしの物(二)の例としては「頼

政」「實盛」「兼平」「朝長」「清經」などがある。そのほかに例外として中の舞を舞ふもの(三)が二番ある。平家の公達のなかでも最も優雅な敦盛を主人公としたもの(「敦盛」「生田敦盛」)に限られてゐる。

修羅物は正規の番組の二番目が妥當な場所とされてゐるから二番目物ともいふ。

鬘物は女物ともいふ。男の役者が女に扮装するときの第一の用意は、頭にカツラを付けて女面を被ることであるからこの稱呼が生まれたのである。能の女には若い女もあり、中年の女もあり、老年の女もあり、身分でいふと、高貴な階級の女もあり、歌人才媛もあり、舞妓白拍子もあり、村娘賤女もあり、また、女もあるし、花の精もある。年代でいふと、古い傳説や物語の人物もあれば、現在生きてゐる人物もあるといつたやうに千差萬別であるが、要するに幽玄の情趣を最もよく現はしうる女が最も重要視されるので、どうしても若くて美しい上品な女がそれに適するとされる。さうして、それは舞踊の種類によつても區別することができ、女主人公が序の舞を舞ふものが一番よく幽玄の情趣をあらはすに適し、中の舞を舞ふものがそれにつぐとされてゐる。

しかし、同じ序の舞物にも、囃子に太鼓が缺けると加はるのとによつて區別があり、太鼓の缺けた序の舞物は大小(大鼓と小鼓)の序の舞物といひ、太鼓の加はつた序の舞物は太鼓の序の舞物といふ。笛はどの曲にもかならず加はるから問題とせず、ただ太鼓の加はるか否かによつて區別を立てる。太鼓が加はると調子が花やかに陽氣になるので、それだけ幽玄味が減少するから、幽玄味がすくなくなるとされてゐる。

る。能では、殊に鬘物では、一味のあはれさの感じられる静かなものが最も重んじられる風が昔からあつた。それで、大小の序の舞物（一）が第一位とされる。「東北」（軒端梅）「井筒」「野宮」「芭蕉」「定家」「關寺小町」「檜垣」など。つぎに太鼓の序の舞物（二）には「姨捨」「葛城」「誓願寺」「杜若」「羽衣」などがある。

鬘物の中の舞物は初めは大小物のみであつたが、後になつて太鼓物ができた。大小の中の舞物（三）としては「熊野」（湯谷）「松風」（松風村雨）「草子洗小町」（草子洗）「祇王」があり、太鼓の中の舞物（四）としては「吉野天人」「胡蝶」「初雪」がある。

そのほかにイロエ物（五）として「源氏供養」があり、舞の全然缺けた物（六）としては「大原御幸」がある。

鬘物は正規の番組の三番目に置かれるから、俗に三番目物ともいふ。五番のなかの三番目は中軸で、演出上最も重要な地位であり、破の能のなかでの中心ともいふべきである。

つぎに四番組物は雑多な種類の寄せ集めで、特殊の名稱で呼ぶことのできないものである。つまり、脇能物・修羅物・鬘物・切能物以外のすべての物をここに一まとめにしたもので、序破急の順位でいふと、もちろん破の能に属すべきものであるが、しかも破の中位を過ぎてつぎの急の能に接近してゐるものであるから、幽玄の情趣は幾らか減少してゐるけれども、劇的要素は最も豊富に包含され、それだけ近代興

味には最も適合してゐるものが多いわけである。

四番目物のなかには鬘物に似て幽玄の情趣を表現することを目的とした物として、準鬘物(一)ともいはれるものがある。「小鹽」「雲林院」「西行櫻」「遊行柳」がそれである。これらは主人公が男性でなくて女性であつたら當然鬘物に編入されるはずで、舞では太鼓の序の舞を舞ふ。つぎに準協能物(二)ともいふべき、神體もしくは女神を主人公とした一群がある。「蟻通」「雨月」「三輪」「龍田」「卷絹」の類で、主人公が薦たけた神體であれば眞の序の舞を、女神であれば神樂を舞ふのが特長である。

純粹の四番目物としては、まづ狂亂物がある。これを二つに分けて、一つは女物狂を女主人公とする物(三)、他は男物狂を主人公とする物(四)である。前者の例としては「班女」「雲雀山」「玉臺」「浮舟」「櫻川」「三井寺」「柏崎」「隅田川」「墨田川」「籠太鼓」「百萬」「卒都婆小町」「富士太鼓」「梅枝」などがあり、後者の例としては「蘆刈」「高野物狂」「歌占」「弱法師」「木賊」などがある。物狂は心に悩みがあつて物に觸れ事に臨んで一時的に狂亂の發作を起こすものであるから、いかにも樂しさに舞ひ戯れるといふことはしないのが本意で、原則としてはカケリを舞ふくらゐであるが、例外として、「班女」「雲雀山」などはカケリのほかに中の舞を舞ふとか、「百萬」「卒都婆小町」はカケリの代りにイロエを舞ふとか、「富士太鼓」「梅枝」は樂を舞ふとか、男物狂では「蘆刈」はカケリのほかに男舞を舞ふとか、「高野物狂」はカケリのほかに中の舞を舞ふとか、「弱法師」はカケリの代りにイロエを舞ふとか、「木賊」は序の舞を

舞ふとか、さういつた變化がそれぞれの曲柄に應じて求められてある。

狂亂物よりもさらに遊びの要素の勝つてゐるものとしては、遊狂物（五）と遊樂物（六）がある。前者は狂亂物に似てゐるが、自ら意識して遊狂するのが特色であり、遊狂することに別の目的を持つてゐる。後者は遊び戯れることそれ自體が目的で、いかにも楽しさうに遊び戯れるのが特色である。舞踊についていふと、前者は羯鼓かちこの舞まひを舞ひ、後者は樂がくを舞ふ。前者の例としては「東岸居士」「自然居士」「花月」などがあり、後者の例としては「枕慈童」（菊慈童）「天鼓」「邯鄲」「唐船」などがある。後者は唐土の人物を主人公とする。そのほかに、一種の遊樂物として「錦木」「松蟲」があり、これは哀愁の情緒で黃鐘わうしゅう早舞はやまひを舞ふのが特色である。

つぎに執心物（七）がある。「女郎花」「船橋」「通小町」「烏頭」（善知鳥）「阿漕」の類で、冥界へ去つた靈魂がこの世に執着を残して浮かびきれないで、この世に歸つて來て地獄の苦しみを訴へ、成佛の回向を僧侶に願ふといふ筋で、舞臺的には地獄の苦しみを見せるところが見せ場である。舞踊はカケリ以上のものは舞はない。

それに似てもつと惡意に充ちたものとしては怨靈物（八）がある。死靈もあり生靈もあるが、いづれにしても、特定の人物に怨みを晴らさうとするのが特色で、「藤渡」（藤戸）「綾鼓」「戀重荷」「鐵輪」「葵上」「道成寺」などがその例である。心境が心境だから舞は舞はない。ただし「道成寺」だけは例外として亂

拍子と急の舞が舞はれる。

つぎに人情物ともいはれるもの(九)がある。これは最も劇的な主題を持つものの一つで、親子、友愛、主従などの人情が契機となつて事件の展開を示すもので、「景清」「俊寛」「攝待」「接待」「鉢木」などのやうに、舞踊的なものはないのが原則であるが、例外として「藤榮」と「望月」は、前者には中の舞と羯鼓の舞が、後者には獅子舞がある。

四番目物のなかで最も特殊なものは現在物(一〇)である。主人公はすべて男性であり、しかも史上の人物であり、それが現在この世に生きてゐる形で直面(假面なし)の姿で現はれ、ワキはかならず主人公の同時代人で、對立的關係に立ち、事件の展開に伴つて主人公が男舞を舞ふか、あるひはワキを相手に切組(格闘)を演じるかするのが條件である。男舞を舞ふ現在物としては、「春榮」「盛久」「安宅」「七騎落」「小袖曾我」「元服曾我」「小督」「滿仲」「仲光」などがあり、切組物としては「夜討曾我」「大佛供養」(奈良詣)「橋辨慶」「正尊」などがある。切組物は室町初期にはあまりなかつたものである。

最後に切能物は名稱のやうに番組の結末に置かれるもので、また五番目物とも呼ばれる。序破急の順位でいふと急の能で、演出も終局を急いでゐる情勢の下に演じられるから、押しなべてテンポが急迫してゐて、ゆつくりした舞などはないのが當然で、働を舞ふもの(一一)が多い。なかには働さへ舞はないものもある。主人公の仁體について區別すると、神體物(「國栖」「藍染川」など)、龍神物(「春日龍神」「大

蛇」など、怪神物（「小鍛冶」「殺生石」「鶴」など）、天狗物（「善界」「鞍馬天狗」など）、準天狗物（「熊坂」「烏帽子折」など）、鬼神物（「野守」「皇帝」「昭君」「鶉飼」「松の山鏡」など）、鬼畜物（「黒塚」または「安達原」「紅葉狩」「大江山」「土蜘蛛」）、羅生門」など）、亡靈物（「船辨慶」「項羽」など）がある。そのほかに、舞を舞ふものも幾らかある。早舞物（二）と特殊の舞物（三）がそれである。前者の例としては「海人」「當麻」「融」などがあり、後者の例としては「山姥」（山伯母）、「石橋」「鷲」「猩猩」などがある。

四、謡曲の作者

謡曲はだれが作ったか。その問題については、能の家にはかならずしも正確ではないとしても二三の傳書が保存されてゐたはずであるけれども、一般にはほとんど全く知られてゐなくて、能役者といへども知らない者が大部分である。まして一般の人にはさらにその知識がなく、ただ漫然と能役者は昔から技藝だけにたづさはつてゐたけれども、謡曲を書くことはできなかつた（江戸時代の多くの能役者はさうであつたし、今日の能役者もさうであるやうに）だらうといふ假定の下に、謡曲はいづれ當時の文筆の人、多くは僧侶に書いてもらつたものに相違ないと想像されてゐた。徂徠や白石のやうな學者ですらそれ以上の知識はなかつたと見えて、謡曲は元曲に倣つて當時の僧侶が書いたものだと信じてゐたやうである。

しかし、事實はさうでなく、謡曲はほとんどすべて能役者、殊に初期の能役者の手によつて作られたものであることが一般に知られるやうになつたのは、明治四十二年吉田東伍博士によつて世阿彌の遺著が校訂されて發表されてから以後のことに屬する。世阿彌について見ても、かれはすぐれた役者でもあり、同時にまたすぐれた作者でもあつたし、理論家でもあつた。かれの父觀阿彌もすぐれた役者であり、作者であつた。世阿彌の嫡男十郎元雅もさうであつた。そのほかにも當時の役者で謡曲を書いた者はすくなくなかつた。さういふことは後世の人が考へたほどむづかしいことではなかつたと見え、「能をせんほどの奇才あらば申樂を作ること易かるべし」と世阿彌は「花傳書」にいつてゐる。また同書に、「自作ならば、ことば、振舞案のうちなり」ともいつてゐる。これは競演の場合に自作を數多く持つてゐる者の有利をいつた言葉である。世阿彌一家に限らず、當時は自作の能を持つてゐた者はすくなかつたことが想像される。觀阿彌時代には、近江猿樂の道阿彌(大王)とか田樂の喜阿彌(龜夜叉)とかいふ作者があつたことが知られてをり、世阿彌時代には猿樂の井阿彌とか同じく榎並の左衛門とかいつたやうな作者もあつた。そのほか、名はいちいち知られてなくとも、能があつた以上、謡曲が作られてゐたことは當然で、おそらくみな役者によつて作られてゐたものと推定してよからう。なんとすれば、世阿彌の書いたものを見ても、能をするほどの者が謡曲を作ることはいさまりきつたことのやうに記してあつて、昔はさうでなかつたといふやうな記載はどこにも發見されないから。

けれども、今日の能の原型は観阿彌が大成し、それを世阿彌が繼承して完成したものであるから、観阿彌、世阿彌を境界として、それ以前の謡曲とそれ以後の謡曲をはつきり區別してよいのである。事實、またそれ以前の作品は今日そのままの形では一つも残つてゐない。たとへば、現行曲「松風」について見ても、初め田樂の喜阿彌が「汐波」と題して作り、それを観阿彌が改作して「松風村雨」と題して演じてゐたのを、さらに世阿彌が改作して同じく「松風村雨」と題したのが、そのうち簡略して「松風」と呼ばれるやうになつたのである。さういつたやうなことは數多く行はれた。さうして、古作は今日すでに原形を留めてゐないのであるから、それについて論ずることは不可能である。

謡曲作者に關する文獻としては、從來「能本作者註文」(大永四年、吉田藏人兼將)、「二百十番謡目錄」(明和年間、觀世左近元章)があり、そのほかにも江戸時代に幕府に對して能の各宗家から答申した書類にも作者の記入があり、今日残つてゐるものには享保六年に觀世大夫、金春八左衛門等から答申した「書上」カキアガヒがあり、また近年發見された「歌謡作者考」「異本謳曲作者」があり、「自家傳抄」(永正頃、金春系統の傳書)があるが、それぞれ傳承を異にして意見の一致しないものが多い。それらに比べて最も信頼の置けるのは世阿彌の談話を二男元能が筆記した「世子六十以後申樂談儀」のなかの作者に關する事項である。それとあはせて、さらに有力な資料は世阿彌みづから筆録した「五音」である。すくなくとも記録類によつて謡曲作者を判別しようとするには、これらの調書によるほかはない。

それらによつて謡曲作者とその作品についてやや安全と考へられる推定をするとつぎのとほりである。
 (ただし、ここにあげるのは現行曲のみにとどめる。現行曲本文も後から後からと有名無名の手で改修されたものがすくなくないので、ここに記載する作品がすべて原作のまま今日におよんでゐると思ふことは正しくない。)

喜阿彌(龜阿彌) 汐汲(觀阿彌の「松風村雨」の原形) 女郎花(現行曲「女郎花」の原形)。

金春權守 昭君。

井阿彌 通盛 吉野靜。

榎竝(江波)の左衛門五郎 柏崎(現行曲「柏崎」の原形) 鶺鴒(現行曲「鶺鴒」の原形)。

觀阿彌清次(元弘三年—至徳元年) 伏見(金札) 布留 松風村雨(現行曲「松風」の原形) 靜(現

行曲「吉野靜」の原形) 卒都婆小町 自然居士 求塚 四位の少將(通小町) 高野(現行曲「高野

物狂」の原形) 嵯峨物狂(現行曲「百萬」の原形) 須磨源氏(現行曲「須磨源氏」の原形)。

その他 淡路 草子洗小町 卷絹 鉢木 の作者を觀阿彌に擬する説がある。

世阿彌元清(貞治二年—嘉吉三年) 相生(高砂) 弓八幡 養老 志賀 代主 御裳濯 老松 放生

川 白樂天 佐保山 吳服 西王母 右近 難波梅(難波) 道明寺 富士山 田村 屋島 箴 忠

度 經政 頼政 實盛 兼平 知章 朝長 清經 敦盛 軒端梅(東北) 井筒 野宮 采女 佛原、

夕顔 落葉宮(落葉) 二人靜 定家葛(定家) 鸚鵡小町 關寺小町 檜垣 姨捨 葛城 誓願寺
杜若 羽衣 湯谷(熊野) 松風村雨(松風) 妓王 大原御幸 雲林院 西行櫻 蟻通 三輪 班
女雲雀山 水無月祓 飛鳥川 花筐 三山 櫻川 三井寺 逆髮(蟬丸) 百萬 梅枝 蘆刈 木賊
東岸居士 花月 天鼓 邯鄲 錦木 船橋 女郎花 烏頭(善知鳥) 阿漕 藤戸 綾鼓 戀重荷
砧 葵上 竹雪 俊寛 景清 春榮 國栖 春日龍神 鶴 車僧 野守 泰山府君 鍾馗 舍利 項
羽 海人 當麻 融 須磨源氏 山姥。
そのほかにも 松尾 源大夫 巴 江口 源氏供養 富士太鼓 籠太鼓 土車 滿仲(仲光) 鐵輪
藤榮 檀風 鷺 を世阿彌作とする説がある。現行曲ではないが本集に採録の 鶉羽 も世阿彌作と
される。

觀世十郎元雅(一永享四年) 隅田川 歌占 弱法師 盛久。

一説には 石橋 も元雅作とする。

外山又五郎吉廣 唐船。

與江(横尾) 光久 浮舟(世阿彌作曲)。

日吉佐阿彌(一長祿二年) 橋辨慶 望月 殺生石 藤 六浦 雷電?。

宮増(永享ごろ全盛) 氷室 逆矛 攝待 放下僧 小袖曾我 元服曾我 夜討曾我 錦戸 調伏曾我

鞍馬天狗 烏帽子折 雷電? (妻戸) 大江山。

金春禪竹氏信 (應永一二年—文明初年頃) 加茂 竹生島 和布刈 楊貴妃 千手 芭蕉 小鹽 雨月

龍田 加茂物狂 玉鬘 松蟲 小督 忠信 大會 熊坂 谷行。

竹田法印定盛 (應永二八年—永正五年) 善界。

内藤河内守藤左衛門 俊成忠度 半菴。

太田垣能登守忠説 (文安頃に活躍した連歌を好んだ武人) 槿。

觀世小次郎信光 (永享七年—永正一三年) 九世戸 玉井 胡蝶 吉野天人 遊行柳 安宅 大蛇 張

良 皇帝 紅葉狩 羅生門 龍虎 船辨慶。

金春禪鳳元安 (享德三年—永正末年頃) 東方朔 嵐山 生田敦盛 初雪 一角仙人。

觀世彌次郎長俊 (長享二年—天文十年) 大社 輪藏 江島 正尊。

金剛彌五郎 鳥追舟 玄象 (絃上)。

金剛又兵衛長頼 内外詣。

觀世左近元章 梅。

徳川齊昭 要石 (鹿島)。

作者不明の分 繪馬 寢覺 鶴龜 (月宮殿) 鶺鴒 岩船 身延 住吉詣 雪 室君 鱗形 菊慈童

(枕慈童) 枕慈童(觀世流) 三笑 水無瀬 道成寺 七騎落 木曾 現在忠度 禪師會我 笛之
卷 關原與市 咸陽宮 藍染川 現在七面 小鍛冶 合浦 現在鶴 第六天 松山鏡 土蜘蛛 飛雲
黑塚(安達原) 草薙 碓潜 松山天狗 猩猩 大瓶猩猩 等。

五、謠曲作風の變遷

以上を通觀して知られることは、時代の推移とともに謠曲作風のいちじるしく變化したことである。

觀阿彌以前のことは、手がかりとなるべき資料も乏しいことであり、しばらく問題外に置くとして、能謠曲の大成者なる觀阿彌の作風から見て行くと、觀阿彌の時代には大和・近江を中心として近畿諸國(伊賀・伊勢・丹波・河内・攝津など)には多くの猿樂の座があり、一方京都と奈良には田樂の座があり、いづれも能樂の専門的職業組合として盛んに演技を張行してゐた。初めは鎌倉時代中期以後の傳統によつて田樂が壓倒的勢力を持つてゐたが、觀阿彌の進出したころには猿樂が十分にそれに對立し得るほどに實力を持つやうになり、殊に近江猿樂と大和猿樂が顯著な發展を示し、近江猿樂日吉の座の犬王道阿彌の如きは品位のある藝風をもつて、田樂本座の喜阿彌(かれは音曲の先祖と呼ばれた)と並び稱せられた。田樂にはそれ以前本座に一忠といふ名人があり、殊に物真似にすぐれて觀阿彌も青年時代にはかれに傾倒してゐた。太平記に貞和五年六月京都四條河原で大がかりな勸進田樂の催された記載があるが、そのとき、本

座の一忠が新座の花夜叉を向うにまはして「戀の立合」をしたことは「申樂談義」にも述べられてある。しかし、一忠の時代が過ぎ、田樂の喜阿彌、近江猿樂の道阿彌時代となると、大和猿樂が新興の勢力をもつて進出し、その先端に立つてゐた觀阿彌(結崎三郎清次)が不世出の才能をもつて次第に能樂界を風靡する素地を作り上げた。それまでは田樂・江州・和州と呼ばれてゐた順位が顛倒して、和州・江州・田樂と呼ばれるやうになつた。

觀阿彌の第一の強みは大和猿樂の主張する物真似(一種の寫實主義)を藝道の基本としたことであつた。それに對して近江猿樂は幽玄(一種の情緒主義)を標榜して、藝風を美しく優雅に表現することにもつばら力を注いだ。物真似と幽玄についてのそのころの認識は、世阿彌の書き遺したものにくはしく出てゐるからここでは省略する。能藝を美しく品よく見せることはもちろん大事なことであつたけれども、物真似の堅實な基盤がなければ力強いものとなることはできなかつた。それが、近江猿樂が次第に衰微して、大和猿樂が命脈を長く保つた理由である。大和猿樂の四座である結崎(觀世)・外山(寶生)・圓滿井あるひは竹田(金春)・坂戸(金剛)は、そのうち、江戸時代初期に一流として加入した喜多をあはせて、事實、今日まで六百年近い命脈を保つてゐるのである。その基盤を築き上げた觀阿彌の功績はいくら稱揚しても稱揚しすぎるといふことはない。その功績はかれが和州本來の物真似のうへに、江州の幽玄を取り入れて、能を堅固な美しいものに仕立てたことである。それだけでなく、能を在來のものからほとんど別箇なものに

改造しようとする大きな野心をもつて、あらゆる點に手腕を揮つたが、殊に顯著なことは音曲の方面で根本的な改革を行つたことであつた。そのために當時のあらゆる音曲のなかから、取り入れられる限りのものはそれを取り入れることに努力した。その代表的な功績は、當時としては一種の俗謡として低く見られてゐた曲舞くまひの曲節を思ひ切つて取り入れ、それによつて謡曲の調子が面目を一新して新鮮なものになつたことである。いひかへると、従來はもつぱら七五調の諸律こゑたせの小歌節のみで謡はれてゐたのが、わざと句格を整理しないで間で生かして行く建前の曲舞節くまひがしを攝取したために、變化の多い音曲となつたのである。今日の謡曲のクセの部分はその改革の記念である。

觀阿彌のあとを承けて觀世流の棟梁となつた世阿彌元清は、大和猿樂の傳統によつて物眞似を基本としたことは勿論であるが、父觀阿彌とちがふところは、かれが、幽玄に對する價值づけの特にいちじるしかつたことである。觀阿彌は物眞似第一主義者で、それを修飾するために幽玄を加味したと認められるが、世阿彌は幽玄第一主義者で、物眞似はそれを近江猿樂のやうに浮薄なものにしないための保鞏工作として用ゐたやうに思はれる。そのことはこの父子の作品を見るとよく理解される。物眞似に重きを置くか、幽玄に重きを置くかは、單に自作能の作風だけで判断すべきではなく、いづれも役者であるから、主としてその藝風によつて批判しなければならぬが、舞臺藝術は空間に描かれて、つぎの瞬間には消え失せる性質のもので、それを實見しないものには正確なことはいへない筈であるが、幸ひにも觀阿彌の藝風につい

てはそれを見た息子の世阿彌の批判が遺つてをり、また、それを見なかつたけれども當時の故老たちに聞いて知つてゐたと思はれる禪竹の書き物が遺つてをり、また、世阿彌の藝風についてはそれを見た禪竹の書き物が遺つてゐるので、われわれは大體の見當はつけられるのである。それによると、觀阿彌の藝風は物真似は各種にわたつて幅廣さと大きさをもち、それに加へて幽玄はまた無上の優雅さを發揮した人のやうに想像される。世阿彌も大體その行き方を踏襲したやうであるが、一つは時勢の必要に影響されたためもあつただらうが、あまりに幽玄を重要視してそれがため幽玄そのものは觀阿彌以上に出たとしても、物真似の幅廣さにおいては、あるひは父におよばなかつたのではないかと思はれる。しかし、また、かれは父よりも長命であつた。觀阿彌は五十二で死んだが世阿彌は八十一まで生きてゐたといふ理由もあつて、かれの藝劫は後では非常な深さに達し、幽玄を突き抜けた闌位とか寂びとか位なき位とか、おそらく觀阿彌の體驗しなかつた境地をも知つてゐたと思はれる。つまり能の到達しうる最奥のところまで行つたやうである。さうしてそれを表現するために鬘物、殊に老女物を作つた。

世阿彌のこの行き方は嫡男十郎元雅に最もよく傳へられたが、かれは四十前後で死んだので、それを舞臺的に繼承する者がなくなつた。女婿の金春禪竹(元雅の義弟)も元雅に指導され、世阿彌に傾倒した人ではあつたけれども、かれは藝術本位からすこし禪味の方へ逸れて、よくいふとその方面で獨自の天地を拓かうとしたやうでもあり、わるくいふと、いくらか癖のある物の見方をしてゐたやうでもある。そのこ

とは、かれの書き遺した「歌舞髓腦記」「六輪一露之記」などによつて最もよく知られるが、かれの作つた作品からもまた感知される。

しかし、室町時代の初葉において、一方、觀阿彌―世阿彌―元雅―禪竹とつぎつぎにさういつた傾向で能を續けたとき、他方でもみなさういつた傾向に向いてゐたであらうかといふと、かならずしもさうではなく、むしろ反對に、世阿彌の最も侮蔑したやうな行き方をしてゐた者が多かつたやうである。そのことは「花傳書」や「申樂談義」などのなかに世阿彌が慨歎の言葉をしばしば發してゐることによつても想像される。それは藝道の根本義に觸れる問題で、堅實な物真似の習得には精進することなく、幽玄の情趣の理解にも腐心しないで、ただ一時の虚名を貪り、一夕の嬉笑を迎へて、名利を求めることだけに汲汲たる徒輩が多かつたことは昔も今も變りはないと見える。しかし、そのなかに於いて、ともかくも、大和猿樂の四座がよく藝統を守つて行つたことは、たとへ將軍諸侯の後援があつたためだといへ、はなはだ頼もしいことであつたといはなければならぬ。

しかし、時勢の推移とともに藝術的表現志向の變遷するのはやむをえないことで、いくら世阿彌が幽玄第一主義を唱導したとしても、いつまでも永久に幽玄の情趣とそれに適した單純な構想のみで人心を満足させることのできないのは當然で、世阿彌といへども、いな、世阿彌なればこそ、そのことをよく知つてゐて、能は當世當世に應じて適合させて行くべきだといふ意味の言葉を遺してゐる。世阿彌が幽玄第一主

義を唱導したのはかれの時代がそれを要求したのだとも見る事ができるので、もし、かれが別の時代に生まれてゐたならば、また別の主張をしたかも知れない。それを考へないで、いつまでも室町時代の幽玄第一主義に固執しようとするのは正しい態度とはいへないであらう。

それはともかく、世阿彌の歿後半世紀ほど過ぎると、時代の新しい要求は新しい作品を作らせるやうになつた。作者としての代表者は觀世小次郎信光とその息子の彌次郎長俊であつた。小次郎信光は音阿彌元重の第七子で、技藝鍊達の人であつた。音阿彌は世阿彌の弟四郎の子で、十郎元雅の競争者であつたが、元雅早世の後には將軍義教の庇護によつて能界の實權を握り、同時に世阿彌は不遇となつた。音阿彌は作能はしなかつたやうであるが、舞臺人としては絶大の名聲を博してゐた。小次郎信光の新作は前章記載の世阿彌の幽玄第一主義からはかなり遠く離れたもので、要約していふと、構想が劇的に複雑化し、役者の行動に重點を置くやうに構成され、殊にワキに行動の餘地を十分に與へ、能をシテ・ワキ對立の形で見せるやうに工作したところが特色であつた。それは作能史のうへでは一つの大きな革新で、從來多くは見物人の代表者のやうな役目しか與へられなかつたワキを完全に一箇の役者として押し出したわけであり、實質的に主役本位の一單位の演技であつたものを、二單位の劇的演技に變更したものといふことができる。もつとも、この傾向はかならずしも小次郎信光の創意ではなく、かれより一時代前の日吉の佐阿彌や宮増もかれの先驅者として多くの見本を示してゐるのである。しかも、單に劇的演技としてのみ見れば、

むしろ宮増などの方が却つてより多く前進してゐたともいへるほどであつたが、小次郎信光は大和猿樂の特色である幽玄の情趣は、わづかながらも保存されるだけは保存しようと努めた形跡があり、かつ、大觀世の權守たるかれの地位が物をいつて、大和猿樂の一派ではあつても、極めて微力な宮増座の大夫などよりは、その作品を立派に演出させ、隨つて有名にするのにどのくらゐ便利であつたか知れない。しかし、後世になると、それよりも作品その物が物をいつて小次郎信光の方がやはり重要視された。

小次郎信光の息子の彌次郎長俊は、父にも劣らない多能の技藝者であつたが、かれは専門の脇師となり（小次郎信光も一時は兄正盛を助けて脇師を勤めてゐた）、そのために、父の作品同様、ワキの活動する能を作つた。ワキの役のことだけではなく、構想その物に少しでも新奇な味を出さうといふ方面に努力を注いだことは、前記の作品表を見ただけでも首肯されるであらう。小次郎父子だけではなく、禪竹の孫である同時代の金春禪鳳にもその傾向は顯著に現はれてゐる。たとへば、題材を異邦に求める場合は從來は唐土に限られてあつたが、禪鳳はそれを天竺の傳説に求め、能の世界を波羅奈國の山中、ベナレス附近に持つて行つたりもした。

そんな風にして作能の新運動も一時は活氣を呈したが、やがて戰國時代となり、桃山時代を経て、江戸時代に入ると、能・謡曲は古典視されて、創作的意欲は止まり、ひとへに古格を墨守することだけを努めるやうになつてしまつた。もつとも、太閤秀吉が自分を主人公とする新作能を作らせて上演したこともあ

り、下つては十五代觀世元章が加茂眞淵あるひは加藤枝直に助けられて、自作一番を上演曲目に編したこともあつたけれども、それらは大勢に關係のないことで、能・謡曲の革新運動はふたたび起らなかつた。それだけ、また一方、能・謡曲の技術的習練には大いに見るべきものがあつたことは事實で、これは江戸幕府が能を幕府の式樂として採用し、能役者を一種の官吏として待遇して生活の保障を謀つたことが與つて力のあつたことはいふまでもない。

六、流派の分立

能の流派は室町時代には大和四座と呼ばれて觀世・金春・寶生・金剛がそれであつた。他國には、近江三座とか伊勢三座とか丹波三座とかがあり、大和にもこの四座のほかはまだ群小の座もあつたが、代表的なものは大和四座であつた。今日の能は大和四座の系統であるから、そのほかの座についてはここでは觸れない。

大和四座のうち觀世と寶生は先祖は兄弟で、兄が寶生、弟が觀世であつた。この兄弟は出身は伊賀であつたから、のちに江戸時代に流派の確立が幕府に公認されたときも、戸籍名簿には生國伊賀となつてゐた。寶生と觀世の間に生一きいちといふのがあり、三人兄弟のうち、寶生と生一は早く大和に座を立て、古くから大和の居住者であつた竹田の座(金春)とともに活動してゐた。末弟の觀世は初めは伊賀の小波多こはたに座を立

ててゐたが、のちに大和に轉出し、結崎ゆふざきの地に座を立てて結崎三郎清次と名のつて活動した。これが後日の觀阿彌で、その實力と聲名が大きくなるとともに大和猿樂の統率者のやうな地位に推し出された。

金剛は鎌倉から出て大和猿樂に加入したのであるが、これは金春と密接な關係を持ち、金春が興福寺の神事（春日の神事）に奉仕したやうに、法隆寺に隸屬してゐた。しかし、春日は大和全體の總社のやうなものであつたから、その神事には金春を筆頭として四座ともすべて奉仕してゐた。奉仕するといつても、祭禮のときに演能するだけで、そのほかは自由に興行してゐたやうである。

猿樂は初めは神社とか佛寺とかに奉仕する習慣があり、それからの収入が生計の基本になつてゐたやうに思はれるけれども、そのころは神社の勢力が次第に衰微して、能藝者を扶養するには財力も微祿して行つたので、能藝者は武家の方に依存するやうになり、殊に足利義滿は皇室が舞樂をかかへてゐたやうに、能を護り立てて娛樂してゐたから、能藝者が武家に依存し得る情勢は十分に出來てゐた。それ以後、歴代の足利將軍はみな能の庇護者であつた。觀世・寶生が大和から移動して京都を本據とするやうになつたのもさうした事情からであつたと思はれる。しかし、金春・金剛は依然大和に居住してゐたので、いつしかこの二組の間には藝風の疎隔が生じ、觀世・寶生を上懸かみがかりと呼び、金春・金剛を下懸しもがかりと呼ぶやうになつた。その語意はおそらく初めは都會風の機構・情趣、地方風の機構・情趣といふやうなところから出て、前者が後者を貶しめて呼びならはしたものであるが、次第に原意から離れて、單なる流派的差別をいひ現はす

言葉となつた。しかし、寶生は觀世の蔭に隠れ、金剛は金春の蔭に隠れて、とかく影が淡らいでゐたから、上懸といへば觀世、下懸といへば金春が代表するやうになつてゐた。さういふ時代が長く續いて、江戸時代に入つて能の格式が制定されたときも、諸流の筆頭には上懸の代表者なる觀世が置かれ、つぎに下懸の代表者なる金春が据わり、そのつぎに上懸の寶生、下懸の金剛がつづき、江戸時代、秀忠のときに一流として取り立てられた喜多が最後に置かれて、四座一流または五流と呼ばれるやうになつた。喜多は藝統からいふと金春・金剛と密接な關係を持つてゐたので、當然下懸に編入され、結局、上懸二流・下懸三流といふことになつて江戸時代を通し、明治維新のさい能界は一時ひどい打撃を蒙つたが、ともかくもまた復活して今日におよんでゐる。もつとも、その間に大正年間に觀世から梅若が分離して一流を立てた。この梅若は昔は丹波猿樂の系統であつたが、その後久しく觀世に併合されて一分派のやうな形で續いて來た。梅若は現在では觀世流梅若派を稱してゐる。

江戸時代初期における流派の確立は、同時にそれぞれの藝風の特徴を發揮させるやうに助長した。それは主として音曲と舞踊の方面に顯著な表現様式を作り出させる結果となつたが、そのことは互ひに技を練つて競争するといふ効果もあつたけれども、また、第二義的のことまでも異を樹つて自派の特徴を誇らうとするやうな風をも産んだ。たとへば、假面のごときも、各流宗家には室町時代以來の重代の物が大事に保管されてあり、殊に赤鶴とか龍右衛門とかいつたやうな古典面打の作品は本面と稱して特別に大事にす

る習慣があつて、それを幕府調査の答申にも書き上げ、觀世太夫所持三十七面、金春太夫所持四十二面、寶生太夫所持二十六面、金剛太夫所持三十二面、喜多七太夫所持十三面といふやうなことになるつてゐたが、そのなかには強ひて體面上數を揃へたもので、果たして名稱通りの眞作であつたかどうか疑はしいものもなくはないやうである。また、假面のなかでも女面は特に際だつて目だつものだといふので、「四座の女面」と稱して各座それぞれ自慢の本面を看板にして、觀世は越智作の女面を、金春は龍右衛門作のこゝろもて小面を、寶生は増阿彌作のぞうのせん増女を、金剛は孫次郎作のさしぢぢ孫次郎を、それぞれ藝風をも代表させるものとして標榜してゐたが、近代になるとそれも取り替へられて、觀世は河内作のわふをんな若女を、金春は龍右衛門作小面を、金剛は孫次郎作の孫次郎を、喜多は大和作の小面を、「五流の女面」と稱してそれぞれ標榜してゐた。これらはすべていづれも異を樹てようとする意向を持つものであつた。

さういつたやうにして各流派がそれぞれ特色を出さうとする努力の最も顯著に示されたものは音曲であり、それも發聲法とか曲節の扱ひ方とかだけでなく、謡曲の詞章にまで異を樹てる風があつた。一二の例を挙げると、「松風」のワキの出は、下懸では初めに次第があるけれども、上懸では次第がなく、いきなり名宣なのみりをいふとか、「忠度」の待謡の詞章は流派によつて全く別の詞句であるとか、「望月」のサシの前のクリの詞章は流派によつてあつたりなかつたりするとか、そんな例は枚舉に遑ないほどであり、そのほか、部分的に辭句の異同が多く、殊に四番目物などではコトバの異同が甚だしく、流派ごとにみな違つてゐる

といつてもよいほどである。これは同一流派の古本と近代本とを比較して見ても出入の多いことから推して、單に傳承の誤りといふやうなことではなく、必要に應じてか、あるひは故意に異を樹てようとしてか、ある時期にかなり大きな辭句の改削を行つたものと見なさなければならぬ。結果から見ると、改善されたものもあれば、改悪されたものもあるが、役者や謡の師匠は幼少のころから自派の詞章と曲節を暗誦してゐるので、假りに諸流の音曲的統一を企てるとしても容易に實行は望めないほどに異同が甚だしくなつてゐるのである。

辭句詞章のことは措いて、發聲法や曲節のことは、同一流派内では傳承が正しく行はれてゐるかといふと、それも時代と人によつてさまざまの變遷の跡を示してゐる。現にわたくし一個の見聞によつても、同じ流派の謡ひぶりで、明治ごろと大正のころと今日とではかなりひどく變遷してゐる例を知つてゐる。事實についていふと、一流の表現の基準者となるべき家元の代るごとに、いくらかづつ、あるひは甚だしくそれが變化して行くのはやむをえない事情と認めなければならぬ。それから類推して行くと、どの流派でも、半世紀一世紀の經過の間には、徐徐にはあるとしても、相當に變化するもので、まして謡曲曲節の成立した室町時代の音曲と今日のそれとは、ほとんど想像もおよばないほどの變化があつたことが推定される。しかし、それは主として調子とかテンポとかのことで、根本の曲節は割合に變化してゐないのではないかとも考へられる。といふのは、世阿彌が「申樂談儀」や「五音」のなかで書き遺した曲節に關す

る記事とか、世阿彌自筆と信じられる謡曲本文などを見ても、さういふことが考へられるからである。

いままで述べたのはシテ方がたのことについてであるが、能・謡曲では、シテ方に對してワキ方でも本來それぞれ特有の表現法を持つてゐたはずである。室町時代にはさういふことはなかつたと思はれるが、江戸時代初期に幕府によつて能の統制が行はれた時、シテ方各流派に對してそれぞれ專屬のワキ方が指定され、それが幕府瓦解のときまで續いてゐた。すなはち、觀世には福王・進藤しんどうの二流が、金春には春藤流しゅんどうりゅうが、寶生には寶生流ほうじやうりゅう（下懸寶生流）が、金剛には高安流たかやすが、いづれも專屬してゐた。喜多には專屬のワキはなかつた。そのほか囃子方・狂言方も、それぞれ各シテ方の流派に專屬の者が指定され、シテ方宗家はそれらを皆扶持する責任があつた。明治以後はその制度が崩れて、三役といはれるワキ方・囃子方・狂言方は解放されてしまつたので、それだけでも幕府時代のやうな統制はつかなかつたわけである。

それならば、ワキ方はその附屬するシテ方とどの程度に表現の上の協調を保つてゐたかといふと、ワキ方はシテ方に專屬してゐたことゆゑ、演出上の調和はもとより期待される限り完全に行はれてゐたとしても、しかし、その間に、シテはシテの調子を保ち、ワキ方は別にワキとしての調子を保つといつたやうな差別ができてゐて、それがよい調和を作つてゐたのである。謡の發聲法に昔から横堅わやうけんといつて、ワキは抑へた調子で幅廣くうたふ横わやうの聲をもつて、シテの調子の一段と高いやや細い堅じゆんの聲にあしらひ、シテの謡を引き立てるやうにする習慣ができてゐる。單に聲だけのことでなく、動作についてもシテとワキの間に

はさういつた對照的な種別が立てられてあつた。もしさうでなくて、ワキは單にシテの手輕な者にすぎないといつたやうな在り方であつたら、ワキはワキではなくて、一種のシテヅレになつてしまふであらう。それはワキ本來の存在理由を危くする結果にもなる。それゆゑ、ワキの流派にはワキ特有の表現法を持つた謠曲の定本が別にできてゐたのである。

七、謠本の刊行

謠本が刊行されるやうになつたのは江戸時代初期に入つてからのことで、それまでは筆寫本だけが行はれてゐた。筆寫本の最古の見本としては、世阿彌自筆の「松浦の能」(應永三十四年)「布留の能」(同三十五年)「阿古屋松」が觀世宗家(國寶)に保存されており、また世阿彌が金春禪竹に書いて與へた「柏崎」(盛久)(應永三十年)、「タタツ」(同三十一年)、「江口」(同年)、「雲林院」(同三十三年)、「知章」(同三十四年)が金春宗家の手を離れて大和生駒の寶山寺に所藏されてあるのが最近に發見された。これらのみなそのころの習慣として全部片假名がきで綴られ、詞章のほかには、吟唱者の役名(僧、法師、女、ヲトコ、ゼウ、モリヒサ、ツチャ、ヲカシ、同音など)と吟唱様式の指定(次第、一セイ、サン事、下、上、クセ、クドキ、ハル、クル、コトバなど)と、および、極めて部分的に節附の譜が加へられてあるだけで、全體としては白文といつてよいほどに節博士が附いてゐない、すこぶる原始的な形式である。おそら

く、詞章を一見するとフシはそらんじてゐるから自然に口をついて出て來たもので、特に注意を要する部分のほか節附の必要はなかつたものであらう。これは後世になつても、今日においても、職分（玄人）の者はみなさうであることが原則である。

とにかく、初めは謠本は吟唱の臺本としては甚だ不完全なもので、専門家の單なる心おぼえとして書き綴られたやうなものにすぎなかつた。それが、やや完備した曲譜が全體に施されるやうになつたのは近世に入つてからで、多分、素人、といつても地位の高い素人に筆寫してやる習慣ができてからのことであらう。そのころは、もはや片假名がきではなく、原則として平假名がきとなり、適宜に漢字を交へ、吟唱様式の指定もややくはしく、曲譜の記號も流派によつて次第に特色を示すやうになつて來た。もちろん、それは宗家の大夫が原本を作り、必要に應じてそれを筆寫して人に與へたり、また人がそれを借りて複寫したりしたものだと思はれる。能筆の人が内百番全部を筆寫するやうなことも流行した。三藐院本さんみょういんほんと呼ばれる毛利家舊藏の金春流謠本百二番は、近衛流書道の始祖近衛信尹（永祿七年—慶長一九年）の筆寫本で、現存百番筆寫本の最も古い物の一つである。同じころ、いくらか年次が下つて、豊臣秀頼書寫として傳へられた謠本家藏の「西王母」は、寛永十年日爪忠兵衛宗政の奥書を持つ零本ながら、當時上流階級者の稽古本の一つの見本として役立つ。

謠本がやや大量的に刊行されるやうになつたのは元和・寛永以後に屬するが、それ以前慶長年間にもす

で刊行されたものを見ることが出来る。従來の通説によると、いはゆる光悅本(觀世流)が刊行謄本の最初のものとしてされてゐた。それは嵯峨に居住する角倉了以の子素庵(元龜二年—寛永九年)の出版にかかると、一に角倉本ともいひ、光悅風の書體(素庵は書道においては光悅の門弟であつた)をもつて製造した木板活字を用ひ、用紙に雲母を引き、特殊の華麗な表装を凝らしたもので、謄本(最初は百二番)とともに他の多くの古典をも刊行し、書誌學的には嵯峨本とも呼ばれてゐる。しかし、嵯峨本には刊行日附がなく、その點明確を缺くが、大體において慶長十年前後かと推定される。

それに比べてやや古く、しかも刊行年次の明確なものに車屋本(金春流)があることが明らかになつたのは極めて最近のことである。車屋本といふ名稱は鳥養道晰(初めの名は宗晰)が、生涯のある時期に堺の車の町に居住して車屋を營んでゐたので、俗に車屋道晰と呼ばれ、その筆寫に成る謄本が車屋本と呼ばれてゐたものといはれてゐる。かれの書體は尊圓法親王を流祖とする御家流の一分派で、鳥養宗慶に始まる鳥養流の流を汲むもので、天正のころ、かれはすでに能筆の聞こえがあり、謄は當時全盛を謳はれた金春大夫(禪曲)に師事し、豊臣秀次の内衆として「謄鈔」編纂の仕事にも關係してゐた。かれは自分の筆蹟を木板活字に起こして百番の謄本をいはゆる整版として刊行する計劃を立て、慶長五年から實行に移した。初めは三番五番と徐徐に刊行したものと見え、森末義彰氏の研究によると、山科中納言言經の「言經卿記」同年正月二十三日の條には、道晰が「三輪」「老松」「蟻通」の三番を持參して言經が祝着の挨拶

を述べ、三月二十日には道晰の長男新藏が「相生」「浮舟」「玉鬘」「邯鄲」「通小町」の五番を届け、同二十八日には同じく新藏が「源氏供養」「野の宮」「忠度」の三番を届けてゐる。さうやつて翌年二月には新刊三十番がまとまつたので、言經卿の手を経て後陽成天皇に献上した。すると三月五日に女房奉書をもつて御嘉納の趣が傳へられ、それに言經卿の添狀が附いて道晰に下賜された。

これに依つて、車屋本の最初の三十番は慶長六年春には刊行されたことが明らかにされたわけで、今日においては刊行年次の確認される最初の謡本と認められてゐる。

車屋本の名を記載した最も古い文獻としては、天和三年の序文を持つ「堺鑑」があり、それによると車屋道晰は車屋道説と誤記され、金春大夫の弟子で、堺車ノ町中濱に住んで、謡本を自筆で板行し、世にそれを車屋本と呼ぶ、とあり、もとは七十五番であつたのを増訂して百番とした、とある。いはゆる内百番なるものはそれから始まつたといふ説を「高砂増々抄」は裏書きしてゐる。内百番といふのは、後で外百番が出来てからの名稱で、初めはただ百番と呼んでゐた。最も耳近く親炙されてゐる百番の意味で、それについて耳近く親炙されてゐる百番を「百番の外百番」(略して外百番)といひ、あはせて「内外二百番」といひ、これだけあればどの流派でも大がい事は缺かなかつたし、「世間流布之板行二百番」とそれを稱してゐた。(外百番の刊行は、觀世流は明暦年間、金春流は貞享年間。)さうしてそれ以外の謡本をば「番外謡」と呼んでゐた。番外謡の刊行は貞享三年に「二百番之外百番」二十冊が上梓され、元禄二年に「三百

番之外百番」が、さらに同十一年に「四百番之外百番」が上梓され、結局五百番が上梓されたわけである。そのなかには一度も上演されないもの、かつては上演されたことはあつたが廢曲となつたものも含まれてゐた。なほそのほかにも多くの番外謡があり、それらについて調査した人には丸岡桂、齋藤香村、田中允の三氏があつたが、田中允君は三人の最後の人だけに、調査が最も精密であり、その研究によると、謡曲の今日までに作られた總數は約三千番、實物の現存してゐる分だけでも約二千番といふことである。

敘述が先き廻りしてしまつたが、謡曲の最初の刊行本である車屋本の名はその刊行とともに有名になつたもので、それ以外に鳥養道晰自筆本のまとまつて現存してゐるものにはつぎの七種がある。

一 吉川元光氏所藏本、百二十番(五番綴二十四冊)、用紙鳥の子、胡蝶綴、文祿五年春中上旬、鳥養沙彌識語。

一 吉川元光氏所藏本、百十二番(五番綴乃至六番綴二十一冊)、小型本、附、曲舞三十番(一冊)、曲舞の卷末に文祿四年宗晰の署名。箱の蓋に「自筆自抄車屋謡之本百二十冊」と記してある。

一 野上豊一郎所藏本(もと加藤嘉明家所藏本)、百番(一番綴百冊)、用紙鳥の子、胡蝶綴、元箱附、箱の蓋に「車屋謡本百冊」の古い紙が貼られてある。

一 晬道文藝氏所藏本、四十六番(三番綴乃至二番綴十六冊)楮紙袋綴、宗晰所持本。(重要美術品指定には金剛流謡本としてあるけれども、金春流とすべきである。)

一 高安吸江氏所藏本、九十一番（五番綴十八冊内一冊六番綴）用紙鳥の子、胡蝶綴、文祿四年端月から慶長三年三月に互る沙彌宗晰の識語。

一 高安吸江氏所藏本、六番（三番綴二冊）慶長二曆季冬下旬沙彌道晰識語。

一 田中允氏所藏本、五十番（五番綴十冊）用紙鳥の子、胡蝶綴、枅型本、慶長頃寫。

なほ車屋本の刊本は、百番揃つたものは發見されず、整版本活字本の二種があり、前者には吉川元光氏所藏本七十一番（二番綴三十四冊、三番綴一冊）、同所藏本三十五番（五番綴七冊）、江島伊兵衛氏所藏本八番（一番綴三冊、五番綴一冊）、高安六郎氏所藏本五番（三番綴一冊、二番綴一冊）、後者には江島伊兵衛氏所藏本十九番（一番綴十九冊）などが知られてゐる。

車屋本の研究については、久しく暗中摸索の形であつたが、江島伊兵衛氏の「車屋本之研究」（昭和十九年十一月刊）は初めて車屋本の本體を分明ならしめた好著である。

金春流の車屋本に對して觀世流の光悅本（嵯峨本）は、刊行の年次（慶長）もあまり後れてなく、裝釘の豪華なことにおいては遙かに立ちまさつてゐる。これには製本に數種あり、厚様雁皮紙を貼りあはせて具引雲母摺模様を施した胡蝶綴の上製本を初め、厚紙袋綴の竝製本にいたるまで、すくなくとも八種を數へ得るが、一番綴百冊（百番）を原則とする。書體は光悅風で、角倉了以の子素庵（光悅の弟子）の筆を活字にしたものといはれる。觀世流謄本は初めは御家流で書かれたが、刊行の當初光悅流となり、後近衛

流となつた。

しかし、車屋本にしても光悦本にしても、數寄者の好みで出されたやうなもので、宗家認定の定本といふものではなかつた。さういつた形式のものは初めは存在しなかつたのであるが、さういつた形式で初めて出版されたものは、元和卯月本である。元和六年卯月日、觀世左近大夫暮閑の署名花押をもつて、「右百番之本者我等直傳石田少左衛門章句付依望(？)板起猶以令清書加奥書畢」と奥書をしたもので、光悦本にもまがふほどの豪華な装幀を持ち、鳥の子胡蝶綴の整版本で、内百番を完備したものである。暮閑といふのは觀世九代目(實は十代目)の宗家左近忠親、のちに身愛と改め、黒雪と號した、江戸初期に活動した人で、金春禪曲の同時代人であつた。石田少左衛門はかれの門人で、書は師匠とともに光悦について學んだといはれる。元和卯月本は少左衛門の書寫を黒雪齋暮閑が裏書きしたものである。

しかるにその以前に觀世流謠本として、黒雪本と呼ばれるものがすでに刊行されてゐた。木活字版で奥附に「くわんぜこくせつものしやうくのうつし」とした朱印が押されたもので、様式は異なつたものが三種ほどあり、日附を缺いてゐるけれども、慶長十五年以後(左近身愛はその年に黒雪と改めた)元和初年までの刊行だらうと推定されてゐる。これにはのちに寛永五年(戊辰)の再刊もあつた。

元和卯月本について寛永卯月本が刊行された。寛永六年卯月日として、「右百番之本觀世左近大夫入道暮閑章句付以加奥書之本寫之畢」と奥書があるが、暮閑(黒雪)はそのときすでに死歿してゐた。

それ以後、謡曲の刊行は次第に頻繁となり、寛永十年の道伴本以後は、従来の詞章節博士のほか、間拍子の記入された刊行本が出るやうになり、下つて明暦年間には觀世の外百番が刊行されることとなり、後れて貞享年間には金春の外百番も刊行され、それで上懸を代表する觀世と、下懸を代表する金春の謡本は、いづれも二百番を原則として刊行を重ねてゐるうちに、上懸の寶生は寛政年間に、下懸の喜多は安永年間に、いづれも刊行された。しかし金剛だけは舊幕時代につひに刊行を見るに至らなかつた。

八、車屋本採用の理由

謡本の刊行は昔は今日のやうに版權に束縛されることなく、かなり自由に行はれてゐたけれども、次第に宗家の公認を權威あらしめるやうになつたのは、主としてフシフシ附つの統一が要求されるやうになつてからの結果であつた。同時に詞章の統一といふことも顧慮されたことはいふまでもない。

しかし、當初はかならずしもさうではなかつた。室町初期のことは今日明確にわからなくなつた點がすくなくないが、初めに或る流派で或る曲が創作されると、それが次第に他の流派でも採用され、上演を續けて行くうちに、詞章節拍子に異同を生じたのもあつたであらうし、故意に修正したものもあつたであらうし、同じ流派のなかでも多少の出入を免れなくなつたといふ事實もある。その結果、今日どの流派の本文が原作を最も忠實に保存してゐるかといふことは、容易に決定されない状態となつてゐる。それを決定

するには、諸流の謠曲本文を對比して、できる限り多くの古い資料を集めて、嚴正な綿密な原典批判を行はねばならない。まだ、しかし、さういつた研究の行はれないのは遺憾である。

今日まで諸種の述作に謠曲本文が引用される場合、申しあはせたやうにみな觀世流の謠本から採用されるのは、觀世流が長い間五流の筆頭として能界を代表する地位に置かれ、隨つて最も一般的に行きわたつてゐたといふこと以外にほとんど何等の理由もないことである。觀世流の本文が他の諸流、たとへば金春流の本文より特に正確に保存されてゐるかどうかはすこしも證明されてゐないのである。もつと具體的に事實についていふならば、ある曲は觀世流においてよく傳はり、他の曲は金春流においてよく傳はつてゐる、といふこともあるだらうし、また、ある曲は觀世流においてひどく變更され、他の曲は金春流においてひどく變更されてゐる、といふこともあるだらう。だから、われわれはいつも觀世流の本文だけについて検討するといふのは妥當でない。觀世流と並んで、ある時期にはそれ以上に重んじられてゐた金春流の本文をも検討して見ることは、すくなくとも研究者にとつては必要なことでなければならぬ。それは能・謠曲の完成者なる世阿彌の傳統が、同じ觀世を名のつても、むしろ仇敵のやうな間柄となつた音阿彌の系統(いまの觀世流は音阿彌の系統)よりは、世阿彌の女婿であつて、世阿彌の後繼者なる十郎元雅の手から相傳を受けた金春禪竹の系統(いまの金春流はその系統)の方にかへつてよく傳はつたかも知れないといふ問題は別としても、觀世はそののちさまざまの事情で本文改訂の必要に迫られたことがすくなくな

つたといふことをも考慮に入れて見なければならぬ。それらのくはしい説明は別の機会にゆづるとして、いづれにもせよ、謡曲の原典を常に或る一流の本文についてののみ検討するのは妥當でないといふことだけは確實に斷言し得られる。

さういつた理由から、このたび日本古典全書の刊行が計畫された時、初めわたくし等と一緒に謡曲を擔當するはずであつた能勢朝次君は、金春流の本文を探らうではないかと提言し、それにはわたくしの持つてゐる「車屋本」を底本としようではないかと勧められ、わたくしもそれならば底本が手近にあつて十分に自由に使用することができるので、さういふことに決定した次第である。

車屋本の本文は現行金春流謡曲の本文とはかならずしも同一でない。同一でないどころか、殊にコトバの部分などにはかなり大きな異同がある。曲によつては、三百年の年月が、金春流のやうな變化のすくない事情にあつた流派においてさへ、これほど著しい變化を生ぜしめたものかと驚かれるほどである。變化してゐる部分について見ると、概して昔の表現はいかにも素樸で鷹揚な調子であつたことを感ぜしめられる。他流に較べると現行金春流の本文についてもそれは感じられることであるが、車屋本についてはそれが一層顯著に印象される。車屋本は秀吉がそれを謡つて舞つてゐたときの金春流の本文であるから、さういふことを思ひめぐらして見ると多少の感懐なしとはしない。

この車屋本に收められた曲目は、「鶴鷓羽」(鷓羽)「權」の二番(現今廢曲)を除くと、たいがい他の

流派にはあるものであるが、それにも拘らず、現今の金春流がそのなかから「鸚鵡小町」「檜垣」「伯母捨」「大原御幸」「東岸居士」「攝待」「元服會我」「皇帝」「松の山鏡」を失つてゐるのは惜しいことで、むしろ失つた者の責任とすべきであらう。

凡例

- 一、謡曲の活版に附せられたものは、從來そのほとんどが上懸（觀世・寶生）に屬する觀世流であつたから、その重複を厭ひ、下懸（金春・金剛・喜多）系統の車屋本を複製することとした。
- 二、底本には野上豊一郎藏の寫本を用ゐ、江島伊兵衛氏藏の整版本、同古活字本、田中允藏の寫本をもつて校合し、校異はいちいち頭註に記した。
- 三、野上本は總べて百番であるが、これを便宜上五番立てに分類し、上卷には初番目物から三番目物までの四十二番を収載した。
- 四、學術上の立場から原本の體裁を損じないやうに、かつ普及を目的とする本全書の立場から難讀とならないやうに、この對立する兩條件を満たすために校訂に苦心した。
- 五、右の趣旨の下に、原本の體裁を改めたのは左の諸點である。
 - (イ) 濁點は原本に一切なく、すべて編者が補つた。
 - (ロ) 用言の語尾の送假名は原本に省略されてゐる場合がしばしばあり、そのままでは通讀にも不便であり、かつ誤讀の恐れもあるので、これらは總べて補つた。

(ハ) 原本の假名遣ひは定家假名遣ひの影響が著しく、これらは總べて歴史的假名遣ひ(最近制定の新假名遣ひに對しては舊假名遣ひまたは古典假名遣ひとも呼ばれる)に改め、かつなるべく漢字を宛てた。その度數の少いものはいちいち頭註に記したが、頻繁に現はれるものはその繁を厭うて、左に一括して示すこととした。括弧内は訂正。(五十音順)

あをぐ(仰ぐ) うふ(植う) うへる(植ゑる) をひて(おいて) をふ(追ふ) 感動詞あふ(おう) あふむ(鸚鵡) 形容詞おかし(をかし) おがむ(拜む) をく(置く) をくる(遅る・送る) をこたる(怠る) おさなし(幼し) おさむ(治む) おし(惜し) をす(押す) をそし(遅し) をそる(恐る) 夫の意のおつと(をつと) をと(音) おとこ(男) をとる(劣る) をとろふ(衰ふ) をとろく(驚く) をのく(各々) をのつから(おのづから) をもし(重し) をよぶ(およぶ) 機會の意のおり(折) おる(折る) をる(織る) をろか(愚か) おんな(女) ことほり(理)ことわり さかへ(榮え) さはぐ(騒ぐ) てうあひ(寵愛) とをし(遠し) とふく(とうく) とをる(通る) 助詞共(ともども) なを(猶) なをし(直し) 感動詞なふ(なう) なふく(なうく) はせを(芭蕉) まいる(參る) ゆふれひ(幽靈) ゆへ(故) ゆくゑ(行方) 形容詞語根よは(弱)

なほ右のほか「宮古」を「都」と改めた。

(ニ) 原本には一切ルビはないが、通讀の便を考へ誤讀を恐れて適宜附した。この場合ほかの車屋本

に假名書きになつてゐるときはそれによつて附し、さうでないときは現行下懸謡本を参照して附したが、現行下懸三流のなかでも一致しない場合は、その何れを採用すべきか輕輕しく決し兼ねたので、止むなくルビを附けることを差し控へた場合もある。

(ホ) 句讀點は、散文(ゴマ節まじのないいはゆる詞)のところは原本通りにしたが、韻文(ゴマ節のあるいはゆる節せつ)のところは實上演上の韻律を基準にして、かならずしも原本のままを固執しなかつた。これは特に拍子に合ふ謡のところに著しく、その場合八拍子を規準とする一音節ごとにならず句讀を附することにした。しかしてどこが音節の切れ目であるかは、原本のゴマ節でほとんど判断がついたが、まれに判断に苦しんだところは現行下懸謡本によつた。なぜ右のやうな句讀の打ち方をしたかといふに、律文學である謡曲の立場を尊重したからであつて、原本の詞のところの句讀はそのまま實上演上の息繼ぎであり、律文としての切れ目であるのに對し、節せつのところの句讀は、その句讀のあるべきところに廻し節や引き節の類があるとその句讀は省略されるのが常であり、また拍子に合ふところではしばしば引き節の變型として(外に現はれた聲で引くことなしに、現はれない息だけでその間を持ちこたへるのである)句讀が使はれるが、かかる句讀は節せつの一種と見るべきものであつて、律文の切れ目を表すものではないからである。右のやうな句讀の打ち方をして始めて律文としての(主として七五調)謡曲文學の味讀が可能であると信じた結果にほかならないのであつて、これは未だ何人も

試みたことのない新方法である。また原本の句讀は總べて。であるが、文章の終止でないところは、終止のところは。と區別し、讀解の一助とした。

(へ) 原本の詞のところには「を、節せつのところにはへを用ゐて、ゴマ節を複製出來ない不備の補ひとした。原本には發言者が交替するときに「を用ゐてゐるだけである。(往往脱してゐることすらある)

(ト) 段落は一切編者の私見によつた。大凡の標準を序破急五段の切れ目においたのである。

(チ) 送りの、は編輯方針に隨つて用ゐなかつたが、は原本通りに用ゐた。その場合單語の繰り返し、たとへば「いろく」が「いろいろ」であることは自明だが、句の繰り返しの場合には總べて八拍子を規準とする一音節の繰り返しであるから、句讀點に挟まれた句の繰り返しと心得て頂きたい。たとへば「相生」の「旅衣、末はるく」の都路を、く、」は「旅衣、末はるばるの都路を、末はるばるの都路を、」と讀む類である。

(リ) 原本には演出に關する記載はほとんどなく、謡曲を戯曲として觀賞する場合に著しく不便であるので、冗漫にならないやうに留意しつつ適宜補つた。これらは編者の他の註記とともに總べて括弧を附して、原註と明別した。

(ヌ) その曲に登場する人物を一目瞭然にするため、曲題のつぎに登場人物を略記したが、これは勿

論原本にはないものである。ここには本文に發言のない者（たとへば狂言など）も、現行の演奏を参照して記すこととしたが、ワキツレのある種の場合のやうに、果たして當時登場したかどうか疑はしい場合には記さなかつたのもある。

(ル) 本文に同一人でありながら別の記し方をしてゐる場合があつてやや紛らはしいが、これは古型を保存したいためにあへて原本通りにした。しかし前述の登場人物欄の記載により、両者が同一人であることがすぐにわかるやうにした。たとへば「相生」の原文中で、或る場合には「大臣」と記し、或る場合には「わき」と記してゐるのが同一人であることを示すために、登場人物欄で「ワキ……阿蘇の宮の神主友成（大臣姿）」と註した類である。

(ヲ) 曲題は總べて原本通りに記し、現在通行の曲題と異つてゐる場合は、その通行の曲題を括弧を附して下に註した。

六、校合に用ゐた車屋異本は前述のやうに、江島氏藏の整版本・同古活字本・田中藏の寫本の三種類に過ぎず、現在車屋本の多く（吉川家に最も多くあつたが、最近賣り立てられた）を見る暇を得なかつたことはすこぶる遺憾であるが、これは他日を期して補正したいと考へてゐる。頭註に校異を記すに當つては、整版本を整本、古活字本を活本、田中本を田本と略稱することとした。異本の存在によつて校合の出來た上卷所載の分は左の諸曲であり、他は異本を得なかつた曲である。（本文に記載された

順序による。括弧内はその使用された異本を示す)

相生(田)・難波梅(活)・矢立鴨(田)・鷗鷗羽(田)・田村(田)・屋嶋(整・活・田)・兼平(田)・忠度
 (田)・頼政(田)・朝長(田)・清經(田)・井筒(活・田)・野宮(活)・采女(田)・夕顔(活・田)・江口
 (田)・芭蕉(整・田)・定家(田)・鸚鵡小町(活・田)・檜垣(活)・葛城(活)・誓願寺(田)・權(田)・杜
 若(活)・松風村雨(田)・源氏供養(田)

七、頭註は、限られた字數でしかも内容の充實をはからねばならないから、できるだけ冗語を省き、簡明を旨とした。右の趣旨のもとに、普通の辭書を引けばすぐに知られるやうな語句の註解はしばしば省略したが、その反面難解のところの口語譯を始め、縁語・掛詞・押韻などの謡曲に特に大切な修辭の類については、紙面の許す限りの努力を試みたつもりである。また頻繁に出てくる書名は略號を用ゐることにした。すなはち歌集の類は原則として「和歌集」乃至「集」の語を省略し(たとへば古今和歌集を古今と記す)、物語の類は同じく原則として「物語」の語を省略した(たとへば源氏物語を源氏と記す)。また和漢朗詠集は單に「朗詠」と記した。

八、解題は野上豊一郎、本文および頭註は田中允が擔當した。

謠曲集

初番目物（協能物）

相あひ生おひ （高砂）

- 前シテ……………尉（住吉の松の精）
後シテ……………住吉明神
ツレ……………姥（高砂の松の精）
ワキ……………阿蘇の宮の神主友成（大臣姿）
ワキツレ……………友成の従者（數人）
狂言……………高砂の浦人

（一）今度が初めての旅だが、行先に着くまでには日數がかかることではある。「日も」は紙に通じ、衣の縁語。「久し」は祝言の心。
（二）田本「友成」

（眞の次第）大臣次第へ、今をはじめの旅ごろも、今を始のたびごろも、日もゆく末ぞ久しき。こゑ「抑おさ是こゝは九州肥後の國、あその宮の神主ともなりとは我事

(三)旅仕度をし行先はるかな都への旅を今日思ひ立ち、浦から船出して長閑な春風に吹かれて幾日来たことであらう。来しかた行く末も白雲に隔てられて、さあ見當つかないがあれほど遠いと思つてゐた播磨瀧の高砂の浦に着いたのであつた。はる・春・遙・播は同韻で「張る」に、「たつ」は「裁つ」に、浦は裏に、「き」は着に通じ、いづれも衣の縁語。「たつ」は旅・浪の縁語。白雲は「知らず」の掛詞。

(四)續拾遺「旅人の衣の關の遙遙と都隔てて幾日来ぬらん」

(五)底本「おのへのかね」田本で訂正。

(六)波は磯邊の巖に隠れて見えないうが、音の遠近で潮の満干がわかる。

(七)古今、藤原與風の歌。末句「友ならなくに」

(八)「知らず」の掛詞。つぎの「積り」の序詞、老の縁語。

(九)年が積り積つて白雪のやうな白髪の老人となり、有明月の照らす霜置く春の夜寒の寢所の起き臥しにも。鶴は松の縁語。「ねぐら」

也。詞「吾いまだ都を見ず候程に、此春思ひたち都へのぼり候。又よき次にて候程に、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。(道行)上へ旅衣、末はるくくの都路を、く、けふおもひたつ浦のなみ、舟ちのどけき春風の、いくかきぬらん跡末も、いさしら雲の遙々と、さしも思ひし播磨がた、高砂の浦に着きにけり、高砂の浦に着きにけり。

(眞の一聲) 一聲尉うばへ高砂の、まつの春かぜ吹暮れて、尾上の鐘も、ひびくなり。うばへ波は霞の磯がくれ、二人へ音こそしほの、みちひなれ。(尉)さしこゑへ誰をかもしる人にせむ高砂の、松もむかしの友ならで、二人へ過こし世々はしら雪の、積りくくて老の鶴の、ねぐらにのこる有明の、春の霜よのおきわにも、松かぜをのみ聞きなれて、心を友とすが筵の、思ひをのぶる、ばかりなり。下(歌)へ音信は、まつにこととふ浦かぜの、落ば衣の袖そへて、木蔭の塵をかかうよ、木かげの塵をかかうよ。上(歌)へ所は高砂の、く、尾上の松も年ふりて、老の浪もよりくるや、木のしたかげのおちばか、なるまでいのちながらへて、猶いつ迄かいきの松、それも久しきためしかな、それも久しきためしかな。

の「ね」は音に通じ、鶴の縁語。「おきる」には起居・起寢(い)の兩説がある。

(一〇)風流心だけを友として淋しい思ひを晴らすばかりだ。「心を友とす」には、和歌を友とするの意を寓し、「すが籠」は「する」の掛詞で「のぶる」の序詞。

(一一)落葉のかかる衣。

(一二)底本「この」田本による。

(一三)「搔く」と「斯く」の掛詞。

(一四)「生きん」と筑前の歌枕「生きの松原」との掛詞。

(一五)底本「松」田本で訂正。

(一六)「申させ給へ」の訛。

(一七)(一八)謡曲拾葉抄所引の古今秘説に見える俗説。

(一九)底本「儀」と誤る。

(二〇)松といふのは歌の言の葉の盡きない意で。古今序「松の葉の散り失せずして」

わき「いかに是なる翁。此所に於いて高砂の松とはいづれの木を申すぞ。

して「たかさごの松とは取分き此松を申しならはし候。わき「扱々高砂墨のえの松に相生の名あり。當所と住の江とは國を隔てたるに、何とて相生のまつとは申すぞ。して「さん候古今集の序に、高砂墨の江のまつも相生のやうに覺えとあり。尉はあの住よしの者にて候。祖母こそ當所の人なれ。しる事あらば申さ給へ。わき「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所に有りながら、遠きすみのえ高砂の、浦山國をへだてて住むと、いふはいかなることやらん。うば「うたての仰候や。山川萬里を隔つれども、たがひにかよふ心づかひの、妹背の道は遠からず。して「先案じても御覽ぜよ。二人「高砂住のえの、松は非情のものだにも、相生の名は有るぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉とうばは、松もろともにこのとしまで、相生の夫婦となる物を。わき「謂をきけば面白や。さてさて先に聞えつる、相生の松の物がたり、所にきき置く謂はなきか。して「昔の人の申ししは、是は目出き世のたとへ也。うば「高砂と云ふは上代の、萬葉集のいにしへの義、して「住よしと申すは今此御代に住み給ふ延喜の御事、うば「松とは盡きぬことのはの、して

- (二二)「晴る」と春との掛詞。
 (二三)續古今の「西の海やあをきが原の沙路より現れ出でし住吉の神」により「住の江」に續く。
 (二四)後拾遺序「四つ海浪の聲聞えず」夫木抄の歌「四つ海浪靜かなる御代なれば……」
 (二五)吹くべきときに吹く風。
 (二六)王充論衡、風不鳴條(えだ)。
 (二七)こんな聖代にまさしく生まれ逢つた相生の松は。「あひに相生」は頭韻で、「逢ひに逢ふ」の掛詞。
 (二八)聖代を讃嘆してもそれは愚かなことで、讚嘆しきれぬものではない。
 (二九)朗詠、露暖南枝花始開。
 (三〇)季節にしたがつて花咲き葉の落ちるといふ變化はない。
 (三一)千年不變の緑は雪中に色濃く。朗詠、一千年色雪中深。
 (三二)松花は千年に一度咲くがそれを十度繰り返すともいはれてゐる。また、松花は百年を十度繰り返した千年に一度咲くともいはれてゐる、と解する説もあるが、前者が穩當。本朝文粹朝綱の句、松花之色十廻。
 (三三)こんな便宜を待つてゐる松の

へ榮は古今あひおなじと、二人へ御代をあがむるたとへなり。わきへ能々きけば有難や。今こそ不審はるの日の、二人へ光やはらぐにしの海の、わきへかしこは墨のえ、二人へ爰は高砂、わきへ松も色そひ、二人へ春ものどかに、同上(歌)へ四海波しづかにて、國も治まるときつかげ、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の、松こそ目出かりけれ。勝やあふぎても、ことも愚かやかかる世に、すめる民とてゆたかなる、君のめぐみは有がたや、君の恵は有がたや。

(クワ)上へ夫草木こころなしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春のときを備へて、南枝花はじめてひらく。してさしこゑ然れども此松は、其氣色とこしなへにして花葉時をわかず。同下へ四の時至りても、一千年の色雪のうちにあかき、又は松花の色とかへりともいへり。して下へかかる便を松がえの、同へ言のは草の露の玉、こころをみかく種となりて、生としいけるものごとくに、しきしまのかけに、よるとかや。(クセ)下へ然るに、長能がこと葉にも、有情非情の其こゑ、皆歌にもる事なし。草木土砂、風聲水音まで、萬物をこむる心あり。春の、はやしの、東、風に動き秋の蟲の、北露に鳴くも、みな和

枝が、言葉の玉となり心を修養する種となつて。「松が枝」には「待つ」をかけ、葉は草の、草は露・種の、露は玉の、玉は「みがく」の縁語。

(三三)「同」の字田本で補ふ。

(三四)古今序「生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」

(三五)和歌の道に心を寄せるとかいふことだ。陰は松の縁語。

(三六)長能私記「春の林の東風に動き秋の蟲の北露に鳴くも皆和歌の體に漏れず。有情非情共に歌の道をば興すなり」

(三七)底本「ふうせいすひをん」田本で訂正。

(三八)北風を受けて結ぶ秋の野の露
(三九)松の析字。丁固が腹に松の生えた夢を見て、十八年ののち公になると判じた故事による。

(四〇)古今によつて音色の變ることはない。世阿彌の五音曲の松の木の條に「古今の色なく」とあり、車屋毛利本は「みず」と濁る。現在観世流以外は「見す」と清音。

(四一)始皇帝が松の下で雨を避けることが出来たに禮に、大夫といふ位を贈つたとの史記に見える故事。

歌のすがたならずや。中にも此松は、萬木にすぐれて、十八公じゅうはちこうのよそほひ、千秋のみどりをなして、古今ここんの色をみず。始皇しやうわうの御爵みしやくに、あづかる程の木なりとて、異國にも、本朝にも、萬民是を賞翫す。して上うへへ高砂たかさなの、尾上の鐘の音すなり。同どうへ曉かけて、霜は、置けども松がえの、葉色はおなじ深みどり、立ちよる陰のあさゆふに、かけども、落ばの盡きせぬは、まことなり松まつのはの、散り失せずして色は猶、正木のかづら永き代の、たとへなりけりときは木の、中にも名は高砂たかさなの、末代すえだいのためしにも、あひおひの陰ぞ久しき。

(ロンギ) 上うへへ勝かなにしおふ松がえの、く、老木のむかし顯はして、其名を名乗り給へや。二人ふたりへ今は何をかつつむべき。是は高砂すみのえの、神ここに相生あひまの、ふうふと現じ來りたり。同どうへふしぎや扱は名どころの、松の奇特を顯はして。二人ふたりへ草木心なけれども、同どうへかしこき代とて、二人ふたりへ土つちも木も、同どうへ我わが、大君の國なれば、いつ迄も君が代に、住吉すまきに先ゆきて、あれにてまち申さんと、ゆふ浪の汀なる、海士あまの、小舟にうち乗りて、追風おひかぜにまかせつつ、おきの方へ出でにけりや、澳あなのかたへ出でにけり。(中入。狂言、相生の松の由來を語る)

- (三)千載、匡房の歌。末句「霜や置くらん」底本「おのへ」田本で訂正。
 (四)古今序「松の葉の散り失せずして眞拆の葛長く傳はり」正本に「増す」をかける。
 (四)「高き」の意をかける。
 (四)「逢ひ」「相老」をかけた。
 (四)「住む」の意をかける。
 (四)「言ふ」の意をかける。
 (五)「成る」の意をかける。
 (五)「底本」をひかせ「田本」による。
 (五)「出でる」を出汐にいひかけた。出汐は月の出とともに満ちてくる汐。汐と波、波と淡とはそれぞれ縁語。
 (五)「伊勢・古今・朗詠」などに見える歌。
 (五)伊勢・新古今などに見える歌。下句「久しき世より祝ひそめてき」
 (五)五六頁にあげた續古今の歌。
 (五)「浅し」の意をかけ、萬葉の「夕されば汐滿ちくなる住吉の淺

わき (待詠) へ高砂や、此うら舟に帆をあげて、く、月もる友に出しほの、波の淡路の嶋かげや、遠く鳴尾の澳過ぎて、はや墨の江に着きにけり、はや住のえに着きにけり。(出端) 後して上へ我みても久しく成りぬ住よしの、岸の姫松いく世へぬらん。むつましと君はしらずやみづがきの、久しき代々の神かぐら、よるの鼓の拍子をそろへて、すずしめ給へ、宮つこたち。同上へ西の海、あをきが原の、浪間より、して下へあらはれ出でし、墨よしの、上へ春なれや、殘の雪のあさかがた、同へ玉藻かるなる岸陰の、して松根によつて腰をすれば、同へ千年の翠、手にみてり。して梅花を折て首にさせば、同へ二月の雪ころもに落つ。(神)舞。

(ロンギ) 上へ有難の影向や、く。月すみよしの神あそび、みかげを拜むあらたさよ。して勝さまくの舞姫の、こゑもすむなりすみのえの、松かげもうつるなる、青海波とは是やらん。同へ神と君とのみちすぐに、都の春にゆくべくは、してそれぞげんじやうらくの舞。同へ扱萬歳の、してをみ衣、同へさす、かひなには、あくまをはらひ、をさむる手には、壽福をいだき、千秋樂は民をなで、萬歳樂には命をのぶ、相生の松かぜ、颯々の聲ぞたのしむ、

さつ／＼の聲ぞたのしむ。

香の浦に玉藻知りてな^しなどの歌
によつて、つぎの玉藻を呼び出す。
(五)朗詠、倚^り松根^に而摩^り腰、千年
之翠滿^り手。折^り梅花^に而挿^り頭、二
月之雪落^り衣。二月之雪は梅の花
のこと。

(五八)「澄む」と住吉の掛詞。

(五九)神の道と君の道とは眞直ぐだ
が、そのやうに眞直ぐに。

(六〇)還城樂。舞樂の曲名。

(六一)松風の音と舞ふ袖の音との形
容。

(一) 尊いお姿を敬ひ仰ぐわが大君の御代は、四海靜かて泰平である。御影は神靈の尊稱で、ここでは轉じて大君の尊いお姿の意。四方には代をかける。

(二) 八月十五日男山八幡の例祭。四月の加茂の北祭に對する語。

(三) 空の晴れ渡つた朝都を立ち出で、朝景色もさぞかし美しかつたらうと思はれる木幡山を眺め、伏見の里から程遠くない竹田河原を通り過ぎて、淀の繼橋を渡り、申すも畏れ多い神様を祭つてある八幡の里に着いたのであつた。「淀の繼橋」は歌枕で「かけ」の序詞。
(四) 生きてゐる魚を放つ放生川に動いてゐるのは魚だけではなく、秋の水に映る月までも川波に影を碎いて動いてゐる。

(五) 夕暮の山の松に吹く風までも(六) 神徳の忝さを知つてゐる者はますます神の御利益を受け、それを知らない者もまた神のお恵みに預り。

(七) 易經、積善之家有三餘慶。
(八) 善惡の行ひによつてそれぞれ善惡の報いを受けることは、影の

放生河

前シテ……………尉 (武内の神の化身)

後シテ……………武内の神

ツレ……………男

ワキ……………鹿島の神職筑波某(大臣姿)

ワキツレ……………筑波某の從者(數人)

狂言……………八幡の者

(眞の次第) 大臣次第へ御影をあふぐ此君の、みかげをあふぐ此君の、四方こそ靜也けれ。こゑ「抑おさ是は鹿嶋の神職つくばの侍士たにがしとは我事也。詞「われこの間は都に候ひて、洛陽の寺社殘なく一見仕りて候。又比くらは八月十五日南祭みなみまつりの由申候ほどに、ただ今やはたに參詣仕り候。(道行) 上へ曇曇なき、都の空のあさぼらけ、く、けしきもさぞな木幡山、伏見の里も遠からぬ、竹田がはらを

形に添ひ、響きの聲に應ずるやうだ。

(九)こんな廣大な恵みを受けることの出来る海のやうな深い衆生濟度の神の誓ひ、その誓ひに預ることの出来る魚類などのあらゆる生物、私たちもその生物の一として豊かに暮せる世に佛んでゐることは。「誓の海」は、佛の衆生濟度の誓ひの廣く深いことを海に譬へる佛教思想だが、それを神道に轉用した。「廣き」「うろくづ」はともに海の縁語。「生きとし生ける者」は古今序による。

(一〇)「千歳經る」の意をかけ、枕詞として神を呼び出す。

(一一)神慮に隨つて。

(一二)底本「まふて」と誤る。

(一三)「照る月」から槻弓、弓から矢にいひ續け、さらに矢を八幡山にかける。

(一四)巴神が垂跡してから久しく。久方は「あめ」の枕詞で「久し」をかける。

(一五)巴王充論衡に、太平之世、五日一風、十日一雨、風不_レ鳴_レ條、雨不_レ破_レ塊、とある心。

打すぎで、淀のつぎ橋かけまくも、かたじけなしや神まつる、八幡の里に着きにけり、やはたのさとに着きにけり。

(眞の一聲) 一聲二人へうろくづの、いけるを放つ川なみに、月もうごくや、秋の水。つれへ夕山まつ風までも、二人へ神の恵みの、こゑやらん。さしこゑへそれ國を治め人ををしへ、善を賞し惡をさる事、すぐなる御代のためしなり。かるが故にしれるはいよ／＼萬徳をえ、不知も又めぐみになひ、おのづから積善の餘慶ことにみち、善惡のかけひびきのごとし。かかる恵の道廣き、ちかひの海のうろくづの、いきとしいける者として、豊なる代にすまふ事、ひとへに當社の、御利生なり。下(歌)へ仕へて年も千はやふる、神のまに／＼詣できて。上(歌)へ此御代に、てる月弓の八幡山、／＼、宮路の跡も久かたの、あめつちくれをうるほして、枝をならさぬ松のかぜ、千世のこゑのみ彌増に、いただきまつる社かな、いただきまつる社かな。

わき「けふはこと更御神事とて、皆人清淨のけしきすがたなるに、是なるおきなにかざり魚を取りもち殺生のわざ不審にこそ候へ。して「當社御參詣の人の、是ほどの事をしろしめされ候はぬか。扱けふの御神事をば何としろしめさ

- (一)底本「なふ」と誤る。
 (二)大慈悲のためならその手段に殺生をしても菩薩の萬の善行にも勝る。この思想は三國傳記七ノ十九、論曲熊坂などにも見える。
 (三)反對に神の御利益の網に漏れないやうに。誓は菩薩が慈悲心で人を救はうとの願ひを立て給ふことだが、ここでは神に轉用した。
 (四)佛性に歸入し悟りを開くために行ふ善根。古註は幾生と解いて、多くの生類を助ける善根と宛てゐるが、歸性と宛てるのがよい。
 (五)水が濁つてゐるのも魚が安住出来るやうにとの神徳によるものであつて、その神の誓ひは石清水の名の通り清らかで、澄むといふも濁るといふも、清水の流れ行く末は一つ川になるやうに一體なのである。
 (六)裳裾と同じく袖も濡らして、自ら水を汲み入れて水桶を水底に沈めると。「もすな」の「も」は藻に通じ「ひちて」水などと縁語。みづから・水桶・みなそこ は頭韻。
 (七)朗詠、潭荷葉動是魚遊。潭荷は水中の蓮の葉の意。

れて候ぞ。わきへいでけふの御神事は放生會とかや申すよなう。して「さればこそ放生會とはいけるを放つ祭ぞかし。御覽候へ此魚は、いきたる魚を其まみにて、つれへはうじやう河に放さん爲也。しらぬ事をなのたまひそ。してへ其うへ古人の文を聞くに、二人へ方便の殺生だに、ぼさつの萬行にはこゆるといふ。ましてやこれは生けるを放てば、魚はのがれ我等は又、かへつて誓の網にもれぬ、神のめぐみを憑むなり。わきへ勝々聞けば有難や。さてくいけるを放つなる、其御いはれは何事ぞ。つれへ異國退治の御時に、おほくの敵をほろぼし給ひし、歸正の善根の其爲に、放生の願をおこし給ふ。わきへ謂をきけば有がたや。扱々生るをはなつなる、川はいづくのほどやらん。して「御覽候へこの少河の水のごりも神徳の、わきへちかひは清き石清水の、してへ末はひとつぞ此川の、わきへ岸にのぞみて、してへ水桶に、同上(歌)へとりゐる、此うろくづをはなさんと、くもすそもおなじ袖ひちて、結ぶや、みづから水桶を、みなそこにしづむれば、魚は、よろこびひれふるや、水をうがちて岸陰の、潭荷葉うごく、是魚のあそぶ有様の、げにも、いけるを放つなる、御誓あらたなりけり。

(三三) 朝廷の御先祖の神。
 (三四) 九重・八幡山は數韻。
 (三五) 諸佛が世に出たその根元はといへば、實有のものではなく空であり、萬物の本性は不生不滅などの哲理を示し。底本、ほんらひくう、しんしやうふしやう。
 (三六) 涅槃に到る八種の正道。神皇正統記など所引の八幡託宣に見える。
 (三七) 「正直の頭に神宿る」の諺の原據で、十訓抄六の三十八、私家百因緣集九の五などに八幡大菩薩の誓ひとして見える。
 (三八) 謡曲拾葉抄所引の神祇正宗に見える宇佐八幡の託宣。
 (三九) 行教が宇佐の神託を蒙つて八幡大菩薩を男山に勸請したとの緣起の説を意味する。法と花とは法華經を介して縁語。「うつる」とは花、水と「かけ」と「うつる」とはそれぞれ縁語。觀世流だけは「御法の袖」とある。御法・水・都・南・みつは頭韻。
 (四〇) 「住む」と「澄む」の掛詞。
 (四一) 「満つ」と「三つ」の掛詞。
 三衣は僧衣、衣手は袖の意で、八幡大菩薩が行教の衣の袖に移り給

(クリ) 上へ抑當社と申すは、欽明天皇のむかしより、一百餘歳の世々をへて、此山に移りおはします。してさしこゑれば宗廟の神として、君をまもり國家をたすけ、同へ文武ふたつの道ひろく、九重つづく八幡山、神にも御名は八のもの、して下へ夫諸佛出世の本來空、同へ眞性不生の道をしめし、八正道をあらはし、人佛不二のみこころにて、正直のかうべに、やどり給ふ。(クセ)
 下へ人の國よりわが國、他の人よりはわが人と、ちかはせたまふ御めぐみ、げに有難や、我等ごときの淺ましき、迷ひを照し給はんの、其御誓願まのあたり、行教和尚の、御法の水にかけうつる、花の、みやこをまもらむと、南の山にすむ月の、ひかりもみつの、衣手に移り給へり。さればにや宗廟の、跡あきらかに君が代の、すぐなる道を顯はし、國富み民のかまどまで、にぎはふひなのみつぎ舟、四海の浪もしづかなり。して上へ利益、諸衆生の御誓ひ、同へ二世安樂の、神徳は猶さかゆくや、男、山にし松たてる、梢も草も吹く風の、みな實相のひびきにて、嶺の山かづら、其外里かぐら、さんげの心夢さめ、夜ごゑもいと神さびて、月かげろふの石清水の、あさからぬ誓かな、げに淺からぬちかひかな。

(四〇) 神幸の先驅として飛び交ふ鳩を男山の別名である鳩の嶺にかけ

る。(四一) 乙女は禪(ちはや)の袖を振つて舞ふ。

(四二) 續古今の歌。末句「所からかも」

(四三) 聲高らかに詠吟すること。

(四四) 底本「まはふよ」

(四五) 片方の意。古今「夏と秋とゆきかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ」の心。

(四六) 満月の影を盃にたとへた。

(四五) 古今「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

(五〇) 新古今「百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮らしつ」

(五一) 日の出ころから。陽谷と宛てる。

(五二) 和歌の意。古今序の影響。

(ロング) 上へ扱は神代も和歌をあげ、さては神代もわかを上へ、まひをまひける目出さよ。してへ中へをみの御衣をめし、各々舞をまひたまふ。同へさらば四季のわかをあげ、其しなかへて舞ひたまへ。してへ春はかすみの和歌をあげて、きしゆんらくを舞はうよ。同へさて又夏にかかりては、いかなる舞をまひたまふ。してへかたへ涼しき川水に、浮びてみゆるさかづきの、傾盃樂を舞はうよ。同へ始めて長き夜もふくる、かぜの音に驚くは、たがふむ舞の拍子ぞ。してへ秋きぬと、目には、さやかに見えずとも、秋風樂を舞はうよ。同へ日敷もつもる雪の夜は、してへ廻雪の袖をひるがへす。同へ扱ももしきの舞には、してへ大宮人のかさすなる、同へさくら、してへたちばな、同へもろともに、花の、冠をかたふけて、やうこくよりもたちまはり、北庭樂をまふとかや。さのみは何と語るべき、こと葉の花も時をえて、其ふう猶もさかんにて、鬼も神も納受する、和歌の道こそめでたけれ、わかかの道こそ目出けれ。

(一) 日の出る東方の地にある日本國を訪ねよう。

(二) 白氏文集酒功賛序、唐太子賓客白樂天。賓客は太子輔導の官名。

(三) 底本「かふぶり」

(四) 大空には雲が旗のやうに棚引いてゐる。「雲の旗手」は棚引く雲を風に靡いてゐる旗に見立てたのである。また旗手は、旗の足・旗足と同義で、元來は旗の裾の方をいふのであるが、のちには布地の部分全體をも意味した。雲は「雲の浪」といふ熟語を介して前の浪路と縁語。また日・雲・空・月・日本はいづれも天に關する語で互に縁語。

(五) 筑紫の枕詞。

(六) 浦の秋は松風より訪れ、その風に吹き落された一葉が、舟のやうに浮かんでゐる。貨狄が柳の一葉の水に浮かんだのを見て舟を作つたといふ俗傳、および玉葉集の「月残る磯邊の松を吹き分けて入る方見する秋の浦風」を心においてゐるやうだ。

(七) 觀世金剛二流の互(一)水とあるのがよい。大海が果てしなく廣

白樂天

前シテ……………漁翁(住吉明神の化身)

後シテ……………住吉明神

ツレ……………男(漁夫)

ワキ……………白樂天

ワキツレ……………白樂天の從者(數人)

狂言……………住吉末社神

(眞の次第) わき次第へ舟漕ぎ出でて日のもと、舟漕ぎいでて日のもと、そなたの國をたづねん。抑是は唐の太子の賓客、白樂天とは我事也。詞「さてもこれより東にあたつて國あり。其名を大日本國と名づく。急ぎ彼國にわたり、日本の智恵をはかれとの宣旨を蒙り、唯今海路に赴き候。(道行)上へ東海の、なみちはるかにゆく舟の、く、あとに入日の影のこる、雲のはたてのあ

がつて蒼蒼とした浪は天に連なり、恰も天を浸してゐるやうで。
(八)越王勾踐の忠臣范蠡が呉を亡ぼして功成り名遂げたので、五湖に舟を浮かべて餘生を送つた故事。空は海に映るから「移す」は天の縁語。底本「はんれひ」と誤る。
(九)煙のやうな波が遙かに連らなつてゐる湖上の有様。朗詠、陶朱辭、越之暮眼混五湖之烟。また前の巨水漫漫、この「煙の浪」のちの「浮かむや沖つ浪」などには白氏文集新樂府の「海漫漫：雲濤烟浪」の影響があらう。
(一〇)西に山のないこの松浦瀉では有明月は海の彼方の雲に入るのだが、その雲は舟と同様に沖の浪に浮かんでゐるやうに見える。西と「有明月」、「なき」と「あり」とは縁語。
(一一)こんなに朝早いのに私の船のほかにもう一艘の船がをり、お互ひに碇泊してゐる。「かかる」は碇泊の意に「斯かる」の意をかける。
(一二)唐の海はあちらの方であらうか。唐からの船旅は遠くなく一晩泊りだと聞いてゐるから、この船

まつ空、月又いづるそなたより、山見えそめて程もなく、日本の地にも着きにけり、日本の地にも着きにけり。詞「急候程に、是ははや日本の地に付きて候。しばらく海上に船をうかへ、四方のけしきを眺めばやと思ひ候。

(眞の一聲) 一聲二人へしらぬひの、筑紫の海をあさばらけ、月のみのこる、眺かな。つれへ松かぜよりの浦の秋、二人へ一葉や舟を、みせつらん。さしこゑへ湖水漫々として碧浪天をひたし、越をじせし范蠡が、扁舟に棹をうつすなる、五湖の煙のなみのうへ、かくやと思ひしられたり。あら面白の、海上やな。
(下歌) へ松浦がた、西に山なきあり明の、上(歌)へ月のいる、雲もつかふや澳つなみ、く、たがひにかかる朝まだき、海はそなたかもろこしの、舟路の旅も遠からで、一夜とまりと聞くからに、月も程なき名残かな、月も程なき名残かな。

わき「扱も我萬里の波濤をしのぎ日本の地に着きぬ。小船一艘うかへり。みれば漁翁也。そも汝は日本の者か。して「扱御身は唐の白樂天にてましますか。わきへふしぎやな始めて此土にわたりたるを、白樂天とみる事は、何の故にて有やらん。して「其身は漢土の人なれども、名はさきだつて日本に聞

が松浦瀉に着くのももうすぐだから。それにつけても月の入るの間もないことだから名残り惜しいなあ。月には「着き」をかける。

(三) 尊は日本中に普く廣まつてあるので。「あまねき日の光」といふ句を介して「あまねき」と「日の本」とは縁語。日の本は東だから、その反語である西と縁語。

(四) 氣を配つて今か今かと待つてゐるとき、筑紫の松浦瀉の沖より隠れもない唐船が見え、その船に乗つてゐる唐人を。「心づくし」には筑紫をかけ松浦舟と縁語。

(五) ことさへぐの轉。唐人の枕詞。
(六) ああ馬鹿馬鹿しい、暇が惜しい、糸を垂れて釣をしよう。「いとま」には糸をかけ、「さぶをなぐるま」といふ熟語を介して竿と「いとま」とは縁語。

(七) 靈文。佛經の陀羅尼を指す。

(八) 底本「かひて」と誤る。

(九) 底本「せふ」と誤る。

え、隠れのなければ申すなり。わきへたとひ其名は聞ゆるとも、それぞとやがて見知ること、有るべき事とも思はれず。して下へ日本の智恵をはからんとて、樂天來りたまふべしとの、聞えはあまねき日の本や、西をながめて澳のかたより、舟だにみゆれば人毎に、すはやそれぞと心づくしに、同上(歌)へ今や〳〵松浦舟、〳〵、おきよりみえて隠なき、もろこし船の唐人を、樂天とみる事は、何か空めなるべき。六かしゃことさやぐ、から人なれば御こと葉をば、迎聞きはしらばこそ。あらしな釣竿の、いとま惜しや釣垂れむ、いとま惜しやつりたれん。

わき「いかに漁翁。して「何事にて候ぞ。わき「扱日本には何事を翫ぶぞ。して「扱唐には何を翫びたまふぞ。わき「唐には詩を作りて心をなぐさむよ。して「日本には歌をよみてこころを慰み候。わき「そも歌とはいかに。して「天竺のれいもんを唐土のしふとし、たうどのしふを我朝の歌とす。三國をやはらげ來るをもつて、大きにやはらぐる歌と書いて大和歌と讀めり。さだめてしろしめされ候はんずれども、翁が心を御覽せられむ爲候な。わき「いや其儀にてはなし。いで目前のけしきを詩に作つて聞かせう。して「承り候。わき

(二〇)江談抄第四の在中の詩、白雲似^二帶圍^一山腰^二青苔如^一衣負^二巖背^一。および女房の騷案作「苔衣着たる巖はまひろけむ衣着ぬ山の帯するはなぞ」をすこし替へて、白樂天と住吉明神の作のやうに取りなした。

(二一)底本「せひたひ」と誤る。

(二二)底本「いはふ」と誤る。

(二三)底本「きぬく」と誤る。

(二四)名ある人間のやうに扱つて下さるとは恐れ入つたことだが。

(二五)古今序「花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの何れか歌を詠まざりける」

(二六)上の句と下の句との續き工合の悪い歌、轉じて下手な歌の意。底本「こしおれ歌」と誤る。

(二七)底本「せうか」と誤る。

(二八)この故事は、謡曲拾葉抄所引の古今秘書、曾我物語卷五などに見える。

(二九)人間に眞似て。

(三〇)「有り」を荒磯(ありそ)海にかけ、古今序古註の「我が戀はよ

青苔衣をおびていはほのかたにかかり、白雲帯に似て山のこしを廻る。「心得たるか漁翁。して「せいたいとは青き苔の、巖のかたに懸りたるが衣ににたるとや。下へ白雲帯にて山のこしを廻る。「おもしろや日本の歌も、へ只是候よ。下へ苔ごろも、きたるいはほはさもなくて、衣着ぬ山の帯をする哉。わ

きへふしぎやな其身は賤しき漁翁なるが、かく心ある詠歌をつらぬる、其名はいかに覺束な。して「人がましやな名もなき身なり。されども歌を讀むことは、人間のみにかぎるべからず。生としいける者ごとに、歌をよまぬはなき物を。わきへそもやいきとし生るものとは、扱は鳥類畜類までも、してへ和歌を詠ずる其ためし、わきへ和國に於いて、してへ證歌おほし。同上(歌)へ花になく鶯、水にすめる蛙まで、唐土はしらず日本には、歌をよみ候よ。おきなも、腰折れ歌をば、かたのごとく讀むなり。(クセ)下へ抑うぐひすの、歌をよみたる證歌には、孝謙、天皇の御宇かとよ、大和の國、かづらきや、高間の寺の梅がえに、きぬる鶯こゑきけば、初陽毎朝來、不相還本柄となく、もじにうつして是をみれば、みそちひともじの、詠歌のこと葉なりけり。してへ初春の、あした毎には來れども、同へあはでぞかへる、元の、すみかにと聞えつる、鶯の聲

むとも盡きじありそ海の濱の眞砂はよみ盡くすとも」の歌の心で續ける。

(三二) 濱の眞砂のやうに數知れず。

(三三) なるほど日本の風習は越きの深いもので、漁夫までがこんなに教養があるとは本當に尊い習慣だなあ。

(三四) いつそのこと日本の慰みごとである和歌を謠ひ、色色の舞曲を演じて見せよう。

(三五) 御覽なさい、誰がるなくても私さへみたならば……。

(三六) 文選長笛賦に横笛は西羌人が龍の鳴くのを聞いて作つた由見え、教訓抄卷八にも横笛を龍吟とも龍鳴とも別稱する由來を記してゐる。

(三七) 「老の浪」は老人の皺といふ意味の成語だが、「老の」は前の尉の縁で出したまでで、浪の序詞。

(三八) 底本「かひせひらく」と誤る。

(三九) 以下舞樂の歌詞の心。

(四〇) 山影が水に映るためか水色の青青とした海上で、浪を鼓にして海青樂を舞ふ。「青き海」に海青樂の心を見せる。

(四一) 續古今「西の海やあをきが原

をはじめとして、其外、鳥類畜類も、人にたぐへて歌をよむ。ためしはおほくありそ海の、濱の眞砂のかずくくに、生としいける者、いづれか歌を讀まざらん。

(ロンギ) 上へ勝や和國のふうぞくの、く、心ありけるあま人の、げに有難きならひかな。してへとも和國のもてあそび、わかを詠じてぶがの曲、其色々をあらはさん。同へそもや舞樂のあそびとは、其役々はたれやらん。してへ誰なくとも御覽ぜよ、われだにあらば此舞樂の、同へ鼓は浪の音、笛は龍の吟ずるこゑ、まひ人はこの尉が、老の浪の上にたつて、あを海にうかひつつ、海青樂をまふべしや。してへ蘆はらの、同へ國も動かじ、萬代までに。(來序) 中入。狂言、住吉明神と白樂天と松浦の沖で問答の子細を語り舞ふ)

(出端) 後してへ山陰の、うつるか水も青き海の、同へなみの鼓の、海青樂。

(眞の序之舞) して(ワカ)上へ西の海、あをきが原の、浪間より、同へあらはれ出でし、墨よしのかみ、すみよしの神、住よしの、してへ顯れ出でし、住よしの、同下へすみ吉の、神のちからのあらんほどは、よも日本をば、したがへさせ給はじな。すみやかに浦の浪の、たち、かへりたまへ樂天。

の汐路より現れ出でし住吉の神」
 (四二)この浦を立ち去りなさい。「浦の浪の」は「立ち歸り」の序詞。
 (四三)この俗傳、平家物語卷五などに見える。娑竭羅龍王は八大龍王の一。
 (四四)底本「かいせひらく」と誤る。
 (四五)法華經に見える八種の龍神。難陀、跋難陀、娑竭羅、和修吉、德叉伽、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅。
 (四六)諸本いづれも異同なく、八音(はちいん)の誤りか、といふ諸抄の説以上に進歩した新説もない。
 八音は諸抄によれば、金石絲竹匏土草木の八種の材料でそれぞれ作つた八種の樂器で、諸曲拾葉抄では五行通義を引いて、金は鐘、石は磬、絲は絃、竹は管、匏は笙、土は埴、革は鼓、木は祝故であると説明してゐる。
 (四七)底本「くうかひ」と誤る。
 (四八)神事に着る祭服、轉じて舞衣。
 (四九)舞の袖より起る風。
 (五〇)神と君との守る微動ささやかぬしな
 い國は。「君が代の」は「動かぬ」の序詞。

上へすみよし現じ給へば、すみ吉げんじたまへば、伊せ石清水かも春日、かしまみしますは熱田、あきの、いつく嶋の明神は、しやかつら龍王の、第三の姫みやにて、海上にうかんで、海青樂を舞ひたまへば、八大龍王は、はちりんの曲を奏し、空海くわいにかけりつつ、舞ひあそぶをみごろもの、手かせ神かぜに、ふきもどされて唐船たうせんは、ここより、漢土にかへりけり。げに有がたや神と君、げに有がたや、神かみと君が代の、うごかぬ國ぞ久しき、動かぬ國ぞ久しき。

(一) 山も霞んでうらかな春だが浦は浪風もなく靜かだよ。浦に「うらかな」の意をかける。

(二) 大晦日からの越年の參籠。

(三) 春になつて本當に長閑な風もない日和だが、その長閑な名をもつ風莫(かざなぎ)の濱や、濱の眞砂も吹き上げるといふ吹上の浦も過ぎて行くうちに、早くも來たもので紀路の關を越え、昔の都だからこれも都といつてもよい攝津の難波の星に着いたのであつた。風凧と吹上とは縁語。紀路には來をかける。

(四) 君が代は長く榮えて長柄の橋も造られるし、難波の春も幾久しく長閑だ。長柄に「長し」をかけ

難波梅 (難波)

前シテ……………尉 (壬仁の化身)

後シテ……………壬仁の靈

前ツレ……………男 (梅の精)

後ツレ……………木花咲耶姬の靈 (天女姿)

ワキ……………當今の臣下 (大臣姿)

ワキツレ……………臣下の從者 (數人)

狂言……………梅の精

(眞の次第)。大臣次第へ山も霞みて浦の春、山も霞みてうらの春、浪かぜ靜なりけり。こゑ「抑是は當今に仕へ奉る臣下なり。詞「われ宿願の事あつて三熊野に參り年ごもりし、立かへる春にも成り候へば、唯今下向仕り候。(道行)上へ春たつや、勝ものどけきかざなぎの、く、濱の眞砂も吹上の、うらづたひ

る。古今序「長柄の橋もつくるな
り」

(五)雪中に冬籠りしてゐた梅が、
今は春となつて時を得顔に咲いて
ゐるよ。古今序古註、朗詠などに
「難波津に咲くやこの花冬籠り今
を春べと咲くやこの花」

(六)活本「春めく」

(七)新葉序「天長く地久しくして
神代の風遙に仰がざらめかも」
(八)活本、この肩に二人と註す。

(九)大八洲は四海治まり。「治ま
る」と島の縁で浪を出す。

(一〇)太陽は靜かに日本を照らし、
その恵み豊かな御時世だよ。「日
の本」には日をかけ、影は「恵み」
の意で日の縁語。

(一一)古今の歌。下句「祝ふ心は神
ぞ知るらむ」

(一二)帝への貢物。「曇りなき」の
縁で日嗣を出す。

(一三)諸國から都へ運ぶ道は眞直
で。底本、宮古路。活本による。

「すぐなる」は都路にもかかる。

(一四)活本「尋申へき」

(一五)活本「の」なし。

(一六)活本「づ」なし。

してゆくほどに、はやくもきぢの關こえて、是も都か津の國の、なにはの里に
着きにけり、難波のさとに着きにけり。

(眞の一聲) 二人一せいへ君が代の、ながらの橋もつくるなり、なにはの春も、
いく久し。つれへ雪にも梅の冬ごもり、二人へ今は春べの、けしきかな。さし
こゑへ夫あめ長くつち久しうして、神よのかぜのどかに傳はり、すへらぎのか
しこき御代の道廣く、國をめぐみ民をなでて、四方に治まる八嶋の浪、靜に照
らす日のもとの、かげゆたかなる、時とかや。下(歌)へ春日野に、若なつみつ
つ萬世を、上(歌)へいはふなる、こころぞしるきくもりなき、く、天津ひつ
ぎの御調物、はこぶ、ちまたや都路の、すぐなる御代をあふがんと、關の戸さ
さで千里まで、普く照らす日かげかな、あまねく照らす日かげかな。

わき「いかに是なる老人に尋ねべき事あり。して「老人とはこなたの事候か
何事にて候ぞ。わき「是なる梅の木陰を立ちさらず清めたまふは、もし此梅は
名木にて候か。して「御姿を見奉れば都の人と見え給ひて候が、此なにはづに
於いて色ことなる梅花を御覽じて、名木かとお尋ねは、御心なき様にこそ候
へ。つれへ夫おほかたの春の花、木々の盛は多けれども、花の中にも始めなれ

- (一七) 山谷の詩、山籬是弟梅是兄。
 (一八) 古今序の心。六義は眞名序に、「そへ歌」は假名序に、「難波の梅」の歌は前頁(五)に述べたやうに古註に見える。
 (一九) その梅の歌の縁で聖代も開けて祭えたことといひ、またすべての花のなかでも梅はめでたい例に引かれることといひ。
 (二〇) この難波津は舊都として、また都への通路としての名に恥ぢない勝地であつて、その難波津に。「こや」は攝津の地名の昆陽(こや)に通じ、津の國・難波津の縁語。「なにはづ」には、名に恥ぢないの意をかけ、都路には都の意も兼備してゐよう。
 (二一) 底本「御定」活本「御ちや、」
 (二二) 七三頁にすでに示した歌。
 (二三) 帝を梅によそへて詠んだ歌であつて、その氣持も言葉もよく顯はれてゐる。
 (二四) 大鷦鷯尊、すなはち仁德天皇。
 (二五) 底本「着」活本による。
 (二六) 古今假名序の「そへ歌」は、眞名序では風(ふう)となつてゐるから、その縁で出した。
 (二七) 「無し」の意をかける。

ば、梅花を花の兄ともいへり。して「其うへ梅の名所々々、國々所はおほけれど、六義のはじめのそへ歌にも、難波の梅こそ讀まれたれ。つれへ御代もひらけし祭花といひ、してへあまねき花の佳例といひ、二人へともかくにも津の國の、こや都路のなにはづに、名をえて咲くやこの梅を、名木かとおたづねは、ことあたらしき御誼かな。わき「勝々なにはの梅のこと、名木やらんと尋ねしは、愚かなりける問事かな。然れば歌にも難波づに、咲くやこの花冬ごもり、今は春べとさくやこの、花の春冬かけてよめる、へ歌の心はいかなるぞ。して「それこそみかどをそへ歌の、心詞は顯れたれ。難波のみこは王子ながら、いまだ位に付き給はねば、冬さく梅の花のごとし。わきへ御即位ありてなにはの君の、くらゐに備はり給ひし時は、して「今こそ時の花のごとく、わきへ天下の春をしろしめせば、して「今は春べとさくやこの、わきへ花の盛はおほささぎの、してへ御門を花にそへ歌の、わきへかぜも治まり、してへ立つ浪も、同上(歌)へなにはづに、咲くやこの花冬ごもり、く、今は春べに匂ひきて、ふけども梅のかぜ、枝をならさぬ御代とかや。勝や津の國の、なにはの事に至るまで、豊なる世のためしこそ、勝道廣き治めなれ、げに道ひろき治めな

- (二八)活本、下懸諸本「春べと」
 (二九)王充論衡、太平之世……風不鳴條。梅の縁で枝を出す。
 (三〇)難波の御治世は、なにごとに至るまで豊かな御代の例に引かれるのであつて、それこそ本當に惠民の深い御治世なのだ。「なににはの事」には「何のこと」をかける。
 (三一)この一節、古今序の心。難波津の歌は帝の御即位のときに、また「浅香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものかは」の歌は采女が土器(かはらけ)をとつて詠んだのだとの意。
 (三二)底本「をだやか」活本による。
 (三三)古今序「普き御うつくしみの浪八島の外まで流れ」
 (三四)底本「活本「たいらか」
 (三五)論語顔淵篇、君君臣臣。荀子王制篇、君者舟也、庶人者水也、水則載舟、水則覆舟。孔子家語五儀篇、貞觀政要君道篇、および災祥篇にも、荀子にも、ほぼ同様に見える。
 (三六)朗詠、新古今などに見える。
 (三七)宣命詞。「懸け」をかける。
 (三八)世と代代との掛詞。
 (三九)その猶豫期限も来ると。

難波梅

れ。

(クリ)上へ抑おさなにはづの歌は御門の御はじめ、又あさか山のこと葉は、采女のかはらけ、とりどり也。してさしこゑ昔から國の堯舜の御世にもこえつべし。同へ萬機のまつりごと穩かにして、慈悲のなみ四海に普ねく、治めざるに平らか也。してへ君々たれば臣も又、同へ水よく舟を、うかふとかや。(クセ)下へ高き屋に、のぼりてみれば煙たつ、民のかまどは、にぎはひにけりと、歡慮にかけまくも、かたじけなくぞ聞えける。然れば此君の、代々にためしを引くことも、勝有がたきみことこのり、國々にあまねく、みとせの御調ゆるされし、其とし月も極まれば、濱の、眞砂の數つもりて、雪は、豊年のみつぎ物、ゆるす、故にや中々、いやましにはこぶ御寶の、千秋萬歳の、ちはこの玉をたてまつる。して上へ然れば、あまねきみこころの、同へいつくしみ深うして、八嶋の、外まで浪もなく、廣き御めぐみ、筑波山のかげよりも、しげきみかけはおほ君の、國なれば土も木も、榮え榮うる津の國の、なにはの、梅のなにしおふ、匂ひも四方にあまねく、一華開くれば天下みな、春なれや萬代の、猶安全ぞ目出き。

(四〇)濱の眞砂のやうに數多くの寶物が蓄積されて、豐年の貢物をお許しになるためか、かへつて前にも増して運び込まれる寶物はふえ、帝の千秋萬歳を祝ふ千箱もの玉を奉るのだ。古今序「濱の眞砂數多く積りぬれば。」積り」の縁で雪を出し、雪は豐年の瑞兆といふ諺によつて豐年につづけた。千箱は千秋の縁語。

(四一)古今序「普き御うつくしみの波八島の外まで流れ、廣き御恵みの蔭筑波山の麓よりも繁く……」

(四二)底本「深ふ」と誤る。

(四三)五八頁に註した紀朝雄の歌を引く。大君には「多く」の意をかける。

(四四)難波と「名にし」は頭韻。

(四五)大集經、「一華開天下春。往生講式、一花開天下皆春。

(四六)底本「おり」活本による。

(四七)底本「ふかく」活本による。

(四八)「我をば」の意。

(四九)底本「としし」活本による。

(五〇)底本「せひ」活本による。

(五一)梅の異名を「この花」といふ俗傳を響かす。

(五二)朗詠、誰言春色從東到、露陵

ろんぎへ勝よろづ世の春の花、く、榮え久しきなには津の、むかしがたりぞ面白き。してへげに名にしおふ難波づに、鳥の一聲折しもに、ないうぐひすの春の曲、春鶯囀を奏せん。同へふしぎや御身たれなれば、かく心ある花の曲、舞樂を奏し給ふべき。つれへ我はしらずや此梅の、春年々の花の精。同へ今一人の老人は。してへ今ぞあらはすなにはづに、同へさくや、この花と詠じつづ、位をすすめ申しし、百濟國の王仁なれや。今も、このはなにたはふれ、ももさへぐりの聲たて、春のうぐひすの舞の曲、よもすがら、なぐさめ申すべしや、下伏して待ちたまへ、花のした臥に待ち給へ。(中入。狂言、難波の梅の由來、王仁の詠歌のことなど語り舞ふ)

(出端) 後してへ誰かいつし春の色は、東より來るといへども、南枝はなはじめてひらく。爰は所も西の海に、むかふ難波の春のよの、月雪もてるうらのなみ、よるの舞樂はおもしろや。夢ばし覺まし給ふなよ。天女上へ是はなにはの浦に年をへて、開くるよよの恵みをうくる、この花さくや姫のしんなり。してへ我は又百濟國より此國にわたり、君をあがめ御代を守る、王仁といつし、相人なり。同へむかし、にんとくの御宇には、御代の鏡の、影をうつし、してへ

南枝花始開。

(五三) 東の縁語。

(五四) 雪のやうに白く明るい月光の意か。雪月花の縁で雪を添へたか。

(五五) 波の縁語。

(五六) 「この花」の縁語。

(五七) 世と代代との掛詞。

(五八) 御代の明きらかなことを鏡に譬へ、聖代を占つたことを一影を寫しといふ。

(五九) 梅花の取り持つ縁であり、あるひはまた和歌の靈徳によるものなだ。

(六〇) なにごとも佛法だから。後拾遺一津の國のなにはの事か法ならぬ遊び戯れ舞ふところ聞け。

(六一) 古今の歌。下句「なげども未

だ雪は降りつつ」催馬樂梅枝にも見える。

(六二) 廻河百首の歌。末句「若生ひにけり」また上の句の末句「君が代は」

(六三) 諫鼓の用もなくなり、時刻を報ずる時守の道具となつて。

(六四) 諫鼓の無用になつたことを象徴し、「覺むる」の序詞となる。

(六五) 朗詠、諫鼓若深鳥不驚。

(六六) 「何の鳥も」の意もある。

治まるみよの、榮花をなししも、同へ五九この花のにほひ、してへ又は開開くる言のはの御法、同へ六〇なにはのことか、のりならぬ、あそびたはふれ、色々の舞樂、おもしろや。(天女)舞

天女(ワカ)上へ梅六二がえに、きわるうぐひす、春かけて、してへなげども雪は、ふるき鼓の苔むして、へうちならず、同下へく、人もなければ、君が代に、懸けし鼓も、してへ時守六三のねふり、同へさむるはなにはの、してへ鐘もひびき、同へ浦はうしほの、してへ浪のこゑく、同へいりえの松かぜ、して下へむら蘆の葉音、同へいづれをきくも、よろこびの、かん六五こ苔むし、難波六六の鳥も、驚かぬ御代なり、有難や。樂

(ロンギ)上へあら面白の音楽や、く。時の調子にかたどりて、春鶯囀しゆんまうぜんのがくをば、してへ春風ともろともに、花を散らしてどうどうつ。同へ秋風樂はいかにや。してへ秋のかぜもろともに、浪をひびかしどうどうつ。同へ萬歲樂ばんざいらくは、してへよろづうつ。同へ青海波とはあを海の、してへ浪たてうつは探桑老。同へはとうの曲は、してへかへりうつ。同へ入目をまねき返す手に、く、今の太鼓は波なれば、よりてはうち歸りてはうち、此、音楽に引かれつつ、聖人御

(六五)活本「波頭」。波頭の意。

代に又いで、天下をまもり治むる、天下をまもり治むる、
萬歲樂ぞめでたき、
萬歲樂ぞめでたき。

(一) 君道も神道も正しいので、この國は幾久しく治まることだ。
 (二) 底本「れくひむ」と誤る。
 (三) 都は、空も長閑な春景色で、霞んでゐる行手は志賀の花園だが、その志賀の山越を通り過ぎて、眞野の入江に行く道すから、琵琶湖を吹き渡る風は牙え返り、打ち寄せて来る浪も白い波頭を立ててゐるが、その白に縁のある白鬚の社に早くも着いたのであつた。「霞む」と空・春・立ち、春と花園とはそれぞれ縁語。白鬚には「白し」をかける。
 (四) 釣の仕事をいつまで續けることか。いつまでも隙なく浪の上で明かし暮らすことだらう。「いとなみ」には絲の音があり、釣の縁語。隙と浪間は尾韻。浪間には「無し」をかける。
 (五) 私たちは小さい釣舟に棹をさし馴れてゐるが、小舟で大海を渡るのは難しいやうに、この憂世を渡りかねてゐるよ。「渡る」は舟の縁語。
 (六) 詩句だが出所未詳。
 (七) 底本「てひ」と誤る。
 (八) 現行諸本「江天」

白しろ
鬚ひげ

前シテ……………漁翁 (白鬚明神の化身)
 後シテ……………白鬚明神
 前ツレ……………漁夫
 後ツレ……………天女
 後ツレ……………龍神
 ワキ……………當今の臣下 (大臣姿)
 ワキツレ……………臣下の從者 (數人)
 狂言……………白鬚末社神

(眞の次第) 大臣次第へ君と神との道すぐに、君と神とのみちすぐに、治まる國ぞ久しき。こゑ「抑そも是は當今に仕へ奉る臣下也。詞「さても江州しらひげの明神は靈神にて御座候。君此ほど御靈夢の御告まし候間、急ぎ參詣申せとの宣旨を蒙り、ただ今江州しらひげの明神へ勅使に參詣仕り候。(道行) 上へこ

(一九)底本「たいらか」と誤る。
 (二〇)船頭はそれを見て明朝の雨を豫知するの意。

(二一)花のほころびる意をもかける
 (二二)白と妙の兩意を持つ。

(二三)風は花の縁語。

(二四)新古今の歌。末句「跡見ゆるまで」

(二五)「匂ふ」に通じ花の縁語。

(二六)越路の序の心。
 (二七)打ち續いて眺められる景色だ

よ。
 (二八)漁夫の宛字。

(二九)底本「さんけひ」と誤る。

(三〇)「逢ふ」を所の縁で「近江の海」にいひかけ、「深き」の序詞とした。

(三一)場所柄からして有難いところ
 (三二)白鬚の神が垂跡されてから久

しい年月が経つてゐるのだ。瑞垣は元來久しの枕詞だが、ここでは久しの意味を持つてをり、また神の縁語でもある。

(三三)衆生を救ふ誓願。御利益の意。

(三四)「無し」をかけ、波・小舟・釣と縁語を續けた。

(三五)地名の近江を含ませた。

このへの、空ものどけき春の色、く、霞む行方は花園の、しがのやまごえうちすぎで、眞野のいりえの道すがら、にほの浦かぜさえかへり、立ちよる浪もしらひげの、宮むに早く着きにけり、宮むにはやく着きにけり。

(眞の一聲) 一聲二人へ釣のいとなみいつまでか、隙も浪まに、あけ暮れむ。

つれへ棹さしなるる海士を舟、二人へわたりかねたる、憂世かな。さしこゑ風歸帆を送る萬里の程、昊天渺々として水光平らかなり。しうしはとく是みやうてうの雨。おも白や比しも今は春の空、かすみの衣ほころびて、嶺しるたへに咲く花の、あらしも匂ふ、日かげかな。下(歌)へいやしきあまのころまで、春こそそのどけかりけれ。上(歌)へ花さそふ、比良の山かぜ吹きにけり、く、漕ぎゆく舟の跡みゆる、にほの、浦半もはるくと、霞みわたりて天津鴈、か

へる越路の山までも、ながめにつづくけしきかな、眺に續くけしきかな。

わき「いかに是なる漁父。汝は此あたりの者か。して「さん候此うらの漁父にて候が、朝な／＼沖にいで釣をたれ候處に、是は此あたりにては見馴れ申さぬ御事也。もし都より御參詣候やらん。わき「勝よく見て有るものかな。是は都より始めたる勅使にて有るぞとよ。して「何と勅使にて御座候とや。わき

(三〇)以下長文の白鬚明神の縁起は太平記卷十八比叡山開闢のこの本會我物語卷六比叡山の始まりのこの條には、一層謡曲に近い本文が見えるが、曾我には最初の數行が見えず、またこの白鬚の曲舞の部分は應安年間の古作だから、流布本會我のは謡曲によつたものらしい。

(三一)取りあへず記録されてゐる一説によると。儀は義の誤り。

(三二)底本「たいくのけんこつ」。第九回目の滅劫に當るときで、人の壽命が二萬歳のとき意。佛説でこの世界の始めから終りまでを成住壞・空の四期の劫に分けるが、右の住劫はさらに二十の小劫に分かれ、各小劫はまた増劫と滅劫とに分けられる。人の壽命八萬歳のものが百年ごとに一歳を減じて人壽十歳に至るまでを滅劫といひ、その反對に人壽十歳から百年ごとに一歳を増して人壽八萬歳に至るまでを増劫といふのである。

俱舍論に見えぬ。

(三三)西天竺すなはち西印度。

白 鬚

「中々の事。して「有難や君としてだにか程まで敬ひたまふ此神の、御威光の程こそ有難けれ。二人へいやしきあまの此身まで、すぐなる御代にあふみの海の、深きめぐみをたのむなり。わきへよし誰とても君を仰ぎ、神をうやまふ心あらば、などか恵みに預らざらん。して殊更ここはところから、同上(歌)へみづがきの、としも經にけり白鬚の、く、神のちかひは今とても、かはらざりけり。勝有がたやたのもしや。我は、こころもなみを舟、釣の翁の身ながらも、安くたのしむ此ときに、生れあふ身は有難や、生れあふみは有がたや。

(クリ)上へ夫この國のおこり家々に傳はる所、各々別にして、其説まち／＼なりといへども、しばらくきする所の一儀によらば、天地すでに別れて後、第九の滅劫人壽二萬歳のとき、して下へ迦葉世尊西天に出世し給ふ時に、(同)へ大聖釋尊其じゆきをえて、都率天に住し給ひしが、して上へ我八相成道の後遺教流布の地、いづれの所にかあるべきとて、同へ此南瞻浮州をあまねく飛行して御覽じけるに、漫漫とある大海の上に、一切衆生悉有佛性如來、常住無有變易の浪のこゑ、一葉のあしにこりかたまつて、ひとつの嶋となる今の、大宮權現の、波止土濃なり。(タセ)下へ其後人壽、百歳のとき、悉達と生まれたまひ

來世にはかならず佛となるとの記別(豫言)を授けること。

(三二)佛道を成就したのち。八相成道は佛が一生涯に示す八種の相。

(三三)南闍浮提。この娑婆世界。

(三四)涅槃經の文。一切の衆生は悉く佛となるべき性質を持つてをり、如來は永久に變化することがない。底本「扁易」と誤る。

(三五)山王二十一社の上七座の第一。日吉神社の西本殿である。

(三六)橋殿ともかく。大宮權現の前の板橋をいふ。

(三七)釋尊が跋提河畔で入滅なさつた意。

(三八)不變不滅、一切世界に遍滿する妙體であるから。

(三九)豐葦原の中津國すなはち日本(四〇)名字。名稱、述語の意。

(四一)志賀の枕詞。浦・釣などの語に波の縁で軽く響く。

(四二)底本、潔戒。下縣諸本「結戒」とあるが、觀世流の結界がよい。佛法修行にあたり障害となるものを入れないやうにした聖地。

(四三)底本「けつかひ」と誤る。

(四四)底本「五々百歳」と誤る。釋

て、八十年の春のころ、頭北面西右脇臥、跋提の浪ときえたまふ。されども佛は、常住不滅法界の、妙躰なればむかし、あしのはの嶋と成りし、中津國を御覽するに、時はうがや、葦あはせずの、みことの御代なれば、佛法のみやうじを人しらず。爰に比叡、山の麓さざなみや、志賀のうらのほとりに、釣をたるる老翁あり。釋尊かれに向つて、おきなもし、此地のぬしたらば、この山を我にあたへよ。佛法結界の、地となすべしとのたまへば、おきな、答へて申す様、我人壽、六千歳のはじめより、この山のぬしとして、此水海の七度まで、蘆原に成りしをも、正に見たりしおきななり。殊この地、結界と成るならば、釣するところ失せぬべしと、ふかく惜しみ申せば、釋尊ちからなく、今は寂光土に、かへらんとしたまへば、して上へ時に東方より、同へ淨瑠璃世界の藥師、忽然と出でたまひて、よきかなや、釋尊この地に、佛法をひろめ給はんことよ、我人壽、二萬歳のはじめより、此所のぬしたれど、老翁いまだ我をしらず。なんぞ此山を、惜しみ申すべき。はや開闢したまへ。我もこの山の王と成て、ともに後五百歳の、佛法を守るべしと、かたく、誓約し給ひて、二佛、東西に去りたまふ。其時の翁も、今のしらひげの神とかや。

尊入滅後二千年を経たのちから始まる五百年をいふ。佛法衰退の時期。

(四三) 神の秘事。

(四四) 天女の捧げる燈と龍神の捧げる燈。

(四五) 「言ふ」と「夕べ」の掛詞。

(四六) 吹き嵐す。

(四七) 湖の浪が寄せて来る意と、老が浪のやうに隙なく寄せて来る意とをかけた。浪は前の風、のちの釣に對して縁語。

(四八) 白鬚は老・おきなな縁語。

(四九) 底本「をし」と誤る。

(五〇) 神樂を舞ふ少女。もと八人で舞つたゆゑ八乙女といふが、のちには單に神樂の舞姫をいふ。

(五一) 宜禰。禰宜すなはち神官。

(五二) 今日の狹義の鼓でなく、太鼓を含めた廣義の鼓を指す。

(五三) 神しい氣の滿ち渡つた。

(五四) 古諺。貞永式目巻頭に、右神者依三人之敬二増威。卷絹にも見える。

(五五) 況んや今同は勅使の參詣だからますます威嚴を増すのであつて、敬仰してもなほ敬仰しきれない。

(五六) 「開(あ)け」と「朱(あ)け」

わき「ふしぎなりとよかほどまで、たへなる神祕をかたる翁の、へ其名はいかに覺束おぼつかな。して「今は何をかつつむべき。其いにしへも釣を垂れし翁なるが、勅使を慰め申さんため、只今爰こゝに來りたり。殊更こよひは天灯龍灯神前に來現の時節なれば、へしばらく待たせたまふべしと、同上(歌)へゆふべの雲も立ちさはぎ、く、みぎはに、おちくるかぜの音、老おきなの浪もよりくる、釣のおきなと見えつるが、我白鬚まほの神ぞとて、玉の、扉しきを押しひらき、社壇にいらせ給ひけり、社壇に入らせたまひけり。(來序。中入。狂言、白鬚明神の縁起を語り舞ふ)

(出端) 上へまをとめのかへすたもとの色々に、きねが鼓つづみもこゑすみて、神さび渡れる、折からかな。(後) してへ神かみは人のうやまふによつて威をます。ましてやは勅の使、あふぎても猶あまりあり。同上へふしぎや社壇の、内よりも、く、まことにたへなる、御こゑを出し、戸びらもおのづから、あけの玉たまがき、かかやきわたる、白鬚の、神の御すがた、あらはれたり。

わきへあら有がたの御事や、かかる奇特まがにあふことも、ただ是君の御影ぞと、感涙袖をうるほせり。してへいざ／＼さらばよもすがら、舞樂の曲を奏し

との辨詞。

(五)玉垣と白鬚との兩方にかかる。

(六)靈妙不可思議なしるし。

(六)底本「さひはら」と誤る。

(六)神樂を舞ふとき人長が手に持

つ物を採物(とりもの)といふか

ら、取々は神樂の縁語。

(六)絃樂器である琴や管樂器であ

る笛の役の人たちは。

(六)天上界の天女の捧げる燈と下

界の龍神の捧げる燈との兩燈。

(六)日光の照らす晝の明かるさと

燈の照らす夜の明かるさとの優

劣。

(六)よいかなといふ褒め詞。

(六七)「白む」の意をかける。
(六八)「治まる」は風の縁語。

つつ、勅使を慰め申さんと、同上(歌)へかぐら催馬樂^{六二}取々に、く、絲^{六三}たけの
役々、秘曲を盡し拍子をそろへて、夜遊のぶがくは有がたや。樂。して下へ面
白やこの舞樂、同下へく、の、つづみはおのづから、磯うつ浪のこゑ、松かぜ
はきんをしらべ、心耳^{しんじ}を澄ます折からに、へ天津み空の雲わかかやきわたり、
湖水のおもて鳴動するは、天灯龍燈の、來現かや。

(出端で天女、早笛で龍神出る)上へ天地^{六四}の兩燈、あらはれて、く、神前^{六五}にそ
なふる、御灯の光、山河草木、かかやきわたり、日夜の勝負、見えざりけり。

(續)

して下へかくてよもはや、明方の、同下へかくて夜もはや、明方になれば、
おのおの明神に、御いとま申し、歸れば明神も、御聲をあげて、善哉^{ぜんざい}くと、感
じ給へば、天女はあまちに、又立ちかへれば、龍神は湖水の、上にかけて、
浪をかへし、雲をうがちて、天地にわかれて、飛去りゆけば、明けゆく空も、
白鬚^{六七}の、あけゆく空も、しらひげの神かぜ、治まる^{六八}御代とぞ、成りにける。

(一) 賀茂川の清い流れの水上を尋ねて賀茂の社へ参詣しよう。賀茂川を清い川といふのは古來の傳で、山城風土記にも石河の清川など見える。宮路は、現行諸本の宮居とある方がよいやうだ。

(二) 田本一臣下也

(三) 播磨濁の室の港を暗に旅立つて、裾染(かちんぞめ)で名高い飾磨(しかま)の邊は徒歩で行き、又舟に乗つて上落し、月のやうに美しい都の山陰にある賀茂の社に着いたのであつた。播・立つ・色・染むは衣の、「染む」は裾の、舟・雲・月・山は「のぼる」の、雲・かげ・宮は月の縁語、「とほそ」は「明け」の序詞で、門(と)即ち水門(みなと)の意をかけ、「かち」は飾磨の特産として有名な染料の裾(かち)と徒歩(かち)との掛詞。「久方の」は月の枕詞。「月の」は都の美稱。「雲」と「宮」とは尾韻。(四) 神前を流れる御手洗川は、神の清い心で澄んでゐるが、その綺麗な水の流れる賀茂の河原に行くのである。水と「出づ」とは尾韻。(五) 心を正直にして神に祈つたならば、この汚れた人間界をも、亂

矢立鴨 (賀茂)

前シテ……………女 (賀茂明神の化身)

後シテ……………別雷 (わけいかづち) の神

前ツレ……………女

後ツレ……………御祖の神 (天女姿)

ワキ……………室明神の神職 (大臣姿)

ワキツレ……………神職の従者 (數人)

狂言……………賀茂末社神

(眞の次第) 大臣次第へ清き水上たづねてや、清きみなかみたづねてや、鴨の宮路に参らん。こゑ「抑是は播州室の明神につかへ奉る神職の者なり。詞「扱もみやこのかもと、室の明神とは御一躰にて御座候ほどに、只今参詣仕り候。(道行) 上へ播磨がた、室のとほその明ぼのに、く、立つ旅ごろも色そむる、

の森の名のやうに、神はお正し下さるだらう。賀茂明神の鎮座まします所の森へ行く道だから「ただすの道」といつた。

(六)一年の眞中の六月も半ばを過ぎて。空は月の縁語で虚字だが、中空(なかぞら)の聯想から半の縁語。水無月には夏もみな盡きの意を寓し、月の影更けは月齡のかさむこと即ち晦日に近づくの意。(七)六月晦日に夏越の祓と呼ぶみそぎをする川。ここは賀茂川を指す。底本・田本「御抜川」と誤る。

(八)夕べの意川の縁で浪を出す。(九)心も澄んである身に水桶を持ち、満ち足りた身分ではないから壽命は千年も保つかと思はれるもの、生きてゐる限りは神に參詣する身なので、神殿の曇りのないやうに、やましいところのない私たちの心だよ。「すめる」は川の縁語。水桶には身をかけ、もちがは「持ち」と望月のやうに圓滿具足した顔の意の望顔との掛詞。千早振は神の枕詞だが千年の意をかけ、神・歩み・身・宮居はいづれも「み」の韻をふむ。(一〇)この神に誓ひをかけて頼み、

しかまのかちに行く舟の、のぼる雲わや久方の、月の都の山かげの、かもの宮ゐに着きにけり、かもの宮居につきにけり。

(眞の一聲) 一聲二人へみたらしや、清き心にすむ水の、かもの河原に、出づるなり。つれへすぐに憑まば人の世も、二人へ神ぞただすの、道ならむ。さしこゑへ半ゆく空みな月の影ふけて、秋ほどもなき御抜川、かぜも涼しき夕浪に、心もすめるみづ桶の、もちがほならぬ身にしあれば、命のほどは千早ふる、神にあゆみをはこぶ身の、宮わくもらぬ、ころかな。下(歌)へ憑むちかひやこの神に、よるべの水を波まうよ。上(歌)へみたらしの、聲もすずしき夏かげや、く。ただすの森の木末より、初音ふりゆく郭公、猶過ぎがてにゆきやらで、今、一通りむらさめの、雲もかげろふゆふづくひ、夏なき水の川隈、くまずとも影はうとからじ、汲まずとも影はうとからじ。

わき「いかに是なる水くみ給ふかた」に申すべき事の候。して「何事にて候ぞ。御姿を見奉れば此あたりにては見なれ申さぬ御方也。いづくよりの御參詣にて候ぞ。わき「是は播州室の明神の神職の者にて候が、當社の御神と室の明神とは御一體の御ことなれば、唯今參詣申したり。又是なる河べをみれば、

神前に湛へられた水を汲まうよ。
「よるべの水」には「頼る」の意を
かける。底本「汲ふよ」と誤る。
(二)御手洗川の川音も涼しい夏の
木蔭だ。

(三)郭公の初音は四月ころ。

(四)その郭公の聲を聞いては、や
はり通り過ぎがたく歩みを止め、
今一度聞きたいなあと思つてある
と、通り雨がきて夕日も雲にかげ
り。「一通り」は一度の意と通り雨
の意とをかける。底本「一とをり」。
拾遺「行きやらで山路暮らしつ郭
公今一聲の聞かまほしさに」
(五)夏の暑さを知らない川角にあ
ると、水には自分の影が映るので、
水を汲まないでも、川邊の木蔭に
は親しみを感じるだらう。川隈と
「汲まず」とは連韻。
(六)底本「かつかう」、日本による。
(七)御神體がつきり見えて、神
神しくはないかも知れないが、
(八)現行諸本に神祕とあるのがよ
い。神祕は神の秘事の意。
(九)金春と上懸は「あぞあぞしく」
(一〇)一義がよ。「一通りのわけ」。
(一一)上賀茂の別雷神、下賀茂の玉
依姫命、松尾の大山咋(くひ)神

新しく壇をつき、しらゆふに白羽の矢を立て、渴仰（あつち）のけしき見えたり。是は何
と申したる御事にて候ぞ。して「さては播州室の明神の神職にて御座候か。又
これなる御矢は當社の御神體とも御神物とも、只此の矢の御事也。」あからさ
まなる事なれども、渴仰申させ給ひ候へ。わきへ勝々（げんげん）和光の神祇に於いて、様
々有るべき其内に、わきて此矢の御いはれ、へ委しくかたり給ふべし。して「惣
而神の御事を、あさしくは申さねども、先々一儀を顯はすべし。昔此所に
はたの氏女（うぢむすめ）と申しし人の候ひしが、朝な夕なこの川べに出でて水をむすび神に
手向けけるに、有時水上より白羽の矢一すぢ流れ來り此水桶にとまる。とりて
歸り庵の軒にさす。あるじ程なく懐胎し男子をうめり。此子三歳と申しし時、
人々まとゐして父はとへば、此矢にむかひゆびをさす。其矢すなはちなるい
かづちとなりて天にあげり神となる。わけいかづちのしん是也。つれへ其母み
こもかみとなり、かも三所の神所とかや。してへか様に申せばはばかりの、ま
ことの神祇は愚かなる、二人へ身にわきまへはいかにとも、いさしらま弓やた
けの人の、治まる御代をつけしらはの、八百萬代の末までも、弓筆にのこす心
かな。わきへさてく其矢はのぼる代の、今末の世にあたらぬ矢までも、御神

- (矢の神)。
 (三) 恐れ多いことであり。
 (三) 「知らず」をかけ、弓の縁で矢を聯想し、「やたけ」と續ける。
 (三) 觀世は「治めん」、他の諸流は「治めし」とあり、觀世が最も通じ易いが、底本のままだと、「やたけの人の」は「治まる」の序詞。
 (三) 「知らず」をかけ、白羽の矢の縁より、八百萬代につづく。
 (三) 矢をかける。底本・田本「やをよるつよ」と誤る。
 (三) 記録に残さうとの下心だよ。弓筆は文武といふ意味の熟語だが、ここでは弓は矢の縁で出したまでで、虚字。
 (三) 矢の縁語。値打ちのないの意。
 (三) 對句にわたつて頭韻をふむ。
 (三) 「すむ」まで新古今の歌。石河、瀬見の小川共に賀茂川の異名。
 (三) 江の意で「淺からぬ」の序詞。
 (三) 年は矢のやうに早く流れ。
 (三) 矢の縁語。
 (三) 底本・田本「くまふよ」
 (三) 心と賀茂河と兩方にかかる。
 (三) 二人のところ、田本は「して」
 (三) 「言はん」をかける。
 (三) たぎり立つ流れは白玉のやう

體なる謂は^{いは}いかに。して「げに御不審はさることなれども、隔はあらし何事も、わきへ所からにてすむも濁るも、してへ同じながれの様々に、わきへかもの川瀬もかはる名の、してへかみは賀茂河、わきへしもはしら川、してへ又其うちにも、わきへかはる名の、同上(歌)へ石河や、せみのを川の清ければ、く、月も流を尋ねてぞ、すむも、濁るもおなじえの、あさからぬ心もて、何うたがひの有るべき。としの矢の、早くもすぐる光陰、惜しみて、かへらぬはもとの水、ながればよも盡きじ、絶えせぬぞ手向なりける。下(歌)へいざく水を汲まうよ、いざく水を汲まうよ。

(ロンギ) 上へ汲むや心もいさぎよき、かもの河瀬のみなかみは、いかなる所なるらむ。二人へいづくとか、岩根松がねしのぎくる、瀧つながればしら玉の、音ある水やきぶね川、同へ水もなく見えし大井河、それは紅葉の雨とふる。二人へあらしの底のとなせなる、浪もなにやながるらむ。同へ清瀧川の水くまは、高ねのみ雪とけぬべし。二人へ朝日待ち居て汲まうよ。同へくまは音はのたき波は、二人へうけてかしらの雪とのみ、同へいたたく桶も、二人へ身のうへと、同へ誰もしれ老らくの、くるるもおなじ程なさ、けふの日も夢のう

に飛び散り、音をたてて迷る水が流れ流れて賀茂川の上流の貴船川となる。「玉の緒」といふ熟字から「白玉の音」と續け、貴船川には來をかけ、白玉と貴船川は和歌上の縁語。

(三〇)後拾遺「水も無く見えこそ渡れ大井川岸の紅葉は雨と降れども」
(三一)嵐山の麓の戸無瀬も有名なところだらう。嵐は雨の、波は「流る」の縁語。この邊「な」の韻。

(四〇)新古今「降り積みし高嶺のみ雪解けにけり清瀬川の水の白波」
(四一)觀世、金剛の「汲まば」がよい。
(四二)「雪解け」の縁語。

(四三)古今「落ちたぎつ瀧の水上年積り老いにけらしな黒き筋なし」

(四四)底本・田本「老樂」と誤る。

(四五)「來る」と「暮る」の掛詞。

(四六)夕日の西に移るのと水に影の映るのをかける。

(四七)水を掬ぶ意と萬物を産む神の意とをかける。

(四八)現行の神祕がよい。

(四九)底本「向へ」、田本による。
(五〇)三句にわたつて頭韻をふむ。
(五一)「知らず」の掛詞、矢を聯想させる「やごと」の序詞。

つつぞと、移ろふ影は有りながら、濁なくもみづむすぶの、神のこころ汲まうよ、神の御心汲まうよ。

わき「扱々かやうに神祇をのたまふ。御身はいかなる人やらん。して汝知らずやしんろにおもむき、むかへ給ふも君をまもりの、此神徳をつけしらしめんと顯れいでて、同上(歌)へ恥づかしや我すがた、くくの、まことを、顯はさばあさましやな。あさまにや成りなん。よし名ばかりはしらま弓の、やごとなき神ぞかしと、ゆふしでにかきまぎれて、神がくれに成りにけりや、神がくれに成りにけり。(來序。中入。狂言、加茂明神の縁起を語り舞ふ)

(出端)天女へあら有がたの折からやな。我此宮に地をしめて、法界無縁の衆生をだに、一子とおぼし見そなはる、御祖の神徳あふぐべしやな。くもらぬ御代をまもるなり。同へ守るべしくやな。君の恵みも今此時、天女へ時至るなり時いたるなり。同へ感應あれば、影向みめうの、さうがうしやうごん、まのあたりに、有難や。(天女)舞

上へかもの山なみ、みたらしのかげ、く、移りうつるふ、緑の袖を、水にひたして、すすみとる、く、もすそをうるはず、折からに、上へ山河草木動

(五三)「言ふ」をかける。

(五四)全世界の佛縁のない衆生。

(五五)田本「な」なし。

(五六)神が人の信仰に感じて、美しく妙なお姿を嚴めしく飾りたてて目の前に現はれる。

(五七)「あり」の掛詞。

(五八)賀茂の山の縁と御手洗の水の縁とが映ろひ合ふ。

(五九)觀世流の「涼みとる」とあるのがよい。涼を入れるの意。

(六〇)「上」の字、田本で補ふ。

(六一)「別け」をかける。

(六二)諸天に屬する善神。

(六三)衆生濟度の方便として國土に跡を垂れ給ひ。「を」は衍字か。

(六四)威光を和らげて俗塵に交はり衆生に縁を結ぶ神の姿は。

(六五)別雷の神は風雨を別時に授ける空の稻にをり、雲を別け霧を穿つて、稻妻の光が稻葉の露に宿るほどの短い間でさへも、絶えず鳴る雷であつて。底本・田本「ふううすいしん」と誤る。雲居には「居る」を、別雷には「別け」をかける。稻妻・稻は頭韻。

(六六)時の縁語。

(六七)「別け」をかける。

揺して、まのあたりなるわけいかづちの、神體來現、し給へり。

(早笛) 後して^{そと}抑是は王城をまもるくんしんの道、わけいかづちのしんなり。同へあるひは、諸天善神と、成つて、虚空に飛行し、してへ又は國土を、すいしやくの方便、同へ和光同塵、結縁のすがた、あら有難の、御事やな。

(働)

してへ風雨^{六四}隨時の、み空の雲む。同へ^(風雨)、してへわけいかづちの、雲霧をうがつて、同へ光いなづまの、稻葉の露にも、して下へやどるほどだに、なるいかづちの、同へ雨をおこして、降りくるあし音は、して下へほろほろ、同下へほろく、とどろくと、踏みとどるかす、なる神の鼓^{六五}の、時も至れば、五穀成就も、國土を守護し、治まる時には、このしんとくと、威光をあらはし、おはしませば、みおやのしんは、ただすの森に、飛びさりく、いらせ給へば、猶立ちそふや、雲霧を、わけいかづちの、かみもあまちに、よぢのぼり、神も天ぢに、よぢのぼつて、虚空にあがらせ、給ひけり。

(一)伊勢の神といつても日向の神といつても、衆生濟度の誓願は同じであらう。順序不同で雑多なと乃至は僻事の、意の伊勢物語古註より出た「伊勢や日向の物語」といふ俗諺を響かせた。

(二)旅仕度をして出で立ち、道中日敷を重ねて浦や山を過ぎてはるばると行くうちに、旅には馴れたが苦勞を積んで、筑紫湯の鵜戸の岩屋に着いたのであつた。立ち・重ね・浦・懸け・はる・なれ、はいづれも衣の縁語。「つくし」は盡す・筑紫の掛詞。鵜戸は憂(う)に通じ、「心盡し」の縁語。

(三)今日は神の小屋を鵜の羽で葺くお祭だから、波や風も氣をつけよ。「ふく」と風、「みそぎ」と波、小屋と「立つ」は縁語。

(四)「二人」田本で補ふ。

(五)求(もと)めて。尋ねて。

(六)「歸る」と「しら」との縁語。

(七)秋風の吹く松の傍に並び立つてゐる、磯邊の宮殿の庇を鵜の羽で葺くのだが、これは悠久なこの國の先例だよ。松と磯とは縁語。濱庇は「磯の宮」の縁で出し「久し」

鶯^う 鶯^う 羽^は (鵜羽)

前シテ……………女(豊玉姫の化身)

後シテ……………豊玉姫の神靈(龍女姿)

ツレ……………女

ワキ……………當今の臣下(大臣姿)

ワキツレ……………臣下の従者(數人)

狂言……………鵜戸の岩屋の浦人

(眞の次第) 大臣次第へ伊勢や日向の神なりと、いせや日向の神なりと、誓はおなじかるべし。こゑ「抑そも是は當今に仕へ奉る臣下なり。詞「さても九州うどの岩やは、神代の古跡にて候程に、ただ今思ひたちうどの岩屋へ參詣仕り候。(道行) 上へ二旅二ごろも、猶立ちかさねゆく道の、く、うら山懸けてはるばると、なれて心をつくしがた、うどのいは屋に着きにけり、うどの岩やに着きに

- の序詞となる。
 (八)「久し」の意をかけ、「あま」の枕詞となる。
 (九)「懸け」をかけ、宣命詞として「かたじけなし」に續く。
 (一〇)五穀豐穰の意を寓す。
 (一一)海士の刈る藻。露の序詞。
 (一二)見を掛ける。
 (一三)神の枕詞。千歳經るを掛ける。
 (一四)以下の「二人」とあるところ、田本はすべて「して」とある。
 (一五)天津日嗣を知ろし召す神、すなはち皇位を受け繼ぐ神の意。
 (一六)急げ 磯は頭韻。
 (一七)底本・田本「をのか」と誤る。
 (一八)西南から吹いて迅風(はやて)となつて浪を吹き立て。「ひかた」は干潟に通じ、浦・浪などの縁語だが、西南の風の意の古語。浪風は浪を吹き立てる風の意の成語で、番外謡曲香椎にも「吹くは鹽風、響くは波おろし、はやち干潟、あひの風……」とある。
 (一九)「打つ」をかけ、羽風といふ成語の聯想で、庇を葺く鶉の羽の上を吹く風を鶉の羽風といつた。
 (二〇)「鶉の羽葺く」と「風吹く」との兩意をかけ、つづいて同韻を

けり。

(眞の一聲)一聲二人へ鶉^ニのはふく、けふのみそぎぞ神のこや、立つ波かぜも、心せよ。つれへうどの岩屋の神の代を、二人へ思へば遠し、あきつ國。さしこゑへ有難やすぎし神代の跡^五とめて、聞けばむかしにかへる浪の、しらゆふかけて秋^セかぜの、松にたぐへて磯の宮、うのはふくなり濱びさし、久しき國の、ためしかな。下(歌)へげに名をきくも久^久方の、其あま乙女かずくの、手向草をささげん。上(歌)へたれもげに、神にたのみをかけまくも、く、かたじけなしや此みこの、御母の名をきくも、豊玉姫のいにしへ。げにこころなき我らまで、あまのかるもの露程も、めぐみになどか逢はざらん、恵になどかあはざらん。

わき「いかに是なる人々に尋ね申すべき事の候。して「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。わき「是なる神のかり殿をみれば、墨色なる鳥のはにて一方をふき、一方をふきさされて候。是は何と申したる事にて候ぞ。して「これこそうのは葺合はせずのみことと申して隠なき御^{おん}ことにて候へ。わき「さらば其^は謂^{いは}を御物語り候へ。して「抑^{おさ}地神五代の神をばうのはふき合はせずのみことと申

四つ重ねて文の綾とした。

(二二)「浪おろし」の對語。

(二三)夜の更ける意。風の縁語。

(二四)尊と豐玉姫との契りを諷す。

(二五)この鶉の羽で屋根を葺くこともなるほど變つた面白いことで、世間には同様の面白いことが色々ある。

(二六)俊祕抄に見える細布傳説を指す。

(二七)どういふわけからか、この日向の國では鶉の羽で神の小屋の庇を葺くのだ。だからこの蘆で葺いたやうな粗末な假屋も、幾久しい神の恵みを受けるのであつて、粗惡な筈はなく、世界の不滅を象徴するのだが、これも神の衆生濟度の誓願なのだらう。「ひさし」は「久し」と此との掛詞で、小屋および假屋の縁語。「よのふし」は「世の不死」で、「よ」は節(よ)に通じ、「ふし」および芽ぐむに通ずる。「めぐみ」とともに蘆の縁語。蘆假屋には悪しかりやの意を掛け、攝津の歌枕蘆屋に通じ、同國の歌枕昆陽(こや)の聯想より小屋と縁語。田本その他近世の諸本いづれも「がりや」と濁る。

すなり。其父の御神釣ばりを魚にとられ、龍宮まで尋ねゆき給ひ、豐玉姫とちぎりよをこめ、釣ばりに満干の珠をそへ取りて歸り給ふ。其後豐玉ひめ程なく御懷妊ありしかば、此海邊に御産屋を作り、うのはにてふきさふらふに、いまだ葺きも合はせざるに尊生まれさせ給ふにより、鶉のは葺合はせずのみことと申す也。其御誕生日この秋のけふにあたりたれば、嘉例にまかせてかり殿をつくり、うのはにて葺きさふらふなり。わきへ謂をきけば有がたや。遠きためしも今ここに、宮もさぞな干はやふる、二人へ神のみそぎのまつりごと、直なる御代に跡たれて、わきへ今も日をしる神まつり、二人へ急げや磯の浪になく、わきへ千鳥もおのが翅そへて、二人へ鶉のは重ねて、わきへふくとかや。同上(歌)へ浦かぜも松かぜも、く、ひかたやはやちなみおろし、音をそへ聲をたて、戸ぼそも軒もうのはかぜ、ふけやふけやとくふけ。吹くや、こころにかかるは、花のあたりの山おろし、ふくるまを惜しむや、稀にあふ夜なるらん、此稀にあふよなるらむ。下へおもしろや是ととも、げによの中のしな、いかなれば陸奥には、鳥のはを糸にして、衣を織るとかや。いかなればこの國は、うのは、ふくなり神のこやの、めぐみひさしの蘆がりや、よのふしをあら

(二七)散る波しぶきを露の白玉に見立てた。「露の玉」は「散る」の縁語。

(二八)「ふる」の枕詞。軒は「葺く」の、雨は露の縁語。

(二九)つぎの落葉と縁語。

(三〇)大和にある「雲梯(うなで)の森」の枕詞。前の「まこと」と頭韻。

(三一)鶉の縁でうの附く地名を出す

(三二)底本・田本「ふかふよ」

(三三)干珠の意をかける。

(三四)「言ふ」をかける。

(三五)出るの意。鹽干の縁語。

(三六)木陰も茂るの意。

(三七)「茂き」およびつぎの「重なる」の縁語。

(三八)忍ぶ草の別名を忘れ草といふところから、つぎの「忘れ」を誘ひ出す。

(三九)底本「おかりや」、田本「おかりや」と濁る。

(四〇)以下「も」の韻を重ねる。

(四一)上懸、古版本は「出で」

(四二)天照大神をかける

(四三)知らるるの掛詞、「たつ」の縁語。

はすもや、神のちかひなるらむ。

(ロンギ)上へ早夕暮の秋の空、浪もちるなりしら露の、玉をつらねてふくと

かや。二人へ軒の雨、ふるきことのは取りそへて、手向ぞまこと眞鳥すむ、う

なでの森の落葉を、ひろひあげいざや葺かうよ。同へひろふ鹽干のたま〜も、

折をえたりと夕ぐれ、二人へ月すでに出でしほの、影ながら葺かうよ。同

へ陰もしげ木のやへ神、は色をそへてふく程に、二人へかさなる軒の忍ぶ草、

同へ忘れたり葺きさして、二人へすこしは残せ、同へ名をきくも、葺合はせず

の、神のおがりや、ふき残せふきのこせ、しかも月の夜すがら、影もろとも

我もゐて、もる影は天てらす、神代の秋の月を、いざや眺め明かさむ。

わき「うのは葺合はせずの謂は承り候ひぬ。扱々干珠満珠の珠の在所はいづ

くにて候ぞ。して「かんじゆまんじゆの珠の在所も此あたりにてありげに候。

まことは我は人間ならず。暇申してかへる也。わき「そも人間にあらざとは、

いかなる神の顯化ぞやと、袖をひかへて尋ねれば、して「よし名のらずとも神

のつげ、終には誰としら浪の、たつの都はゆたかなる、玉の女とおぼしめせ。

わきへたつのみやこは龍宮の名、又ゆたかなる玉の女と、きくは豊玉姫かと

- (四四) 底本・田本「あふ」と誤る。
 (四五) 伊勢物語・新古今などにある歌。末句「消えましものを」
 (四六) 「なまし」と同韻。
 (四七) 海松藻(みるめ)に通じ海の縁語。
 (四八) 隔の縁語、「よし」の序詞。
 (四九) 豊玉姫をかける。
 (五〇) 孝經の序に「虎嘯而風起」とあるので、寅(とら)の序詞となる。
 (五一) 八歳の龍女が如意寶珠を釋尊に奉つて男子に生まれ變り成佛した、との法華經の說話をいふ。
 (五二) 永久に變易しない玉。本覺も眞如も宇宙の不變の實體をいふ。
 (五三) 正覺を取るまいとの彌陀の悲願に裏付けられた極樂の蓮臺上の玉の意か。底本「不收」、田本で訂正。
 (五四) 彌陀の支配する世界を圓満具足させることの出来る神通力を持つた玉の意か。田本や七大夫本に遍滿とあるのも同義。
 (五五) 底本・田本「滅」と誤る。近世の諸版本はいづれも「滅」
 (五六) 底本・田本「しるて」と誤る。

よ。してへおう恥かしやしらす玉か、同上(歌)へ何ぞと人の問ひし時、露とこたへて消えなまし。なましひにあらはれて、人のみるめ恥かしや。隔はあらしあしがきの、よし名はしらずと神までぞ。只憑めとよたのめとよ、玉姫はわれなりと、海上にたつて失せにけり、海上にたちて失せにけり。(中入。狂言、豊玉姫御産の神話を語る)

わき(待詔)へうれしきかなやいざさらば、く、此松かげに旅わして、かぜもうそふくとらの時、神の託をもまちてみむ、神のつげをも待ちてみむ。(出端)後して上へ八歳の龍女は寶珠をささげて變成就し、我はうしほの満干のたまをささげて、聖人の御法をえんとなり。有難や。南無や歸命本覺眞如の玉、同へあるひは不取正覺の臺のたま、してへ又は無量壽法界圓満、神通のたま、同へ各々様々、おほけれど、山海増減の、みちひの珠、げにたへなりや、あら有がたや。(中之)舞

上へかんじゆを海に、沈むれば、さすやうしほも、干潟と成つて、よせくる浪も、浦かぜに、吹きかへされて、遠ひがた、千里はさながら、雪を敷いて、濱の眞砂は、へい〜たり。(破之)舞

して下へ扱又まんじゆを、鹽干に置けば、同下へ(扱又…)音吹きかへて、澳あまつかぜ、鹽をも浪をも、ふきたてて、平地にはらんを、たてよせ(たて…)、山もいり海、うみをも山に、なす事安き、満干みかりのたま、かほどに妙なる、たからなれども、ただ願はしきは、聖人せいじんの、すぐなるころの、眞如の玉を、さづけ給へや、さづけ給へと、おもふおもふころは、海となつて、其ま浪にぞ、いりにける。

(毛)上懸「願も深き海となつて」

呉服

前シテ……………女(呉服の化身)

後シテ……………呉服の靈

ツレ……………女(漢服の化身)

ワキ……………當今の臣下(大臣姿)

ワキツレ……………臣下の從者(數人)

狂言……………呉服の里人

(一)政道が政道として正しく行はれてゐるときのこととて。
(二)底本「さんけひ」と誤る。
(三)住吉の淺香瀧の朝は浪もなく長閑で、海士人は玉藻を刈つてゐる。政道が眞直くなばかりでなく、難波瀧へ行く船路も何の障りもなく眞直ぐで、目ざす行手の浦は有名な呉服の里だが、その呉服の里に着いたのであつた。淺香瀧には朝をかけ、高砂に「淺香瀧、玉藻刈るなる……」とあることなどにより玉藻につづけた。行方には「行く」をかける。

(眞の次第) 大臣次第へ道のみちたる時とてや、道のみちたる時とてや、國々ゆたかなるらむ。こゑ「抑そもそも是は當今に仕へ奉る臣下也。詞「我宿願の子細あるにより、住吉の明神へ參詣二任りて候。又是より浦づたひに西の宮へ參らばやと存じ候。(道行)上へ墨三のえや、のどけき浪のあさかがた、く、玉藻かるなる海士人の、道もすぐなる難波がた、行方の浦も名をえたる、呉服くれはの里に着きに

(四)綾の衣を織る吳服の里に。吳織(くれはとり)、漢織(あやはとり)と并稱するところから、吳織は「あや」の枕詞となる。「うら」は衣の縁語。

(五)打ち沓せる浪も白いが、その浪のやうに白い白糸を原料として機を織る音が、浪音に加はつて騒がしい。「立ち」は前の衣とつぎの浪との縁語。白糸も前の衣とつぎの機織との縁語。

(六)身には唐名を負つてゐる有名な女工であり、その昔を思ひ出せば、月の入る西の海の方から海路遙かに渡つて來たのだが、その前身は唐人であつて、永年ここで暮らしてきたので、この吳服の里までもわが身によつて有名になつた名所だよ。「名にしおふ」は、上を受けて名を持つ、下にかかつて有名なの兩意を兼ね、「出づる」は月・いるの縁語。「來しかた」には來を、「くれは」には「暮らす」をかける。

(七)これといふのも、有難い聖代のお蔭で、唐土より送り日本に迎へられた織物で。「送り」は、「緒繰り」に通じ、機物の縁語。山の

けり、くれはのさとに着きにけり。詞「急ぎ候程に、是ははや津の國くれはの里に付きて候。又これなる松原に當つてはた物の音の聞え候。立ちこえ聞かばやと存じ候。

(眞の一聲) 二人一聲いくれはとり、あやの衣のうら里に、年經て住むや、あまをとめ。つれい立ちよる浪もしら絲の、二人い機織りそふる、聲しげし。さしこゑい是は津の國くれはの里に、住みて久しき二人の者。我この國に有りながら、身いはもろこしの名にしおふ、女工ぢやうらのむかしを思ひ出づる、月のいるさや西の海、なみぢはるかにこしかたの、身はから人の年を経て、爰にくれはの里までも、身にしられたる、名どころかな。下い歌い是もかしこき御代の爲、送りむかへし機物の、上い歌い大和にも、織るからきぬのいとなみを、く、今敷嶋の道かけて、言の、葉草の花までも、あらはしぎぬの色そへて、心をくだくむらさきの、袖もたへなるかざしかな、袖も妙なるかざしかな。

わき「我この松原にきてみれば、姿はから人なる女性二人、一人は機たを織り、今一人は絲をとり引き、たがひに常の里人とはみえず。そも御身はいかなる人ぞ。してい恥かしや里離なる松原の、うしほもくもる夕月の、かげにたぐへて

やうにある織物の意の「機物の山」といふ成語を介して、「機物の」は大和の枕詞ともなつてゐる。

(八)日本でも唐風の衣を織るやうになつたのだが、その仕事を今はしきりにし、のみならずそれが和歌の道にもおよんで、この機織のことが花のやうに美しい言葉で歌に表されて風情を添へ、心をこめ苦心して織る紫衣の袖も、舞のときには美しく翳されるよ。大和と「から」、「きぬ」と「いと」、「なみ」と嶋、「色」と花および「きぬ」とは縁語。敷嶋は和歌の意だが、「しきりに」の意をかけ、「あらはしきぬ」は「あらはしごろも」ともいひ、源氏物語藤袴の巻から出た語で喪服の意だが、ここでは單にあらはすの意に用ゐる。ここでは單を誘ひ出し、源氏物語の縁でさらに紫ともつながり、また紫草は根を碎いて染料とするから、紫と「碎く」とは縁語である。

(九)ここは人里離れた松原で、汐曇のために夕月の影も霞んでゐるが、そのやうに機織の音も浪音に紛れて聞えまいと思つたのに。汐曇とは潮の氣で海上が霞むこと。

浦浪の、こゑに紛れてはたものの、音聞えじと思ひしに、知られけるかや、はづかしや。わき「いや／＼何をかつつみ給ふ。其身は常の里人ならで、此松原にかくれゐて、機を織り給ふは不審也。へいかさま名乗りたまふべし。して「今は何をかつつむべき。是は應神天皇の御宇に有りし、くれはとりあやはとりと申しし女、今又目出き御代なれば、現に顯れきたれる也。わきへ「是はふしぎの御事かな。それは昔の君が代に、唐國よりも渡されし、「綾織二人の事なるが、今現在に顯はれたまふは、へ何といひたることやらん。して「早くも心得給ひたり。先此里をくれはの里と、名付け初めしもなに故ぞ。我此所に住みし故なり。つれへ又あやはとりとは機物の、糸をとり引たくみ故、綾のもんをもなす故に、あやはとりとも申す也。して「くれはとりとは機ものの、糸ひく木をばくれはといへば、くれはとる手によそへつつ、へ吳服とりとは申すなり。つれへさればふたりの名によせて、してへくれはとり、つれへあやとは申しつたへたり。二人へ然れば我らはから人なれば、大和こと葉はしらねども、下へ吳服とり、あやに戀しく有りしかば、二むら山と詠じけんも、ふたりを思ふ心なり。同上(歌)へくれはとり、あやしめ給ふ旅人の、へ、御めの程はさ

- (一〇)綾の紋。綾織の美しい模様。
 (一一)「くれは」を 榊端(くれは)と解して立てたかと思はれる牽強附會説。
 (一二)「あや」の枕詞。
 (一三)後撰の歌。下句「二村山も越えずなりにき」
 (一四)不審をお起しになつた旅人の御眼力は、成程さすがに音に聞こえた都人の教養から來るのであつて。「心から」は上懸では「所かた」となつてをり、「吳服といふ所の名から」の意となる。ただし光悦本は「心から」とある。「心から」「から人」は連韻。
 (一五)源平盛衰記に「吳郡之綾……」
 (一六)すつと前から女工の仕事である。「いと」は「永き」の縁語。
 (一七)天下太平を象徴する句で志賀にも見えるが出典未詳。熊坂にはこれを逆用して「東南に風立つて西北に雲靜かならず」とある。底本「おさまりて」と誤る。
 (一八)綾織女と絲織女。
 (一九)「暮れ」をかける。
 (二〇)西日と尾韻。唐人の記事ゆゑ生硬な漢語をわざと頻出。
 (二一)「織り」と折折との掛詞。

すが勝^{トク}、なにしおふ都人の、こころからから人と、我等を御覽せらるるは、げにかしこしやよき君に、つかふる人か有難や、つかふる人か有難や。

(クリ)上へ綾^{あや}といつばもろこし吳郡^{ごく}の地より織りそめて、女工^{むすめ}の永き、いとなみなり。してさしこゑしければ神功皇后三韓をしたがへ給ひしより、同へ和國異朝の道廣く、人の國までなびく世の、わが日のもととはのどかなる、御代の光はあまねくて、國とみ民ゆたかなり。して下へ東南雲收まりて、同へ西北に風、しづかなり。(クセ)下へ應神、天皇の御宇かとよ。吳國の勅使この國に、はじめて來り給ひしに、あやめいとめのぢよふをそへ、萬里の、蒼波をしのぎ來て、西日^{さいじつ}かげ殘なく、くれはの里にやすらひ、連日^{れんじつ}にたつるはた物の、錦^{にしん}をおりく、の、綾の御衣をたてまつる。勅使奏覽ありしかば、歡感ことにはなはだし。それより名付けつつ、袞龍^{こんりゆう}の御衣の紋、いとなみも名たかき、山ばと色をうつしつつ、けしき、だつなり雲鳥の、はぶさをたたむあやとなす、いともかしこかりけり。して上へ然れば萬代に、同へ絶えせぬ御調^{みづな}なるべしと、御さだめ有りしより、吳服^{ごふく}のものをやはらげて、くれはとりあやはとりと、名付けさせ給へば、年^{とし}を迎へて色をなす、綾の、にしきのから衣^{ころも}、返す^{かへ}くも君

(三三) それ以來その綾の衣を袞龍の御衣と名付けて、御衣の模様を織り出す仕事で有名になり、絲の配合も美しい山鳩色を取り入れて引き立たせたのであつて、模様には雲や翼を疊んだ鳥を用ゐたのは、誠に畏いことであつた。「袞龍の御衣」は龍の模様のある天子の服。「いとなみ」は、絲並と「營み」の掛詞。山鳩色は麴塵(きくぢん)ともいひ、蕪黃の黃がちな色で天子の服色。「氣色だつ」は雲の、氣色は色の、「たつ」は鳥の、「いと」は絲に通じ「あや」の縁語。(三三) 年月の經つに隨つてますます美しい織物に進步する。(三四) 古例を引いて考へるにつけ、かやうな聖代は返すがへすもめでたい。「返すは衣、袖の、袖は振るに通ずる」「古き」の、絲は「引く」「かかる」の縁語。袖・絲は連鎖語で意味はない。(三五) 夜の枕詞。「あり」をかける。(三六) 底本「綾給へ」と誤寫。(三七) 模様は小車模様だ。(三八) 「うし」の枕詞。(三九) 「吳はとり」「あやはとり」と尾韻。雞の異名を常世の長鳴鳥

が袖、ふるき、ためしを引く絲の、かかる御代ぞ目出めでたき。

(ロンギ) 上へ是に付けても此君の、／＼、めでたきためし有明あきの、よすがら機はたを織り給へ。二人へいざ／＼さらば機物の、にしきを織りてわが君の、みつぎに備へ申さん。同へそもや御調みづのかず／＼の、錦の色は、二人へを車の、同へうしみつも時すぎ、曉の空を待ち給へ。すがたをかへて來らむ。さらばといひて吳服とり、あやはとりは歸れども、にはとりはまだ鳴かずや、夜長なりと待ち給へ、夜ながくとも待ちたまへ。(中入。狂言、吳服漢服來朝の故事を語る)

わき(待語)へうれしきかなやいざさらば、／＼、此松かげに旅たびりして、風も嘯うそくとらの時、夢の告をも待ちてみん、夢の告をもまちてみむ。(出端) 後してへ君が代はあまのは衣稀うすにきて、なづとも盡きぬ巖いわならなん。千代ちよにやちよを松まつのはの、散失せずして色は猶なほ、まさきのかづら永ながき代の、ためしに引くや、綾あやのもん、くもらざりける、時代ときよかな。同へ此君の、かしこき代ぞとゆふ浪なみに、聲こゑたてそふる、機はたの音。してへ錦にしきを織るはた物の内に、相思の字をあらはし、衣ころもつきぬたのうへに、怨別あなづのこゑ。松のかぜ。又は磯いそうつ浪の音。同

- といふから、夜長の縁語でもある。
- (三〇) 鶴羽に註す。九五頁參照。
- (三一) 君が代の長久を天人の劫を説く佛説を引いて表した拾遺の歌。
- (三二) 朗詠に「君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」とあるを用ゐ、八千代を待つのを松にいひかけた。
- (三三) 古今序に「松の葉の散り失せずして、まさきの葛長く傳はり」
- (三四) 綾絲を引くといふところから「引く」の縁語。「もん」は模様で「曇る」の縁語。
- (三五) 「言ふ」をかける。
- (三六) 朗詠に、織錦機中已辨三相思之字、漣衣砧上俄添三怨別之聲。
- (三七) 「しきる」を掛ける。
- (三八) 機織りの擬音。
- (三九) 織姫「たまたま」の縁語。この邊「た」の頭韻を五度重ねる。
- (四〇) 底本「せひれひ」と誤る。
- (四一) 聖代の例として引かれる。
- (四二) あやはとりの「とり」をかける。

^{三七}
 へしきりにひまなきはた物の、してへとるや異服の、手ぐりの絲。同へ我^{わが}とるはあやは。してへふみ木の足音、同へきりはたりちやう、してへきりはたりちやうちやうと、同へ悪魔も、恐るる、聲なれや、勝^{げん}織姫の、かざしの袖。(中之舞)

^{三九}
 上へ思ひいでたり、七夕^{たなばた}の、^(思ひ:) たま〜あへる、旅人の、夢の精靈^{せいりょう}、妙重ぼさつも、影向^{かげむかひ}なりたり、夜もすがら〜、寶^{たから}の綾を、織りたて〜、我君にささげ物、御代^{みよひ}の様^{よう}の、二人の織姫、くれはあやはの、取^{とり}〜に、くれはあやはの、とり〜の御調物^{みづなま}、備ふる御代こそ、目^め出^でけれ。

西王母

前シテ……………女(西王母の化身)

後シテ……………西王母

前ツレ……………女

後ツレ……………西王母の侍女

ワキ……………支那の帝王(穆王であらう)

ワキツレ……………帝王の臣下(數人)

狂言……………周の穆王の官人

(狂言帝王の徳をたたへその御遊がある由を觸れる。眞の來序) わきさしこゑ有難
や三皇五帝のむかしより、今この時に至るまで、かかる聖主のためしはなし。
(わき)つれ其御威光は日のごとく、わき其みこころは海のごとくに、(わ
き)つれ其豐に廣き御めぐみ、わき天に輝き、(わき)つれ地にみちて、同上

(一)海のやうに深く。

(二)海の縁語。

(三)海と尾韻。

(四)前にある日、後にある星と呼
應する縁語。

(五)海の縁語。

(六)論語に、爲政以仁、譬如北辰
居其所衆星拱之、とあるの
に據り、衆星が北極星に向つて拱
禮しながらそれを中心として大空
を廻るやうに、人民が天子を敬仰
することを言ふ。拱は手の指を組
んで拜する中國の禮法。

(七)底本「けうする」と誤る。

(八)底本「郷上」と誤る。

(九)千戸を領する諸侯や萬戸を領
する諸侯がその印の旗を靡かし。

(一〇)都城の周圍の門に集つて、さ
ながら市をなし、その人人の奉る
金銀珠玉が光を添へて燦然と輝き
夜と雖も晝のやうに明かるくて、
晝夜の區別が出来ないほどであつ
た。金銀珠玉は市の縁語。

(一)こんな立派な氣色は地上では噂に聞くことも出来ないほどのもので、あの天上の喜見城のやうだから、その楽しいことばどんなであらう。喜見城に「聞けぬ」をかけた。

(二)史記の李廣傳・蒙求の李廣成蹊などに、桃李不言、下自成蹊、とあるによる。原文では、桃李は物は言はないが人がそれを欲しがつて集るために、その下は自然小道を形成するといふ意だが、ここでは西王母の縁で桃を出し、天子が諭さないでも下人民は自然道義正しいの意。

(三)來に通じ道の縁語。

(四)草木國土も自然みな萬物の本體である眞如の化現であつて、妙なる佛法の眞理に萬物が潤ふときが來たのであらう。色香は眞如を花に、見立て花の化現が色香であること、から眞如の化現の意となり、つぎの「妙なる」の序詞ともなつてをり、「法の水」に續いて「妙法花」の字を隠してゐる。「水」は光稅本實生流などは「みつ」とあり、下懸は「水」觀世は「三つ」とあるが、下の「潤ふ」への續き

(歌)へ北辰の拱ずる數々の、く、萬天にめぐる星のごとく、百官卿相雲客や、千戸萬戸のはたをなびかし、銚をよこたへ、四方の、かどべにむらがりて、市をなし金銀珠玉、ひかりをまじへ、光明かくやくとして、日夜の勝劣見えざりけり。かかるけしきは喜見城、其たのしみもいかならむ、其たのしみもいかならむ。

(一聲) 一聲二人へ桃李ものいはず、しもおのづから道をなす。貴賤のまじはり、隙もなし。さしこゑへ面白や四季折々の時をえて、草木國土おのづから、皆是眞如の花の色香、たへなる法の水のころ、うるほふ時や至らん。みちとせに咲く花ごころ、折しる春の、かざしとかや。下(歌)へいざや君にささげん、いざく君にささげん。上(歌)へすへらぎの、其みころはあまねくて、く、ひまゆく駒の法のみち、千里の、外までうへもなき、道にいたりてあきらけき、靈山、會上の法の場、廣き教のまことある、君々たればたれとても、いさみある世のころかな、いさみある世の心かな。

(して) 詞「いかに奏聞申すべき事の候。(わき)「そもいかなる者ぞ。して」是なるはなはみちとせに花咲き實なる桃花なるが、今此時にあたりて花さく

工合から見て「水」の方がよいやうだ。

(二七)三千年に一度花咲く仙桃がめでたい時節を知つて咲き出で、春の挿頭にもならうとしてゐるとか。

(二八)大君のお恵みの心は普く隙間もなく行き渡り、佛法は千里の外までおよび無上道の悟境に達して、靈鷲山の道場での道理の明らかな釋尊の廣大な教のやうに、真心のある君だから、誰でも勇んで喜喜とした心で過す御代だよ。「ひまゆく」は、隙なく行き渡る意を兼ねて有名な莊子の語より「駒」につづき、駒の縁で「のり」の序詞となる。謡曲評釋には「廣き教の眞ある君君たれば」のところに西王母の一名廣教眞君を隠したとある。

(二九)其と重韻。

(三〇)その物言はじといふのこそ。

(三一)朗詠に、桃李不言春幾暮。

(三二)拾遺の歌。末句「逢ひけるかな」

(三三)君の四方におよぶ厚い恵みのためであつて、國土が千代に榮える種となるこの桃花の色は美しい。千千と「もも」とは縁語。

事、ただこの君の威徳なればと、あふぎて捧げ參らせ候。わきへ是はふしぎの御事かな。そもみちとせに花咲くとは、扱はいかさま聞き及べる、其西王母のそのの桃か。してへ中々にそれとも今は物いはじ。わきへさればこそそれぞ殊更名におふ花の、してへ桃李ものいはず、わきへ春いくばくのとし月を、してへ送りむかへて、わきへこの春は、同上(歌)へみちとせに、なるてふ桃のことしより、く、花咲く春にあふことも、只是君の四方のめぐみ、あつき、國土の千々の種、もも花の色ぞたへなる。

(ロンギ)上へ扱はふしぎや久方の、く、天津乙女のまのあたり、姿をみるぞふしぎなる。してへうたがひの、心な置きそ露のまに、やどるや袖の月の影、雲の、上まで其めぐみ、あまねき色にうつりきぬ。同へうつるふ物はよの中、人の心の花ならぬ、してへ身は天上のたのしみに、同へ明けぬ、くれぬと送りむかふ、年はふれどかぎりもなき、身の程も隔てなく、まことは我こそ西王母の、分身よ先歸りて、花の實をも顯はさんと、天にぞあがりける、天にぞあがり給ひける。(申入。狂言、王母の桃の奇瑞を語り、管絃を催して王母を待つ由觸れる)

(三)袖の露に月影が宿るやうに、月の照る露の上まで君の恵みは普く行き渡つてゐる。新古今の「拂ひかねざこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに」を引く。露は置くの、「露の間」は宿るの、雲は月の、「うつる」は影と色のそれぞれ縁語。

(三)古今「色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」

(四)身と實との掛詞。

(三)古今「天つ風雲の通路吹き閉ぢよ乙女の姿しばしとどめん」

(六)天上の仙界を理める王。

(七)漢武内傳に、光耀_二陸宇_一。

(二)同書に、著_二黄金_一襦襦。底本

「くはうきん」と誤る。

(二)同書に、腰佩_二分景_一之劍。(中略)戴_二太真_一晨嬰之冠。底本「しんゑい」と誤る。

(三)玉鴈。内傳には玉盤とある。

(三)朗詠の、天醉_二于花_一桃李盛也の心。底本「ええる」と誤る。

(三)朗詠曲水の詩に「手先遮」

(三)雲上に住む花のやうな美しい鳥。前出の孔雀や鳳凰を指す。

わき「是はふしぎの事なりと、其西王母のまことの姿を、へもしやあらはし給ふとて、(待詠)上へ糸竹呂律の様々に、く、しらへをなして音楽の、こゑすみのぼる天津かぜ、雲のかよひぢこころせよ、雲のかよひぢ心せよ。(下り端)同上へ面白や、く。かかる天仙りわうの、來臨あればかずくの、孔雀、鳳凰迦陵頻伽、飛びめぐりこゑごゑに、立ちまふや袖のはかぜ、天津空の衣ならん、あまの衣なるらん。して下へ色々ささげ物、(同)へく、中に妙に見えるは、西王母の其すがた。ひかり、ていうをかかやかし、黄金の御衣を着し、して下へつるぎを腰にさげ、同下へく、晨纒の冠をき、ぎよくしやうにもれる桃を、侍女が手より取りわたし、してへ君にささぐる桃實、同へ花の盃、取りあへず。(中之)舞

上へ花も酔へるや、さかづきの、く、手先さへぎる、曲水の宴かや。御溝の水に、たはふれたはるる、手弱女の、袖ももすそも、たなびきたなびく。雲の花鳥、春風に和しつ、雲ぢにうつれば、わうほも伴なひ、よちのぼる、王母もともなひ、のぼるやあまぢの、行方もしらずぞ、成りにける。

二番目物(修羅物)

田村

(一) 京都への田舎路を後に隔てて旅を續け、春姿の都に出ようよ。底本・田本とも「出ふよ」とある。
(二) 時節ももはや三月半で空も春めき、光も長閑にさし昇る日が霞んで見える彼方は音羽山だらうか。そこに懸る瀧の響も靜かな清水寺に着いたのであつた。
(三) 地主権現の櫻は花盛りだが、この櫻花はそのまま神佛への春の手向花となつてゐることだ。
(四) 以下「影清し」まで當時流行の今様歌か。花月にも同文が見える。觀音の衆生濟度の大慈悲心が濁惡の娑婆に普くおよぶことを、春の花が芳香を放ち秋の月が水に映るのに譬へた。十惡は殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・愚痴。三十三身は觀音が衆生濟度のために三十三種の身に變化すること。五濁は劫

前シテ……………童子(田村丸の化身)

後シテ……………坂上田村丸の靈

ワキ……………東國の僧

ワキツレ……………東國の僧の從僧(二人、なしにも)

狂言……………清水寺門前の者

(次第) 僧次第へひなの都路へだてきて、ひなの都路へだてきて、九重の春に出でうよ。詞「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、此春おもひ立ち都へのほり候。(道行) 上へ比もはや、彌生なかばの春の空、

濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁。

(五)この櫻花は神の前庭の雪であらうか。千早振は神の枕詞。

(六)白い雲も霞も櫻花に埋もれて。

新勅撰家隆の歌「今日見れば雲も櫻も埋もれて霞もかねたる三吉野の山」を引いてゐるやうだ。

(七)八重咲一重咲とりどりに咲き重なつて、成程九重の都の春の空といふさはしい。八重十一重九重といふ數の縁で續けてある。

(八)四方に連る山山。

(九)そのまま。

(一〇)神佛が衆生濟度の方便として威光を和らげて俗塵に交はる意であるが、こゝはそれを宮人に適用。

(一一)この社に關係のある者。

(一二)底本・田本とも「曆」と誤る。

(一三)上懸は「賢心」。

(一四)生身とも書き、生きた正真正銘のの意。

(一五)上懸は「木津川」。

(一六)田本「光明かくやく」。

(一七)田本「行て」。

(一八)底本・田本「きやうゑいこし」。

(一九)田本・「ひんかし」。

(二〇)底本・田本とも「すへ」。

(二一)尊容。

く、影ものどかに出づる日の、かすむそなたや音はやま、瀧のひびきも靜なる、清水寺しみずでらにつきにけり、清水寺しみずでらに着きにけり。

(一 聲) して一 聲こゑへおのづから、春の手向と成りにけり。地主ぢしゆの櫻の、花ざかり。さしこゑへ夫花それの名所なごころおほしといへども、此寺の地主の櫻にしくはなし。

さればにや大慈大悲の春の花、十惡の里にかうばしく、三十三じんの秋の月、五濁の水に、影きよし。下(歌)へ千ちはやふる、神のお前の雪なれや。上(歌)

へ白妙しろたへの、雲も霞もうづもれて、く、いづれさくらの梢ぞと、見渡せばやへ一重、げにここのへの春の空、四方のやまなみのどかなる、春のけしきは面白

や、春のけしきはおもしろや。
わき「ふしぎやな是なる人をみれば、よし有げなる姿にて玉ははきをもち、

花の陰を清め給ふは、花守にてましますか。して「さん候んは地主ぢしゆ權現ごんげんに仕へ申す者にて候が、はるは花の本を清め、さながら木陰きかげに候へば、へ宮守とやいはん又花守とや申すべき。よしくいづれの爲なりとも、もとより和光わくわう同塵どうじん

の、宮人なればよしある者ぞと、おほしめされ、候へとよ。わき「扱あつかは宮人に

てましますかや。然らば當寺たうじの御來歴ごらいれきくはしく御物語り候へ。して「いでく

(三)今も清水といふ名で名高い清水の觀世音。その觀音の衆生濟度の深い誓願も數數で、千手觀音の千の御手のやうなとりどりさまざまの誓願は皆く行き渡つて、國王も萬民も誓願に漏らすまいとの大慈悲の御惠は有難い。「ながれ」「深き」は水の、「かずかず」は千手の、「とりどり」は御手のそれぞれ緣語。

(三)極樂淨土。

(三)我らのために惠を垂れて下さる觀世音を今更敬仰するの愚かなことと思はれ、勿體ないことではある。

(三)底本・田本とも「曆」と誤る。

(三)底本「して」脱。田本で補ふ。

(三)田本「せひかんし」。現行本の「清閑寺」とあるのが正しい。

(三)鶯の枕詞。

(三)印度の靈鷲山になぞらへた名で靈鷲山正法寺のことか。底本・田本とも「鶯のおの寺」と誤る。

(三)時間のたつのが惜しい。

(三)この一事に我を忘れた春の一時。

(三)蘇東坡の詩に、春宵一刻值千金、花有清香一月有陰。

語つて聞かせ申さん。抑當寺清水寺と申す事は、大同二年の御草創、坂の上の

田村丸の御願なり。むかし大和國こじま寺に延鎮といつし沙門、正身の觀音を

拜まんと誓ひしに、有時淀川の水上より金色の光たちしを、あやしめ行きて見

れば此瀧つぼに至りぬ。觀音の佛像かくやくとして顯れ給ふ。又山上のこのま

より、灯の影ほのかに見えしを、しるべにのぼりてみれば一人の老翁あり名乗

つていはく、我は是行叡居士といへり。我此地にすんで七百歳也。汝この所に

あつて一人の檀那をまち、大伽藍を建立すべしとて東をさして行き去りぬ。此

事世もつてかくれなければ、坂の上の田村丸、則がらん建立し、千手の佛像を

つくり据ゑ、都鄙安全のそんようとせり。然れば行叡居士といつば、觀音さ

つたの御さいたん、又檀那をまつと有りしは是、坂の上の田むら丸。同上(歌)

今も其、名にながれたる清水の、く、深きちかひもかずくに、千手の、

御手のとりく、様さまの誓ひあまねくて、國土、萬民を洩らさじの、大悲の

影ぞ有がたき。勝や、安樂世界より、今此しやばにじげんして、我等が爲の觀

世音、あふぐも愚かなるべしや、あふぐも愚かなるべしや。

わき「御來歴は承り候ひぬ。扱々見えわたりたる山々は皆名所候か。して」

(三) 清水の水はその名の通り濁りが
ないが、そのやうに御誓願にも
偽りはなく、清水の碧(みどり)の
流に影を映す青柳も緑の芽をふ
き。

(三) 梁塵秘抄に「千手の誓ぞ頼も
しき、枯れたる草木も忽に、花咲
き實なると説いた給ふ」。

(四〇) 「咲く」を掛ける。

(四一) 「あり」を掛ける。

(四二) 朗詠に、天醉三子花。 底本・
田本とも「ええりや」とある。

(四三) 「知らず」を掛け、跡の序詞
となつてゐる。

(四四) 素姓を知りたいならば。

(四五) 「間近き」の枕詞。

(四六) それとも、遠い所か。古今の
「遠近のたづきも知らぬ山中にお
ぼつかなくも呼子鳥かな」を借り
て「おぼつかなくも」の序とした。

(四七) 軒漏る月光がちらつく戸。

(四八) 妙法花經の文字を隠す。法華
經の教への道を迷はずに西へ行く
月、その月の光の下での意。

(四九) 説法明眼論に、宿一樹下一汲二
一河流三……皆是先世結緣。

(五〇) 應護、擁護。衆生を守ること。

(五一) 底本・田本とも「たいらけ」

も、花さくら木によそほひ、いづくの春も押しなへて、のどけき影は有明の、
天も花に酔へりや。おもしろの春べや、あら面白の春べや。

ろんぎへ勝やけしきをみるからに、ただ人ならぬ粗の、其名いかなる人やら
ん。していかにとも、いさや其名もしら雪の、跡を惜しまば此寺に、かへる

かたを見たまへ。同へ歸るやいづこ蘆垣の、まちかき程か遠近の、して「便木
もしらぬ山中に、同へ覺束なくも、同下へ思ひ給はば、わがゆく方を見よやと

て、地主権現の御前より、くだるかみえしが、くだりはせで坂の上の、田村
堂の軒もるや、月の村戸を押し明けて、内にいらせ給ひけり、内陳に入らせ給

ひけり。(中入。狂言、清水寺の縁起、田村丸の鈴鹿山鬼神退治のことなど語る)

わき(待謡)へ夜もすがら、散るやさくらの陰にゐて、
花もたへなる法

のみち、迷はぬ月のよととも、かの御經をどくじゆする、此御經を讀誦す

る。(二撃) 後して上へあら面白の折からやな。地主権現の花ざかり、清水寺の

たきつなみ、まこと一河のながれを汲んで、他生の縁ある旅人に、こと葉をか

はず夜聲のどくじゆ、是ぞ則大慈大悲の、觀音おうごの、直道なる。

わきへふしぎやな花のひかりにうつるひて、其様けたかき男體の、甲冑を帯

- (五三)底本りうくはん、田本による。
 (五四)現行諸本の「瑞験」がよい。
 (五五)歡喜微笑の觀音に頼みをかけて。底本「巖笑」、田本による。
 (五六)詩經小雅に、溥天之下莫不非王土、率土之濱莫不非王臣。
 (五七)逢坂の序詞。「粟」には泡を掛ける。
 (五八)陽炎のもえる石山寺。宇治の靈石蜻蛉石より「かげろふの」は石の枕詞ともなつてゐる。
 (五九)清水と同じ觀世音佛だと頼みをかけるにふさはしい近江路にかり、「合ひに合ふ」を近江に掛る。
 (六〇)武の道も人に後れまいと、萬花に先駆けて咲き勝利の瑞色を見せた梅花の如く、誰も彼も勇み立つて、彌猛心は荒れ狂ふ。
 (六一)「先駆け」と「咲きかけ」とを掛ける。
 (六二)底本・田本とも「且色」
 (六三)誰も彼もといふべきを、梅が枝の縁で花といひ、さらに紅葉と續けた。
 (六四)「土」の枕詞。荒を掛ける。
 (六五)太平記に「草も木も我大君の

して見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。しては是人王五十一代、平城天皇の御宇に有りし、坂の上の田村丸。東夷を平らげ惡魔をしづめ、天下太平の忠勤たりしも、則當寺の、佛力なり。同さしこそへ然れば君のせんじには、勢州すずかのあくまを靜め、都鄙安全になすべしとの、おほせによつて軍兵をととのへ、既におもむく時節に至りて、此觀音の佛前に參り、祈念を致し立願せしに、して下へふしぎの瑞現あらたなれば、同へ歡喜みせうのたのみをふくんで、急ぎ凶徒に、うつ立ちけり。(クセ)下へ普天のした、率土の内、いづく王地にあらざるや。やがてなにしおふ。關の戸ささで逢坂の、山をこゆれば浦浪の、粟づの森やかげるふの、石、山寺をふし拜み、是も清水の一佛と、憑みはあひにあふみちや、瀬田の、長橋ふみならし、駒もあしなみやすすむらん。して上へ既に、伊勢ぢの山ちかく、同へ弓馬のみちもさきかけんと、勝色、みせたる梅がえの、花も紅葉もいろめきて、たけきこころはあらかねの、土も木も、わが大君の神國に、もとより、觀音の御ちかひ、佛力といひ神力も、猶かずくになすらをが、待つとはしらでささしかの、鈴鹿の、御被せし世々迄も、思へば佳例なりけり。

國なれば何處か鬼の栖なるべき」
 (六六)大君の神國のものである上に
 (六七)「増す」を擲け、「待つ」と重
 韻。底本田本とも「ますらお」
 (六八)鈴鹿の賊はねらはれた牝鹿の
 やうなはかない身の上だ。「さそ
 しかの」は鈴鹿の枕詞でもあり、
 御説には身を掛ける。
 (六九)昔この鈴鹿川で齋宮が御禊を
 なさつたのも悪魔を拂ふ意味があ
 つたと思はれ、思へばそれもめで
 たい先例であつたのだ。
 (七〇)天智天皇時代に鈴鹿山にゐた
 逆賊と太平記に傳へられてゐる。
 (七一)底本田本とも「おかす」
 (七二)都間近い。
 (七三)阿濃の松原。津の海岸にある。
 (七四)「むら立ち」の序詞でもある。
 (七五)智度論に、引禪定之弓、放
 智懸箭、とある意をとつた。
 (七六)底本「せひ」田本による。
 (七七)法華經普門品に、呪詛諸毒藥、
 所欲害身者、念彼觀音力、還
 着於本人。他人が呪詛や毒藥で己
 に害を加へようとしても、かの觀
 音力を念ずれば害は還つてきて、
 加へようとした本人に歸着すると
 の意。

上へ去程に山河を動かす鬼神のこゑ、天にひびき地にみちて、萬木干草動搖
 せり。(カケリ)して「いかに鬼神まさに聞くらん。下へ千方といつしげきしん
 に、「仕へし鬼も王地を犯す天罰にて、ちかたをすつればたちまちほろびうせ
 しぞかし。増てやまちかきへ鈴鹿山、同上へふりさけみれば伊せの海、く、
 あの、松原むら立ちきたつて、鬼神は、黒雲、鐵火をふらしつつ、數千騎に
 身をへんじて、山の、ごとくに見えたる所に、して下へあれをみよふしぎや
 な、同下へく。味方の、軍兵の旗のうへに、千手觀音の、ひかりをはなつて
 虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、智恵の矢をはげて、一たび放
 せば千の矢さき、雨あられと降りかかつて、きじんの勢に亂れおつれば、こと
 ごとく矢さきにかかつて、鬼神は残らずうたれにけり。有難し有がたしや。ま
 ことに呪詛諸毒やくねび、觀音のちからをあはせて、則還着於本人、すなはち
 還着於本人の、かたきはほろびにけり是、觀音の佛力なり。

(一) 整本と活本とは「八島」

(二) 春霞がたなびき浪も浮き立つ
 沖を舟に乗つて行くと、入日に映
 える雲も入日ともども照り添ひ、
 日數も重なり、屋島の浦はその夕
 日に映える彼方の空の方だと思ひ
 ながら行くうちに、長かつた船旅
 を經て屋島の浦に着いたのであつ
 た。「浮き立つ」は霞と浪とにか
 かる。舟は港に入るものだから「入
 る」の縁語。「入日の雲も照りそひ
 て」には日數も重なるの意をも寓
 し、「はるく」と「沖つ」は春の意を含
 みます。「立つ」と「沖つ」は尾韻。
 (三) 詩句らしいが出典未詳。
 (四) 野火と解する説もある。
 (五) 古文前集柳宗元の詩に、漁翁
 夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚
 竹。
 (六) 月の出とともにさして來る潮
 に乗つて、沖の波の彼方に霞んで
 見えた小舟が、岸邊を思ひ焦がれ
 て沖つ波が岸に打寄せるやうに、

屋嶋ヤシマ

前シテ……………漁翁(義經の化身)

後シテ……………源義經の靈

ツレ……………漁夫

ワキ……………都の僧

ワキツレ……………都の僧の從僧(二人、又なしにも)

狂言……………屋島の浦人

僧詞「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ西國を見ず候ほどに、此度
 思ひたち西國修行と心ざし候。(道行)上へ春霞、浮立つなみの澳津舟、く、
 いらり日の雲も照りそひて、そなたの空とゆくほどに、はるくなりし舟ちへ
 て、屋嶋の浦に着きにけり、やしまの浦に付きにけり。

(一聲) してさしこまへ面白や月海上に浮んでは波濤夜火に似たり。つれへ漁

漕ぎよせられて来て。「こがれ」には「焦がれ」と「漕ぐ」とを掛ける。

(七)底本「二人」のところ「して」と「さと近し」のところ「二人」とある。他本で改む。

(八)海士が呼び合ふ聲が聞こえる。里が近いのだ。

(九)田本「してさしこゑ」

(一〇)私たちは一葉の小舟で萬里の海を渡り、唯一枚の帆に孕む風に身を任す。詩句らしいが出典未詳。

(一一)夕の空に浪のやうに見えた雲も。

(一二)海の碧(みどり)に映じて。

(一三)松だけが霞の中に見え海岸は何處にあるか分らない。そしてこの海は九州の海に續いてゐるのであらう。「しらぬひ」は筑紫の枕詞で「知らず」を掛けてゐる。

(一四)わたしたちは釣糸を垂れる暇もないが、「いとま」には糸を、「なみ」には「無し」を掛ける。

(一五)霞の間に見え残つてゐる夕暮。

(一六)心を浮き立たせるやうだ。

(一七)車屋諸本「ましひ」と誤る。

翁よる西岩に傍うて宿す。二人へあかつき湘水をくんで楚竹をたくも、今にしばらくして蘆火の影、ほの見えそむる、面白さよ。一せいへ月のでじほの奥つなみ、つれへ霞のを舟、こがれきて、二人下へ海士のよび聲、さと近し。さしこゑへ一葉萬里の舟のみち、只一帆のかげにまかす。つれへ夕の空の雲のなみ、二人へ月の行方に立ちきえて、霞にうかふ松原の、陰はみどりにうつるひて、海岸そこともしらぬひの、筑紫のうみにや、つづくらん。下(歌)へ爰はやしまの浦づたひ、海士の家もかすくへに、上(歌)へ釣のいとまもなみのうへへ、霞わたりておきゆくや、あまの、を舟のほのぼのと、見えて残る夕暮。うらかぜ迄も長閑なる、春やこころを誘ふらん、春やこころをさそふらん。

わき「いかに此しほ屋のうちへ案内申し候。つれ「誰にて渡り候ぞ。わき」行暮れたる修行者にて候。一夜のやどを御かし候へ。つれ「それに御待ち候へ、其由あるじに申し候べし。修行者の渡り候が一夜の御宿と仰せ候。して「あまりにみぐるしき鹽屋の内にて候程に、お宿は叶ふまじいよしを申せ。つれ「其由申して候へば、みぐるしき鹽屋の内にて候程に、お宿はかなふまじい由を仰せ候。わき「是は都の者にて候が、此浦はじめて一見のものにて候。ひらに一

(一八)「悪し」を掛け、草枕と縁語。

(一九)新古今の歌。末句「しくものぞなき」しく「に」敷くを掛ける。

(二〇)古屋の屋を屋島に言ひ掛け、屋島の縁で高松を出し松の苔と續け、「屋島に」以下を苔の序詞とした。

(二一)この浦での慰みは卒禮といふ浦の名のやうに群れてゐる鶴であるが、その鶴を御覽下さい。

(二二)新古今「天つ風ふけひの浦にゐる田鶴のなつか雲居に歸らざるべき」雲居には都をきかせてゐる。

(二三)整本活本「襟紺」。裾濃(すそご)の意。絨絲の上は薄く下ほど濃い紫色のもの。

(二四)清背長。草摺の長い鍔。

(二五)鞍壺。鞍の尻を乗せるところ。

(二六)一番古い上皇。ここでは後白河院。

(二七)人柄・器量・風采などの意。

夜と重^{かさね}而^もおほせ候へ。つれ「お僧は都の人にて候が、ひらに一夜と重^{かさね}而^も仰^{おほ}せ候。して「何とお僧は都の人と候や。げに〜聞けばいたはしや。さらばお宿

をかし申さん。つれ「本よりすみかもあしの屋の、して「只草枕とおほしめせ。つれ「しかもこよひは照^ありもせず、して「曇りもやらぬ春の夜の、二人

へおぼる月よにしく物もなき海士のとま、同上へやしまにたてる高松の、苔の筵はいたはしや。上(歌)へ扱^なぐさみは浦の名の、〜、むれゐるたづを御覽

ぜよ。などか雲^三わに歸らざらん。旅人のふる郷^{さと}も、都と聞けばなつかしや。われらも本^{もと}はとて、やがて涙にむせびけり、やがて涙にむせびけり。

わき「いかに申し候。似合はぬ申し事にて候へども、此浦は源平兩家の合戦の巷と承り及びて候。夜もすがら御物語り候へ。して「此尉も年久しき者なれば、あら〜見及びたる所を語つて聞かせ申すべし。いで其比は元暦元年三月

十八日の事なりしに、平家は海のおも一町ばかりに舟をうかへ、源氏は此汀に打出でたまふ。大將軍の御裝束、あかちの錦の直垂に、むらさきすそ^{三三}くの御き

せなが、鎧^{よろい}ふんばり鞍^{二五}かさにつつ立ちあがり、一院^{二六}の御使源氏の大將檢非違使

五位の尉、みなもとの義經と、へなのり給ひし御こつ^{二七}がら、あつばれ大將やと

(二八)口合戦のことが終つて。
(二九)「待ち懸けしに」まで底本句讀節附脱、他本で補正。

(三〇)「三保の谷」の意。

(三一)「整本活本」「鞆」がよい。

(三二)「えいや」がよい。

(三三)「綴」の最上部の板をいふ。

(三四)田本「あはれに」とある。

(三五)陸の軍勢は陸の陣に引くやうに互に引いた跡には、「引く

跡の」は跡の序詞ともなつてある。

(三六)磯打つ浪や松風の音が寂しく聞こえるばかりになつたのであつた。

(三七)「ろんぎ」田整活三本で補ふ。

(三八)「あま」の重韻。

(三九)「言はうか」の意を掛け、浪より「引く」汐・淺と續け、朝倉の序詞となつてゐる。夕・夜・朝は互に縁語。

(四〇)新古今、天智天皇御製、朝倉や木の丸殿にわれ居れば名乗りをしつつ行くは誰が子ぞを引く。木の丸殿は天皇が筑前(一説土佐)朝倉山に丸木で造られた行宮。あの木の丸殿にあるのなら名乗つても行かうものゝ意。

見えし、今の様に思ひ、出でられて候。つれへ其時平家のかたよりも、こと葉たたかひことをはり、「兵船一そう漕ぎよせて、浪うちぎはにおりたつて、

陸のかたきを待ち懸けしに、して「源氏のかたにも續く兵五十騎ばかり、

中にもみおのやの四郎と名乗つて、まつさきかけて見えし所に、つれへ平家の

方にも悪七兵衛かげきよとなりの、みおのやをめがけたたかひしに、して「其

時みおのやは太刀打ち折つてちからなく、すこし汀に引退きしに、つれへ景清

追かけみおのやが、して「着たる甲の鞆をつかんで、つれへうしろへひけばみ

おのやも、してへ身をのがれんと前へゆく。つれへ互にゑいやと、してへ引く

ちからに、同へ鉢付の板より、引きちぎつて、左右へ瀾とぞのきにける。是を

御覽じて義經、御馬を、汀に打ちよせ給へば、佐藤つぎのぶ、能登殿の矢さき

にかかつて、馬よりしもにどうど落つれば、舟には、菊王も討たれければ、共

に、あはれとおぼしけるか、舟はおきへ陸は陣へ、あひびきに引くしほの、跡

はときのことゑたえて、磯の浪まつかぜばかりの、音さびしくぞ成りにける。

ろんぎ上へふしぎなりとよ海士人よ。あまり委しきものがたり、其名をなの

り給へや。二人へ我名をなにとゆふ浪の、引くや夜鹽もあさくらや、木の丸殿

(四〇)老人の名を知りたいが、その老人である御身が昔を語るころは今丁度春の夜で、夜汐の引く曉になつたなら。車屋諸本みな「おひ人」と誤る。小忌衣は祭服であるが御身を掛け、上の老と下の頃との重韻の關係で置かれた連絡語。

(四一)田本は「して」とある。

(四二)「良し。常の」の意。義經の名を隠してある。

(四三)「をば」の意。「し」は強めの助詞。

(四四)義經の時の夢心地を覺まさないで待てと言つたその聲も、夜の更けるとともに古り行き、浦風の吹き渡る松の根を枕とし耳をそばだてて、苔の筵を敷いて横になりながらも、心樂しく重ねて夢を待つてゐる。「ふけ」に更け・古る。吹くの三意を寓し「思を延ぶる」は心をのびのびと樂しませる意だが、筵を敷延べる意をも掛けてゐる。

(四五)傳燈錄、落花難上枝、破鏡不重照。一度死ねば生還らぬ。 (四七)娑婆に對する執着から怒の念が起るので、心中に住む鬼が魂魄のなかに戻つて來て。

にあらばこそ、名乗してもゆかまし。同へ勝やこと葉を聞くからに、其名ゆかしき老人の、二人へ昔をかたるをみ衣、同へ比しも今は、二人へ春のよの、同へうしほの、落つるあかつきならば、修羅の時になるべし。其ときは、我名やなのらん。たとひ名のらずともなるとも、よしつねの憂世の、夢ばし覺まし給ふなよ、夢ばしさまし給ふなよ。(中入。狂言、屋島の合戦の様を語る)

わき「只今の老人の、よしつねの世の夢心、さまざままでとへ聞えつる、(待語)上へ聲もふけゆく浦かぜの、く、松がねまくらそばだてて、思ひをのぶる若ごろも、重ねて夢をまちむたり、重ねて夢を待ちむたり。(一聲)後して上へ落花枝にかへらず。破鏡ふたたび照らさず。然れども猶妄執の曠志とて、鬼神魂魄の境界にかへり、我と此身をくるしめて、しゆらのちまたによりくる浪の、淺からざりし、業因かな。

わきへはやあかつきにも成るやらんと、思ふ寢覺の枕より、甲冑をたいし見え給ふは、もし判官にてましますか。して「我義經が幽靈なるが、願恚にひかるる妄執により、猶西海の浪にただよひ、生死の海に沈淪せり。わきへ愚かやなこころからこそいきしにの、海とも見ゆれ眞如の月の、してへ春の夜なれど

(四)底本田本歸真。整活本で訂正。
 (四)底本田本「きやうかひ」整本活本による。
 (五)意味なし。「寄る」の縁語、淺の序詞。
 (五)惡業を招くべき惡因。
 (五)怒に引きずられて娑婆に執着が残るのでこの意。
 (五)生死流轉する迷の世界の苦しみの深いのを海に譬へた佛語。
 (五)底本「輪」他三本で訂正。
 (五)迷の心で見ることこそ。
 (五)悟れば生死の海をも眞如の月が照らすのであつて苦しみはない。眞如とは佛敎で言ふ宇宙の本體、それを月に譬へ春に續けた。
 (五)「今宵の空」にかかる形容句。
 (五)舟と陸との合戦の巷はここなのだから、場所が場所と忘れられたぬものだ。ものぬぶに物を掛けられた。
 (五)武士として屋敷に入つて弓矢を持つて戦つた、その元の身のままでまたここに來たが、弓矢の道には迷はないのに生死の海には迷つたのだ。そしてその生死の海や罪障の山を離れ切らないで魂が屋島の浦に歸るのは恨めないよ。矢と「射る」と弓、「いる」と月、弓と

曇^{五七}なき、こころもすめるこよひの空、わきへむかしを今に思ひ出づる、して
 舟^{五八}と、陸との合戦のみち、わきへ所からとて、してへ忘れえぬ、同上(歌)へ
 五九
 ものふの、やしまに入るや月弓の、く、本の身ながら又爰^{三三}に、きうせん
 の、道は迷はぬに、まよひけるぞや、生死^{七四}の、うみ山を離れやらで、歸るやし
 まのうらめしや。とにかくに執心^{六〇}の、のこりの海の深き夜に、夢ものがたり申
 すなり、夢物がたり申すなり。

(クリ)上へ忘れぬ物をえんぶの故郷に、さつて久しき年^{六二}なみの、よるの夢路
 にかよひきて、しゆらだうの有さまあらはずなり。してさしこゑへ思ひぞ出づ
 るむかしの春、月も今宵にさえかへり、同へ本の渚は爰^{三三}なれや。源平たがひに
 矢さきをそろへ、舟をくみ駒をならべて、打ちいれく足^{六三}なみに、くつばみを
 ひたしてせめたたかふ。して「其時何とかしたりけん。義經弓をとり落し、浪
 にゆられて流れしに、つれへ其折しもは引く鹽にて、はるかに遠くながれゆく
 を、してへかたきに弓をとられじと、「義經駒を遊^{六四}がせて、敵船ちかく成りし
 所に、つれへかたきは是をみしよりも、舟をよせ熊手に懸けて、すでにあやふ
 く見えたまひしに、して「其とき熊手をきり拂ひ、終に弓を取りかへし、へ本

本(もと)と、海と山、「歸る」と屋島の矢とはそれぞれ縁語。弓箭には來を、「うらめし」には浦をかけ、月弓は槻弓の意。

(六〇)執心は生死の海深く残つてゐるのだから、この深夜に現はれて。

(六一)寄るとの縁で夜の序詞になる。

(六二)歩調を揃へ。

(六三)四本とも「あやうく」とある。

(六四)源平の合戦に。

(六五)私心はない。

(六六)佳名を揚げるには未だ半ばにも達してゐない。

(六七)運の盡きない限りは。

(六八)浪に引き渡はれる弓を取つたのだ。弓取(武士)の名は未代に残すべきではないかと。

(六九)論語子罕篇、智者不惑、仁者不憂、勇者不懼。「勇者」現行諸流「ようしゃ」と譯ふ。

(七〇)勇猛心のある武士が弓を敵にはやるまいと。矢だけは彌猛で弓の、とりは弓および敵のそれぞれ縁語。梓弓にはあるを掛けた。

(七一)歴史にも佳名を残すに違ひない記録となるであらう。「こころ」は整活本は後規とあるが後記の意

弓筆の弓は筆の縁で出した虚字。

の汀なぎさに打ちあがれば、同へ其時兼房申すやう、口惜しの御振舞やわたなべにて景時が申ししも、是にてこそ候へ。たとひきんを展べたる御弓なりとも、御命にはかへ給ふべきかと、涙をながし申しければ、判官是をきこしめし、いやとよ弓を、惜しむにあらず。(クセ)下へ義經源平に、ゆみやをとつてわたくしなし。然れども、佳名よなはいまだ半ならず。されば此弓を、かたきにとられよしつねは、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、ちからなし義經が、運のきはめと思ふべし。さらずは、かたきに渡さじとて、浪なみに引かるる弓とりの、名は未代にあらずやと、かたり、給へば兼房、さて其外の人迄も、皆感涙をながしけり。して上へ智者は、惑まどはず、同へ勇者は恐れずの、矢やたけごころの梓弓、かたきにはとり傳へじと、惜しむは名のため、惜しまぬは、一命なれば、身を捨ててこそこうきにも、佳名よなをとどむべき、弓筆の跡なるべけれ。

してへ又修羅道の、ときのことゑ、同へ矢叫やよびの音、震動せり。(カケリ)して「けふのしゆらのかたきはたそ。何能登守教經とや。あら物々し手なみはしりぬ。へおもひぞ出づる壇のうらの、同上へ其舟いくさ今ははや、く、閻浮えんぶに

(七三)底本「かめひ」他三本による。
(七三)娑婆に歸つて生死を増した戦
が始まつた。生死のは海の序詞。
(七四)新後拾遺「水や空空や水とも
見え分かず通ひてすめる秋の夜の
月」
(七五)半禮といふ屋島の近くの地名
を讀み込む。
(七六)地名の高松と松との掛詞。

かへるいきしにの、うみ山、一同にしんどうして、舟よりはときのことゑ、して
へ陸には浪のたて、同へ月にしらむは、してへ劔つるぎのひかり、同へ潮にうつる
は、してへ甲かほの星の影、同下へ水みづやそらく、行くも又雲のなみの、うちあひ
差しちがふる、舟いくさのかけひき、うきしづむとせし程に、春のよの浪より
あけて、かたきとみえしはむれむれる鷗、ときのことゑと聞えしは、浦かぜなりけ
り高松たかまつの、うらかぜなりけり、たか松の、あさあらしとぞ成りにける。

- (一)「する」を掛ける。
 (二)底本田本とも「出ふよ」
 (三)「の」田本「か」とある。
 (四)信濃路の有名な木曾の棧道を
 通り、名に聞こえた義仲の亡き跡
 を弔ふために、野邊の道の邊の草
 陰に假寐の夢を結ぶ。さうした夜
 を重ねながら日数を加へて。「名
 にし負ふ」は前後にかかる。「弔
 ふ」と「草の陰」枕と夜とはそ
 れぞれ縁語。其跡は義仲の亡き跡
 の意。「道の邊の草の陰野の」の
 ところは「の」の重韻。
 (五)この柴舟が薪を積んでゐるや
 うに、私は世間の辛い事をわが身
 に積んでゐるのだから、柴が焚か
 ぬ前から焦がれるやうに、私も柴
 舟を漕ぎながら何よりも先づ辛い
 思ひにこがれるのだ。憂きに木を
 掛け、「こがる」に焦がる。漕がる。
 思ひにこがるの三意を含ませた。
 (六)舟に便乗する意。
 (七)山田も矢橋も琵琶湖岸の有名
 な渡船場。
 (八)特別の御好意で。
 (九)法華經藥王品に佛の慈悲を喻
 へて、如三子得父母、如三渡得船。
 (一〇)「逢ふ」を掛ける。

兼かね
平ひら

前シテ……………尉(兼平の化身)

後シテ……………今井四郎兼平の靈

ワキ……………木曾の僧

ワキツレ……………木曾の僧の從僧(二人、またなしにも)

狂言……………矢橋の渡守

(次第) 僧次第へはじめて旅をししなのぢや、はじめて旅を信濃ぢや、木曾の山やま家を出でうよ。詞「是はしなの國きその山家より出でたる僧にて候。扱も木曾義仲は、江州あは津の原はらにてはて給ひたる由承り及びて候程に、御跡を弔ひ申さんため、唯今江州あは津の原へと急ぎ候。(道行) 上あしなのぢや、木曾のかけはしなにしおふ、く、其あととふや道のべの、草の陰ののかりまくら、夜を重ねつつ日をそへて、行けば程なくあふみぢや、矢走やばしのうらに着きにけり、矢走のうらに着きにけり。

- (一)辛い世を渡る身すぎのため
 柴を運ぶ舟であつて、涙のために
 乾く隙とてない着古した私の袖
 も。水浸しのやうに濡れてゐる
 「憂き」の「き」と柴と「干す」
 とは互に縁語。水刷卒は舟の縁語
 で身馴れの意を掛け、次の「見馴
 れぬ」の序詞ともなつてゐる。
- (二)法は乘に通じ舟の縁語。
- (三)日吉神社の攝社、上の七社、
 中の七社、下の七社、計二十一社
 をいふ。
- (四)右の、上の七社の一。
- (五)東北。
- (六)始めは天台宗徒がその總本山
 の地比叡山を「わが山」と言つた
 のであるが、後には普く比叡山の
 別名になつた。
- (七)東北の方向を言ひ、悪魔の住
 むところと陰陽道で考へられてゐ
 た。
- (八)聲聞緣覺菩薩の三乘の別なく
 一切衆生を悉く成佛させる教法。
 天台宗は一佛乘の教を説く法華經
 を聖典とするゆゑ、天台の意とな
 る。
- (九)靈鷲山。田本「み山」とある。
- (一〇)中堂建立のときの傳教の歌

(一)聲) して一聲へ世の業の、憂を身につむ柴舟や、たかぬさきより、こがるらむ。

わき「なう／＼あれなる舟に便船申さう。して「是は山田矢走の渡し舟にて
 もなし。御覽候へ柴つみたる舟にて候。わき「こなたもしば舟と見申して候へ
 ども、折節わたりに舟もなし。殊更出家の身にて候へば別の御りやくに、舟
 を渡してたびたまへ。して「勝も／＼出家の御身なれば「よの人にはかはり給
 ふべし。げに御經にも如渡得船、わき「舟待ちえたる旅行の暮、して「かか
 折にもあふみの海の、二人へ矢走をわたる舟なれば、それは旅人の渡し舟也。
 同上(歌)へこれは又、憂よをわたる柴舟の、／＼、ほされぬ袖もみなれ竿の、
 みなれぬ人なれど、法の人にてましますれば、舟をばいかで惜しむべき、とくと
 くめされ候へ、とくとくめされ候へ。

わき「いかに船頭殿に申すべき事の候。して「何事にて候ぞ。わき「むかひ
 にあたつて太山の見えて候は、承り及びたる比叡山候か。して「さん候あれこ
 そ比叡山候よ。ふもとは山王廿一社、茂りたる杜は八王子、戸津坂本の人家ま
 で残なくみえて候。わき「勝あのひえいさんは、王城よりは良にあたつて候

「阿耨多羅三藐三菩提の佛達我が立つ所に冥加あらせ給へ」(新古今などに見えり)

(二)底本「坂の内」、田本で補正。

(三)涅槃經に「一切衆生悉有佛性、如來常住無有二變易」

(四)毘盧遮那すなはち大日如來の意。大日如來の三密の觀法を弘通することを梢の繁り並ぶに喩へた

(五)天台の觀法で心を寂靜にして眞理を觀すること。その觀法の深奥なるを海に喩へ琵琶湖に擬した

(六)戒律を守り禪定に入つて心を澄まし智慧によつて眞理を悟るいはゆる戒定慧の三學を觀山の東塔西塔横川の三塔で象徴したとの意

(七)一念のなかに三千世界があるといふ機縁を象徴して。

(八)衆徒。僧徒の意。

(九)圓滿に融通し合ふ教法。

(一〇)「曇なき」の縁で月を出し、月の夜の聯想より横川と續けた通絡語。

(一一)志賀の枕詞。

(一二)日吉の祭に上七社の神輿が幸崎に渡御すること。梢は松の縁語。

(一三)小波の立つ湖面を水刷竿をさして舟を漕いで行くうちに。小波

か。してへさん候夫わが山は王城の鬼門をまもり、惡魔を拂ふのみならず、

佛乘の嶺と申すは、傳へきく麓の太山をかたどれり。又天臺山と號するは、震

旦の四明の洞をうつせり。傳教大師桓武天皇と御心をひとつにして、延暦年中

の御草創、わがたつ袖と詠じ給ひし、根本中堂の山上まで殘なく見えて候。わ

きへ扱々大宮權現のおはします、波止土濃とやらんもあの坂本の内候か。して

「南の麓すこし木深き杜のうちこそ、大宮權現の御在所はしどのにて候へ。わ

き「有難や一切衆生悉有佛性如來と聞く時は、われらが身迄もたのもしうこそ

候へ。して「仰のごとく佛衆生通ずる身也。お僧も我もへだてはあらじ一佛乘

の、わきへ嶺にはしやなの梢をならべ、して「麓に止觀の海をたたへ、わき

へ又戒定惠の三學をみせ、してへ三塔となづけ、わきへ人は、してへ又、同上

(歌)へ「一念三千の、きを顯はして、三千人のしゆとを置き、圓融の法も曇な

き、月の、横河も見えたりや。扱又、ふもとはさざ浪や、しがから崎のひとつ

松、七社の神輿の、みゆきの木末なるべし。さざなみや、みなれ竿こがれゆく

ほどに、遠かりし、向ひのうら浪の、粟津の森はちかく成りて、跡は遠き老浪

の、むかしながらの、山櫻は青葉にて、面影も夏山の、うつりゆくや青海の、

と水馴竿の水、「身馴れ」と思ひ
焦がれるに通ずる。「こがれ」とは
おの縁語。

(三三)浦浪の向ふに遠く見えた粟津
の森は近くなつて、來し方は遠く
隔たつたが、そのやうに老の皺を
たたへた私の過去も遠く隔たつた
のだ。「向ひ」は浪の、老は昔のお
のの縁語。「浦浪の」は泡に通ず
る粟津の序詞ともなつてをり、
浦浪と老浪、「近く」と「遠き」と
はおのおの對語。老浪は老の皺の
意。底本田本とも「をひ浪」
(三四)千載集平忠度の歌「さざ波や
志賀の都は荒れにしを昔ながらの
山櫻かな」昔ながらと詠まれた志
賀の山櫻は今昔青葉で昔の面影も
ない夏山となつてをり、それが青
い湖に映じてそこを柴舟が移り進
んで行くの意。夏山に掛け、う
つりに映り移りをし、青海
と柴舟とは青芝を介して縁語。
(三五)柴と重韻。僅かの間でもの意。
(三六)紐に通じ袖の縁語。
(三七)粟津の原の哀れなこの世で。
粟津と「哀れ」とは頭韻。
(三八)血潮の影しく流れ流るる驗へ。
(三九)築枕をも掛け前句の血河の驗

柴舟のしば^{三五}も、暇ぞ惜しきさざ浪の、よせよせよ磯ぎはの、あはづに早
く付きにけり、粟津に早く着きにけり。(中入。狂言、義仲兼平等の最期の様を語
る)

わき(待語)へ袖をかたしく草まくら、く、日も暮れよにも成りしかば、あ
はづの原の哀世^{おのよ}に、なき影いざやとふらはん、なき影いざやとふらはん。(一聲)
後してへ白双骨を碎くくるしみ眼睛をやぶり、紅波楯を流すよそほひ、胡縁^{こゑ}に
殘花をみだる。雲水^{うんすい}の、粟津の原の松かげに、同へ関^とつくりそふ、こゑく^{こゑ}に、
して下へ修羅のちまたは、さはがしや。

わきへふしぎやな粟づの原の草枕に、甲冑を帯しみえ給ふは、いかなる人に
てましますぞ。してへ誰とはなどや「うたてしや。御身是まで來り給ふも、我^{わが}
なき跡をとはんとの、御心ざしにてあらざるや。兼平これ迄参りたり。わき
へ今井の四郎兼平は、今は此よになき人なり。扱は夢にて有るやらん。して
へいや今みる夢のみか、うつつにもはやみなれ棹^{さし}の、舟にて見みえし物がた
り、はやくも忘れ給ひたり。わきへそもや舟にて見みえしとは、矢走^{やせ}のうらの
わたし守の、して「其舟人こそ兼平が、うつつに見えし姿なれ。わきへされば

- へに呼應。底本田本共やなくぬ。
 (四〇)血潮の飛散する形容。
 (四一)泡に通ずる粟津の序詞。前の花の縁で雲を出した。
 (四二)見の掛詞、舟の序詞。
 (四三)底本「漁父」田本で訂正。
 (四四)武士の意だが者を掛け、矢に通ずる矢橋の序詞でもある。
 (四五)矢橋の音を含ませた。
 (四六)生滅盛衰の無常な娑婆では變化が激しいの意。
 (四七)老人が先に死に若人が後に死ぬとは定まつてゐないの意。
 (四八)それ等は夢幻泡影と何等異なる所のないはかないものだ。金剛經に、一切有爲法、如夢幻泡影。
 (四九)人の榮花もむくげの花が一日咲き榮えて凋むのと同じだ。朗詠白樂天の詩に、權花一日自爲榮。
 (五〇)武士の家に生れたことを意味する。「住む」に「澄む」をきかせて月に續け、月の輪の聯想より「月の」を「僅か」の序詞とした。
 (五一)「殘る」は月の縁語。
 (五二)底本「相て」田本で訂正。
 (五三)底本「おほせひ」田本による。
 (五四)底本「定」田本で訂正。

こそはじめより、やうある人と見えつるが、扱はきのふの舟人は、してへ舟人にあらず、わきへ漁夫にも、してへあらぬ、同上(歌)へものふの、やばせのうらの渡し守、くくと、見えしはわれぞかし。同じくは此舟を、御法の舟に引きかへて、我を又かの岸に、わたしてたばせ給へや。

(クリ)上へ夫有爲生死のちまた來つて去る事はやし。老少もつて前後不同、夢幻泡影いづれならん。してさしこゑ「只是權花一日の榮、同下へ弓馬の家にすむ月の、わづかに残るつはもの、七騎となりて木曾殿は、此あふみ路に下りたまふ。かねひら瀬田より参りあひて、又三百餘騎になりぬ。してへ其後かせんたびくにて、又主従二騎に打ちなさる。同下へ今は力なし。あの松原におちゆきて、御腹めされ候へと、かねひらすすめ申せば、心ぼそくも主従二騎、粟津の松原さして、落ち行きたまふ。(クセ)下へかねひら申すやう、うしろより御かたき、大勢にて追懸けたり。防矢つかまつらんとて、駒の手綱をかへせば、義仲御説有りけるは、おほくの、かたきを遁れしも、汝一所にあらばやの、所存なりつる故ぞとて、同じくかへし給へば、兼平又申すやう、こは口惜しき御説かな。さすがに義仲の、人手にかかり給はん事、末代の御恥辱、た

(五四)底本田本とも「しかひ」

(五三)比叡嵐に吹かれて雲の去來する空は暮れ。「くれはどり」には「暮れ」を掛け、くれはとりあやはとりの縁で「あやし」の序詞となつてゐる。

(五六)「知らず」の掛詞、薄氷の序詞。

(五七)駒の序詞。

(五八)底本「しかひ」、田本による。

(五九)「落ち方」遠方の掛詞。

(六〇)「盡き」の掛詞、矢の序詞。

(六一)「落ち」を掛ける。

(六二)「ろんぎ」田本で補入。

(六三)底本「くはうけん」田本による。荒言は悪口雑言の意だから、ここは公言の意ではなからうか。

兼 平

だ御^{カニ}自害有るべし。今井もやがて参らんと、兼平にいさめられ、又引つかへし落ちたまふ。して上^{五五}へ比は、陸月^{むつき}の末つかた、同^{五六}へ春めきながらさえかへり、ひえの山かぜの、雲ゆく空はくれはどり、あやしやかよひぢの、末^{五六}しら雪のうす氷、ふかたに馬をかけおとし、ひけどもあがらず、うてどもゆかぬ望月^{五七}の、駒の、かしらも見えばこそ、こは何とならん身の果、せんかたもなくあきれば、此^{五八}まま自害せばやとて、刀に、手を懸け給ひしが、さるにても兼平が、行方いかにとおちかたの、跡をみ歸り給へば、して上^{五九}へいづくより來りけん、同^{六〇}へ今ぞいのちはつきゆみの、矢ひとつ來つて、内甲^{ふせと}にからりといふ。痛手にてましませば、たまりもあへず馬上より、遠近^{六一}の土となる、ところは爰ぞ我よりも、主君の御跡を、まづ弔ひてたびたまへ。

ろんぎ^{六二} 上^{六三}へ勝^けいたはしき物がたり、兼平の御さいごは、何とかならせ給ひける。してへかねひらはかくぞとも、しらでたたかふ其障^{むす}にも、御さいごの御事を、心にかくるばかりなり。同^{六四}へ扱其後におもはずも、かたきの方にこゑたてて、してへ木曾殿討たれたまひぬと、同^{六五}へよばはるこゑを聞きしより、してへ今は何をか期^すすべきと、同^{六六}へ思ひ定めて兼平は、してへ是^{六七}ぞ寂期^{さいご}の荒言^{六八}と、

一三七

(六四)底本「大せひ」、田本による。
 (六五)磯・浪は汀の縁語。浪枕といふ熟語より「磯うつ浪の」は「まくり切り」の序詞に使はれた。
 (六六)四方八方に切り拂ふ劍法の名。
 (六七)仕儀。振舞の意。

同へあぶみふんばり大音あげ、してへ木曾殿の御内に今井の四郎、同へかねひらと名乗りかけて、大勢にわつていれば、本より、一騎、當千の秘術をあらはし、大勢を、あはづの、汀におつつめて、磯うつ浪のまくりぎり、蜘蛛手十文字に、打ちやぶりかけ通つて、其後、自害の手本よとて、太刀をくはへつつ、さかさまに落ちて、つらぬかれ失せにけり。兼平がさいごのしぎ、目をおどろかす有さまかな、めを驚かす有さまかな。

忠^た度^の

- (一) 田本「忠則」
- (二) 花をいよいよやだと捨てた世捨人の身は月に雲がかかっても厭ふまい。花と月とは縁語。
- (三) 田本「の」なし。
- (四) 田本「此春思ひ立ち」なし。
- (五) 鳥羽離宮をいふ。
- (六) 山の意を含み「隔つる」を受ける。つぎの「名のみして」はこの山崎をもうけると思はれる。
- (七) 「留りも果てぬ」と憂身とにかかると。
- (八) 辛い身はつねに浮世の塵にまみれながら芥川を渡り。塵と芥川、浮世と飽くに通ずる芥川とはおのおの縁語。
- (九) 昆陽だが、小屋に通じ「宿借る」の縁語となつてゐる。
- (一〇) 蘆の葉に吹き渡る風の音を聞くまいとするけれども、その風音とともに辛いことも聞こえて来て、世捨人の身にも辛いことがあり、有馬山にも足を留めかね、離れ難い浮世のつらさにあだし心は起こり、假寐の夢も覚めがちな枕許に遠くから聞えて来るのは難波の鐘。その難波も後になつて鳴尾瀨に来ると沖の方遠く浪の上に

前シテ……………尉 (忠度の化身)

後シテ……………平忠度の靈

ワキ……………僧 (俊成の御内の者)

ワキツレ……………從僧 (二人、又なしにも)

狂言……………須磨の浦人

(次第) 僧次第へ花をもうしと捨つる身の、花をもうしと捨つる身の、月にも雲は厭はじ。詞「是は俊成の卿の御内に有りし者にて候。としなりなくならせ給ひて後、もとゆひきりか様の姿と罷成りて候。我いまだ西國を見ず候程に、此春思ひ立ち西國あんぎやと心ざし候。さしこゑへ城南の離宮に赴き都を隔つるやま崎や、せき戸の宿は名のみして、留りも果てぬ旅のならひ、憂身はいつもまじはりの、塵のうき世のあくた川、おなのをささを分け過ぎて、下(歌)へ月も宿かるこやの池、水底きよく澄みなして、上(歌)へ蘆のは分けのかぜの

小舟が見えるよ。有馬山には「有り」を、鳴尾瀨には「成る」を掛け、聞かじとすれど・隠れかねたるはとも前後にかかり、「うき」と「あだ」とは縁語。

- (一)底本「浮に」、田本による。
- (二)底本「又これなる」
- (三)底本「又これなる」
- (四)源氏物語須磨の巻に見える語で、後には固有名詞になつた。
- (五)底本「浮わさ」、田本による。
- (六)懲りないで。須磨を掛ける。
- (七)鹽水を汲まないときでさへ。
- (八)干すは鹽木と衣とにかかると。
- (九)「無し」の掛詞、浦の序詞。
- (一〇)「住む」を掛けた。
- (一一)しばしば鳴く、絶えず鳴く。
- (一二)古今集に見える、在原行平の歌。「わくらはに」はたまさかに、「藻鹽垂れつつ」は涙と汐に袖を濡らしつつの意。
- (一三)鹽を探るために藻を焼く煙。衣の「も」と連鎖になつてゐる。
- (一四)底本「有人」、田本による。
- (一五)通りすがりの御縁ではあるが
- (一六)山の枕詞だが、「重い足を引いて」の意も含ませてゐる。
- (一七)「かかる」、田本で補ふ。

音、く、きかじとすれど憂きことの、捨つる身迄も有馬山、かくれかねたる世の中の、うきにこころはあだ夢の、覺るまくらに鐘遠き、難波はあとになるをがた、おきなみ遠きを舟かな、澳浪遠き小舟かな。詞「漸急ぎ候程に、是は津の國すまの浦とかや申し候。これなる磯べに一木の花の見えて候。承り及びたる若木の櫻にてもや候らん。立ちより眺めばやと思ひ候。

(一)一聲) してさしこゑへ勝世をわたる習ひとて、かくうきわざにもこりずまの、汲まぬ時だに塩木をはこべば、ほせどもひまは浪ごるもの、浦やま懸けて須磨の里、一聲へあまの呼こゑ隙なきに、しば鳴く千鳥、ねぞすごき。さしこゑへ抑この須磨のうらと申すは、さびしき故にも其名をうる、わくらはに問ふ人あらば須磨のうらに、藻鹽たれつつわぶと答へよ。げにやいさりのあま衣、もしほの煙松のかげ、いづれもさびしからずと云ふことなし。「又是なる櫻はある人の、跡のしるしの花なれば、下へ比しも今は春の花、手向の爲に逆縁ながら、足引の山よりかよふ折ごとに、かかるへ薪に花を折りそへて、手向をなして歸らん、手向をなして歸らむ。

わき「いかに是なる尉殿。御身はこの里人にてましますか。して「さん候此

- (二) 煙の絶間を待ちかねて休む暇もなくの意。
 (元) 浦と山と道こそ違つてゐるが
 (三) 柴といふものの候へば「まで源氏物語須磨の巻の本文を抄引」
 (三) 「する」を掛ける。
 (三) 海士(あま)を掛ける。
 (三) 底本「定」、田本による。

(三) 宿なりと。

- (三) 平家物語に見えた忠度の歌。
 (三) 前の「した」と重韻。

の所のあまにて候。わきへ海士ならば浦にこそ住むべけれ。「山ある方に通はんをば、山人とこそ申すべけれ。して「是は御詞とも覺えぬ物かな。そも海士の波む鹽をば、やかで其儘置き候べきか。わきへ勝々是は理也。藻鹽たくなる夕けふり、してへ絶間を遅しと鹽木とる、わきへ道こそかはれ里離れの、してへ人音稀に須磨のうら、わきへ近き後の山ざとに、してへ柴と云ふもの候へば、わきへ鹽木の爲にかよひくる、して下へあまりに愚かなる、お僧の御説かなやな。同へ勝やすまの浦、よの所にやかはるらむ。それ花につらきは、嶺の嵐や山おろしの、音をこそ厭ひしに、須磨の若木の櫻は、海すこしだにも隔てねば、かよふうらかぜに、山の櫻もちる物を。

わき「早日の暮れて候一夜の宿を御かし候へ。して「勝おやどがな参らせ候はん。や。此花の陰ほどのお宿の候べきか。わきへげに「花のやどなれども、誰をあるじと定むべき。して下へ行暮れて木の下陰をやどとせば、「花やこよひのあるじならましと、へ詠めし人も此苔のしたいたはしや。われらが様なるあまだにも、常には立ちより弔ひ申すに、お僧達はなど逆縁なりともとふらひ給はぬ。愚かにまします人々かな。わき「行暮れて木の下陰を宿とせば、

(三)亡き跡の墓じるしの花なのだ
(三)まあ情ない。忠度はあれほど
俊成の和歌の友として親しかつた
人なのにな……

(三)宿においては今宵の主人だ。

(四)名も忠度といふからには法の
聲を聞いて極樂の蓮華の臺上にお
坐りなさい。忠度に法を掛ける。

(四)底本田本とも「問はれ」

(四)「一言ふ」を掛ける。

(四)そのとき都への傳言を申さう

(四)「宿る」の掛詞、行き方知ら
ずの序詞。「やどりき」と「ゆき」
とは尾韻。

(四)袖を片敷き草を枕にするとき
ぞかし夢路にも入らうが、月も入
り、その入る月の跡も見えない磯
の小山の夜の花の陰に旅寝して、
夢心も夜とともに更けて行くにつ
れ嵐がはげしく吹き募る様子では
ある。嵐は花の縁語。

(四)討死した遺跡に於いてお僧の
夢の中に生前の姿を現し、迷夢か
ら覚める我が心、心迷ひの残つ
てゐる古への物語を申さう爲に幽
靈となつて來たのである。迷ふの
縁で雨夜と續け、雨に前シテの海
士をきかせ、源氏物語箒木の巻の

花やこよひのあるじならましと、詠めし人は薩摩の守、して「忠度と申しし人
は此一の谷にて討たれしかば、ゆかりの人の殖ゑ置きし跡のしるしの花ぞかし。
わきへうたてやさしも俊成の、和歌の友とてなれし、して「宿はこよひの
あるじの人、同へ名もただのりの聲ききて、花の臺にざし給へ。して「有難や
今よりは、かく弔ひの聲聞きて、佛果をえんぞ嬉しき。同へふしぎや今の老人
の、手向のこゑを身に請けて、よろこぶけしきみえたるは、何の故にて有るや
らん。して「お僧に弔はれ申さんとて、是まで來れりと、同へゆふべの花の陰
に寝て、夢の告をも待ちたまへ。みやこへ言傳申さんとて、花のかげにやどり
きの、ゆきがた知らず成りにけり、ゆき方しらず成りにけり。(中入。狂言、忠
度が俊成に歌の入集を頼んだこと、忠度の討死のことなど語る)

わき(待詠)へ袖をかたく草まくら、く、夢路もさぞないる月の、跡見え
ぬ磯山の、よるの花にたびねして、心もともに更けゆくや、嵐はげしきけしき
かな、あらしはげしき氣色かな。(一聲)後して「恥かしやなき跡に、すがたを
返す夢のうち、覺むる心はいにしへに、まよふ雨よの物がたり、申さん爲に魂
魄に、移りかはりて來りたり。さなきだに妄執ふかきしやばなるに、何中々の

返す夢のうち、覺むる心はいにしへに、まよふ雨よの物がたり、申さん爲に魂
魄に、移りかはりて來りたり。さなきだに妄執ふかきしやばなるに、何中々の

有名な兩夜の物語を引き出した。

(四七) なまじつか。「何」と頭韻。

(四八) 撰歌の數には朝。

(四九) 平家を受けてゐたのである。

(五〇) 出来ることなら。

(五一) 須磨の浦風も氣をつけてお憎の夢を覺ましてくれるな。

(五二) 底本「同」脱。田本で補ふ。

(五三) 和歌の道に心を密せた事は。

(五四) 人間としては最も結構なことだ。

(五五) 世間から重視せられてゐた。

(五六) 随分忙しい身であつたが、和歌を愛する心からか狐川より引き返す。身の縁で心と續け、和歌を愛する風流心を心の花に喩へ、花から蘭菊と續け、白氏文集の、狐藏三蘭菊、より狐川の序に用ゐた。

(五七) 千載集の撰歌に入るやうにと嘆願した。

(五八) 歸り來ての意の來を掛けた。

(五九) 筑紫の海上にさすらひ、その後勢を得てしばらくはと頼りにした須磨の浦の根據地も、光源氏の昔から源氏の住み所で、平家のために都合が悪いのだと。

(六〇) 今は是までと。

千載集の、歌の品には入りたれども、勅勘の身のかなしさは、^{四九} 讀人知らずとかかれしこそ、妄執の中の第一なれ。されどもそれを撰じ給ひし、俊成さへ空しく成りたまふ。御身はみうちに有りし人なれば、今の定家君に奏し、^{五〇} 然るべくは作者を付けてたび給へと、夢物語申すに、^{五一} 須磨の浦かぜも心せよ。

(タリ) ^{五二} 同上へげにやわかか家に生まれ其道をたしなみ、^{五三} 數嶋のかけによつしこと、^{五四} 人倫に於いてもつばらなり。わき(サシコエ)へ中にもかの忠度は、文武二道を請けたまひて世上にまなこたかし。同下へ^{五五} 抑後白河の院の御宇に、千載集をえらばる。五條の三位俊成の卿、うけ給はつて、是をせんず。下(歌)へ年は壽永の秋の比、都を出でし時なれば、上(歌)へ^{五六} さもいそがはしかりし身の、^{五七} 心の花からんぎくの、狐河より引きかへし、俊成の家にゆき、歌の望を^{五八} 歎きしに、のぞみたりぬれば、又弓箭にたづさはりて、^{五九} 西海の浪のうへ、しばしと^{六〇} 憑む須磨のうら、源氏の住みどころ、平家の爲はよしなしと、知らざりけるぞはかなき。

上へ^{六一} 去程に一の谷のかせん、今はかうよと見えしかば、皆々舟に取乗つて海上にかふ。(カケリ?) して、^{六二} 我も舟にのらんとて、汀の方に打出でしに「後

(六) 金春流のみここカケリ、金剛と喜多とは「花や今宵の」の前。
 (六七) 六七騎ほど。上懸は「六七騎にて」
 (六八) 観無量壽經の文。「阿彌陀如来の光明はあまねく十方世界を照らし念佛する衆生を攝取して捨てず」との意。
 (六九) はかなくも。もろくも。
 (七〇) 底本「六彌太」田本による。
 (七一) その年もまだ若く、九月ごろの空が薄く曇つて、降つたり降らなかつたり定めのない時雨が濃く淡くむらむらに染めた紅葉のやうな錦の直垂を着てゐられるのは、よもや尋常の人ではあるまい。年が若いといふ意から末長しの意に通じて長月と續けた。通ふは定めなきの縁語。直垂と只とは「た」の韻をふんでゐる。後撰に「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける」とあるを引く。
 (七二) 矢を入れて背に負ふ武具。
 (七三) 底本田本とも「すへ」
 (七四) 「あらじ」を掛け、「風の音」といふ句より音の序詞となつてゐる。

をみれば、下へ武藏の國の住人に「岡部の六彌太と名乗つて、六七騎が間道懸けたり。是こそ望む所よと思ひ、駒の手綱を引つかへせば、六彌太やがてむずとくみ、兩馬があひにどうどおつ。彼六彌太を取つて押へて、へ腰の刀に手を懸けしに、同上へ六彌太が郎等、御うしろより立ちまはり、うへにまします忠度の、右の肘を打落せば、左の御手にて、六彌太を取つて投げのけ、今はかなはじと思食して、そこ、のき給へ人人よ、西拜まんとのたまひて、光明遍照、十方世界念佛衆生、攝取不捨とのたまひしに、してへ御聲のしたよりも、同へ痛はしやあへなくも、六彌太太刀を抜きもち、終に御首をうちおとす。下へ六彌太、こころに思ふ様、痛はしや彼人の、御死骸をみたてまつれば、其としもまだしき、長月比の薄ぐもり、ふりみふらずみ定なき、時雨ぞかよふ村紅葉の、錦のひたたれは、只よの常によもあらじ。いか様是は君達の、御中にこそあるらめと、御名ゆかしき所に、箆をみればふしぎやな。短尺を付けられたり。見れば旅宿の題を据ゑ、上へ行き暮れて、このした陰を、宿とせば、してへ花やこよひの、あるじならまし、同へ忠度とかかれたり。扱はうたがひあらしの音に、聞えし薩摩の、守にてますぞいたはしき。

(セ) 目を暗くして。
(セ) 花が根に歸るやうに、私も冥途に歸るのだ。千載集崇徳院の御製「花は根に鳥は古巢に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき」拾遺集「春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主なりけれ」を花の縁で借用したのである。

(キリ) へ御身この花の、陰に立ちより給ひしを、かく物語申さんとて、日を暮らしとどめし也。今は、うたがひよもあらし。花はねにかへるなり。我跡とひてたび給へ。木陰三五を旅のやどとせば、花こそあるじなりけれ。

- (一) 夏季九十日間籠居して修行するいはゆる夏安居のこと。
- (二) 磯邊の山の松陰の岩上にしばらく人待ち顔にみると、誰の乗つてゐる夜舟かは分らないが、白波の上に楫音だけが聞えて、今宵の鳴門の浦は静かだよ。岩根に居を、まつに松と待つとを、白波に知らずを、鳴門に鳴るを掛けた。
- (三) 古今の「昨日といひ今日と暮らして飛鳥川流れて早き月日なりけり」によつたものと思はれる。
- (四) 老の身にとつて頼みにならな^いものは我が身の行末の日數だ。
- (五) 波にゆられる小舟に乗つて何時まで世をば渡らねばならない海士なのだらう、それにしても餘りにも暇のないことだ。「わたづみ」は渡津海で「渡る」の掛詞だが、海士を掛けた「餘り」の序詞ともなつて居り、浪には「無し」を掛けてゐる。
- (六) 何を樂しみとして老の身の命を保たんがために體をこきつかつてゐるのだらう。何は浪と頭韻。
- (七) 所は夕浪の鳴り轟く鳴門で、沖の雲の彼方に續いて淡路島の遠く離れた入江が見えるが、それに

通盛

前シテ……………漁翁(通盛の化身)

後シテ……………平通盛の靈

前ツレ……………女(小宰相の局の化身)

後ツレ……………小宰相の局の靈

ワキ……………僧

ワキツレ……………從僧

狂言……………鳴門の浦人

僧詞「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。扱も此うらは平家の一門あまた果て給ひたる所にて候程に、御經を讀み弔ひ申し候。上(歌)磯山に、しばし岩ねのまつ程に、く、たが夜舟とはしら浪に、楫音ばかりなるとの、浦靜なるこよひかな、浦しづかなる今宵かな。

しても離脱する事の出来ない辛い世の生業が苦しい。鳴門に「鳴る」を、「離れ江の」に「離れ得ぬ」を掛けた。上懸は「離れ得ぬ」とある。又うきは浪・雲・泡等の縁語。(八)月が夜の波間に沈んで清い光は見えない。詩らしいが出所未詳。(九)弱つてしまつて。「ふけ」は夜の更ける意味をも寓し、苦葺きの葺きにも通じて次の苦と縁語。(一〇)雨の脚と蘆間とを掛けてゐる。(一一)「無し」の掛詞、夢の縁語。(一二)「緒」になつて。交つて。(一三)唐風の櫓の意だが、ここでは楫との頭韻で用ゐたまでで唐には意味はない。櫓を漕ぐのを止めて。(一四)續詞花集および俊秘抄に見える連歌「誰ぞこの鳴門の浦に音するは泊り求むる蟹の釣舟」を詠つた俗歌によつたものらしく、歌枕名寄鳴門の條・謠抄通盛・謠曲拾葉抄海士などにおのおの異なつた俗歌が見える。(一五)「借り」を掛けた。(一六)魚を取る仕事は悪いことであり蘆火はその助けとなるからその名の如く悪い火だと思つてゐたのに、鳴門の海では經を讀むための

(一) 女へすは遠山寺の鐘のこゑ、此磯ちかく聞え候。してへ昨日すぎ、女へけふとくれ、してへあす又かくこそ有るべけれ。女へされども老に憑まぬは、してへ身のゆく末の日數なり。一せいへいつまで世をばわだづみの、あまりに隙も、浪を舟、女へ何を便に、老が身の、して下へ命の爲に、つかふらん。同上(歌)へ憂きながら、心のすこしなぐさむは、く、勝海邊の業、さも面白き、浦の秋のけしきかな。所は夕浪の、なるとの澳に雲つづく、淡路の嶋や離江の、うき世のわざぞくるしき、憂きよの業ぞくるしき。

してへ暗濤月をうづんで清光なし。つれへ舟にたく海士のかがり火ふけ過ぎて、二人へ篷よりくぐるよるの雨の、あしまにかよふ風ならでは、音する物も波枕に、夢かうつつかお經のこゑの、嵐にたぐへて聞ゆるぞや。楫音を静めから櫓を押さへて、聽聞申し候はん。わきへたそやこの鳴門のおきに音するは。二人へとまりさだめ海士の釣舟候よ。わきへさもあらば思ふ子細あり。此磯ちかくよせ給へ。二人へ仰にしたがひ漕ぎよせみれば、わきへ二人の僧は巖のうへに、二人へいさりの舟は岸のかけ、わきへ蘆火の影をかり初に、お經を開き讀誦する。二人へ有がたやいさりする、業はあし火と思ひしに、わきへよき

善い燈火となり。蘆火には「悪し」を掛け、思ひ・燈火などと尾韻。鳴門の海は「成る」の掛詞、弘誓深如海の縁語。

(二七)法華經普門品の偈文。衆生濟度の弘い誓願は深いこと海の如く劫を経て思議し難い意。底本「功ふしき」と誤る。

(二八)法華經隨喜功德品の句。法華經を聽聞して隨喜する人がつぎつぎにその利益を傳へて五十人目に到つても功德は變らないとの意。(二九)夜で經の紙面が暗いのに、浦風が蘆火を吹き立てて明るくして。「おもて」と「うら」とは縁語。

(三〇)法華經提婆品に娑竭羅龍王の八歳の女が法華經の功力で男子に變つたとある説話をいふ。

(三一)底本「おうち」と誤る。

(三二)成佛の願。

(三三)「滿つ」を法華經譬喻品の火宅説話の羊鹿牛の三車に言ひ掛け、車の脚といふ熟語より蘆火の序詞とした。

(三四)經讀む光である蘆火は清いから蘆火の下で清く夜を明かさう。蘆火とあかすは頭韻、また縁語。

(三五)月下の海上を漕いで行く。

とらむ
灯とうになるとの海の、三人下へ弘誓くわいじ深如海しんじよかい歴劫れきやく不思議ふしぎの機縁き縁によりて、五十展ごじゅうけん轉てんの隨喜ずいき功德品くどくひん。同下(歌)へげに有がたや此經このきやうの、おもてぞ暗くらき浦うらかぜの、あし火の影を吹きたてて、聽聞するぞ有がたき。上(歌)へ龍女りゆうにょ變成へんじやうときく時は、く、祖母そぼもたのもしや、おほぢは云ふに及ばず。ねがひもみつみつの車くるまの、あし火は清くあかすべし、猶々お經あそばせ、猶猶お經あそばせ。

わき「いかに船中へ申すべき事の候。此浦は平家の一門あまた果て給ひたる由承り及びて候御物語り候へ。して「仰のごとく此澳このあきにて平家の一門果て給ひたる所也。中にも小宰相の局こそ。や。其時の有様お申しあれ。上へ去程きよに平家の一門、馬上ばじやうをあらため、女へあまのを舟に乘移り、二人へ月つきに棹さしさす、時もあり。してさしこゑへ爰こゝだにも都の遠とほきすまの浦、二人下へおもはぬかたきにおとされて、げに名を惜しむものふの、おのころ嶋しまや淡路がた、あはの鳴門なるとに着きにけり。してへ去程きよに小宰相の局めのとを近づけ、いかに何とかおもふ。我たのもしき人々は都みやこにとどまり通盛は討たれぬ。誰をたのみてながらふべき。此海にしづまんとて、主従なくく手を取りくみ舟ばたに臨み、女下へ去さにてもあの海にこそしづまうしづまううずらめ。同下(歌)へ沈しづむべき身の心にや、涙

- (二六) 住居(すまひ)を掛ける。
 (二七) 淡路島の別名またはその近邊の島と考へられてゐた磯殿盧島。そのこに通じ前の武士を受ける。
 (二八) 淡路と重韻。
 (二九) まんとすらめ。底本「まふ」
 (三〇) 「寝ねて」の意。
 (三一) 「沈む」の縁語。
 (三二) 極樂のある西は何處かと問ふと月の入る彼方だと教へられたがその方も見えなない。一般に春の夜の習ひで霞んでゐる爲だらうか。
 (三三) 道を掛けた。
 (三四) 法華經八卷の意。
 (三五) 衆生濟度の誓ひの意。八軸と續いて「ち」の重韻。
 (三六) 法華經の第二品の名。
 (三七) 方便品の偈文。我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ。一切の衆生を化して皆佛道に入らしむ。
 (三八) 底本「く」
 (三九) 「立ち歸る」の縁語、荒に通ずる「あら」の序詞。
 (四〇) 波に交つて。波の間に。
 (四一) 徒らに立ち騒ぐ浪。消え残るの縁語、泡に通ずる阿波の序詞。
 (四二) 金春流の外は「あげ」とある。
 (四三) 「たりし」の音便。

の兼^{三〇}ねてうか^{三一}ふらん。上(歌)へ西^{三二}はととへば月のいる、く、そなたも見えず大方の、春の夜やかすむらん。涙もともにくもるなり。めのとなくく取付きで、此度の物おもひ、君一人にかぎらず、おぼしめしとまり給へと、御きぬの袖に取りつくを、振りきり海にいとみて、老人^{三三}もおなじ満鹽^{三四}の、底の、みくづと成りにけり、底のみくづと成りにけり。(中入。狂言、通盛と小宰相の局との艶事、小宰相の局の入水の様など語る)

僧二人(待詔)へ此八軸^{三五}のちかひにて、く、一人も洩らさじの、方便品^{三六}を讀誦する。下へ如我昔所願^{三七}。(出端)僧へ如我昔所願、後して上へ今者已満足、僧へ化^{三八}、一切衆生、して皆令^{三九}、入佛道^{四〇}の、同へ通盛ふうふは、お經に引かれ、立ちかへる波の、あら有難の、御法やな。

わきへふしぎやなさもなまめきたる御姿の、浪^{四一}にたぐへて見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。女へ名斗^{四二}はまだ消えのこるあだ浪の、阿波のなるとに沈み果てし、小宰相の局の幽靈なり。わきへ扱今一人甲冑をたいし、兵具^{四三}いみじく見えたまふは。してへ是はいく田の森の合戦に於いて、名を天下^{四四}にかけ、武將^{四五}たつし響^{四六}を越前の三位通盛、むかしをかたらん其爲に、是まで顯れ出でた

- (四四)「得し」を掛ける。
 (四五)正面の陣。
 (四六)底本「心本」と誤る。
 (四七)平家一門の中の主として頼みにすべき者の意。底本「宗旨」と誤る。
 (四八)死んでしまふならば。
 (四九)盃を月に通じ、「月の夜」の聯想で宵を月けた。
 (五〇)楚の項羽が漢の高祖に攻められ最期が迫つた時、愛妾虞氏と別れの酒を酌み交した有名な故事。
 (五一)右の故事を詠んだ朗詠の橋廣相の詩句に、燈暗數行虞氏涙。
 (五二)底本「くらふして」
 (五三)底本「をそなはり」
 (五四)「荒し」を掛ける。
 (五五)底本「おとおと」
 (五六)一の谷に行かうとしたが、後髪を引かれる思ひで行くに行かれない。行くも行かれぬは鶴越のある一の谷の縁語。一の谷の縁で須磨を出し、源氏物語須磨の巻に「おはしますうしろの山に柴といふものふすぶるなりけり」とあることから須磨の背面の山を後の山と呼ぶので、「須磨の」を「うしろ」の序詞に用ゐた。

るなり。

同(クリ?)へ抑この一の谷と申すにまへは海、うへはけはしきひよどりごえ、まことに鳥ならでは翔がたくけだものも、足をたつべき地にあらず。してさしこゑへ只いく度も大手の陣の心もとなきぞとて、同下へ宗徒の一門差しつかはさる。通盛も其隨一たりしが、忍んで我陣に歸り、こざいしやうの局にむかひ、(クセ)下へすでに軍、明日に極まりぬ。痛はしや御身は、みちもりならで此内に、憑むべき人なし。我ともかくも成るならば、都に歸り忘れずは、なき跡とひてたび給へ。名残惜しみのおさかづき、通盛酌をとり、さすさかづきの宵のまの、うたたねなりし昵言は、たとへばもろこしの、項羽高祖のせめをうけ、數行虞氏が涙も、是にはいかでまさるべき。ともし火くらうして、月の光にさしむかひ、かたり慰む處に、して上へ舍弟ののとのかみ、同へ早甲冑をよろひつつ、通盛はいづくにぞ、などおそなはりたまふぞと、よばはりし其聲の、あら恥かしや教經、わが弟と云ひながら、他人より猶恥かしや。暇申してさらばとて、ゆくもゆかれぬ一の谷の、所から須磨の山の、うしろ髪ぞ引かるる。

(五七)「逢ふ」を掛ける。

(五八)木村源吾重章の意であらうが平家物語には木村三郎成綱、源平盛衰記には木村源三成綱、東鑑には源三俊綱とある。口誦の誤か。

(五九)抜いて待ち構へてゐたの意。底本「まふけ」

(六〇)六道の一。常に闘争を事とする世界。娑婆で戦をした者が落ちると佛教で言ふ。

(六一)「受くるなり」の省略形。

(六二)衆生済度のためにあらゆる悔辱を堪へ忍ぶ慈悲深い姿。

(六三)煩惱を脱して悟を得ること。

(カケリ)してへかくて、いふたは軍半とおぼしかりしに、「なに、但馬のかみ經正も早

討たれぬと聞ゆ。わきへ扱さつまの守忠度の果は。してへ岡部の六彌太ただず

みとくんで「討たれぬと聞えしかば、あつばれ通盛も名ある侍もがな。討死せ

んと待つ處に、へすはあれを見よよきかたきに、同上へあふみの國の住人に、

く、五八木村の源五しげあきらが、鞭をあげて馳せきたる。みちもり、すこしも

さはがず、五九抜きまうけたる太刀なれば、甲の、六〇眞向ちやうどうち、返す太刀に

て差しちがへ、ともに修羅道の苦をうくる。六一あはれみを垂れたまひ、よくとふ

らひてたび給へ。

下(キリ)へ讀誦のこゑを聞く時は、く、惡鬼ころをやはらげ、六二忍辱慈悲

のすがたにて、菩薩もここに來現す。成佛得脱の、六三身となりゆくぞ有がたき、

身と成りゆくぞ有がたき。

頼政よりまさ

- (一) 稻妻に普通の稻荷の枕詞。
- (二) 地名だが、草深い意をも含む。
- (三) 水の多い田。
- (四) 宇治川の上流の意。
- (五) 遠くに見える里。
- (六) ああ里人が来てくれるとよいが。
- (七) どれが名所だかどれが舊跡だかさあ知らない。白浪の立つ宇治川には舟と橋とがあつて渡るのは易しいけれども、渡り難いのは世の中で、その世の中にやつと命を保つてゐるに過ぎない我が身だから、名所舊跡については何とお答へしたらよいでせう。何ともお答へ出来ません。白浪に「知らず」

前シテ……………尉(頼政の化身)

後シテ……………源頼政の靈

ワキ……………旅僧

狂言……………宇治の里人

僧詞「是は遠國えんごく方より出でたる僧にて候。このほどは洛陽の寺社に参り、名所舊跡のこりなく一見仕りて候。又是よりも南都に参らばやと思ひ候。(道行)

上へあま雲の、いなりの社ふし拜み、く、猶ゆく末は深草ふかぐさや、こはたの關をけさこえて、伏見の澤田見えわたる、水みづのみなかみたづねきて、宇治の里にも着きにけり、うぢの里にも付きにけり。詞「是ははや宇治のさとにて候。あら面白の所や候。さしこゑへ勝かつや遠國えんごくにて聞き及びしうぢの里、「山のすがた河のながれ、へ遠とほのさと橋のけしき、見所おほき名所かな。「哀里あはれ人の來り候へ

を、名所に命を掛けた。宇治川の柴舟と宇治橋とは古來有名。(八)賣物集にも見える諺。「門前の小僧は習はぬ經を讀む」と同意。勸學院は藤原多嗣の創立した同族のための學校。蒙求は唐の李瀚の撰んだ書で初學者必讀の教科書。(九)興ゆかしく田本で訂正。「にくふ」(一〇)容易でない困難なこと。(一一)古今集に見える。私の庵室は都の東南で御覽の通りに住んでゐる。世間の人は世を憂いとて逃避してゐる宇治山だと言つてゐるよ。宇治に「憂し」を掛け、「しか」は「然か」の意だが鹿をほめめかしてゐる。

(一三)「立ち」を掛ける。
 (一四)朝日山にある惠心院を指す。
 (一五)朝日山といふ名にも似ず月が出るよの意。洒落である。
 (一六)平等院の東南にあつた地名。
 (一七)月の光が見え、雪のやうな月光を浴びて柴小舟が掉さし下り。嶋小舟は光悦本も同様だが柴小舟の訛らしく、糞生・金春・金剛は柴小舟とあり、翻世も最近改めた。(一八)優劣のつけ難いよい氣色だ。

頌 政

かし。

して「なうく御僧は何事を仰せ候ぞ。わき「是はこの所はじめて一見の者にて候。名所舊跡御教へ候へ。して「所には住み候へども、賤しき宇治の里人なれば、名所とも舊跡とも、いさしら浪のうぢの河に、舟と橋とは有りながら、わたりかねたるよの中に、住むばかりなる名所舊跡、何とか答へ申すべき。わき「いやさやうには承り候へども、勸學院の雀は蒙求をさへづるといへり。所の人にてましませば御心にくうこそ候へ。先喜撰法師が住みけん庵はいづくのほどにて候ぞ。して「さればこそ大事のことをお尋ねあれ。喜撰法師が庵は、下へ我いほは都のたつみしかぞ住む、「世をうぢ山と人は云ふ也。へ人はいふなりとこそぬしだにも申し候へ。尉はしらず候。わき「又あれに一村の里の見えて候は楨の嶋候か。して「さん候。まきの嶋とも申し、又うぢの河嶋とも申す也。わき「是に見えたるこじまが崎は。して「なにたち花の小嶋が崎。わき「向ひにみえたる寺は、いかさま惠心の僧都の、御法を説きし寺候な。して「なうく旅人、あれ御覽せよ。上(歌)へ名にもにす、月こそ出づれば朝日山、同く、款冬の瀬に影見えて、ゆきさしくだす嶋を舟、山も河も、

- (一八)形。
 (一九)高倉宮以仁王を奉じて頼政の起こした戦を指す。
 (二〇)底本「しかひ」、田本による。
 (二一)道端の草の露のやうにはなかなか消えてしまつての意。底本草路、田本による。金春流は霜露。
 (二二)旅人や驛馬が行つてしまつたやうに誰一人氣に止める者がな
 い。
 (二三)よそごとではない。
 (二四)旅人であるあなたの草を枕の旅寢の夜の夢に。露は草の縁語で露の世といふ熟語から世に普通の夜に續く連絡語となつてゐる。
 (二五)夢のやうにはかない浮世の中に住む宇治の橋守である私は年をとつて穢も寄つた。遠國のお方と話をするこの私は頼政の幽霊だと名のるや否や消え失せてしまつた。夢と「うつつ」、浪と橋・打ち・頼政の「より」、橋と「渡す」とはおのおの縁語。中宿は世の中との掛詞で、現世は過去世と未來世との中宿だとの思想から浮世を受け、源氏物語権本の巻に「宇治のわたりの御中宿」などとあつて宇治は京都奈良間の中宿となつてゐる。

おぼろ／＼として、是非をわかぬけしきかな。勝や名にしおふ、都にちかき宇治のさと、聞きしにまさる名所かな、聞きしにまさる名所かな。

して「此所に於いて平等院と申す御寺は御覽ぜられて候か。わき「いや／＼無案内の事にて候程に、左様の所をも未見ず候。をしへて給はり候へ。して「さらばこなたへ御出で候へ教へ申し候べし。わき「あらうれしやさらば御供申さうするにて候。して「こなたへわたり候へ。是こそ隠もなき平等院にて候へ。又是なるはつり殿と申す所にて候。懇に御覽候へ。わき「あら面白や候。又これなる芝をみれば、扇のなりに取殘されて候謂の候か。して「中中の事此芝につきて物語の候。かたつて聞かせ申し候べし。わき「あらうれしや懇に御物語候へ。して「昔此所に於いて宮軍の有りし時、源三位頼政合戦に打ちまけ給ひ、此所に扇をしき自害し果てたまひぬ。されば名將の古跡なればとて、今も扇のなりに取殘して扇の芝と申し候。わき「痛はしやさしも文武に名をえし人なれども、跡は草露の道のべと成つて、下へ行人征馬の行方のごとし。あらいたはしや候。して「げによく御弔ひ候物かな。然も其宮軍の月も日もけふにあたりて候。下へか様に申せば我ながら、よ所にはあらず旅人の、草の枕の露

たことから宇治の序詞に用ゐられた連絡語。古今の「千早振宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年の経ぬれば」および「うち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」を引いてゐる。

(二六) さあ弔つて亡者を成佛させようと思ひ、寄せて来る浪の音を枕邊に聞く水際も近いこの平等院の庭の扇の芝を片袖の下に敷いて、夢の中の對面を待たうよ。「浮かめ」は「浪」の縁語。「思ひ寄る」は「思ひ」を掛け、「寄る邊の浪」を誘ひ出す連絡語。

(二七) 底本田本とも「ふ」と誤る。(二八) 戦ひ激しく死傷の多い喩へ。孫鹿は黃帝蚩尤死戰の地。紅波は血の流れ。

(二九) 憂世の宇治川の網代に打ちかかる浪は荒い。あゝ娑婆が戀しいよ。宇治川に「憂し」を「あら」に荒を掛けた。

(三〇) 平家物語卷四に見える頼政の子仲綱が平家方を嘲つた歌。尤も延慶本や長門本では頼政となつてゐる。緋絨に氷魚を掛けてゐる。底本「ひおとし」田本で訂正。

のよに、すがた見えんと來りたり。うつつとな思ひたまひそとよ。同上(歌)
へ夢二五のうき世の中宿の、く、宇治の橋守としをへて、老の浪もうちわたす、をちかた人にも申す、我頼政が幽靈と、名乗りもあへず失せにけり、なのりもあへずうせにけり。(中入。狂言、頼政謀叛の子細、最期のことなど語る)

わき「扱は頼政の幽靈かりに顯れ我に詞をかはしけるか。いざ弔ひて浮かへんと、(待語)上へ思ひよるべの浪まくら、く、汀もちかし此庭の、扇の芝をかたしきて、夢のちぎりをまたうよ、夢の契りをまたうよ。(一撃)後して上へ血二六はたくろくの河と成つて、紅波楯をながし、白刃骨をくだく。世二九をうち河の網代のなみ、あら閻浮こひしや。伊勢武者は、皆ひをどしの鎧きて、うちのあじろにかかりぬるかな。うたかたの、あはれはかなき世の中に、同へ蝸牛三〇の角の、あらそひも、して下へはかなかりける、こころ哉三二。

「あら貴の御弔ひや。猶々御經讀み給へ。わきへふしぎやな法體の身にて甲冑を帶し、御經よめとうけ給はるは、いかさまききつる源三位の、其幽靈にてましますか。して「勝三三やくれ三三な三三わは三三蘭生に殖えても隠れなし。下へ名のらぬさきに「頼政と御覽三四するこそ恥かしけれ。只御きやう讀み給へ。わきへ御心やす

(三二) あはれの序詞。泡のやうなあはれにもはかない世の中。

(三三) 愚かな小ぜり何事。白氏文集

(三四) 蝸牛角上争三何事。

(三五) すぐれた者は何處にあつても人目に立つといふ意の諺。義經記

卷二・謡曲安宅などにも見える。

(三六) 法華經に見える語。同經をつぎつぎに言ひ傳へて五十人目におよんでもその功力が衰へないこと。

(三七) 展轉ではなく直接にの意。

(三八) 平等院といふ地名も諸佛の智慧である平等大慧にまさに通じ。

(三九) 前の「おも」と重韻。

(四〇) 釋迦の存在中に釋迦が説法した大會場はこの平等院の庭なのだ。だからこの平等院で佛の平等大慧の功力によつて頼政が成佛するだらうが、それは有難いことだ。

(四一) 「法の場」の縁語が大慧の意。頼政は「依り」の掛詞。底本法場とあり、田本で「の」を補ふ。

(四二) 名も高い高倉の宮に仁王が御殿を外に都を忍び出て。高倉は「高し」の、有明は「有り」の掛詞。「有明」は月の、「月」は都の序詞。「雲居」は高・宮・月・都な

くおぼしめせ。五十展轉のくりきだに、成佛の縁はうたがひなし。増てやは直道に、してへ弔ひなせる法のちから、わきへあひに逢ひたり所の名も、してへ平等院の庭のおも、わきへ思ひ出でたり、してへ佛在世に、同上(歌)へ佛の説きし法の場、へ、ここぞ平等大會の、功力に頼政が、佛果をえんぞ有がたき。

してさしこゑへ 抑治承の夏の比、よしなき御謀叛をすすめ申し、同へ名も高倉の宮のうち、雲々のよ所に有明の、月のみやこをしのび出でて、して下へうき時しにもあふみぢや、同へ三井寺さして、落ちたまふ。(クセ) 下へ去程に、平家は時をめぐらさず、數萬騎のつはものを、關の東につかはすと、聞かや音羽のやまつづく、山科の里近き、木幡の關をよ所にみて、爰ぞ、浮よの旅ごころ、宇治の河橋うちわたり、大和路さして急ぎしに、して上へ寺と、宇治との間に、同へ關路の駒のひまもなく、宮は、六度まで御落馬にて、煩らはせたまひけり。是はさきの夜、御寝ならざる故なりとて、平等院にして、しばらく御座を構へつつ、うぢ橋の中の間引きはなし、したは河浪うへにたつとも、共に、白旗をなびかして、よするかたきを待ち居たり。

くおぼしめせ。五十展轉のくりきだに、成佛の縁はうたがひなし。増てやは直道に、してへ弔ひなせる法のちから、わきへあひに逢ひたり所の名も、してへ平等院の庭のおも、わきへ思ひ出でたり、してへ佛在世に、同上(歌)へ佛の説きし法の場、へ、ここぞ平等大會の、功力に頼政が、佛果をえんぞ有がたき。

どの縁語。

(四〇)「逢ふ」を掛ける。

(四一)「聞く」の縁語。

(四二)つぎの山科と頭韻。

(四三)「憂し」の掛詞、前の浮世と

頭韻、つぎの「打渡り」の打と重

韻。

(四四)三井寺を當時は寺と略稱した

(四五)「除もなく」の序詞で、逢坂の

關を馬で通つたことを匂はせた。

(四六)中程の橋板を取り外し。

(四七)橋下には白川波が立ち、橋

上には源氏が白旗を立て、ともに

白色を靡かして。立つは波の縁語。

(四八)底本「してさし」、田本による。

(四九)田本「の」脱。

(五〇)底本「ひひたり」、田本による。

(五一)底本田本とも「なふ」

(五二)下流。

(五三)弓笛をつかませて引き寄せ。

(五四)底本田本とも「おめひて」

(五五)底本「せむ」、田本による。

(五六)踏み留まらぬことも出来ないで

(五七)現行曲の切先とあるのがよい

(五八)底本田本とも「かふ」

(五九)頼政の子の仲綱兼綱兄弟。

(六〇)歌人として有名な。

四八 して「かくて源平宇治川の南北の岸に打出でたりしに、橋はひいたり水はた

かし。下へさすが難儀の大河なれば、「さうなう渡すべきやうもなかりし處

に、下へ田原の又太郎忠綱と「名乗つて、宇治河の先陣我なりと、へなのりも

あへず三百餘騎、同へくつばみをそろへ川水に、すこしもためらはず、むれぬ

る、村鳥のつばさをならぶる、羽音もかくやと白浪に、ざんざつとうち入れ

て、浮きぬ沈みぬ渡しけり。して下へ忠綱、つはものを下知していはく、同へ水

のさかまく所をば、岩ありとしるべし。よはき馬をばしたでにたてて、つよき

に水をふせがせよ。流れ武者にはゆはずをとらせ、たがひに力を合はすべし

と、ただ一人の下知によつて、さばかりの大河なれども、一騎ものこらずこな

たの岸に、をめてあがれば味方の勢は、我ながら踏みもためず、半町ばかり

覺えずしさつて、きさきをそろへて、ここをさいごとたたかうたり。去程にい

れ亂れ、我もくとたたかへば、してへ頼政がたのみたる、同へ兄弟の者も

うたれければ、してへ今は、生害こなりと、同へ只一筋に老武者の、して下

へ是までと思ひて、同下へ、平等院の庭のおも、是なる芝の上に、あふぎ

をうちしき、よろひぬぎ捨て座をくみて、刀をぬきながら、さすが名をえし其

(六二)平家物語に見える歌。身に實を掛けた。

(六三)前世。

(六三)「逢ふ」の掛詞。

身とて、してへ埋木ウツキの、花さく事もなかりしに、身のなる果はてぞ、あはれなりける。同へ跡とひ給へ御僧よ。かりそめながら是ととも、他生たせいの法の縁に今、あふぎあふぎの芝の草のかげに、かへるとて失せにけり、立ちかへるとて失せにけり。

實盛

(一)阿彌陀經に、從是西方過二十萬億佛土有三世界、名曰極樂。

(二)極樂往生はさうした遠い國に生まれるわけではあるが。

(三)大原談儀に「彌陀在三心」彌陀の淨土はわれわれ自身の心の中にもあるといふ考へ方。

(四)南無阿彌陀佛と彌陀の御名を稱へること。

(五)衆生を淨土に迎へ取つて一人残らず救ふといふ彌陀の誓願に誰が取り残されることがあらう。觀無量壽經に、念佛衆生攝取不捨。

(六)末句は「法の庭人」とあつて、一遍上人語錄所見の上人の歌。說法聽聞の人人が歸つた後までも猶獨り残つて佛の御名を稱へてみよう。二七九頁、中卷二九四頁參照。

(七)佛の教へを知つてゐる人でも知らない人でも何れもその靈魂を極樂へ引きつけようとする彌陀の誓願。その誓願に漏れないのを網に漏れないの願へたのである。「引く」は網の縁語。

前シテ……………尉(實盛の化身)

後シテ……………齋藤實盛の靈

ワキ……………僧(他阿彌上人)

ワキツレ……………從僧(二人)

狂言……………篠原の里人

(狂言出て、篠原の里で毎日遊行十四代他阿彌上人の説法があるが、日中のころ獨言を仰せられるので、人人が不審に思つてゐる由觸れる)

わきさしこゑへ夫西方は十萬億土、遠く生まるるみちながら、つれ僧へ爰も己心の彌陀の國、わきへ貴賤群集の稱名のこそ、つれへ日々夜々の法の場、わきへ勝もまことに攝取不捨の、つれへちかひにたれか、わきへ残るべき。(三人)上(歌)へ獨猶、佛の御名を尋ねみん、く。各々かへる法の庭、しるも知らぬ

- (八)極樂の彼岸へ行く法の舟に乗れば、易易と成佛の道に浮かんで行くことだよ。「浮む」は舟の縁語。「法(乗り)」は「舟」の縁語。
- (九)觀本朝往生傳を始め諸書に見える大江定基(寂昭)臨終の詩に、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。底本「きこふ」と誤る。
- (一〇)立居も苦しい老人の身で、説法の場へ寄り着くことが出来ないなら、「よりも」は寄り藻(波)に打ち寄せられた藻(波)に通じ浪の縁語。
- (一一)一度念佛を唱へれば迎へ取つて下さるといふ彌陀の光明のやうな心には曇りはないが。
- (一二)老眼は曇つて説法の場への通路が明かでないやうに、法を聞いて成佛する道もたどし。
- (一三)説法の場もまた彌陀の淨土もここから遠くはあるまい。觀無量壽經に、汝不知阿彌陀佛去此不遠。
- (一四)鄙の枕詞。
- (一五)田舎者だから名などはありません。萬一人間並に名前があつたなら名乗りもせせう。
- (一六)よくまあ。
- (一七)底本「せうみやう」

もこころひく、誓ひの綱にもるべきや。しる人も、しらぬ人をもわたさばや。彼國へゆく法の舟、うかふも安き道とかや、うかふも安き道とかや。

してさしこゑへ笙歌遙に聞ゆ孤雲のうへ、聖衆らいかうす落日のまへ。あらたふとやけふも又紫雲のたつて候。「いかに人々。日中の稱名ははや近付きて候か。や。鐘の音念佛の聲の聞え候。さなきだに立^〇わくるしき老の浪の、よりもつかずは聴衆の庭に、よそながらもや聽聞せん。上へ一念稱名の聲のうちには、攝取の光明くもらねども、老眼のつうろ猶もつてたどる。よし／＼さのみは急がずとも、ここを去る事、遠かるまじや。南無阿彌陀佛。

わき「いかに翁。して「御前に候。わき「扱も此ほど日中の稱名に一日も忘る事なし。されば心ざしの人とみる處に、翁の姿を餘人のみることなし。誰にむかつて何事を申すなど皆人不審しあへり。けふは翁の名をなのり候へ。して「是は思ひの外なる仰せかな。元よりこの身はあまさがるひな人なれば人がましく、名もあらばこそ名乗りもせめ。只上人の御下向、則みだの來迎なれば、下へかしこうぞ長生して、此稱名の時節にあふこと、まうきのふぼく優曇花^〇、花待ちえたるこちして、老のさいはひ身にこえ、よろこびの涙たもとに

(一〇)容易に逢ひ難いことの喩へ。
法華經に、佛難し得し値、如し優曇波羅華^一又如^二一^三眼^四鏡^五值^六浮木孔^七。
(一〇)新葉集序に「老の幸望みに越え喜びの涙袂に餘れり」
(一一)妄執によつて輪廻してゐる娑婆における我が名を。

(一二)懺悔の廻心。罪を懺悔して心を邪より正に廻らすこと。
(一三)底本「近ふ」

(一四)射矢に通じ弓取の縁語。
(一五)詞花集頼政の歌。下句「櫻は花にあらはれにけり」
(一六)老人を實盛だと御覽下さい。櫻の縁で老木と言つた。
(一七)禮記に、魂氣歸^二于天^一形魄歸^二于地^一。

(一八)執着心の残る娑婆の世に。
(一九)「あだ浪」まで「寄る」に普通の「夜(よる)」の序詞。
(二〇)妄執の闇に迷ひ、夢とも現とも分らない思ひばかりしてゐる。
篠原に爲を掛けた。

(二一)篠原の草葉に霜の置いたやうな白髪の老人だが、老ぼれたからとてお咎めなさるな、篠原の草葉

實盛

あまる。されば此身ながら、安樂國に生まるか、無比の歡喜をなす處に、輪廻妄執のえんぶの名を、又あらためて名のらん事、口惜しうこそ候へ。わき「勝々おきな申す所理至極せり去ながら、ひとつはさんげのゑしんたるべし。只つつまず名乗り候へ。して「何とただ名のれ。わき「中々の事。して

「さらば人を御のけ候へ。わき「本より翁の姿を餘人のみることにはなけれど、所望ならば人をばのくべし近うよりて名乗り候へ。して「昔長井の齋藤別當實盛と申しし者は、此篠原のかせんに討たれて候。定めてきこしめし及ばれてこそ候らめ。わき「それは平家の侍かくれなき弓取。いや其いくさ物語はむやく只翁の名をなのり候へ。して「いや其實盛も、御前の池水にて鬚鬚をすすがれて候。其執心のこりけるか、今も此邊の人には幻のごとくに見え候ぞとよ。わき「ふしぎの事をきく物かな。「さて今も人に見え候か。して下へ深山木の其梢とは見えざりし、櫻は花にあらはれたる、老木をそれと御覽せよ。わき「ふしぎやなさねもりの、昔を聞きつる物語、人の上ぞと思ひつるに、「身のうへなりけるふしぎさよ。わき「扱はおことは實盛の、其幽靈にてましますか。して「我さねもりが幽靈なるが、魂は冥途に有りながら、魄は此よにとどまり

の霜の「置き」に普通の翁の序詞。翁はまた霜の縁語。また伊勢物語の「翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる」の歌の上句をも引いてゐる。「翁さび」は翁らしい振舞ひの意。
 (三)池の岸邊での法事の意。池の縁で水を出し、つぎの「深く」澄み」などはこの水の縁語である。
 (三)阿彌陀佛に深くおすがりする念佛の聲が澄み渡る弔ひが宵から曉に至るまで行はれ、西へ行く月の光が曇りないやうに、西方極樂を志す曇りない心で鐘を鳴らして夜通し南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛
 (三)永遠にの意。往生要集に、永越過苦海、初往生淨土爾時歡喜心不可言宣。
 (三)生死流轉する娑婆。
 (三)往生要集に、處是不退、永免三途八難之畏、壽亦無量、終無三老病死之苦。「不退の處」は再び迷界に退轉することのない極樂を指す。
 (三)阿彌陀佛の譯語。命は無量の意を掛けた。
 (三)一念(極めて短い時間)毎に念佛を續ける人は、その一念毎に

て、わきへ猶執心のえんぶのよに、して「貳百餘歳のほどはふれども、わきへ浮ひもやらでしのはらの、して「池のあだ浪よるとなく、わきへ晝ともわかで心の闇の、して「夢ともなく、わきへうつつともなき、して「思ひをのみ、(上歌)へ篠原の、草ばの霜のおきなさび、(同)へ、人ながめそかり初に、顯はれ、出でたる實盛が、名をもらし給ふなよ。なき世がたりも恥かしとて、御前をたち去りて、行くかとみれば篠原の、池のほとりにて姿は、まぼろしと成りて失せにけり、まぼろしと成りて失せにけり。(中入。狂言、實盛討死の様、首洗ひのことなど語る)

わき(待詔)へ篠原の、池のほとりの法の水、ふかくぞ憑む稱名の、こゑすみわたる弔ひの、初夜より後夜にいたるまで、心もにしへゆく月の、ひかりとともに曇なき、鐘をならして夜もすがら、へなむあみだぶなむあみだぶ、南無阿彌陀佛なむあみだ佛。(出端)後して下へ極樂世界に入りぬれば、ながく苦海をこえゆきて、輪廻のふる郷隔たりぬ。歡喜のころいくばくぞ。上へ所は不退のところ、命は無量壽佛となう。あらたのもしや。ねんくさうぞくする人は、同へ念々ごとに、往生す。して「南無といつば、同へ則是歸命。して

極樂往生をする功德を積む。

(三〇)善導の觀經玄義分に、言^二南無^一者即是歸命、亦是發願廻向之義、言^二阿彌陀^一者即是共行、以^二斯義^一故必得往生。南無といふのは即ち漢譯の歸命で成佛の願ひを發して廻向する意であり、阿彌陀といふのは是即ちその發願を果す行であつて、かやうに願行具足するわけだから必ず極樂往生が出来るのだとの意。

(三一)埋木のやうに。

(三二)埋木・池。「浮め」などと縁語。

(三三)一言ひ」の序詞。後撰に「小山田の苗代水は絶えぬとも心の池のいひは放たじ」「いひ」は槓(イヒ、槓の古語)の普通で池を受けらる。

(三四)修羅道における苦しみ。

(三五)残雪のやうに。

(三六)そのいでたちは殊に花やかなよそほひで、とりわけ曇りない月の光や燈の火影があつて夜とはいへ暗くないので、明らかにそれと分かる錦の直垂の上に、萌黄句の鏡を着て。

(三七)どうして賣となることが出来る。賣の池と呼ばれる極樂の八

へ阿彌陀といつば、同へ其行この儀を、もつての故に、してへかならず往生、うべしとなり。同へ有難や。

わきへふしぎやなしらみあひたる池の面に、見れば有りつる翁なるが、甲冑を帶し來りたり。して「埋木の人しれぬ身と沈めども、心の池のいひがたき、修羅のくげんの數々を、浮へてたばせ給へとよ。わきへ是程にまのあたりなる姿ことばを、餘人は更に見も聞きもせで、して「唯上人のみあきらかに、わき

へみるやすがたも殘の雪の、してへ鬢鬚しろき老武者なれど、わきへ其いであちは花やかなる、してへ粧^{よそほ}ことに曇なき、わきへ月のひかり、してへともしびの影、同上(歌)へくらからぬ、よるの錦の直垂に、く、もよぎ句ひのよろひきて、こがね作の太刀かたな、今の、身にては是ととも、何か賣の、池の蓮の、臺こそ賣なるべけれ。勝やうたがはぬ、法のをしへは朽ちもせぬ、こがねの詞重くせば、などかは至らざるべき、などかは至らざるべき。

わき「見申せば猶も輪廻の姿也。其執心をふり捨てて、彌陀即滅の臺に至り給ふべし。して(クリ)へ勝や一念彌陀佛即滅無量罪、同へすなはちゑかかう發願心、こころを殘す、事なかれ。してさしこゑへ時いたつて今宵有がたき御法

功德池の蓮の臺こそ寶である筈だ。

(四六) 黄金の序詞ともなつてゐる。

(四七) 佛のお言葉を大切にしたらなら

(四八) 極楽の彼岸へを補へば分る。

(四九) 一念彌陀佛即滅無量罪の略。

(五〇) 一度彌陀佛を念すれば即時に無量罪が消滅するとの意。往生本

緣經に見え、惠心僧都の佛心法要

にも引かれてゐる。

(五一) 自分の善根を佛に廻向して極樂往生を願ふ心。

(五二) 娑婆に執心を残す。

(五三) 罪を恥ぢて告白する意。底本

懺悔と誤る。

(五四) 追憶がましい。

(五五) 篠原の野で、草葉の陰に置く

露のやうにはかなく消えたの意。

「忍ぶ」と篠原とは頭韻。

(五六) 不思議な。底本「きゐる」

(五七) 白髪交りの意。上懸はこの語

なし。現行下懸は何れも霞亭と宛

て金剛は「かすを」金春・喜多は「か

すう」と詠つてゐる。この本文

である平家物語卷七寶盛最期の條

では「かすを」「かすう」「かすは」

糟尾・糟生、貞享版節用集では霞

亭とあり區區だが、現代の諸辭書

をうけ、同下へ慚愧懺悔の物がたり、猶もむかしを忘れかねて、忍ぶに似たる

篠原の、草のかけ野の露と消えし、有様かたり申すべし。して「扱も此しのは

らの合戦破れしかば、源氏のかたに手塚の太郎みつもり、木曾殿の御前に馳せ

参じ申しけるは、光盛こそ奇異のくせ者とくんで首取つて候へ。大將かと思

ば續く勢もなし。又葉武者かと思へば錦の直垂をきたり。名のれ、くせむ

れども終に名のらず、こゑは坂東聲にて候ひしと申せば木曾殿、あつばれ長井

の齋藤別當にてやあるらむそれならば、義仲が上野にてみし時、鬚鬚のかすを

なりし今は定めて白髪たるべきに、鬚鬚のくろきこそふしんなれ。樋口の次郎

は見知りたるらんとてめされしかば、樋口参り、ただ一目みて涙をはらくと

ながいて、下へあなむざんやな是は齋藤別當にて候ひけるぞ。實盛常に申しし

は、六十にあまつていくさせば、若殿原にあらそひて、先をかけむもおとなげ

なし。又老武者とて人々にあなづられんも口惜しかるべし。鬚鬚を墨にそめ、

若やぎ討死にせんずる由、つねく申し候ひしが、まことに染めて候ひけり。

あらはせて御覽候へと、申しもあへずくびをもち、同下へ御まへをたつてあた

りなる、此池なみの岸にのぞみて、水の緑も影うつる、柳の糸の枝たれて、(上

は桂川地蔵記を引いて糟尾説を取つてゐる。

(五)底本「なかひて」と誤る。

(五)波寄せる池の邊に行つて緑の水を見ると、緑の柳は水に影を映して絲のやうな枝を垂れてをり。

(六)朗詠良香の詩「氣鬢風梳新柳髮、水消浪洗舊苔髻」を引く。池水で髪を梳り鬢を洗つて見れば。

(六)以下三つの「や」は弓の縁語。

(六)自分勝手な希望ではないのだ(六)典據とすべき文句の意。漢書項羽傳に「富貴不歸故郷、如衣錦夜行」とあるのを指すか。

(六)御領所の別當に補せられて。(六)現行諸流いづれも「老後」

(六)後撰集に見える。

(六)前漢武帝時代の人。初め貧しかつたが、のち出して錦を着て故郷會稽に歸つた。前漢書に見える。底本朱實臣と誤る。

(六)「有り」を掛けた。

(六)いかにも懺悔の物語をして心の底まで清めて、執着心のやうな濁つた心を残しなざるな。底・清

歌へ氣鬢カウれては、かぜ新柳のかみをけづり、水きえては、浪舊苔の、鬚をあらひてみれば、墨はながれおちて、もとの、白髮ハクシツと成りにけり。げに名を惜しむ弓取は、たれもかくこそ有るべけれや。六あらやさしやとて、みな感涙をぞ流しける。(クセ)下へ又實盛が、にしきの、直垂をきる事、わたくしならぬ望みなり。さねもり、都を出でし時、宗盛こうに申すやう、故郷へはにしきをきて、かへるといへる本文あり。六實盛生國は、越前の、者にて候ひしが、近年、御領に付けられて、むさしの長井に、居住つかまつり候ひき。此度北國に、まかりくだりて候はば、定めて、うちじにかまつるべし。老期ラキの、おもひでは是に過ぎじ、御免あれとのぞみしかば、赤地のにしきの、直垂をくだし給はりぬ。して上へ然れば、古歌にも紅葉カキばを、同へ分けつつゆけば錦きて、家にかへると、人や、見るらんと讀みしも、此本文の心なり。さればいにしへの、朱實臣シュジツは、にしきの袂を、會稽山にひるがへし、今の實盛は、名を北國のちまたにあげ、隠なかりし弓とりの、名は末代に有明アキの、月のよすがら、さんげ物がたり申さん。

(ロンギ)上へ勝カチや懺悔の物がたり、心の水の底きよく、にごりを残し給ふな

- く・濁りは何れも水の縁語。
 (七〇)その執着心の残る修羅道での所作が、底本「こう」とある。
 (七一)來と木曾との掛詞。
 (七二)平家物語に基づいた語。古來諸説あるが、北國の方言らしく「組みてむずよ」の訛かと愚考する。現代俗語の「組みやがつたな」に當るかと思ふ。
 (七三)鞍の前方の山形に高くなつてゐるところをいふ。
 (七四)鎧の腰の廻りに垂れた部分。
 (七五)まくりあげて。
 (七六)むんずと。力を籠めて勢強く。
 (七七)風に痛めつけられた。
 (七八)枯木のやうに力もなくなつて
 (七九)上懸と金剛流とは「折れて」
 (八〇)そこをやつて來て。
 (八一)影も形もなくなつてしまつたのだ。南無阿彌陀佛を唱へて我が亡き跡を弔つて下さい。南無阿彌陀佛には無しの意を持たせてある。

よ。してへ其^セ執心の修羅の業、廻りくへて又爰に、きそと、くまんとたくみしに、手塚めにへだてられし、無念は今もあり。同へ續くつはもの誰々と、名の中にも先すすむ、してへ手塚の太郎みつもりが、同へ郎等は主をうたせじと、してへかけへだたりて實盛と、同へ押しならべて組むところを、してへあつばれ、おのれは日本一の、剛の者とくんでうずよとて、同へ鞍の、前輪に押し付けて、首、かき切つて捨ててけり。其のち手塚の太郎、さねもりが弓手にまはりて、草ずりをたたみあげて、二かたなさす所を、むずとくんで二疋があひに、どうど落ちけるが、して下へ老武者のかなしさは、同へ軍にはしつかれたり。かぜにちぢめる、こぼくのちからも落ちて、手づかがしたになる所を、郎等はおちあひて、終に首をばかきおとされて、篠原の土と成つて、影もかたちもなき跡の、影もかたちも、南無阿彌陀佛、とふらひてたび給へ、あととふらひてたび給へ。

朝長

前シテ……………青墓の宿の長者（女）

後シテ……………源朝長の靈

ワキ……………清涼寺の僧（朝長の乳母子）

ワキツレ……………從僧（二人）

狂言……………青墓の宿の長者の内の者

- (一) 大敗北の意だが、謠曲作者は地名に誤解してゐたやうだ。
- (二) 底本日本とも「をひ」
- (三) 青墓。オオハカと發音してゐたのでこのやうに誤つたらしい。
- (四) 宿驛の宿の女將。
- (五) 「過ぎ」と頭韻。
- (六) 風の縁語。
- (七) 「吹く」の意を寓してゐる。
- (八) 青墓の宛字。
- (九) 花の散つた跡に訪れる松風はこれが花を散らした風かと思ふと、落花の雪のなかにあつて本来ならば趣を添へる松風の音もかへつて恨みに思はれることだらう。落花を死んだ朝長に、松風を長者自身に見立てたのである。
- (一〇) 草の露や水の泡にも似たはない心を持つた人々にも
- (一一) 他人の歎きを見てそれがそのままわが身にふりかかり、このや

僧詞 「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。扱も大夫の進朝長は、みやこ大崩にて重手負ひ、美濃の國あふはかの宿長者の屋にて自害し失せ給ひて候程に、御跡を弔ひ申さむ爲、只今あふはかの宿へと急ぎ候。（道行）上へあふみ路や、瀬田の長橋打ちわたり、く、猶ゆく末はかがみ山、老曾の森もうち過ぎて、すゑに伊吹の山かぜや、不破の關路を過ぎゆき、あふはかの宿に着きけり、奥波かの宿に付きにけり。（狂言、呼び出されて僧に朝長の墓を教へる）

うに涙を雨とばかりに流して花のやうな美しい袖を濡らし、内の思ひを外に顯す言葉も無く、泣くばかりの有様だわ。身は見の、「斯かる」は「懸る」の、「泣く」は「無く」の掛詞。「かかる」と雨、「無る」と涙・雨・花はそれぞれ縁語。花薄は穂の序詞。底本田本とも「しほる」とある。

(三)月日の經つのを惜しむけれど顔氏家訓に、光陰可_レ惜。

(四)古今に「雪の中に春は來にけり鶯の水れる涙今や解くらん」

(五)鶯の水つた涙は解けてもわが心の悲しみは解けず、打ち解けても寝ないから。

(六)上懸および金剛流は「を」とありこの方がよく分かる。

(七)今は平家の世だから源氏一門の縁故の者は出家であつても容赦しませんのでの意。

(八)抖擻(とそう)の訛。欲望を捨てて専心佛道修行すること。

(九)さぞかし一入のお悲しみをお感_レじてございませう。

(十)自分自身のことのやうに歎かしくて。

(十一)主従の關係は過現末三世に互

(次第) して次第へ花の跡とふ松風や、花のあととふまつかぜや、雪にもうらみなるらん。さしこゑへ是はあふはかの長者にてさふらふ。夫草の露水の淡、はかなき心のたぐひにも、哀をしるは習ひなるに、是は殊更思はずも、人の歎きを身の上に、かかる涙の雨とのみ、しをるる袖の花ずすき、ほに出すべき言のはも、なくばかりなる、有様かな。下(歌)へ光の影を惜しめども、月日の數のほどふりて、上(歌)へ雪の中、春はきにけりうぐすの、氷れる涙今ははや、解けても、寝ざれば夢にだに、御おも影の見えもせで、痛はしかりし有様の、思ひ出づるもあさましや、思ひ出づるもあさましや。

「あらふしぎやな此御墓所には我ならで七日に参り、弔ひ申す人もなきに、旅人とおぼしき御僧の、涙をながし弔ひ給ふは、取分きたる御心ざしにて候やらん。わき「勝よく御覽ぜられて候物かな。是は朝長のゆかりの僧にて候が、此あふはかの宿にて果て給ひたる由を承り及び、とくにも参り度くは候ひしかども、今ほどの事は怨敵のゆかりをば出家の身をもゆるさず候程に、とすう行脚に身をやつし忍びて下向仕りて候。して「扱々朝長のゆかりとはいかなる人にてましますぞ。わき「是は朝長の御めのとごなにがしと申しし者なる

る御縁だとの意。つぎの一樹・二世・四に普通の死など数韻。なほ頭韻を踏んでゐる「弔ふ」・朝長も十に普通ゆゑこれら數韻の一部とも見られる。

(一) 説法明眼論に、宿^二一樹^一下^二汲^一一河流^一・二夜同宿(中略)皆是先世結縁。

(二) 朝長に一夜の宿を借したのも前世からの因縁だつたので。夫婦は二世の思想を含ませて女性としての朝長への恩慕を寓する。

(三) 弔はれる朝長も互に死の縁があつたのだ。朝長に「弔ふ」を掛けてゐるやうだ。

(四) ここは所も死の縁に全くあてはまる逢墓に普通の青墓で、その青墓にある墓標は草の陰にあるのだが。「あふはか」は「逢ふ」と青墓の掛詞。「草の陰」は墓の縁語、青の序詞。

(五) 青野が原とは名ばかりで青い草はなく、冬越しの古い枯葉が春草代りにあるばかりで、丁度秋の浅茅原のやうだ。

(六) 萩の枯葉を焼いた跡の野原までも、本當に火葬場に立ち上る夕煙を思ひ出させる。朝長もその火

が、去事有りて御暇給はりはや十ヶ年に及び候。して「扱はげにも」一入の御哀、さこそはおぼしめさるらめ。わらはも一夜の御なじみに、かやうにあへなく成り給へば、あさましき痛はしき、一方ならぬ思ひにただ身の歎きのごとくにて、かやうに弔ひ申すなり。わきへさてはふしぎや我とても、もと主従の御名残、是も三世の御値遇。して「わらはも」一樹の陰のやどり、他生の縁ぞと大きく時は、今是^三とても二世のえんの、わきへけふしも互に爰にきて、して「弔ふ我等も、わきへ朝長も、同上(歌)へ死の縁の、所もあひにあふはかの、く、跡のしるしか草のかげの、青、野が原は名のみして、古葉のみの春草は、さながら秋のあさぢはら、萩の、焼はらの跡までも、げに北芒の夕けふり、一片の、雲となり消えし、空は色も形も、なき跡ぞ哀なりける、なき跡ぞあはれなりける。

わき「扱々朝長の御寂期のしぎ何とか御座候ひつる。して「其時の有様申すに付けて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入りて、あらけなく門を叩く音す。誰なるらむと答へしに、鎌田殿とおせられしほどに門を開かすれば、物の具したる人四五人うちへいり給ふ。義朝御おやこ鎌田金王丸とやらん、わらはが所

葬場の煙となつて立ち上り一片の雲となつてこの空に消えたのだが、今見るその空は色も形もなく、そのやうに色も形も止めずに消えて亡くなつた朝長の亡き跡は悲しいことであつた。北芒は北邸で中國洛陽の北の邸山をいひ、漢以來の有名な火葬場ゆゑ、ここは火葬場の意。「なき」は「亡き」と「無き」の掛詞。

(二七)仕儀。有様。

(二八)「仰せ」の約言。

(二九)膝頭。

(三〇)射られの意。武士詞では受身を嫌ひ使役を受身に代用する。

(三一)「に」田本で補ふ。

(三二)一足も歩けさうもありません

(三三)途中。

(三四)犬のやうに野たれ死ぬこと。

(三五)前途。將來。

(三六)「ゆひかひ」が正しく、言ひ甲斐の轉で、腑甲斐ないの意。

(三七)息が絶えなかつたので。

(三八)側の見る目も悲しくて、その悲しさを何時になつたら忘れよう

(三九)この一節平家物語諸本の丹波少將成経が亡父成親の墓に詣でたところの本文を引いてゐる。源平

を憑たもみおぼしめされ、一夜を明かすべしとおせられし程に、其まま頼まれ参らせ、明けなば川舟にめされ、野間のうつみへ御入り有るべしと也。去程さるに朝長は、都大崩とやらんにて膝ひざの口をいさせ、とかく煩はせ給ひしが、夜更け人しづまつて朝長の御聲にてなむあみだ佛ぶつと二こゑのたまふ。こはいかにとて鎌田殿参り、朝長の御腹めされて候やと申されければ、義朝驚き御覽みまはするにはや、御はだぎぬも紅べににそみてめも當てられぬ有様也。鎌田殿かかへ申され、義朝何とて自害するぞと仰せられければ、朝長いきのしたにて、下しもへさん候大崩にて膝の口を射させ、既に難儀がたがたに候ひつるを、馬にかかり是までは参りて候へども、今は一あしもひいつべくも候はず。路次みちぎはにてかたきにもあふならば、犬死いぬじにすべく候間自害みづかつかまつり候。ただ返すく御せんども見届け申さでかやうに成り候事、さこそゆいかひなき者とおぼしめされ候べきなれども、路次みちぎはにて捨てられ参らせば、雑兵ぞうへいの手に懸からんこと、あまりに口惜くちやくしうさふらへば、ここにてお暇給はらんと、同下どうげ(歌)へ是を取期とりにきのおことばにて、こと切れさせ給へば、義朝、正清取付きて、歎かせたまふ御有様を、よ所よところのみるめも、哀あはれさをいつか忘れん。上うへ(歌)へかなしきかなや、形をもとむれば、苔底こけぞこの朽骨くつこつ、

盛衰記に「悲しきかなや、形を苔の底に埋みて」、延慶本(長門本もほぼ同文)に「亡魂なれば答ふる人も更になし。(中略)かたちを求むれども見えず、唯苔底の朽骨を思ひやらる。聲を尋ねれども答ふるものなし」。流布本(八坂本もほぼ同文)に「三世十方の佛陀の聖衆も隣み給ひ、亡魂尊靈もいかに嬉しとおほしけん」などある。(四〇)朝長の肉體は苔むした墓の下で朽ちた骨となつてゐて。(四一)草深い小道の邊の空しい骨となつて。

(四二)過現末の三世にわたり、東西南北とその間の四隅と上下との十方世界に居られる佛や菩薩達も。(四三)かうしてゐるうちに夕日が西に傾いて、夕日の映る雲が切れ切りに去來する空は青く、「うつる」に「移るふ」と「映る」、青野原に青を掛けた。

(四四)觀世音に向つて行ふ懺悔法。上懸の一懺法「がよい」。

(四五)讀經念佛による佛事供養。

(四六)「二人」田本で補ふ。

(四七)懺法讀誦の聲があたりに満ち山風も吹き満ちて月も更け。滿つ。

みゆるもの今は更になく、哀なるかなや、其聲を尋ねれば、草徑の亡骨と成つて、こたふるものも更になし。三世十方の、佛陀の聖衆も、あはれむ心あるならば、亡魂尊靈も、さこそ哀とおほすべき。下(歌)へかくて夕陽影うつる、
く、雲絶々にゆく空の、青野が原の露分けて、彼旅人をともなひ、あふはかの宿に歸りけり、あふはかの宿に歸りけり。

して「見ぐるしう候へども暫く御逗留候ひて、朝長の跡を御弔ひ候へ。(シテ、狂言に接待を命じて中入。狂言、朝長義朝らの最期を語る)

わきへ扱も幽靈朝長の、佛事は様々おほけれども、つれ僧へ取分き亡者の貴ひたまひし、觀音織法讀みたてまつり、わきへ聲佛事をもなすとかや。二人(待詔)上へこゑみつや、法の山かぜ月更けて、く、光やはらぐ春のよの、眠を覺ます鉢つづみ、時もうつるや初夜のかね、音すみわたる折からの、御法の夜聲感涙も、うかふばかりのけしきかな、浮ふばかりのけしきかな。(出端)後して上へあら貴の織法やな。昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體。まことなるかな、まことなるかな。上へ有がたや。聞けばたへなる法の御こゑ、わきへ我今已具、して楊枝淨水、わきへ唯願薩埵。

夜と數語。

(四八)鑄鉞と太鼓。

(四九)鼓の縁語。

(五〇)「打つ」に通じ、鉞・鼓・鐘などと縁語。

(五一)「夜聲に」の意。

(五二)天臺覺運の本覺讚中にある偈文。慧思禪師の作といふ。昔靈鷲山にあつて法華經を説かれた釋迦如來は、今西方にあつて阿彌陀と名付け、娑婆に示現しては觀世音といふも、三世に渡る衆生の利益は同一體であるとの意。底本「しやはしけんくはんせをん」とある。

(五三)觀音懺法の偈文、我今已具三楊枝淨水、唯願大悲哀憐攝受、我今再獻三楊枝淨水、唯願觀音哀憐攝受、我今三獻三楊枝淨水、唯願薩埵哀憐攝受、の初句と末句とを引いた。上懸は「吾今三點」とある。

(五四)上懸は「薩埵」とあり、「たう」は「たと」の轉訛か。

(五五)有難い經文の諷誦を聞いて、觀音が感應して利益を施さうとして感ぜられる氣配が我が肝に銘じても美稱。

(五六)念珠すなはち數珠だが、「思

同へ心耳しんじをすませる、玉文たまもんの瑞諷、感應肝に、めいずる折から、あらたつとの、弔ひやな。

わきへふしぎやな觀音懺法こそすみみて、灯ともの影ほのかなるに、みれば正まさしく朝長の、影のごとくに見え給ふは、もしく夢かまぼろしか。して「元よりも夢幻の假の世なり。其疑ひを止め給ひて、ただく御法を講じたまへ。わきへ勝々かたがたかやうにま見えたまふも、偏ひとへに法の力ぞと、おもひの珠たまの數かずくりて、してへ聲をちからにたよりくるは、わきへまことの姿か、してへまぼろしかと、わきへ見えつ、してへかくれつ、わきへ面影おもかげの、同上ごとう(歌)へあれはとも、いはば形や消えなまし、く。消えずはいかにもし火かを、背くなよ朝長を、ともに憐みて深夜の、月も影そへて、光陰ひかりかげを惜しみ給へや。げにやとき人を、またぬ憂世の習ひなり。只何事なにごとも打ち置きて、御法を説かせ給へや、みのりをとかせ給へや。

(クリ)上へ夫それあしたに紅顔有つて世路せいろに誇るといへども、夕ゆふには白骨はくごつとなつて郊原に朽ちぬ。してさしこまへ昔むかしは源平げんへい左右さうぶにして朝家あそけを守護しごしたてまつり、同へ御代を治め國家を靜めて、萬機まんきの政まつりごとすなほなりしに、保元平治ほうげんへいじの

ひ」を掛けた。

(五七)何度も縁縁つてゐると。

(五八)念珠の珠語。近寄つて来るは。

(五九)あれは朝長の面影かとでも言つたなら形は消えてしまふであらう。とも・燈・朝長・共には重韻。

(六〇)朗詠白樂天の詩に、香_レ燈共燐深夜月。

(六一)格言に「光陰可_レ惜時不_レ待_レ人」

(六二)底本「を」田本で訂正。

(六三)朗詠に、朝有_二紅顏_一誇_二世路_一暮爲_二白骨_一朽_二郊原_一。御文にもあり

(六四)平家物語卷四大衆揃に「昔は源平左右に争ひて朝家の御固めたりしかども……」

(六五)底本田本とも「すなを」

(六六)底本「さはき田本「強き」

(六七)「の」田本で補ふ。

(六八)底本「おさた」田本による。

(六九)雨の縁語。

(七〇)頼まれ甲斐もなくて。

(七一)梵網經に「一切男子是我父、一切女人是我母、我生々無_レ不_レ從_レ之受_レ生」

(七二)生生世世の。前世からの。

(七三)長者の弔ひのお志も誠に深く、その深い志を請けて喜ぶのだ。

世のみだれ、いかなる時か来りけん。して下へ思はざりにし弓馬のさわぎ、同

へ偏に時節、到来なり。(タセ)下へ去程に、嫡子悪源太よしひらは、石山寺に

こもりしを、多勢に無勢かなはねば、力なく生捕られて、終に誅せられにけ

り。三男、兵衛の佐をば、彌平兵衛が手にわたし、これも都へぞとられける。

父、義朝は是よりも、野間のうつみにおちゆき、長田を憑み給へども、頼む、

木の本に雨もりて、やみくと討たれ給ひぬ。いかなれば長田は、ゆひかひな

くて主君をも、討ちたてまつるぞや。いかなれば此宿の、あるじはしかも女人

の、かひくしくも憑まれて、一夜の情のみか、かやうに跡までも、御とふら

ひになる事は、して上へ抑、いつのよの契りぞや。同へ一切の男子をば、生

々の父と思ひ、萬の女人は、しやうくの母とおもへとは、今身の上知ら

れたり。さながら、親子のごとくに、御歎きあれば弔ひも、まことに深きこ

ろざし、受けよるこび申すなり。朝長が後生をも、御こころ安くおぼしめせ。

(ロンギ)上へげに憑むべき一乗の、功力ながらになどされば、いまだ瞋志の

甲冑の、御有様ぞいたはしき。してへ梓弓、本の身ながら玉きはる、魂は善所

におもむけども、魄は、しゆらだうに残つて、しばしくるしみをうくる也。同

- (七四) 願つてもよい法華經の功德の力によつて安心の境地にゐられる筈なのに。「乗は法華經を指す。」
 (七五) 甲冑の縁語。「もと」の枕詞。
 (七六) 魂の枕詞。はるは弓の縁語。
 (七七) 「逢ふ」の掛詞。節(七)に普通の世の序詞。合竹は數本の管を同時に吹き合はせる笙の吹き方。
 (七八) 「現じ」を掛ける。
 (七九) 雲の縁語。
 (八〇) 白雲のやうな白旗紅葉のやうな赤旗で。雲・紅葉は散りの縁語。底本「こようよう、田本による。」
 (八一) 矢竹までも深く射込まれて。
 (八二) 射通されると。
 (八三) 飛び越して。
 (八四) 重傷なので。
 (八五) 一步も動けなかつたのを。
 (八六) 「落ち」と遠近の掛詞。

抑おさしゆらの苦患くげんとは、いかなる敵てきにあひ竹せきの、してへ此よにてみし有様の、同へ源平兩家げんへい、してへいれ亂みだるる、同へ旗は、白雲紅葉はくうんの、散りまじりたたかふに、運うの、きはめのかなしさは、大崩おほにて朝長が、膝ひざの口くちを筥はこぶかに射させて、馬うまの、ふと腹はらに射付あけらるれば、馬うまはしきりにはねあがれば、鎧よろいをこしておりたたむと、すれども難儀がたの手なれば、一足ひとあしも引かれざりしを、乗のりがへにかきのせられ此、あふはかにおちつき、雑兵ざふひやうの手にかからむよりはと、思ひさだめてはら一もんじに、かき切つて其ままに、修羅道しゆらだうにをちこちの、土つちとなりぬるあを野が原ののの、なき跡あととひてたび給へ、なきあとをとひてたび給へ。

- (一) 遙かな海路を経て都にさあ歸らう。八重・九重は數讀。平家灌頂卷「九重の雲の上にて見し月を八重の潮路に詠めつ」
- (二) 底本田本とも「つゐに」
- (三) 張合ひのない。はかない。
- (四) 我が世の春の意を掛けた。
- (五) すでに時雨の降る初冬に旅裝束をつけ、雨や涙に濡れた袖に落ちぶれた身を隠して、忍び忍び京へ上るのであつた。衣と「しをる」及び袖、袖と身はおのの縁語。底本田本とも「しほるる」とある。
- (六) 順序通りお取りつぎ下さい。
- (七) 取りつぎの手を經る必要はあるまい。直接にの意。
- (八) どうしてよいか分りません。
- (九) 出家。
- (一〇) 都へはとて歸れない身だから、路傍の雑兵の手にかかるくらゐならば……と決心なされたのか。道は身の掛詞、「歸る」の縁語。
- (一一) 月明の深夜、舟から。
- (一二) 病死ならば。
- (一三) 或は。ことによつたら。
- (一四) 無きと「亡き」の掛詞。
- (一五) 世には夫婦の仲の意もある。
- (一六) このごろは人目を忍ぶわが家

清きよ
經つね

シテ……………平清經の靈

ツレ……………清經の妻

ワキ……………粟津の三郎

(次第) わき次第へ八重の鹽路の浦の浪、やへの鹽ぢのうらのなみ、九重にござや歸らむ。詞「是は左中將清經の御内に仕へ奉る粟津の三郎と申す者にて候。さても憑たもみ奉り候清經は、つひに身の成りゆくべき事をおぼしめし定められけるか、柳が浦の澳あきにして、身を投げ空しく成りたまひて候。其後船中を見申して候へば、髪のかみにはだのままりを残し置かれて候程に、あへなき御形見をもち只今都へのぼり候。(道行) 上へこの程は、ひなの住すまひに馴なれて、本れなれ、たま〜かへる古さとも、むかしの春はるに引きかへて、今は物うき秋あきかれて、は五や時雨ふる旅たびごるも、しをるる袖の身の果を、忍び〜にのぼりけり、忍び

なので、その我が家の垣根の薄を吹く風が音を立てないやうに、聲をも立てずに忍び音に泣くばかりの身であつたが、今は誰を憚る必要があらう。有明の月の残る夜もすがらなりとも、何を忍び隠れよう、時鳥かにながつて、泣くのだ。垣根は垣根の意だが、今は穗に通じ、包む及び薄の縁語。有明は有りの、名をもは猶もの掛詞。

(二七)延慶本平家に見える歌。盛衰記では初句見るからに、末句「本の社に」見る度に心を苦しめる髪だから辛さのあまり本の主へ返すとの意。心づくしに筑紫、髪に神、憂さに宇佐を掛け、清経が九州の宇佐八幡に詣でたのを寓す。(二八)形見の髪を清経にお返ししての意。「手向け」は社の縁語。(二九)戀しく思ひながら寝ること。

(三〇)横にする意。(三一)枕が亡き夫の魂に戀を知らしめてくれるだらうの意。枕が戀といふものを私に味ははしてくれるだらうと見る説もある。

(三二)大戀語録に、聖人無夢。太平記卷廿五「されば聖人に夢なし

くくのぼりけり。

詞「いかに誰か御入り候。筑紫よりも粟津の三郎が参りたる由それ〳〵御申し候へ。つれ「あはづの三郎か人までも有るまじこなたへ参れ。いかに粟津の三郎あら珍しや。扱ただ今は何の爲の御使ぞ。わき「かくと申さん爲是迄は参りて候へども、〳〵何と申しあぐべきやらむ、是非をわきまへず候。つれ「あらふしぎや何とて物をば申さでさめ〳〵とは啼くぞ。わき「只面目もなき御使にて候。つれ「めんぼくもなき御使とはもし御遁世ばし有りけるか。わき「いや御遁世もなく候。つれ「過ぎにし筑紫の軍にも御つつがなきところ聞きつるに。わき「合戦にも討たれ給はず候。つれ「合戦にもうたれ給はず御遁世もなくは、何とて面目もなきとは申すぞ。わき「筑紫へはかなひ給はず、都へは迎もかへらぬ道のべの、雑兵の手にかからんよりはと思食定められけるか、柳が浦のおきにして、深ゆく月の夜舟より、身を投げ空しく成りたまひて候。つれ「何身をなげむなしく成り給ひたるとや。下へうらめしやせめては討たれもしは又、やまふのゆかの露ときえなば、力なしとも思ふべきに、我と身を投げたまひぬれば、もしはかはらで同じ世に、めぐりや逢ふと懇め置きし、ことのは

とはこれを以つて申すものにて候。聖人は心が安靜だから夢などは見ないとの意。

(三三)しかし人世を現實と見る人があらうか、誰もさうは見ない。

(三四)夢窓國師語録、眼裏有^レ塵三界窄、心頭無^レ物一床寬。目の中に迷妄の塵があると廣い三界も狭く見え、心の中に何の迷もなければ一つの小さい床も廣く思はれるとの意。「一床」底本田本とも、「一生」

(三五)世だが、夫婦の仲の意もある。

(三六)夢幻何れも跡形もないこと雲や水の往來のやうだ。さうした夢幻のやうな娑婆の故郷にたどりたどりやつて來てまた歸つて行く我が心のはかないことよ。「行く」「歸る」は雲水の縁語。「いづれ跡ある」は「いづれやは跡ある」の反語の省略だらう。

(三七)古今、小野の小町の歌。

(三八)定命の期を待たないで。

(三九)約言。約束の意。

(四〇)私のことをお恨みになるなら

(四一)「有り」の掛詞、「見よ」の序詞

(四二)御存じないのか、形見を返す氣持は、思ひ餘つたことを歌にした「見る度に心盡しの髪なれば」

迢も今ははや、いつはりなりけるうらめしさよ。勝^げうらみても其甲斐の、なき身と成るこそかなしけれ。同下(歌)へ何事も、はかなかりける世^よの習ひ。上(歌)へこのほどは、人めをつつむわが宿の、く、垣ほのすすきふくかぜの、こゑをもたてず忍び音に、啼くのみなりし身なれども、今は誰をかはばかりの、有明の月のよただとも、何か忍ばんほととぎす、名をも隠さで泣く音かな、名をもかくさでなくねかな。

わき「身を投げたまひて後船中を見申して候へば、はだのまもりに鬢のかみを殘し置かれて候程に、是まで持ちて参りて候。つれ下へ是は中将どのの黒髪かや。見ればめもくれ心きえ、猶もおもひのまさるぞや。みる^またびに、心づくしのかみなれば、うさにぞかへすもの社へと、同下(歌)へ手^た向けかへして夜もすがら、涙とともに^なおもひねの、夢になりとも見え給へと、ねられぬ^ねにかたふくる、枕^{まくら}や戀をしらすらむ、枕^{まくら}や戀をしらすらん。

してへ^ま聖人に夢なし誰^たあつてうつつとみる。眼裏^{まなこ}に塵あつて三界すぼく、心頭無事にして一床ひろし。勝^げやうしとみしよもまぼろし、つらしと思ふ身も夢。いづれ跡ある雲水の、ゆくも歸るも閻浮の故郷に、たどる心のはかなさよ。下

によく表してある。「言の葉は歌の意だが事の掛詞、「返す」の縁語。(三)その歌の下の句「鬘さにぞ返す本(社へ)」を私の方で轉用して再びあなたに黒髪を送るが、嫌でないなら保存すべき形見だよ。飽かずは赤に通じ黒の、又明かずに通じ戸に通ずる留むの縁語。(四)「亂れの掛詞「分きて」の序詞(五)取り分け。特別に。殊更に。(六)以下三句「か」の頭韻。(七)形見にも黒髪にも掛かる。(八)すねて泣く涙に濡れた手枕。(九)夜の意だが、夫婦の仲の意の世の意をも含んでゐる。(一〇)獨寢のやうに別別に臥して互に異なる恨を述べてゐるのは悲しいことだ。ふしぶしは臥臥節節の掛詞、節(よ)に普通の夜の縁語。(一一)古今「形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあるまじしものを」。中は「却つて」の意。(一二)思ふにつけても。(一三)田本「給へ」。(一四)九州や四國の海の意。(一五)福岡縣遠賀郡の山鹿城の宛字(一六)急流を下るための底の淺い舟だが、ここは足の早い小舟の意。

へうたたねに、戀しき人をみてしより、夢てふ物はたのみそめてき。「いかにいにしへ人。何とてまどろみ給ふぞ。清經こそ是まで参りて候へ。つれへふしぎやなまどろむ枕に見え給ふは、げに清經にてましませども、正しく身を投げたまへるが、夢ならでいかかみるべきぞ。下へよし夢なりとも御姿を、見みえ給ふぞ有がたき。去ながら命をまたで我と身を、捨てさせたまふ御事は、いっはりなりける兼言なれば只うらめしうこそ候へ。して「左様に人をものたまはば、我も恨みは有明の、見よとて送りしかたみをば、何しに返し給ふらん。つれへ知らずや形見を返すとは、思ひあまりしことの葉の、下へみる度に、こころ盡しのかみなれば、して下へうさにぞかへす本のやしろへと、二度送る黒かみのあかずはとむべきかたみぞかし。つれへ愚かど心得たまへるや。慰みとの形見なれどもみれば思ひのみだれ髪、してへわきて送りしかひもなく、形見を返すはこなたのうらみ、つれへ我は捨てにし命のうらみ、してへたがひにかこち、つれへかこたるる、してへ形見ぞつらき、つれへ黒髪の、同上(歌)へ恨みをさへにいひそへて、くねる涙の手枕を、ならべて、ふたりがあふよなれど、うらむれば獨ねの、ふし／＼なるぞかなしき。勝やかた見こそ、中々

うけれ是なくは、わするる事も有りなんと、思ふもぬらす袂かな、おもふもぬらす袂かな。

して「此うへは恨みをはれ候へ。西海四海の物語申し候はん。扱も一門は九州山家の城へもかたき攻め來ると聞えしかば、とる物も取りあへずたかせ舟にとり乗り、へよもすがら柳と云ふ所につく。同へ勝や所も名をえたる、浦はなみ木の柳かけ、いとかり初の皇居をさだむ。それより宇佐八幡に御參詣有るべしとて、御幸をはやめたてまつり、神馬七疋其ほか金銀種々のささげもの、則奉幣の、爲なるべし。わきへ世の中の、うさには神も、なき物を、何いのるらん、心盡しに。して下へかやうに聞えしかば新中納言とりあへず、同下へさりともと、思ふこころも蟲のねも、弱り果てぬる秋の暮かな。してへ扱は、同へ佛神三ぼうも、捨てはて給ふと心ぼそくて、一門は、きをうしなひ力をおとして、足弱ぐるまのすごくと、還幸なしたてまつる、哀なりし有様。(クセ)

下へかかりける所に、長門の國へも、かたきむかふと聞きしかば、又舟にとり乗りて、いづくともなく押し出す、心の中ぞあはれなる。勝やよの中の、うつる夢こそまことなれ。保元の春の花、壽永の秋の紅葉とて、ちりくになりう

(四) 誠に柳といふ地名にふさはしく海岸には柳の並木があつて、その柳の木蔭に行んの一時の皇居を定める。並木は波に通じ浦の縁語、「いと」は絲に通じ柳の縁語。

(四) 平家物語卷八に見える宇佐八幡の神詠。宇佐と「憂さ」、「心盡し」と筑紫とをそれぞれ掛けてある。

(四) 知盛。平家諸木は宗盛とある。

(五) 千載集の俊成の歌。さりととも「は」はそれでもまさかとの意で、辛い世には神もないと神自身が仰せられたが、それでもまさか神がないことはあるまいとの意。

(五) 佛法僧の三寶。こゝは佛の意。

(五) 足の進まない形容。

(五) 榮枯盛衰が夢のやうに移り變るのが世の中の眞の姿なのだ。

(五) 盛衰記卷卅二に「平家は保元に春の花と榮えしかども、壽永に秋の紅葉と散り果てて」

(五) 「散り散り」。「存かむ」ともに花・紅葉及び一葉の縁語。

(五) 一葉の縁語。

(五) 追風を掛ける。

(五) 浪の白い意を掛け、平家物語卷八太宰府落ちの條の文を引く。

(五) 心魂に残つてゐる道理を考へ

て見るのに。

(六〇)十訓抄第六に「八幡大菩薩は悉くも正直の者の頭に宿らん」と誓はせ給ふ。私聚百因縁集卷九の第五話に「正直の頭に宿らんと誓ひて八幡大菩薩と顯れ給へり」

(六一)どうせ消えねばならない露のやうなはかない身が猶消えないかのやうに執着して、浮草が浪に誘はれるやうに。「置き」は露の縁語。

(六二)見るの掛詞、沈みの序詞。

(六三)言はでと頭韻、歌枕岩代の松の語より「待つ」の序詞となる。

(六四)何か待つことでもあるかのやうに。

(六五)「ありや」と頭韻。

(六六)月を眺めて吟嘯する。

(六七)横笛。

(六八)「澄み」と「速やか」の掛詞。

(六九)鑑みて。考へて。

(七〇)徒浪のやうに消えてしまふ意だが、「歸らぬ」の序詞でもある。

(七一)盡きないのは心配ごとだよ。今は筑紫の旅路だが人生とても旅なのだ。「心盡し」は筑紫の掛詞。

(七二)ひたすの。「見るらん」にかかる副詞と見る説もある。

(七三)見よの掛詞、假の世の序詞。

かふ。一葉の舟なれや。柳が浦の秋かぜの、追手、がほなるあとの浪、しらすぎのむれゐる松みれば、源氏の旗をなびかす、多勢かと肝をけす。ここに清經は、こころにこめて思ふやう、去にても八幡の、御託宜あらたに、しんこんに残る理、まこと正直の、かうべにやどり給ふかと、只一筋に思ひきり、して上へあぢきなや。とても消ゆべき露の身を、同へ猶置きがほにうき草の、浪にさそはれ、舟にただよひていつまでか、憂き目を水鳥の、しづみ果てんと思ひきり、人にはいはで岩代の、まつことありやあかつきの、月に、うそふくけしきにて、船のへいたに立ちあがり、こしより、やうでう抜き出だし、ねもすみそかに吹きならし、今やうをうたひ朗詠し、こしかた、行末をかがみて、終にはいつかあだ浪の、かへらぬはいにしへ、とまらぬは心づくしよ。此世とても旅ぞかし。あらおもひ残さずやと、よそめにはひたふる、狂亂と人や見るらん。よし人は何とも、みるめをかりのよるの空、西に、かたふく月を見れば、いざや我也つれんと、南無阿彌陀佛みだほとけ、迎へさせ給へと、只一聲を寂期にて、舟よりかつばとおち鹽の、底の、みくづと沈みゆく、憂き身の果ぞかなしき。

- 「假の世」の世を夜に言ひ掛けた。
 (七五) 引汐の意だが落ちを掛けた。
 (七六) 「浮き」に通じ「沈み」の縁語。
 (七七) 「昏れ」の掛詞、浮寝の序詞。
 (七八) 辛い思ひに沈んで寝なければならぬとは恨めしかつた契だ。
 「浮ね」「沈む」「うら」の縁語。
 (七九) 人の言ふところによると地獄とても同じことで。源平盛衰記に「いふならず奈落の底に入りぬれば利利も首陀も變らざりけり」
 (八〇) 底本「ける」田本で訂正。
 (八一) 「落ち」を掛け、古今の「遠近のたつきも知らぬ云々」の歌をふまへ「たつき」を立木に轉用。
 (八二) 精劍。清劍とも。
 (八三) 雲の旗をつき立て。
 (八四) 橋慢。おごりたかぶること。
 (八五) 愛欲貪恚痴は皆玄に通ずる道場だとの意か。通玄道場ではなく痛患鬪諍だとの説もある。
 (八六) 迷ひも悟りも。
 (八七) 「亂るる」は上下にかかる。
 (八八) 現行の亂れぬがよいやうだ。
 (八九) 「救はれて」を補へば分る。
 (九〇) 「清き」を掛ける。

つれ上へ聞くに心もくれはどり、浮ねに沈む思ひの海の、うらめしかりける、ちぎりかな。してへいふならず、ならくもおなじ、うたかたの、哀はたれも、かはらざりけり。かかるへ扱しゆらだうに遠近の、同へさて修羅道にをちこちの、たつきはかたき雨は矢さき、月はせいけん山はてつじやう。雲のはたてを ついて、けうまん八四の劔をそろへて、邪見八七のまなこの光、あいよくとんいちつう げんだうぢやう、無明八六もほつしやうも、亂るるかたきうつは浪、引くはうしほ、是までなりやまことはさいごの、十念見なれぬ御法の舟に、慚たのみしままにうた がひもなく、勝八九もこころは清經九〇が、げにも心は、きよつねが、佛果をえしこそ 有難けれ。

三番目物(鬘物)

軒^{のき}端^{ばの}梅^{うめ} (東北)

前シテ……………女(和泉式部の化身)

後シテ……………和泉式部の靈

ワキ……………東國の僧

ワキツレ……………從僧(二人、又なしにも)

狂言……………東北院門前の者

(一)年の改まつた新春だな。花咲く都に上らう。花は都の美稱でもあり、また春の縁語。
(二)武藏の地名。現在外務省のある所。霞は春・立つの縁語。

(次第) 僧次第、八年立ちかへる春なれや、年たちかへる春なれや、花の都にのぼらん。詞「是は東國がたより出でたる僧にて候。われいまだ都を見ず候程に、この春思ひ立ちみやこにのぼり候。(道行) 上へ春立つや、霞^ニみの關をけさ

(三)武藏野は果てがないと聞いてゐるが、目を重ね踏み分けて行くうちにやはり果てはあつて、いつしか武藏野をあとにし、雲のかかる山また野を遠くのうしろに隔て来て。新古今に「武藏野や行けども秋の果ぞなきいかなる風の末に吹くらん」

(四)雲の縁語。

(五)とんでもない。

(六)晋の起居注に、晉武好_レ文則梅開、廢_レ學則梅不開、故梅云_三好文木_一。このこと十訓抄・謡曲老松にも見える。

(七)拾遺集・大鏡・十訓抄などに見える「勅なればいと畏し驚の宿はと問はばいかか答へむ」との歌にからまる故事より出た名。

(八)目を離さずに。見飽きないで。

(九)妙法華經の文字を折り込む。

(一〇)通りすがりの御縁。

(一一)前の「す」と連鎖。

(一二)つぎの年月と連鎖。

(一三)「経る」と「古き」の掛詞。

(一四)その梅の花の主を知つてみると古いわけて、大空も霞むばかりに降る雪が一面に降り積るやうに世間のすみずみまでも鳴り響いて

こえて、^三果はありけりむさし野を、分け暮らしつつ跡遠き、山又やまの雲をへて、みやこの空も近づくや、旅までのどけかるらん、旅までのどけかるらむ。(ワキ、東北院の梅を賞し、狂言よりこの梅は昔和泉式部が植ゑたので和泉式部と呼ばれる由を教へられる)

詞「さては此梅はいづみ式部の殖ゑたまふによつて、花の名をも和泉式部と申し候や。上へげにや昔の春をのこし、色香たへなる花ざかり、あらおもしろや候。

して「なうくあれなる旅人は何事を仰せ候ぞ。わき「さん候ははじめに都にのぼりたる者にて候が、是なる梅を人に尋ねて候へば、和泉式部と申し候ほどに、不審に思ひ眺めいりてやすらひ候。して「いやうつつなやむめの名は、好文木又は鶯宿梅などこそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとてもちひさせ給ふべからず。先此寺に上東門院の住ませ給ひしとき、いづみ式部はあの方丈の西のつまを休み所とさだめ、此梅を植ゑ置き軒ばの梅と名づけ、めがれせずながめけるとなり。下へまことたへなる花の縁に、御經をも讀誦したまはば、逆縁の御りやくともなるべし。「是こそ和泉式部の殖ゑ置き給ひし軒端の

ある和泉式部の花を愛する風流心、その風流心の名残がこの梅なのだらうか。古今「梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れば」「久方の」は「久し」の掛詞、天の枕詞。

△昔昔のこを聞くにつけても昔が思ひ出され、この思ひ出の多い春は昔の春と違ふのだらうか。いやすべて普通りなのだが、唯違ふのは自分一人が無風流なことだ。古今「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」

△無風流なのがあなた一人かどうかはさあ知らないが、昔のことを誰に問はうか。私は道の邊の芝に置く露のやうなはかないこの世にはゐないのだが、この梅の花に住む者だよ。白雪は「知らず」の掛詞、「降る」に普通の古事序の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露「この花は梅の異名」

軒端梅

梅にて候へ。わき「さては此梅はいづみ式部の殖を給ひし軒ばの梅かや。又あの方丈の西のつまは、いづみ式部の御休み所にて候ひけるか。して「中々なりや此ところ、後には寺と成りしかど、和泉式部の伏どとて、作りもかへず本のままに、方丈のうちにづくりこめて、今にたえせぬ名残なり。わき「勝勝聞けばいにしへの、なをのこし置く形見とて、して「花もあるじをしたふかと、年々色香もいやましに、わき「さもみやびたる其けしき、して「今もむかしを、わき「残すかと、同上（歌）「年月を、ふるき軒端のむめの花、く、あるじをすれば久かたの、あま、ぎる雪のなべて世に、聞えたる名残かや。いづみ式部の花ごころ。

（ロンギ）上へげにやいにしへを、きくに付けても思ひでの、春やむかしの春ならぬ、わが身ひとつぞ心なき。して「ひとりとも、いさしら雪のふる言を、たれに問はまし道芝の、露のよになけれども、この花に住むものを。同へそも此花にすむぞとは、とぶさに散るかはな鳥の、して「おなじ道にと歸るさの、同へさきだつ跡か、して「花の陰に、同下へやすらふと見えし儘に、我こそ、梅のあるじよと、ゆふぐれなるのはなの陰に、木隠れて見えざりき、こがくれ

ときの跡はこの花の木陰だらうかといひながら、花の木蔭に休んでゐるやうに見えたが。千載「花は根に鳥は古巢に歸るなり春のときまりを知る人ぞなき」新千載「根に歸り古巢を急ぐ花鳥の同じ道にや春も行くらむ」などの心を取つてゐる。

(二七)「言ふ」を掛け、夕映の意から、紅梅の意に續いて行く。

(二八)梅花も美しい御寺で、佛法の道を迷はずに辿つて西方極樂の方へ行く月の照らす夜通し。妙法華經の字を折り込んでゐる。

(二九)法華經のなかの譬喩品。

(三〇)藤原道長。上東門院彰子の父。

(三一)廣本沙石集卷五・月刈藻集に見える歌だが、前者では道長が道命、式部が保昌に變つてゐる。譬喩品に見える有名な火宅説話を讀み込んだ戯歌。火宅は愛世の譬。

(三二)植ゑて置いた花の功德で蓮花の臺に上り、讀んで置いた歌の功德で歌舞を司る菩薩となつて。

(三三)「澄む」に普通の「住む」と

「出づる」との連絡語。

(三四)譬喩品に、三界無レ安猶如三火宅一。

て見えず成りにけり。(中入。狂言、東北隨のこと、和泉式部の軒端の梅の由來などを語る)

わき(待詠)へ夜もすがら、軒端の梅のかけにゐて、く、花もたへなる法の道、まよはぬ月のよととも、彼御經をどくじゆする、此御經をどくじゆする。(一聲)後して下へあら有難の、御經やな、あら有がたの御經やな。上へただ今讀誦し給ふはひゆほんよなう。「思ひ出でたり此寺に、上東門院の住ませたまひし時、御堂の關白この門前を通り給ひしが、御車の内にて法華經のひゆほんをたからかにどくじゆし給ひしに、折節式部この御經の聲を聞いて、上へ門のほか、法の車の音きけば、我も火宅を、出でぬべきかなと、かやうに申したりし事、今の折から、思ひ出でられ、さふらふぞや。わきへ勝々此歌は、いづみしきぶの詠歌ぞと、「田舎までも聞き及びしなり。扱は詠歌の心のごとく、火宅をばはや出でたまへりや。して「中々なりや火宅は出でぬさりながら、殖を置く花の臺として、讀み置く歌舞のぼさつとなつて、わきへ猶この寺にすむ月の、してへ出づるは火宅、わきへ今ぞ、してへ既に、同(上歌)へ三界、無安のうちを去りて、みつの、車にのりの道、すはや火宅の門を今ぞ、和

- (二七) 火宅説話に見える羊鹿牛車。
 (二八) 「乗り」の意。
 (二九) 「出づ」を掛ける。
 (三〇) 成等正覺。悟りを開いたこと。
 (三一) 菩提心を發し佛法を説く。法身説法と解すると佛の説法の意。
 (三二) 古今眞名序。適爲(後世)被(知)者唯和歌之人而已。底本「こうせひ」
 (三三) 同序、動(天地)感(鬼神)云云。
 (三四) 言語の術であり。
 (三五) 冥感。目に見えない感應。
 (三六) 今を盛りの花の都では。
 (三七) 都と空との連絡語。
 (三八) 春の空までも長閑で、その長閑な心を種として歌を讀むから、都人の詠吟する歌は天道に叶ふのだ。底本「あいきん」
 (三九) 「拂ふ」と水上との連絡語。
 (四〇) 流れ行く末の知られない白河
 (四一) 三體詩所載の買島の詩、鳥宿(池)中樹、僧敲(月下)門。
 (四二) わざわざの參詣人も通りすがりの參詣人も日に日に増して。
 (四三) 古今集敏行の「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」を引く。

泉、式部がじやうとう、正覺をうるぞ有難き。

(クリ) 上へ夫和歌といつば發心説法の妙文たり。たま〜後世にしらるる物にただ、和歌の人なりと、貫之も是を、かきたるなり。してさしこゑへかるが故に天地を動かし鬼神をかんぜしむることわざ、同へ神明佛陀のみやうかんにいたり、殊にときある花の都、雲々の春の空までも、のどけき心を種として、天道に叶ふ、詠吟たり。(クセ) 下へ所はこのへの、東北の靈地にて、王城の、鬼門をまもりつつ、惡魔をはらふ雲水の、みなかみは、山陰のかも河や、すゑしら河の浪かぜも、いさぎよきひびきは、常樂の縁をなすとかや。庭には、池水をたたへつつ、鳥は宿すちちうのき、僧はたたく月下の門、出でいる、人跡かず〜の、袖をつらねもすそをそめて、色めく有様は、げに〜花の都なり。して上へ見佛、開法のかず〜、同へ順逆の縁はいやましに、日夜、朝暮におこたらず、丸夏三伏の夏たけて、秋きにけりと驚かす。湖庭の松のかぜ、一聲の秋をもよほして、上求、菩提のきをみせ、池水にうつる月かげは、下化衆生のさうをえたり。とうぼくいんやうの、時節もげにと知られたり。
 下へ春のよの、(序)舞。して(ワカ)上へ春の夜の、やみはあやなし、梅の花、

(四) 湖底の誤り。谷底の意。

(四) 朗詠、源英明の詩、池冷水無三

三伏夏「松高風有二一聲秋」

(四) 東は陽、北は陰ゆゑ東北院はその名のやうに陰陽和合の時節に

ふさはしいところと知られるのだ。陰は院の掛詞。

(四) 古今集凡河内躬恒の歌。

(四) 眞暗で何の趣きもないものだ

が。

(四) 新古今「梅の花誰が袖ふれし

匂ぞと春や昔の月に間はばや」

(五) 花のやうに美しい衣の意。梅

の縁語。

(五) 舞樂の曲名。舞人の縁語。鶯

は梅の縁語。

(五) 「増し」を掛ける。

(五) 前述の「花は根に鳥は古巢に

歸るなり云々」の歌により「歸る」

の序詞に用ゐてある。

(五) 「出づ」を掛ける。

同へいろこそ見えね、香やはかくるる、かやはかくるる、香やはかくるる。

(ロンギ) 上へ勝や色よりも、く、かこそ哀におもほゆれ。たが袖ふれし梅

の花。してへ袖ふれて舞人の、返すは花ごるも、春鶯囀と云ふ樂は、是春のう

ぐひす。同へ鶯宿梅はいかにや。して下へ是鶯のやどりなり。同へ好文木はさ

ていかに。してへ是文をこのむ木なるべし。同へ唐のみかどの御時は、國に、

文學さかんなれば、花の色もますく、匂ひ常よりみちく、梅風四方に薫す

なり。是迄なりや花はねに、鳥は古巢にかへるとて、方丈のともし火を、火宅

とや猶人はみん。爰こそ花の臺に、いづみ式部がふしどよとて、方丈の室にい

ると見えし、夢は覺めにけり、みえつる夢は覺めにけり。

(一)活本・田本「井筒」

井み幹づ (井筒)

前シテ……………女(有常の娘の化身)

後シテ……………紀有常の娘の靈

ワキ……………旅僧

狂言……………櫛本(いちのもと)の者

- (二)田本ここに「是よりも初世に參らばやと思ひ候」の一句入る。
- (三)活本「人にとへば」
- (四)伊勢物語の歌。下句「夜半にや君が獨り越ゆらむ」風吹けば沖つ白波までは立つにかかる序詞。
- (五)底本「多しし」活本・田本による。
- (六)「常なき」の序詞でもある。
- (七)夫婦兩方とも。
- (八)佛に供へる水。曉と頭韻。
- (九)田本「すますらん」
- (一〇)風の吹くと夜の更くとの掛詞
- (一一)西に傾いた月が傾いてゐる軒

僧詞「是は一所不住の僧にて候。我このほどは南都に候ひて、靈佛靈社拜みめぐりて候。又あれなる寺を人に尋ね候へば、在原寺とかや申し候。立ちより一見せばやとおもひ候。さしこゑへ扱は此在原寺は、いにしへ業平紀の有常の息女、「ふうふ住みたまひける石の上なるべし。下へ風ふけばおきつしら浪たつた山と詠じけんも、此所にての事なるべし。かかるへ昔がたりのあととへば、其業平の友とせし、紀の有常の常なきよ、妹背をかけて弔はん、いもせを懸けてとふらはむ。

端に生えた草を照し。

(一〇)忘草に通じ、軒端の草の縁語。

(一一)忍草に通じ、軒端の草と忘れ草に普通の「忘れ」との縁語。

(一二)田本「なくて」

(一三)筋と「引き」の縁語。

(一四)その御誓願を實證するかのやうに、有明の月の行方は極樂の方角の西の山だが、四方の眺めは秋で、秋空には松風の音だけが聞こえるけれども、その松風はどことあてどもなく吹いてをり、さうした定めのないこの世の夢心地は何の音によつて覺めることが出来よう。

(一五)活本「庭の」なし。

(一六)板で圍をした井戸。田本「板井を汲あげあか水とし、あれなる塚に……」

(一七)寺を建てた願主。

(一八)田本「其跡のしるしも、是なる塚のかげやらん」

(一九)手向の花をさす水。田本「あ

か水」

(二〇)田本「其時だにも業平は」

(二一)「行き」を換けてあるやうだ。

(二二)田本ここ「して」とあり、以下「昔男の」まで「して」と「わ

(次第) して次第へあかつき毎のあかの水、曉ごとのあかの水、月もころや

清むらん。さしこゑへさなきだにものさびしき秋の夜に、人目稀なる古寺の、

庭のまつかぜ更け過ぎて、月もかたふく軒端の草、忘れて過ぎしいにしへを、

しのぶがほにていつまでか、待つことありてながらへん。げに何事もおもひで

の、人にはのこる、世の中かな。下(歌)へただいごとなく一筋に、憑む佛のみ

ての糸、みち引きたまへ法の聲。上(歌)へまよひをも、照らさせ給ふ御ちか

ひ、く、げにもと見えて有明の、行方はにしの山なれど、ながめは四方の秋

の空、松の、聲のみ聞ゆれども、あらしはいづくとも、定なき世の夢ごころ、

何の音にか覺めてまし、何の音にか覺めてまし。

わき「我この寺に旅ひして、心を澄ます折ふしに、女性一人來りたまひ、是

なる庭の板井をむすび、花をきよめ香をたき、あれなる塚にゑかうをなし給ふ

こと不審にこそ候へ。して「此寺の本願ありはらの中將なりひらは、世に名を

とめし人也。されば其なきあとも是なる草の陰やらん。わらはも委しくはしら

ずさふらへども、花水を手向け御跡を弔ひ候。わき「勝々ありはらのなりひら

は、世に名をとめし人也去ながら、今はあまりに遠き世の、昔がたりの跡なる

き」が底本と入れ變つてゐる。

(三六)「成り」の掛詞。

(三七)男女人間の艶話の意をも含む。

(三八)「有り」を掛けた。

(三九)老松に圍まれ雑草の生えた塚。活本「生たる」現行五流のうち

觀世・寶生・金剛は「老いたる」

(四〇)薄の穂の出てる意に、事の子細を願はしてゐる意を掛けた。

(四一)この穂の出た薄は何時生えたのであらう。

(四二)深梁。深く置く形容。

(四三)「降る」を掛けてゐるやうだ。

(四四)田本「して」なし。

(四五)居の掛詞、布留に音通の「ふりにし」の序詞。

(四六)田本「同」なし。

(四七)古びた里ではあつたが、古今「日の光藪しわかねばいそのかみ

ふりにし里に花も咲きけり」

(四八)底本「して下」脱。活本・田本で補ふ。

(四九)「なし」の掛詞、「寄る」に音通の夜の序詞。

(五〇)夜道を行く夫の行先を心配する心が通じて夫の心が解け。行方は「行く」の掛詞。觀世流「遂げ

て」

を、かやうに弔ひ給ふ事、其在原の業平に、へいかさま故ある御身やらむ。

して「故ある身かと承はるは、何とて仰せ有るやらん。彼業平は其時だにも、

昔男といはれし身の、今は殊更遠き世に、故もゆかりも有るべからず。わき

へもつとも仰せはさる事なれども、爰はむかしの舊跡にて、主こそ遠くなりひ

らの、してへ跡はのこりてさすがにいまだ、わきへ聞えは朽ちぬ世がたりを、

してへ語れば今も、わきへむかし男の、同上(歌)へ名ばかりは、在原寺の跡ふ

りて、く、松もおひたる塚の草、これこそそれよなき跡の、一むら、ずすき

の穂に出づるは、いつの名残なるらむ。草、ばうくとして、露しんしんとふ

るつかの、まことなるかないにしへの、跡なつかしき氣色かな、跡なつかしき

けしきかな。

して(クリ)上へ昔ありはらの中將、年經てここにいそのかみ、同へふりにし

さとも花の春、月の秋とて、住み給ひしに、してさしこそゑへ其ころはきのあり

つねが娘と契り、いもせの心あさからざりしに、同へ又河内の國たかやすの里

に、しる人ありて二道に、忍びてかよひ給ひしに、して下へ風ふけばおきつし

ら浪たつた山、同へ夜はにや君が獨ゆくらんと、覺東なみのよるのみち、行方

(四三) 人情の機微をつかまへてゐる歌が、夫を思ふ妻の心を述べたのも道理だ。「うたかた」は歌の掛詞、泡に普通の「哀れ」の序詞。

(四二) 井戸側。

(四一) 垂れ髪姿の童兒。

(四〇) 共に親しく語り合ひ。友達は共の掛詞。

(三九) 水に映して見交し。水鏡は見の掛詞、影・水・底ひ・移るなどの縁語。

(三八) 心から陸まじくもしてゐるうちに。「そこひ」「うつる」は水の縁語。

(三七) 美しい言葉の手紙に戀しい心を籠めて。葉・露・玉・心・花・色など皆一聯の縁語。

(三六) 伊勢物語に見える男の贈歌。

(三五) 底田本「いつ」活本による。

(三四) 丈比べをした私の脊丈も。

(三三) 底活本「老に」田本による。

(三二) 伊勢物語に見える女の返歌。

(三一) 人妻としての結髪をする意。

(三〇) 「ろんぎ」活本で補ふ。

(二九) 着に普通の紀の序詞でもあらう。

(二八) 「知らず」の掛詞、夜半の序詞。

(二七) 「もみぢばの」まで黄に普通

を思ふところとけて、よその契りはかれ／＼なり。して下へげに情しるうたかたの、同へ哀をのべしも、理なり。(クセ) 下へ昔此國に、住む人のありけるが、宿をならべて門の前、井づつによりてうなひ子の、友だちかたらひて、たがひに影を水かがみ、おもてを雙べ袖をかけ、心のみづもそこひなく、うつる月日もかさなりて、おとなしく恥ぢがはしく、互に今は成りにけり。其後、彼まめ男、こと葉の露の玉づさの、こころの花も色そひて、して上へつつ井づつ、井幹にかけしまるがたけ、同へおひにけらしな、いも、みざるまにと、讀みて送りける程に、其時、女もくらべこし、ふり分がみもかた過ぎぬ、君ならずして、誰かあぐべきと、たがひに讀みし故なれや、つつ井づつの女とも、聞えしは有常が、娘のふるき名なるべし。

ろんぎ 上へげにやふりにし物語、きけば妙なる有様の、あやしや名乗りおはしませ。してへまことは我は戀ごるも、紀の有常がむすめとも、いさ、しら浪のたつた山、夜はに紛れて來りたり。同へふしぎや扱はたつた山、色にぞ出づるもみぢばの、してへきの有つねが娘とも、同へ又ははるづつの女とも、してへ恥かしながら我なりと、同下へいふや、しめなはの永き世を、契りし年はつ

の結の序詞。龍田山は紅葉の名所。「色に出づる」は紅葉の縁語だが、それと顯れるの意を含む。

(六〇)「結ふ」に通じ、「永き」の序詞である注連繩の縁語。

(六一)夫婦仲。底本・田本「代」活本による。

(六二)十九歳の意の「つつ」の掛詞。

(六三)「わき」活本・田本で補ふ。

(六四)昔を引き戻す夢を見添へようと、衣を裏返して、苔の筵に旅寢をしたのであつた。古今の「いとせめて戀しき時は鳥羽玉の夜の衣を返してぞ寢る」の心を取つた。

(六五)伊勢物語に見える歌。櫻は直に散る移り氣な花と評判されてゐるが、滅多に來ない人をも年に一度は待つてゐるのだ。

(六六)伊勢物語の「梓弓眞弓槻弓年を経て云云」の歌によつた。月に普通の槻弓より年に續けた。

(六七)「成る」の掛詞。

(六八)底本「なをし」活本による。

(六九)他人の舞を眞似て舞ふこと。

(七〇)美しい袖を齧つて舞ふ。

(七一)昔のことを思ひ出してゐると

井 幹

つ井づつ、わづつの陰にかくれけり、井づつのかげにかくれけり。(中入。狂言、業平と有常の娘との戀物語、業平河内通ひのことなど語る)

わき(待詠)へ更けゆくや、有はら寺のよるの月、く、むかしをかへす衣手に、夢まちそへて旅まくら、苔のむしろに伏しにけり、苔のむしろに臥しにけり。(一聲)後してへあだなりと名にこそたてれ櫻花、としにまれなる人も待ちけり。かやうに讀みしも我なれば、人まつ女ともいはれしなり。われつつ井づつのむかしより、まゆみつき弓年をへて、今はなき世に業平の、かたみの直衣身にふれて、上へなつかしや、むかし男に移りまひ、同へ雪をめぐらす、花の袖。(序之)舞。して(ワカ)上へ爰にきて、むかしをかへす、在原の、同へ寺井にすめる、月ぞさやけき、月ぞさやけき。

して下へ月やあらぬ、春やむかしと詠めしも、いつのころぞ。へつつ井づつ、同下へつつわづつ、井筒にかけし、して下へまるがたけ、同へ生ひにけりしな。して下へ老いにけるぞや。同へさながら見みえし、昔男の、冠直衣は、女ともみえず、男なりけり。業平のおもかげ、して下へ見ればなつかしや。同へ我ながらなつかしや。亡婦、魄靈の姿は、しばめる花の、色なうて匂ひ、の

こりて在原の、寺のかねも、ほのくくと、明くればふる寺の、松かぜや芭蕉葉

の、夢も、やぶれて覺めにけり、夢もやぶれ覺めにけり。

- にして」とある業平の歌を指す。
(七〇)田本「比ぞや」活本「心ぞ」
(七一)車屋諸本みな「老にけらしな」
(七二)「男なりけり」にかかる副詞。
(七三)契りを交したときそのままの
(七四)死んだ女の幽霊。底本・田本
「はうふうはくれひ」。活本による
(七五)古今序「凋める花の色無うし
て匂残れるが如し」
(七六)車屋諸本「なふて」
(七七)「破れ」の序詞。底本「はせ
を葉」活本・田本による。

野宮のみや

(一) さぞよい氣色と思はれるので
(二) 伊勢の齋宮に立たれる方が潔
齋のために籠られたところ。

(三) 皮を取らない丸木の鳥居。

(四) 鳥居の兩側にある柴の袖垣。

(五) 伊勢の佛法も何ら妨げられ

ないのので神佛の隔てをなさ

ず、僧の身の私がこの宮所に尋ね

て見ても心も澄み渡る夕ではあ

る。伊勢の神は野の宮の縁で出し

た。神垣と隔て道と直ぐ」とは

各各縁語。宮所は見の掛詞。

(六) 春以來花を見なれてきたこの

野の宮も秋以後はどんなに味氣な

いことだらう。秋に「飽き」を寓

し、源氏に捨てられた六條御息所

の身の上を暗示。野は花の縁語。

(七) なほ一層袖は涙の露に萎れ。

底本活本ともに「しほれ」とある。

(八) 悲しさに身の碎けるやうな夕

暮。身・碎くはともに露の縁語。

底本「くだくなり」活本で訂正。

(九) 心が滅入つて行く様子は自然

千草の花が萎れて行くのに象徴さ

れそして身の衰は習慣となるの

だ。色は「花」「衰ふ」などの縁語。

(一〇) 身に沁みて覺えてゐる昔の面

影は消えて無く、昔を思ひ出して

前シテ……………女(六條御息所の化身)

後シテ……………六條御息所の靈

ワキ……………旅僧

狂言……………野の宮邊の者

僧詞「是は一所不住の僧にて候。我このほどは都に候ひて、洛陽の寺社殘な
く拜み廻りて候。又秋も末つかたに成り候へば、嵯峨野のかたゆかしく候程
に、只今にし山へと心ざし候。是なる森を人にとへば、野の宮の舊跡とかや申
し候程に、立ちより一見せばやと思ひ候。さしこゑへ我この舊跡にきてみれ
ば、黒木のとりわこしば垣、「昔にかはらぬ有様也。下へかかる時節に参りあ
ひて、拜み申すぞ有がたき。かかるへ伊勢の神がき隔てなく、法のをしへの道
すぐに、爰に尋ねてみやどころ、心もすめる夕かな、こころもすめるゆふべか

も、昔を忍ぶよすがは何もない。歸つて來ても何の甲斐もないこの假の世に戻つて來てまた中有に歸るのは本當に恨めしいことだ。色と「消え」、「歸り」と「古へ」、衣と着に普通の來および裏に普通の恨、鴈に普通の假と「行き歸る」とは各各縁語。忍ぶの草衣はいはゆる忍指だが「忍ぶ」と來の連絡語。「しも」(霜)は「ゆき」(雪)と縁語。

(一)どこの誰とも分らない方。

(二)差支へのない者で。

(三)古くさくなつてしまつた舊跡なの。

(四)忌垣。神社の垣。

(五)源氏物語、櫛の巻の御息所の歌。この忌垣には三輪のやうな目印の杉もないのに、どう間違へて折りなざつた櫛なのですか。

(六)和歌の意。葉は櫛の縁語。活本「言はは哉」

(七)源氏物語櫛の巻に「櫛を聊か折りて持給へりけるを差入れて、變らぬ色をしるるべにてこそ忌垣をも越え侍りにけれ云々」

(八)昔に變らぬ色とお答へになるとは、あなたは中々の源氏物語通で敬服しました。櫛だけが常縁の

な。

(次第) して次第へ花になれこし野の宮の、花に馴れこしの宮の、秋より後はいかならん。さしこゑへ折しもあれ物のさびしき秋暮れて、猶しをれゆく袖の露、身をくだくなる夕まぐれ、こころの色はおのづから、干草の花にあらはれて、衰ふる身の、習ひかな。下(歌)へ人こそしらね年々に、むかしの跡に立ちかへり。上(歌)へ野の宮の、森のこがらし秋更けて、く、身にしむ色の消えかへり、おもへばいにしへを、何と忍ぶの草ごるも、きてしもあらぬ假の世に、行き歸るこそ恨みなれ、ゆきかへるこそ恨なれ。

わきへ我此森の陰にゐて、「いにしへを思ひ心をすます折節に、いとなまめける女性一人忽然として來り給ふは、いかなる人にてましますぞ。して「いかなる者ぞと問はせ給ふ。そなたをこそ問ひ參らすべけれ。是はいにしへ齋宮にたたせ給ふ人、かりに移ります野の宮也。其後は此事たえぬれども、昔を思ふとしどしに、下へ人こそしらね宮所を清め、御神事をなしさふらふ所に、行方もしらぬ御ことなるが、來り給ふは、ははみちあり。とくく歸り給へとよ。わきへいやく是はくるしからぬ、身の行末もさだめなき、「世を捨人の數なるべ

陰を造つてゐる森の下道には晩秋の氣はひが濃く。榊は賢(さか)しの掛詞。

(一)紅葉は色付く傍から散り、淺茅が原も草葉が枯れ、かうして荒れて行く野の宮の昔懐しい舊跡、その舊跡である此處に、あの九月の七日の日も今日廻つて來、又私もやつて來たのです。野の宮は野に通じ淺茅が原・荒るるの縁語。

(二)「刈り」に通じるの縁語。

(三)今も火を燃してゐるらしい幽かに見える火燒屋(衛士が庭火を焚く休憩所)の邊の幽かな光は、私の胸のなかの戀心が形となつて外に顯れたものだらうか。火燒屋は「火焚くや」の掛詞。「幽かなる」は火燒屋と光にかかる。

(四)孟子 思有於中一必形於外。より出た諺。能野にも見える。思ひは火に通じ光の縁語。

(五)前坊。前の東宮。

(六)色香の盛りの花のやうに時めいて夫婦の愛情が睡まじかつたが(七)會者定離は本より浮世の習、この世は夢の世だと悟らなければならぬとばかりに。「驚く」は夢の縁語。

野 宮

し。扱々爰(えい)はふりにし跡をけふごとに昔を思ひ給ふ、へ謂(いは)はいかなる事やらん。して「光源氏この所に詣うで給ひしは、長月七日の日けふに當れり。其とき聊(いさ)持ちたまひける榊の枝を、いがきの内にさし置き給へばみやす所とりあへず、下(くだ)へ神(かみ)がきはしるしの杉もなき物を、いかにまがへて折れるさかきぞと、「讀み給ひしもけふぞかし。わきへ勝(か)おもしろき言(ことば)の葉の、今持ちたまふさかきの枝も、むかしにかはらぬ色よなう。してへ昔(いにしへ)にかはらぬ色ぞとは、榊のみこそときはの陰の、わきへ森の下道秋かれて、してへ紅葉(もみぢ)かつちり、わきへあさぢが原も、同上(おなご)歌へうら枯(かれ)の、草ばにあるののみやの、く、跡なつかしき爰(えい)にしも、其、長月の七日のひも、けふに廻りきにけり。物、はかなしや小柴垣、いとかり初(はつ)の御住(みま)む、今も火たきやの幽(かすま)なる、光は、わが思(おも)ひ内にある、色や外(ほか)に見えつらん。あらさびし宮所、あらさびし此宮どころ。

(クリ)上(かみ)へ抑(おさ)みやす所と申すは、桐壺のみかどの御弟(みせい)、せんばうと申したてまつりしに、時(とき)めく花の色香まで、妹背の心あさからざりに、してさしこゑへ會者定離(あひまじり)のならひ本よりも、同(おなご)へ驚(おど)くべしや夢の世と、程なく遅れ給ひけり。して下(くだ)へさしてしもあらぬ身の露の、同(おなご)へ光源氏のわりなくも、忍びく

(二六)このままではゐられないと涙に昏れてゐた身に。露は光の序詞だが、涙の意をも含んでゐる。

(二七)源氏が御息所を。

(二八)以下數句源氏物語卷の本文を巧みに使つてゐる。

(二九)葉と色との連絡語。

(三〇)娘の齋宮の桂川での戯で白幣を附けた櫛を川に流したが、私自身はその川に漂ふ浮草のやうな寄る邊ない身で、その頼りやうもない心に誘はれ齋宮とともに伊勢に行くとき、行く手に希望も見えて涙も乾き、鈴鹿川の川浪にも濡れず、子を慕つて伊勢まで母が連れ添つて行くことも前例のないことだが、竹のやうに親子仲好く多氣の都(齋宮の居住地)に行つたその心情は恨めしいことだつた。古今小町の歌「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」源氏物語卷の御息所の歌「鈴鹿川八十瀬の浪に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ」を引く。鈴鹿川は「涼し」の、「言の葉は、添ひ」は子と母との、多氣は竹のおのおの掛詞。「濡れず」には涙に濡れない意もある。

に行きかよふ、して下へ心のすゑのなどやらん。同へ又絶々の、中なりしに、(クセ)下へつらきものには、さすがに思ひ果て給はず。遙けき野の宮に、分けいりたまふ御心、いと物哀なりけりや。秋の、花みな、衰へて、蟲の聲もかれくゝに、松ふくかぜのひびきまでも、さびしき道すがら、秋のかなしひもはてなし。かくて君ここに、詣うでさせ給ひつつ、情をかけて様々の、こと葉の露も色色の、御こころの内ぞあはれなる。して上へ其後、桂の御はらひ、同へしらずも掛けて川なみの、身は、浮草のよるべなき、こころの水にさそはれて、行方も鈴鹿河、やそせの浪にぬれくゞず、いせまでたれか思はんの、ことのははそひゆく事も、ためしなき物を親と子の、たけの、都路におもむきし、こころこそ恨みなりけれ。

ろんぎ上へ勝やいはれを聞くからに、只人ならぬ御けしき、其名を名乗り給へや。してへなのりても、かひなき身とて恥かしの、もりてやよ所にしられまし。よしさらば其名も、なき身ぞと問はせ給へや。同へなき身と聞けばふしぎやな。扱はこの世をはかなくも、してへ去りて久しき跡の名の、同へ御息所は、してへ我なりと、同下へ夕暮の秋のかぜ、森の、このまのゆふづくよ、影

- (三)「ろんぎ」活本で補ふ。
 (三)山城の歌枕羽束師の森に、「恥かし」「洩り」を言ひ掛けた。
 (三)「無き」と「亡き」の掛詞。
 (三)「弔はせ」の意の方が強い。
 (三)名だけは跡に残つてゐる。
 (三)「言ふ」の掛詞。
 (三)僧衣の意。木陰・草の縁語。
 (三)僧衣と同じ枯色の草を筵に。
 (三)昔の事を思ひ出して。「述べて」は「展へて」に通じ筵の縁語。
 (三)野の宮の秋の千草の花を飾つた車に乗つて、私も昔の月日と同様に普通りにやつて來ましたよ。輪に普通の我と「廻り」とは車の縁語。
 (三)光と音との兩方にかかる。
 (三)下簾をゆかしく垂らした網代車。簾は「かけ」の縁語。
 (三)「知らず」の掛詞。「所狭き」の序詞。
 (三)「わき」底本脱、活本で補ふ。
 (三)奥の掛詞、遣(や)るの序詞。
 (三)底本「なかへ」活本による。
 (三)従者の乗るお供の車。底本「人たまひ」活本による。
 (三)物見に出た甲斐もないやうな目に逢ひ、無力なわが身のほど

野 宮

かすかなる木のしたの、黒木の、鳥の二ばしらに、立ちかくれて失せにけり、跡たち隠れ失せにけり。(中入。狂言、光源氏が野宮に六條の御息所を訪れたことを語る)

わき(待詔)へ片敷くや、杜のこかげの苔ごろも、く、おなじ色なる草筵、思ひをのべて夜もすがら、彼御跡をとふとかや、かの御あとをとふとかや。(一驚)後して下へ野の宮の、秋の千種の花車、われもむかしに廻りにけり。

わきへふしぎやな月のひかりもかすかなる、車の音の近づく方を、みればあじろの下すだれ、「思ひ懸げざる有様なり。今はうたがふ所もなく、御休所にてましますか。へさもあれいかなる車やらん。して「いかなる車と問はせ給へば、思ひぞ出づる其いにしへ、へかもまつりのくるまあらそひ主はそれぞとしら露の、わきへ所せきまで立てならぶる、して物見車のさまへに殊ときめくあふひの上の、わきへ御車とて人をはらひ、立ち騒ぎたる其中に、してへ身はを車のやる方もなしと答へて立て置きたる、わきへ車の前後に、してへばつとよりて、同(上歌)へ人々轅に取付きつつ、人だまひの奥に押しやられて、物みぐるまのちからもなき、身の程ぞ思ひしられたる。よしや、おもへば何事

が。物見車は紙(ち)に普通の力の序詞。

(四)前世で犯した罪の報い。

(五)「憂し」の掛詞、「廻り」の序詞。

(五)袖の美稱、月の縁語。

(五)月光が淋しく洩れて森の下露に映つてゐる。森は「洩り」の掛詞、「陰」の縁語。

(五)露のやうにはかないわが身の置きどころであるこの野宮も物あはれで。「置き」は露の縁語。

(五)庭の有様も他のところとは違つた氣色で、ほんの假初の風情の小柴垣の露を拂つて訪問された私もまたその訪問した人源氏も。

(五)「待つ」を掛ける。

(五)「舞」活本で補ふ。

(五)ここは厚いこなながら元來伊勢大神宮のなかだが、その鳥居の外へ出入する姿は生死の道に迷ふかのやうに見えるので、神は納受なさるまいかといつて。「神風や」は伊勢の枕詞。内外は伊勢の縁語。

(五)生死の迷界の意。車の縁語。

(五)活本「く」のところ「火宅の門を」

も、酬^{五九}の罪によももれじ。身は猶^{五〇}うしのを車の、廻^{六一}りめぐりきていつまでぞ、妄執をたすけ給へや、妄執をたすけ給へや。

して下へ昔にかへる、花の袖、同へ月にとかへす、けしきかな。(序之)舞。

して(ワカ)上へ野の宮の、月もむかしや、思ふらん。同へ陰^{五三}さびしくも、杜^{五四}の下露、もりのした露。して下へ身^{五五}の置き所も、哀むかしの、同へ庭^{五六}のたたずま

ひ、して下へよそにぞかはる、同へけしきもかりなる、して下へこしば垣。同

へ露うち拂ひ、問はれし我も、其人も、唯夢の世と、ふりゆく跡なるに、たれ

ま^{五五}つ蟲のねは、鈴々^{五九}として、風茫々たる、ののみやの夜すがら、哀なり。(破

之)舞^{五六}

上へ爰^{五七}はもとより、かたじけなくも、神かぜや、伊勢の、内外^{五八}の鳥居に、出

でいる姿も、生死^{五九}のみちを、神は受けずや、思ふらんと、又車に、うちのり

て、火宅^{六〇}の門をや、出でぬらむ、^{五九}火宅の^{六一}

の門を

采女うねめ

前シテ……………女(采女の化身)

後シテ……………采女の靈

ワキ……………都の僧

ワキツレ……………從僧(二人、なしにも)

狂言……………春日の里人

(一)まだ夜が明けない曉の薄明りとともに私も都を立ち、幾重にも深く立ち籠める朝霞の彼方に下弦の月が残るなかを、深草山の末續きの木幡の關を今越えて、京都と奈良との中宿である宇治に出で井手の里を過ぎると、ここはもう奈良坂で、春日の里に着いたのであった。影は月の縁語。「下り月」は「下り」の、深草山は「深し」の、井手は「出で」の掛詞。

僧詞「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ南都を見ず候程に、只今おもひたち南都一見と心ざし候。さしこゑへ比は彌生のすゑつかた、花のみやこを旅だちて、まだ夜をこめてしののめの、(道行)上へ影ともに、我も都をくだり月、くゝのころあしたのやへ霞、深草山の末つづく、木幡の關をいまこえて、うちの中宿井手の里、過ぐれば是ぞならざかや、春日のさとに着きにけり、春日のさとに付きにけり。

(二) 悉くも春日野に垂跡なされた春日明神のみます興福寺にさあ参詣しよう。春日野の寺は興福寺。

(三) 朗詠張文成の詩に、更闌夜靜。

「更闌け」は夜が更ける意。

(四) 春日には四柱の神を祭る。

(五) 夜に楯つくやうな明かるい燈火も世捨人の悟りを象徴する光かと思はれ、その光とともに觀賞する深夜の月は朧に杉の木の間から洩れてくるので、神の御心にも何物にも勝る景色とお思ひになるだらう。底本・田本とも「かうく」

「よを背けたる」の「よ」は夜と世との掛詞。朗詠、宵、獨共隣深夜月。新古今「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜に若くものぞなき」

(六) 藤の咲いてゐる藤原氏の氏神春日神社の夜明けもまた春景色ではある。藤の門は藤原氏一門の意だがここはその氏神を意味し藤を掛けてゐる。「あくる」は門の縁語。

(七) 端山。麓の山。深くない山。

(八) 神の庇護を仰がうと。

(九) 春日明神の菩薩名。大慈悲心で萬行を修める恵みを日に喻へ

(次第) して次第へ宮路ただしき春日野の、みやちただしきかすが野の、寺にもいざや参らむ。さしこゑへ更闌け夜しづかにして、四所明神の竇前に、歌々たるともし火も、よを背けたる影かとして、共に憐む深夜の月、おぼろくと杉の木のみをもりくれば、神の御心にもしく物なくや、おぼすらん。下(歌)へ月にある、花のかげゆく宮めぐり、上(歌)へはこぶ歩みの數よりも、く、積る櫻の雪のには、又色そへてむらさきの、はなをたれたる藤の門、あくるも春のけしきかな、あくるも春のけしきかな。

わき「いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候。是ほど茂りたる杜林に、しかも女性の御身として、か様に重ねて木を植ゑたまふ事不審にこそ候へ。して「木を植ゑて神の御心に叶ふ謂を語り参らせ候はん。抑當社と申すは、神護景雲二年に河内の國平岡より、此本宮の嶺にうつらせ給ふ。さればこの山もとは山の陰あさくて、木陰ひとつもなかりしを、かげ憑まんと藤原や、氏人よりに殖ゑし木の、元より恵み深ければ、程なくかやうに深山となる。へされば慈悲萬行の日の影は、三笠の山にのどかに、五重唯識の月のひかりは、春日の里に限もなし。同下(歌)へかげ憑みおはしませ。ただかり初に植うるとも、神

た。

- (一) 萬法唯識の妙理を知るための
五段階の觀法を月に喩へた。法相
宗の本山興福寺は唯識の道場。
(二) 神の御惠みと木の陰との兩意
を持つ。「かげ」は日・月・木な
どの縁語。
(三) 土の枕詞だが國土の意。
(四) 久しの掛詞、「あめ」の枕詞。
(五) 番外謡曲鹿島に鹿島明神の神
木を「これはあめははきぎと申し
候。この御神あめより下り給ひし
時、かざし給ひし木なれば、あめ
ははきぎと申し候」と説いてゐる
から、春日四所明神の一つである
武雷命の舊住地たる鹿島の神木を
指したと考へられる。謡曲拾葉抄
や關秘錄卷六の所説は從ひ難い。
(六) 濟度しようとして。
(七) 靈鷲山。釋迦が佛法を説いた
靈山。
(八) 釋迦が成道なさつた菩提樹の
木蔭を顯すやうにも、眞盛りの藤
が松にからまつて咲いて、松にも
花を貸してゐるやうな風情の春日
山。春日山は「貸す」の掛詞。
(九) 田本「しかれば」なし。
(一〇) 天の帝。天皇の尊稱。

采女

木とおぼしめし、あだにな思ひ給ひそ。上(歌)へあらかねの其はじめ、く、
治まる國は久かたの、あめははこぎのみどりより、花開け香のこりて、佛法流
布の種久し。むかしは靈鷲山にして、妙法華經を説き給ふ。今は衆生をどせん
とて、大明神とあらはれ、此山に住み給へば、わしの高ねとも、三笠の山を御
覽ぜよ。さて菩提樹のこかげとも、盛なる藤咲きて、松にも花を春日山、のど
けき影は靈山の、淨土の春に劣らめや、淨土の春に劣らめや。

わき「木を植ゑて神の御心にかなふ謂は承り候ひぬ。さらば御いとま申し候。
して「始めたる御事にて候はば猿澤の池をみせ參らせ候はん。わき「承り及び
たる名池にて候。さらば御供申し候べし。して「なうく是こそ猿澤の池にて
候へ。此池のほとりにて御經をよみ佛事をなして給はり候へ。わき「御經を讀
み佛事をなすべき事は安きほどの御ことなり。扱誰と名をさして廻向申し候べ
き。して「是はいにしへ采女の身を投げ空しく成りし池也。采女とは君につか
へ申す上わらはなり。しかれば雨のみかどの御歌にも、下へわきも子がねくた
れがみを猿澤の、「池の玉もとみるぞかなしきと、詠ぜし歌の心をばしろしめ
され候はぬか。わき「承り及びたる様には候へども、委しくはしらず候。御物

(二〇)拾遺集大和物語などに見える人丸の歌。底本・田本とも「脇母子」

(二一)底本・田本とも「しかひ」

(二二)川蟬の羽毛のやうな美しい髪。底本・田本とも「ひすひ」

(二三)美しくなよやかな鬢髪。

(二四)三日月のやうな美しい眉。桂は月中の樹だがこは月の意。

(二五)紅花のやうな美しい唇。

(二六)浅はかさ。

(二七)猿が井戸に映る月を取らうとして溺死したといふ僧祇律に見える説話によつた。無謀な望を戒める喩へ。

(二八)猿の掛詞、池に普通の「生ける」の序詞。

(二九)「寄る」と夜との掛詞。

(三〇)假に現れた幻のやうな采女を真心をもつていろいろに弔はう。「采女の衣の」は「色色に」の序詞でもある。

(三一)水のやうに清澄な菩提心。つぎの、騒がし・浮む・池は水の縁語。

語り候へ。して「雨のみかどの御時、ひとり采女有りしが、はじめは叡慮にかなひ御恵みあさからず。程なく思食捨てけるを、及ばずながら恨み参らせ、此池に身をなげ空しく成りし也。わきへ勝々我も聞き及びしは、御門哀とおほしめし、此猿澤に御幸なりて、してへ采女が死骸を叡覽あれば、わきへさしもさばかりうつくしかりし、してへ翡翠のかんざし婢娟の鬢、わきへ桂のまゆずみ、してへ丹花のくちびる、わきへにうわの姿引きかへて、二人へ池のもくづに亂れうくを、君も哀とおぼし召して、同上(歌)へわきも子が、ねくれたれがみを猿澤の、く、池の玉もと、みるぞかなしきと、叡慮に懸けし御情、かたじけなやなしもとして、君を、うらみしはかなさは、譬へば及びなき、水の月とる猿澤の、いける身とおぼすなよ。我は采女の幽霊とて、池水にいりにけり、池水の底にいりにけり。(中入。狂言、春日神社に木を植えた由來、采女投身のことなど語る)

わき(待語)へ池のなみ、よるの汀に座をなして、く、假に見えつるまぼろしの、采女のきぬの色々に、弔ふ法ぞまことなる、とふらふ法ぞまことなる。(一聲)後してへあら有難の御弔ひやな。たへなる御法をうるなるも、心の水と

(三三)心が亂れてゐても。

(三四)心中の猿のやうに狂ひ騒ぐ煩惱も嗜れ、功德池の蓮臺上に坐る身とならう。佛教では煩惱を意猿または意馬心猿といふ。猿澤は猿の掛詞、池の序詞。

(三五)誰にも佛となるべき本性がある。涅槃經に、一切衆生悉有佛性。

(三六)「無し」の掛詞、「水の下」の對語。

(三七)底本「増てや」、田本による。

(三八)龍女が佛法により男子に變成して南方無垢世界に往生したとの法華經の說話によつたのである。

(三九)印度の南岸にある觀音の淨土だが、新古今春日明神の「補陀落の南岸に堂立てて今ぞ榮えむ北の藤浪」により興福寺を意味する。

(四〇)「成る」の掛詞。

(四一)花のやうな美しい衣を着た采女は眞心を盡して。花衣は裏に音通の「うら紫」の序詞。「うら紫」は心の序詞。

(四二)本朝文粹勸解公和歌序に、情動於内一言形於外。内に籠めた情愛を和歌で巧みに表現する例。

(四三)橘諸兄のこと。この說話は古今集序の古註に見える。

聞く物を、騒さわがしくとも教あらば、うかふ心の猿澤の、池の蓮はすの臺うゑに座せん。
能よ々よ弔たひたまへとよ。

わきへふしぎやな池の汀に顯れ給ふは、采女と聞きつる人やらん。してへはづかしながらいにしへの、采女がすがたをあらはす也。佛果をえしめおはしませ。わきへ元よりも人々ひとおなじ佛性なり。何うたがひも浪の上、してへ水の下

なるうろくづも、わきへ成佛得脱、してへうたがひなし。同(上歌)へましてや、人間に於いてをや。龍女りゆうにょがごとく我もはや、變成男子へんじゆうなんしなり。采女とな思ひたま

ひそ。しかも、所はふだらくの、南の岸に至りたり。是ぞ南方無垢世界、生れん事もたのもしや、生れんこともたのもしや。

(クリ)上へ勝かやいにしへ三九にならの都の世々をへて、神と君との道直みちただに、國家

をまもるためしとかや。してさしこゑへ然れば君につかへ人、其品じなのおほき中に、同へわきて采女さいにょの花ごろもの、うらむらさきの心をくだき、君邊くんべんに仕

へたてまつる。して下へされば世上に其名をひろめ、同へ情内じやうないにこもり言葉ほかに顯はるるためし、世もつてたぐひ、おほからず。(クセ)下へかづらかづらきの大

きみ、勅しつにしたがひ陸奥むつの、忍ぶもぢずり誰も皆、ことも疎おろそなりとて、儲たくわな

(四〇)勅命を受けて陸奥へ行かれたとき誰も皆待遇が粗略だとお怒りになり、饗應などをしたがなほもどろいふわけからか大君の心が打ち解けなかつたときに。古今の「陸奥の信夫もぢぢり誰故に云云」の歌により「忍ぶもぢぢり」は誰の序詞。

(四一)盃を取つて酒を勸めたときの和歌の心で大君の心が解け。露は葉の縁語、情の序詞。

(四二)大和物語に見える歌。末句「思ふものは」。原歌は萬葉集にある。上の句は「浅くは」の序詞。

(四三)この歌で人の心に風流心が起こり和歌が盛んにになり、國も治まり安全になつたとか。心の花には和歌の意もあり、風は花・雲の縁語。

(四四)采女は鳥が花の梢を飛ぶやうに袖を蹴して舞ひ、その戯れの歌舞に人の心は引かれ移り。采女と色、「移る」と花、鳥と音・雲および「飛ぶ」に普通の「とぶさ」とはおのおの縁語。

(四五)雲・廻る・盃などの縁語。
(四六)雲・影・廻る・御酒(みき)の縁語。

んどしたりけれど、猶しもなどやらむ、大君の心とけざりしに、采女、なりける女の、かはらけとりし言のはの、露の情に心とけ、歡感もつてはなはだし。さればあさか山、陰さへみゆる山の井の、あさくは人を思ふかの、心の花ひらけ、かぜも納まり雲しづかに、安全をなすとかや。して上へ然れば、采女のたはふれの、同へ色音にうつる花鳥の、とぶさに及ぶ雲の袖、影も、めぐるやさかづきの、御遊のみきの折々は、采女のきぬの色そへて、大、宮人のをみごろも、櫻をかざすあしたより、けふもくれはどり、聲のあやをなすぶがの曲、拍子をそろへ、たもとをひるがへして、遊樂快然たる、采女のきぬぞたへなる。

へ取わき忘れめや、曲水の宴の有りし時、御かはらけ度々めぐり、有明の月ふけて、山ほととぎす、誘ひがほなるに、歡慮をうけて遊樂の、へ月になけ。

(序之)舞。して(ワカ)上へ月になけ、おなじ雲の、ほととぎす。同下へ天津空ねの、よろづ世までに、して下へ萬代と、かざらじ物を、あま衣、なづとも盡きぬ、巖ならなん。へ松のはの、同下へ松のはの、ちり失せずして、正木のかづら、永くつたはり、鳥の跡たえず、天地おだやかに、國土安穩に、四海浪、しづかなり。

(五〇)風情を添へて。色は衣の縁語。
(五一)節會に祭官や舞人の着る藍摺の上着。轉じて舞衣の意となる。
(五二)新古今「百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮らしつ」
(五三)「暮れ」の掛詞、文(あや)の序詞。

(五四)面白い舞歌。毛詩、聲成レ文。
(五五)曲水に盃を浮かべて酒宴する三月三日の行事。土器(かはらけ)はこの縁語。

(五六)興を催すやうな有様なので。
(五七)以下「疎闢を打つなり」まで、采女が遊樂のとき歌つた歌の心。

(五八)この宮中と同じ雲居にゐる郭公よ萬代までも大空で月に向つて鳴け。「空ね」は夜に普通の萬代の序詞。

(五九)拾遺「君が代は天の羽衣稀にきて撫つとも盡きぬ巖ならなむ」
(六〇)以下「鳥の跡絶えず」まで古今序を引く。和歌がいつまでも榮える意。

(六一)底本・田本とも「をたやか」
(六二)粗末な窓。上懸は「そつうつ」
(六三)佛法を讚美する因縁なのだから。

して下へさる澤の池のおも。同下へへに、水、滔々として浪又、悠々たりとかや。石根に雲おこつて、雨は、疎闢をうつなり。遊樂の夜すがら是、うねめの、たはふれとおぼすなよ。讚佛乗の、因縁なる物を、よくとふらはせ給へやとて、又浪にいりにけり、又浪の底にいりにけり。

(一)松浦明神や箱崎八幡の靈驗。
 (二)先づ音に聞えた雲林院の夕景色で、夕日の傾く方にある秋草の花咲く紫野を分けて。雲と「高く」および夕日、「うつろふ」と影および秋草、花と紫とはおのおの縁語。
 (三)「有り」と在原業平との掛詞。
 (四)古今・伊勢などに見える業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは本の身にして」
 (五)右の歌は五條の太後の宮の西の對のあばらな板敷に臥して二條の后を戀ひ偲んで詠んだのである
 (六)光源氏が五條の夕顔の宿で主の素姓も知らずに契つたところ。「あたり」「あばら屋」「あるじ」は頭韻。
 (七)源氏物語夕顔の巻に見える夕顔の歌。山を源氏に月を自身に喻へ男に捨てられる不安を諷した。
 (八)楚の襄王が高唐で夢に巫山の仙女と契つたが、覺めたら陽臺の

夕顔ゆふがほ

前シテ……………女(夕顔の上の化身)

後シテ……………夕顔の上の靈

ワキ……………豊後の僧

ワキツレ……………從僧(二人、またなしにも)

狂言……………京都五條邊の者

僧詞「是は九州豊後の國より出でたる僧にて候。松浦はこざきの誓ひもすぐれたりとは申せども、猶も名たかき男山に參らんと思ひ、この程は都にのぼり、洛陽の名所舊跡拜みめぐりて候。けふも立出で佛閣を拜まばやと思ひ候。さしこゑへ尋ねみる都に近き名どころは、先名もたかく聞えたる、雲の林の夕日影、うつろふ方は秋草の、花むらさきの野を分けて、上(歌)へかものみやしるふし拜み、く、ただすの森も打過ぎて、かへるやどりは在原の、月やあら

朝雲暮雨であつたとの文選の故事
 (九)帝舜の崩御を娥皇女英の二妃
 が歎いて楚國の畔にさまよひ湘江
 の岸邊で死んだが、その靈の流す
 血の涙が廟前の竹を斑に染めたとの
 博物志に見える故事。巫山の故
 事と共に男女の契りのはかない譬
 (一〇)「忍ぶ草」まで「忍ぶ」の序詞。
 (一一)昔を追想する事の多い宿話が
 (一二)當時見聞したことが執心の種
 となり、戀の色香を捨てなかつた
 ために流した涙は後世の往生の妨
 げとなるので。雨は浮雲の縁語。
 (一三)情なくも娑婆に通つて來る心
 の迷雲を、嵐が浮雲を拂つて月が
 現れるやうに拂ひ除けて、月のや
 うな悟りの心に晴れ渡れと、叶は
 ぬ望ながら空を仰ぐのだ。
 (一四)その名の代りの假の名前。
 (一五)「西底本」とをる「活・田本」による。
 (一六)それより後の世に。
 (一七)夕顔に置く露のやうなはかな
 い世に夕顔の上とはかない契りを
 結んだので、夕顔は鬼のために露
 のやうに消えるといふこの上もな
 い悲しい思ひを経験なさつたが、
 その名も恐ろしい鬼の形さながら
 に苦むしてゐる鬼瓦のある河原院

夕 顔

ぬとかこちける、五條あたりのあばらやの、あるじもしらぬ所まで、尋ねとひ
 てぞ暮しける、たづね問ひてぞくらしける。詞「ふしぎやな是なるあづまやよ
 り、女の歌を吟ずる聲の聞え候。暫やすらひ候ひて尋ねばやと存じ候。

(アシラヒ出シ)して下へ山のはの、心もしらでゆく月は、うはの空にて影やた
 えなん。上へ巫山の雲はたちまちに、陽臺のもとに消えやすく、湘江の雨はし
 ばくも、楚畔の竹をそむるとかや。さしこゑへ爰は又元より所も名をえた
 る、ふるき軒ばの忍ぶ草、しのぶかたくおほきやとを、むらさき式部が筆の
 跡に、只なにかしの院とばかり、書置きし世はへだたれど、見しも聞きしも執
 心の、色をも香をも捨てざりし、かかる(下歌)へ涙の雨は後の世の、さはりと
 なれば今も猶、上(歌)へつれなくも、かよふころの浮雲を、く、はらふあ
 らしの風のまに、眞如の月も晴れよとぞ、むなしき空にあふぐなる、むなしき
 空にあふぐなる。

わき 「いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候。して「何事にて候ぞ。わき
 「此所をばいづくと申し候ぞ。して「さん候此所をばなにがしの院と申し候。
 わき「ふしぎやななにがしの山侍士の寺は名の上の、ただかり初のことばやら

と御承知下さい。露は夕顔の縁語ではかない意だが夕顔の死を暗示し、世は世間と男女の契りとの兩意を兼ね上には夕顔上の意を寓し、河原は瓦の掛詞で鬼の縁語でもある。

(一〇)その夕顔の魂の宿つた玉鬘。玉鬘は夕顔の娘で乳母子豊後介に伴はれて幼時を筑紫で送つた。玉鬘は魂(たま)の掛詞。

(一一)思ひなして。

(一二)拾葉抄所引源祕抄序「源氏物語は心詞幽玄にして義理甚だ深し」岷江入楚序「煩惱即菩提の女此物語の大意也」お伽草子紫式部の巻に「其詞ゆふゑんにして心菩提を勸め義理殊に深し」などある。

(一三)底本「幽遠」活本・田本による。

(一四)底本・活本・田本ともに「儀」

(一五)「浅からず」は「誓の道」と

(一六)「契り」の上下にかかると。

(一七)一寸休息のために道端に止めたる御車なのだ。夕顔の巻の歌「夕露に紐解く花は玉銚の便に見えし縁(えに)こそありけれ」

(一八)好機を逸すまいと、浮氣人夕顔の「折り」は夕顔の縁語。

(一九)「知らず」の掛詞。新古今「白露

ん。又それを其名に定めしやらん承り度くこそ候へ。して「さればこそ始めより、六かしげなる旅人と見えたれ。紫式部が筆の跡に、只なにがしの院とかきて、其名をさだかに顯はさず。然れどもここは古りにし融のおとどの、住み給ひにし所なるを、其世をへだててひかる君、へ又夕顔の露の世に、うへなき思ひを見たまひし、名もおそろしき鬼のかたち、それもさながら苔むせる、かはらの院と御覽ぜよ。わきへうれしや扱はむかしより、名におふ所をみることよ。「我等も豊後の國の者、其玉かづらのゆかりとも、へなして今又ゆふがほの、露消えたまひし世がたりを、語り給へや御あとを、及びなき身もとふらん。

して(タリ)上へ抑ひかる源氏の物がたり、こと葉幽艶をもととして、りあさきに似たりといへども、同へこころ菩提心をすすめて義ことに深し。たれかはかりにも語り傳へん。してさしこゑへ中にも此夕顔の巻は、ことに勝れて哀なる、同へ情のみちも浅からず、契りたまひし六條の、みやす所にかよひ給ふ、よすがによりし中宿に、して下へ只やすらひの玉銚の、同へたよりにたてし御車なり。(クセ)下へものあやめも見ぬあたりの、小家がちなる軒のつま

の情置きける言の葉やほのぼの見えし夕顔の花玉葉の縁で末を出す。

(二七) 班女が漢成帝の寵を失ひ秋の扇に喩へて嘆いた故事とは異り、互に契の絶える事はしなかつた。

(二八) 夕顔巻「古もかくや人の迷ひけん我がまだ知らぬ東雲の道」

(二九) 蛭螂。朝生暮死の蟲。はかない喩へ。命の枕詞でもある。

(三〇) 眞暗闇で正氣の人もなく。古今「烏羽玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」

(三一) 「思ふ」の掛詞、「うたかた」の序詞。

(三二) 泡のやうにはかない人。

(三三) 「消えて」と水とにかかる。

(三四) 「うたかた」「消え」などと縁語。底本・田本「淡」活本による。

(三五) 死んでしまつた。「散り」は花の縁語。

(三六) 法華經提婆達多品に女人は罪深くて梵天・帝釋・魔王・轉輪王・佛身の五身に成れないといふ。

(三七) 「月影の」まで「ほの見え」の序詞。

(三八) ほのかに見えて来た夕顔の上は、昔のはかない身の上話と共に人生ははかなくて人は遅かれ早か

に、咲きかかりたる花の名も、えならず見えし夕顔の、折三六すごさじとあだ人の、

こころの色はしら露二六の、情置きける言のはの、すゑをあはれと尋ねみし、聞三六

の、あふぎの色ことに、たがひに秋の契りとは、なさざりししのめの、みち二六

の迷ひのことはも、この世はかくばかり、はかなかりけるひをむしの、命か二六

けたる程もなく、秋の日やすく暮れはてて、宵のますぐる古さとの、松のひび

きもおそろしく、して上へ風三〇に、またたく灯三〇の、同へきゆるとおもふこち

して、あたりをみれば烏羽玉三〇の、闇の、うつつの人もなく、いかにせんとかお三二

もひ河、うたかた人はいききえて、歸三三らぬ、水の泡三四とのみ、散り果てし夕顔

の、花はふたたびさかめやと、夢にきたりて申すとて、有りつる女も、かきけ

す様にうせにけり、かきけすやうに失せにけり。(中入。狂言、光源氏と夕顔と

の故事を語る)

わき(待詠)へいざさらば夜もすがら、く、月みがてらにあかしつつ、法華

讀誦のこゑたえず、弔ふ法ぞまことなる、とふらふ法ぞまことなる。(一撃)後

して下へあら有難の御経やな、あら有難の御きやうやな。さしこゑへさなきだ

に女は五障三五の罪深きに、聞くもけうときものけの、人うしなひし有様を、顯

れ死んでしまふといふ愛世の哲理をも解き明かしなされるのですか。

新古今「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらん」

(三九)以下數節夕顔の巻の本文を巧みに利用してゐる。

(四〇)清らかだつた心も戀慕の妄執に汚されてこんな身となつたが。

(四一)夕顔の巻の歌。末句「契り違ふな。露婆婆は在俗の佛道者。源氏が夕顔の宿で隣の御嶽精進の聲を聞いて詠んだ歌だが、それを夕顔の靈が僧に來世を頼む意に轉用した。車屋諸本「をこなふ」。

(四二)「舞」活本・田本で補ふ。

(四三)言ふを夕顔に掛け、夕顔の喜ぶ様を形容した。夕顔の巻「白き花を己ひとり笑みの眉開けたる」

(四四)法華經の功德を喩へた。

(四五)龍女が男子に變成して成佛したとの法華經の佛説の通りたに女人である夕顔も煩惱を解脱したが、この嬉しさを今宵は何に包まうかと。古今「嬉しさを何に包まん唐衣云云」袖は衣・「包む」の縁語。

(四六)底本「をと山」活・田本に上る。

(四七)「雲」の縁語。

はす今の夢人の、跡よくとふらひ給へとよ。

わきへふしぎや扱は脊のまの、山のは出でし月影の、ほの見え初めし夕顔

の、末葉の露の消えやすき、もとのしづくの世がたりを、かけて顯はし給へる

か。してへ見たまへ爰もおのづから、けうとき秋の野らと成りて、わきへ池は

水草にうづもれて、古りたる松の陰くらく、してへ又啼きさはぐ鳥のからこゑ

身にしみわたる折からを、わきへさも物すぐく思ひ給ひし、してへこころの水

はにごり江に、引かれてかかる身となれども、うばそくが、行ふ道をしるべに

て、同へこむ世もふかき、ちぎりたえすな契りたえすな。(序上之)舞

して下へお僧の今の、とふらひを請けて、同へお僧のいまの、弔ひを受けて、

かずくうれしやと、して下へ夕顔のゑみのまゆ、同へ開くる法華の、してへは

なぶさも、同へ變成男子の、ねがひのままに、解脱のころもの、袖ながら今宵

は、何をつつまんと、云ふかとおもへば、音羽山、嶺の松かぜ、かよひきて、

明けわたる横雲の、まよひもなしや、しののめのみちより、法に出づるぞと、

明暗の空かけて、雲のまぎれに、うせにけり。

江^え口^{ぐち}

前シテ……………女（江口の君の化身）

後シテ……………江口の君の靈

ツレ……………遊女の靈（二人）

ワキ……………都の僧

ワキツレ……………從僧（二人、なしにも）

狂言……………江口の里人

（一）世捨人の友である月も出家以前からの友だから、濁世を離れた世界は何處なのだらう。
（二）淀川を舟で下ると行く手には霞のなかに鶴殿の芦の穂がほのかに見え、霞んで見える松に煙のやうな浪が打ち寄せてゐる江口の里に着いたのであつた。夜と淀とは「よ」の頭韻。その「よ」は節（よ）に普通で芦の、芦は足に普通で舟の、浪は江のおのおの縁語。「ほの見えし」は穂の掛詞。「松の煙」は霞んで見える松、「煙の波」は霞越しに見える煙のやうな波の意。

（次第）僧次第 月はむかしの友なれば、月はむかしの友なれば、世の外いづくなるらん。詞「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ西國を見ず候ほどに、只今思ひ立ち西國あんぎやと心ざし候。（道行）上へ都をば、まだ夜深きに旅だちて、く、淀の川舟ゆく末は、うどのの蘆のほの見えし、松のけふりの浪よする、江口の里に着きにけり、江口のさとに着きにけり。（狂言、ワキに尋ね

(三)無情にも宿を拒んだので。

(四)新古今・撰集抄などに見える。出家することまでは難しからうが僅か一夜の假の宿を拒むとはあんまりなお方だ。「假の宿」は俗世間の意にも通じ世のなかの縁語。

(五)昔をしみじみ思ひ出させる歌

(六)「露の」まで世の序詞。葉・草・陰・陰野・露・世と縁語で連

ねたのである。

(七)新古今・撰集抄などに見える。世捨人と聞いたからこそ假の宿に心を留めなさるなと思ふだけなのです。

(八)申す上は。上懸と喜多流は「申せば」とある。

(九)假の宿である。この憂世を捨てた人ではあり。

(一〇)こちらにも名に聞かえた好色の遊女で、家は成程引籠つてあるといふものの埋木のやうに人に

知れない煩はしいことばかり多い宿ですから、さういふ煩はしい宿に。古今序「色好みの家に埋れ木

の人知れぬ事となりて」

(一一)田本「なるに」

(一二)底本同上「脱、田本で補ふ。

(一三)宿を貸し惜しむのこそこの假

られて江口の長者の舊跡を教へる)さしこゑへ扱はいにしへの江口の君のあととなるかや。其身は土中にうづむといへども、名はとどまりて今までも、昔がたりの舊跡を、今みる事のふしぎさよ。「勝^{ビツ}や西行法師、此所^{ココ}にて一夜のやどをかりし時、あるじの心なかりしかば、下^{シタ}へよの中をいとふまでこそかたからめ、「かりのやどりを惜しむ君かなと詠じけんも、下^{シタ}へ此所にてのことなるべし。あらおもしろや候。

して「なう／＼今の歌をば何と思ひよりて詠じ給ふぞ。わき「ふしぎやな人家も見えぬ方よりも、女性一人來り給ひ、今の詠歌の口ずさみを、いかにと問はせ給ふこと不審にこそ候へ。して「忘れてとしを經し物を、又思^{オモ}ひそむことのはの、草^{クサ}の陰の露のよを、駄^ダふまでこそかたからめ、かりのやどりを惜しむとの、其言のほも恥かしければ、さのみは惜しみ參らせざりし、其理^{ことわり}をも申さん爲に、是まで顯はれ來りたり。わき「いや是はただ西行法師の讀みける跡を、ただ何となく口ずさむ所に、さのみは惜しまざりにしと、理^{ことわり}り給ふ御身はさて、いかなる人にてましますぞ。して「いやさればこそ假のやどりを惜しむとの、御心のうちも恥かしければ、惜しまぬ由の御返^{かへん}事を、申しし歌をば何と

の世を惜しまないためなのに。

(一) 〆言ふの掛詞、返らぬの序詞。

(二) 〆返らぬ昔のことはさて置き、今でも世捨人は俗世間の話に心を留めなさいませ。

(三) 〆底本ここに「同」とあり「ろんぎ」なし。田本で補正。

(四) 〆いかにもこの世は浮世だ。その浮世の話を聞いてると、姿も誰か分からず、夕暮に幻のやうに見える人はどういふのだらう。

(五) 〆ほんやりと、見え隠れする川の曲つたところに見え隠れしてゐるその人影は江口の遊女と見えるだらうか、恥かしいこと。川と江

口の江及び「流れ」とは縁語。

(六) 〆「あらじ」の掛詞。「消え」の序詞。浪と「消え」は「流れの君」の縁語。

(七) 〆拾遺集兼盛の歌をそのまま引いて僧が不意に來た意に用ゐた。

(八) 〆説法明眼論に、宿一樹下、汲一河流、一夜同宿、皆是先世結縁。

(九) 〆御推量下さいませ。「汲み」は水の縁語。

てか、詠じもせさせ給はざらん。わきへ勝今おもひ出だしたり。いで其返歌の

ことのはは世をいとふ、して下へ人としきけばかりの宿に、「心とむなと思ふ斗

ぞ。心とむなと捨人を、いさめ申すは女のやどりに、へ留め參らせぬも理な

らずや。わきへ勝理也西行も、假のやどりを捨人といひ、してへこなたもな

におふ色好みの、家にはさしも埋木の、人しれぬ事のみおほきやどに、わきへ

心とむなと詠じたまふは、してへ捨人を思ふころなるを、わきへただ惜しむ

との、してへことのはは、同上(歌)へ惜しむこそ、惜しまぬかりのやどなる

に、く、などや惜しむとゆふ浪の、かへらぬ、いにしへは今とても、捨人の

世語に、こころなとどめ給ひそ。

ろんぎへ勝やうき世の物がたり、きけば姿もたそかれに、かげろふ人はいか

ならん。してへ黄昏に、たたずむ影はほのくと、見えがくれなる川ぐまに、

江口の流れの、君とや見えん恥かしや。同へさては疑ひあら磯の、浪と消えに

し跡なれや。してへかりに住みこしわがやどの、同へ梅の立枝やみえつらん、

してへ思ひの外に、同下へ君がきませるや、一樹の、陰にややどりけん、又は

(三)言ひも終らないうちに。
 (三)川舟を泊めて船中で契りを結ぶ、さうした浮世の花やかだがはかない夢を見馴れて、迷ひの夢から覺めない身の情なさよ。波と「うき」夢と枕および「驚く」とはおのおの縁語。「はかなさよ」は次の「さよ姫」と連韻。
 (三)佐用姫が松浦瀆で夫の唐への舟出を悲しんで獨り淋しく涙で袖を濡らしたその名残りが、われわれのかうしたはかない生活なのだ(三)宇治の橋姫が訪れようともしない人を待つてゐるのも、私達遊女の身の上そのまま、感慨無量だ。古今「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(三)それはとにかく、花・雪・雲・浪何れも泡のやうなはかないものだからそんなものはどうでもよい。ああ面白い生活がしたい。吉野は「よしや」と頭韻、花の序詞。「哀れ」は泡の掛詞「あはばや」と頭韻。花・雪・雲・浪・泡は縁語の連韻。
 (三)舟に乗つての川遊び。
 (三)昔とはとんでもない。御覽なさい月は昔と違つてゐませうか。

かりして失せにけり、聲ばかりして失せにけり。(中入。狂言、江口の君は菩薩の化身であつて、性空上人が正身の菩薩を御覽になつた傳説を語る)

わき「扱は江口の君かりに顯はれたまひけるぞや。へいざや御跡とふらはんと、(待詠)上へいひもあへねばふしぎやな、く、月澄みわたる河水に、遊女のうたふ舟あそび、月に見えたるふしぎさよ、月にみえたるふしぎさよ。(一聲)後三人(上歌)へ川舟を、留めて逢ふせの波まくら、同へく、うきよの夢をみならばしの、驚かぬ身のはかなさよ。さよ姫がまつらがた、かたしく袖のなみだの、もろこし船の名残なり。又宇治の橋姫の、とはんともせぬ人をまつも、身のうへと哀なり。三人下へよしや芳野の、同へよしやよしの、花も雪も雲も浪も、あはれ世にあはばや。

わきへふしぎやな月澄みわたる水のおもに、遊女のあまたうたふうたひ、色めき見えたる人影は、そも誰人の舟やらん。してへ何この舟をたが船とは、恥かしながらいにしへの、えぐちの遊女の川遣遙の、月の夜舟を御らんぜよ。わきへそもや江口の遊女とは、それは去りにしいにしへの。してへいやいにしへとは御覽ぜよ。月は昔にかはらめや。つれへ我等もかやうに見えきたるを、

(三〇) 夢のやうなことをおつしやる
 (三一) 底本、田本とも「さほ持」
 (三二) 朗詠に、秋水漲來舟去速。
 (三三) 棹をさしながら歌ふ歌舟去速。影
 さすの「さす」は棹の縁語。
 (三四) 「歌へ」と頭韻、「哀れ」の枕
 詞。
 (三五) 「言ふ」を掛ける。
 (三六) 世の意だが、夜に通じ遊女の
 縁語。また節(よ)に通じ一節の
 縁語。
 (三七) 無明以下十二の因子が互に因
 となり果となつて流轉すること。
 (三八) 六道講式に、流轉無窮如三車
 廻り庭、昇沈不定似鳥遊林。
 (三九) 前世にはまた前世が來世には
 また來世があつて生の始めも終り
 も分らない。また人界や天上界
 に生まれざる善果を得てゐるが、道
 を誤り迷つて悟りの種を蒔いてゐ
 ない。あるひはまた三途八難のや
 うな惡道に落ちて苦患に妨げられ
 るはや發心の機縁を失つてゐる。
 趣迷發心集に、鎮墮三途八難之惡
 趣所レ得苦患ニ而既失發心之媒、
 或時適感中人天上之善果、顛倒迷
 謬而未レ植解脱之種、先生亦先生
 都不レ知三生生前、來世猶來世全無

いにしへ人とはうつつなや。してへよし／＼何かと問ひたまふとも、さを持(ツ
 レの他の一人)へいはじやきかじ、してへ六かしや。三人上へ秋の水、みなぎり
 落ちて、さる舟の、して下へ月も影さす、棹の歌、同下(歌)へうたへやうたへ
 うたかたの、哀、むかしの戀しさを、今も、遊女の舟あそび、よをわたる一節
 を、うたひていざやあそびむ。
 (クリ) 上へ夫十二因縁の流轉は車の庭に廻るがごとく、してへ鳥のはやしに
 あそぶに似たり。同へ前生又前生、してへかつて生々々のさきをしらず。同へ
 來世猶來世、さらに世々のをはりをわきまふる事なし。してさしこゑへあるひ
 は人中天上の善果をうくといへども、同へ顛倒迷妄していまだ解脱のたねを植
 えず。してへ或は三途八難の惡趣に墮して、同へくげんにさへられて既に發心
 の中立をうしなふ。して下へ然るにわれらたま／＼請け難き人身を受けたりと
 いへども、同へ罪業ふかき身と生まれ、殊にためしすくなき河竹の、流れの女
 となる。先よの報までおもひ、遣るこそかなしけれ。(クセ) 下へ紅花の春
 のあした、紅錦繡の山、よそほひをなすとみえしも、ゆふべのかぜに誘はれ、
 黄葉の秋のゆふべ、黄纈繡のはやし、色をふくむといへども、あしたの霜にう

辨三世終一。

(四一)底本「迷亡」田本「めいまつ」

(四二)六道講式、人身難受。

(四三)遊女の異稱。

(四四)紅の花盛りの春の朝、紅の錦繡で飾られたと見え山も、夕の風に誘はれて花は散り色はあせ、紅葉の美しい秋の夕黄色い絞染めのやうな林は見事であつても、翌朝の霜のために色は變る。

(四五)松吹く風や葛葛を照らす月に誘はれ來つて言葉を交す客人も。

(四六)美しく飾つた閨房で枕を並べて妹背を契つた男女の間も。

(四七)聲音に溺れ愛着心が淺くなく

(四八)容色に耳を傾けて愛欲に對する執着心が誠に深い、これらは。

(四九)妄執に染着する機縁となる。

(五〇)色聲香味觸法の六境をいふ。

これらは人の心を汚すから塵といひ、この六塵によつて眼耳鼻舌身

意の六感官が罪を作るのである。

(五一)煩惱を解脱した萬有の本體。

これを大海に譬へたのである。

(五二)六塵から法塵を除いたもの。

(五三)六根から生じる六欲。

(五四)萬有の本體である眞如が種種な機縁に隨つて萬物となつて現れ

つろふ。松風蘿月に、こと葉をかはず賓客も、さつて來る事もなく、翠帳紅闌に、枕をならべし妹背も、いつのまにかは隔つらん。凡、こころなき草木、情ある人倫、いづれ哀をのがるべき、かくは思ひ知りながら、して上へ有る時は色にそみ、貪着の思ひあさからず。同へ又有るときは聲をきき、愛執の心いと深き、心に思ひ口にいふ、妄染の縁となるものを、勝や皆人は、六塵の境にまよひ、六根の罪をつくることも、みることに聞く事に、まよふこころなるべし。

上へ面白や。(序之)舞。して(ツカ)上へおもしろや。實相無漏の大海に、五塵六欲のかぜは、ふかねども、同へ隨縁、眞如の浪の、たたぬ日もなし、たたぬ日もなし。して下へ波の立むも何故ぞ。かりなる宿に、こころとむる故、同へ心とめずは、うき世もあらじ、して下へ人をもしたはじ、同へ待つ暮もなく、して別路もあらしふく、同へ花よもみぢよ、月雪のふることも、あらよしなや。

して下へおもへば假のやど、同下へ思へばかりのやどに、こころ、とむなと人をだに、いさめし我なり。是までなりや歸るとて、すなはち普賢、菩薩とあらはれ、舟は白象となりつつ、ひかりとともにしろたへの、白雲に、打乗り

て、西の空に行き給ふ。有がたくぞ覺えたる、有がたくこそ覺ゆれ。

るといふ佛教哲理。
(西)安靜である筈の心が動搖するのは何故なのか。
(孟)「あらし」の掛詞、花の序詞。
(美)古事、昔物語。雪の縁語。
(毛)普賢菩薩の乗物。白毫に通じ光の縁語。

楊 貴 妃

シテ……………楊貴妃

ワキ……………方士

狂言……………常世の國の者

(一) まだ行つた事のない東海の仙境への道は何處だか尋ねよう。源氏夕顔の巻「古もかくやは人の迷ひけむ我がまだ知らぬ東雲の道」
 (二) 仙術を使ふ道士。
 (三) 底本「宴」と誤る。
 (四) 底本「馬塊」陝西省にある。
 (五) 上は青空から下は地下まで。
 長恨歌に、上窮碧落下黃泉。
 (六) 中國で東海にあると想像されてゐた仙境蓬萊島にある宮殿。
 (七) 尋ね求める人の幻に人傳でもよいから逢ひたいものだ。魂の在所は其處と定つてゐるわけのものでもなく、舟に乗つて浪を分けて行くと、ほのかに山がちの島が見えて常世(とこよ)の仙境に着いたのであつた。源氏桐壺「尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかを其處と知るべく」幻は原歌では幻術師の意だが、ここでは楊貴妃

(次第) わき次第へ「我まだしらぬ^レ篠の目の、わがまだ知らぬしのめの、道をしづくと尋ねむ。詞「是は玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候。さても我君まつりごとただしくまします中に、又色を重くし艶を専とし給ふにより、容色無雙の美人をえたまふ。御寵愛ならびなし。則貴妃にさだめらる。楊家の御娘たるが故に其名をやうきひと號す。然れどもさる事ありて馬嵬が原にて失ひ奉りて候。御門御なげきかぎりなし。せめての御事に魂魄のありかを尋ねて參れとの勅定にまかせ、かみ碧落しも黄泉まで尋ね申せども、さらに魂魄のありかをしらず候。未蓬萊宮に至らず候ほどに、彼嶋にわたり御行方を尋ねばやと存じ

の幻の意。浪は「無し」の掛詞。「ほのか」は帆に普通舟の縁語。

「草の假寝の枕結ふ」は草を結んで假寝の枕とするの意だが、床に普通の常世の序詞。草と山および「刈り」に普通の假寝、枕と夜に普通の常世とは縁語。

(八)宮殿のめぐり連なる形容。

(九)莊嚴(裝飾)が雄大で。

(一〇)漢の宮殿の廣大な様子。尤も萬里は萬里長城の意かも知れない。

(一一)玄宗と楊貴妃の遊樂したのが驪山宮、そのなかに長生殿がある。

(一二)長恨歌に、中有二人、字太真。長恨歌傳に、署曰三玉妃太真院。楊太真外傳に、額署曰三玉妃太真院。

(一三)花の縁語。

(一四)長恨歌傳、楊太真外傳などに洞戸とあるによる。仙室の心。

(一五)獨りて月を眺めてゐると、袂が涙に濡れて、月影までも泣いてゐるやうに見えるよ。

(一六)花模様を刺繍した垂布を幾重ねも垂れた戸張。寢室に用ゐる。

長恨歌、九華帳裡夢魂驚。

(一七)雲のやうに房房した鬢の髪。

長恨歌に、雲鬢半偏新睡覺。

(一八)長恨歌に、雪膚花貌參差是。

候。(道行)上へたづねゆく、まぼろしもがな傳にても、く、玉のありかはそ

ことしも、浪路を分けて行く舟の、ほのかに見えし嶋山の、草のかりねの枕ゆふ、とこよの國に着きにけり、とこ世の國に着きにけり。(ワキ、狂言に楊貴妃

の住居を教へられる)さしこゑ有りしをしへにしたがつて此蓬萊宮にきてみれば、宮殿盤々として更に邊際もなく、しやうごん巍々としてさながら七寶をち

りばめたり。漢宮萬里のよそほひ、長生驪山の有様も、是にはさらになぞらふべからず。あらうつくしの所やな。「をしへのごとく太真殿としるしたる額の候。しばらくこのあたりに徘徊し、ことの由をも窺はばやと存じ候。

して下へあら物すごの宮中やな。あら物すごの宮中やな。さしこゑ昔は驪

山の春の蘭に、ともにながめし花の色、うつればかはる習ひとて、今は蓬萊の秋のほらに、獨ながむる月かげも、ぬるるがほなるたもかな。あら戀しのいにしへやな。わきへいかに此宮のうちに申すべき事の候。唐の天子の勅のつか

ひ、方士是まで参りたり。玉妃は内にましますか。してへなに唐帝の使とは、なにしに是まできたれるぞとて、九華の帳を押しかけて、玉のすだれをかかけ

つつ、わきへ立出で給ふ御すがたを見れば、してへ雲のびんづら、わきへ花の

- (一七)長恨歌に、玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨。
 (一八)長恨歌に、太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉。太液は漢の武帝の造つた園池、芙蓉は蓮の花、未央は漢の高祖の建てた宮殿。
 (一九)長恨歌、六宮粉黛無顏色。
 六宮は天子の後宮、粉黛は美人。
 底本「ふんたひ」
 (二〇)底本「あやうく」
 (二一)役に立たない露の様なはかない身だが、その物の數にも入らない身の魂の在所を、露は玉の縁語。
 (二二)「勝り」の掛詞「枯れ」に通の「離(か)れ」の縁語。續古今「吹く風も訪ふに辛さのまさるかな慰めかぬる秋の山里」
 (二三)杜絶え勝ちな仲では風のやうなはかない便りは却つて恨めしいよ。中中には仲の意があるやうだ
 (二四)娑婆を思ふと魂が消えるやうに悲しい。底本「玉しむ」
 (二五)長恨歌に、七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。牽牛織女の二星に誓つたこと、長恨歌傳・楊太真外傳に見える。底本「連離」
 (二六)私語と涙との兩方にかかる。

かほばせ、二人へ寂寞たる御まなこのうちに、涙をうかへさせ給へば、同上(歌)
 梨花一枝、雨をおびたるよそほひの、
 太液の、ふようのくれなゐ、未央の柳のみどりも、是にはいかでまさるべき。勝や、りきうの粉黛の、顔色のなきも、理や、顔色のなきも理や。

わき「扱も」後宮よにましし時だにも、朝政ごとは怠り給ひぬ。いはんやかくならせたまひぬる後は、只ひたすらの御歎きに、御命も危く見えさせ給ひて候程に、せめての御事に魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨を蒙り、是迄参り御すがたを拜み奉ること、下へ唯是君の御心ざし、淺からざりし故ともへば、いよ／＼御痛はしうこそ候へ。して「勝々汝が申すごとく、今は甲斐なき身の露の、數にもあらぬ玉のありかを、かやうに尋ねたまふこと、御情にはにたれども、下へとふにつらさのまさり草、かれ／＼ならば中々の、便のかぜはうらめしや。又今更の戀慕のなみだ、舊里をおもふ魂をけす。わきへ扱しもあるべき事ならねば、急ぎかへりて奏聞せん「去ながら、御かたみの物をたび給へ。して「是こそありし形見よとて、玉の簪とり出でて、へ方士にあたへたびければ、わき「いやとよ是はよの中に、類有るべき物なれば、いかで

(二) 生死の苦界に轉々すること。

(三) 底本「馬塊」

(三) 底本「玉しる」

(三) 底本「連離」

(三) 枯れて色が變ること。

(三) 將來も昔と同様心が變らなれば。心と「變ず」とは縁語。

(三) 「出で」の掛詞。「とも」の縁語。

(三) 何で容易に。

(三) 「見えむ」と三重の帶の掛詞。

三重の帶は戀に瘦せ細つて常なら

一重に結ぶ帶が三重にも結べる意

(三) 再び逢へるかどつか分らない身だから。廻り逢ふは帶の縁語。

(三) 底本「うる」

(四) 前に出た玉の釵を指す。

(四) 釵と舞の袖との兩方にかかる

(四) 長恨歌の、驚破霓裳羽衣曲、

の古訓。霓裳羽衣の曲は、玄宗が

月宮で見た天人の舞樂を模して作

つたと傳へる舞曲。

(四) 舞曲の名。莊子が夢で胡蝶に

なつたといふ莊子に見える故事に

結びつけ、はかない譬へとした。

(四) 上懸および金剛流は衆生。た

だし觀世は最近出生と改めた。

(四) 未來にはまた未來があつてい

か信じたまふべき。御身と君と人しれず、契り給ひし言の葉あらば、それをし

るしに申すべし。して「勝々^{けつけん}是は^{ことわり}理也。思ひぞ出づる我も又、其^{その}初秋^{はつあき}の七日

の夜、二星^{にせい}にちかひし言の葉にも、同下(歌)へ天にあらば願はくは、比翼の鳥

とならむ、地にあらばねがはくは、連理の枝とならむと、誓ひしことを、ひそ

かに傳へよや。ささめごとなれども、今漏れそむる涙かな。上(歌)へされども

世の中の、流轉^{りゅうてん}生死のならひとて、其身は、馬鬼^{まき}にとどまり、魂^{たま}は、仙

宮にいたりつつ、比翼も友をよび、ひとり翅をかたしき、連理も枝くちて、た

ちまち色^{いろ}を變ずとも、おなじ心の行方ならば、終^{つひ}のあふせを、憑^{たの}むぞとかたり

給へや。

(ロング) わきへさらばといひて出舟^{いせふね}の、ともなひ申し歸るさと、思はばうれ

しさの、猶いかならん其ころ。してへ我は又、何中^{なつか}く^{こころ}にみへの帶、廻^{めぐ}りあ

はんも知らぬ身に、よしさらばしはしまて、有りし夜遊をなすべしや。わきへ

勝^{かち}や驪山^{りしやん}の宮のうち、月の夜遊の羽衣^{うい}の曲、してへ其^{その}かさ^{かさ}にして舞ひしとて、

わきへ又とりかさし、してへさす袖の、同^{どう}へそよや、霓裳^{ねいじやう}羽衣^{うい}の曲、そよやげ

いしやう羽衣のきよく、そぞろにぬるる袂かな。(物着)してへ何事も、夢まほ

つまでも廻り廻り、生れたり死んだりして果(はて)がない。「やうやう」は「永永」

(四)衆生の生死流轉する迷界を二十五に分つたもの。すなはち四洲・四惡趣・六欲天・梵天・無想天・那含天・四禪天・四無色天をいふ。

(四七)天人の命終時に現れる五衰相

(四八)須彌山の四方にある南瞻部洲・東勝神州・西牛貨洲・北俱盧洲

(四九)北俱盧洲は四洲の中最も勝れ、その住人は千年の壽を保つのだが、それでも終には命が終るのだ

(五〇)老少不定で死の順序が一定してゐない南瞻部洲即ち娑婆の意。

(五一)天上界の仙人。

(五二)往昔の因。前世からの宿縁。

(五三)長恨歌に、楊家有女初長成、養在深閨人未識。

(五四)生きてはともに老い、死しては同じ墓穴に葬られようとの夫婦の契り。

(五五)「澄む」に普通の「住む」と泡に普通の哀との連絡語。

(五六)「はかなき」の縁語、玉に普通の邂逅(たまさか)の序詞。

(五七)底本「浮むかし」

(五八)長恨歌、七月七日長生殿、夜

ろしたはふれや、同へあはれ胡蝶の、舞ならん。(イロへ)

(クリ) 上へ夫過去遠々の昔をおもへば、いつを受生のはじめとしらず。未來やうくの流轉、更に生死の果もなし。してさしこゑへ然るに二十五のうち、いづくか生者必滅の理にもれん。同下へ先天上の五衰より、須彌の四州のさまざまに、北州の千年終につきぬ。して下へいはんや老少不定のさかひ、同へ歎きの中の、なげきとかや。(クセ) 下へ我もそのかみは、上界の諸仙たるが、わうじやくの因ありて、かりに、人界に生まれきて、楊家の、深窓にやしなはれ、いまだしる人なかりしに、君きこしめされつつ、急ぎめし出だし、后宮にさだめ置きたまひ、借老、同穴のかたらひも、縁つきぬればいたづらに、又この嶋に只ひとり、歸り、來りてすむ水の、哀はかなき身の露の、玉さかにあひみたり。靜にかたれ憂き昔。して上へ去にても、思ひ出づれば恨みある、同へ其文月の七日の夜、君と、かはせしむつごとの、ひよくれんりのこの葉も、かれくになるささめごとの、篠の、一夜のちぎりだに、名殘をおもふならひなるに、ましてや年月、なれて程ふるよの中に、さらぬ別のなかりせば、千世も人にはそひてまし。よしそれとものがれえぬ、會者、定離ぞと

半無し人私語時、在天願作ニ比翼鳥、在地願爲^三連理枝。

(五七)「枯れ枯れ」で葉の縁語だが離れ離れ(かれがれ)にも通じ契りの縁語でもある。

(六)節(上)に普通の夜の序詞。私語(ささめごと)と頭韻。

(六)伊勢物語「世の中にさらぬ別の無くもがな千代もと祈る人の子の爲」世の中は原歌では文字通りの意だがここでは夫婦の仲の意の方が強い。「さらぬ別」は死別。

(六)底本二度とも「うゐの曲」

(六)乙女がたまたま袖を振つて霓裳羽衣の曲を舞ふその舞ひ振りに乙女の心情がはつきり表現されてゐるでせう。源氏物語紅葉賀の巻に「物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖打振りし心知りきや」

(六)他人の舞ひに惹かれてそれに真似て舞ふ舞ひの意だが、ここでは「移り」の掛詞、釵の序詞。

(六)よもあらしの意を蓬が鳥に掛け、鳥つ鳥を鶴に普通の浮世の枕詞とした。蓬が鳥は蓬萊鳥のこと。

(六)常世の國蓬萊島の宮殿の意だが、床を掛ける。

聞く時は、あふこそ別^{わか}なりけれ。

〽羽衣の曲、(序之)舞。して(ワカ)上へ羽衣の曲、まれにぞ返す、をとめ子^{六三}が、同へ袖うちふれる、こころしるしや、心しるしや。

して下へ戀しきむかしの、物がたり、同下へ^(戀しき)盡くさば月日も、うつり舞の、しるしのかんざし、又給はりて、いとま申して、さらばとて、勅使は都に、歸りければ、して去^まにてもく、同へ君には此世、あひみんことも、よもぎが鳴つどり、うきよなれども、戀しやむかし、はかなやわかれの、とこ世^{六六}のうてなに、ふし沈^{六七}みてぞ、とどまりける。

二人閑ふたにん じづか (二人靜)

前シテ……………女(靜の化身)

後シテ……………靜の靈

ツレ……………菜摘女

ワキ……………勝手明神の神職

狂言……………神職の從者(太刀持)

(一)金春・金剛は「じんぐう」、喜多は「じんぐ」と誦つてゐる。
(二)吉野川が國栖村大字菜摘の邊を流れるときの名稱。夏箕川とも。
(三)拾遺集平兼盛の歌。末句「雪にかあるらむ」
(四)春の象徴である吉野といふ地名からしても春が立つてゐるが、季節の上にも春が來て空も春めき朝方の野原も何時の間にか霞み、霞んで見える松も若菜のやうな綠色を添へ、その綠を水に映してゐる菜摘川には名高い若菜が生えてゐるよ。「あしたの原」は葦田の原で大和國王子附近の名所だがここでは「朝の原」の意。「霞む」は「朝の原」と松とにかかると。綠と菜摘川とは縁語。「名にし負ふ」には「生ふ」を掛ける。

わき詞「是は和州みよし野勝手の御前の社人にて候。扱も毎年正月七日にわかなを神供にそなへ候。當年は某それがしが番にあたりて候程に、けさより女どもを集め、なつみ河のほとりにてわかなを摘ませ候が未歸いまだらず候。女共にとり／＼歸れと申し候へ。(ワキ、菜摘女が早く歸るやう狂言に觸れさせる)

(二聲) つれ一せいへ見渡せば、松の葉しろき芳野山、いくよ積りし、雪ならむ。さしこゑこゑ所ところから春たつ空のあしたの原、いつしかとのみうちかすむ、松

(五)木の芽の萌え出る春雨が降つても。春雨は「張る」の掛詞。續後撰「霞立ち木の芽春雨ふるさとの吉野の花も今や咲くらん」
 (六)後幾日たてば摘めるだらう。古今「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」
 (七)春になつたといふだけで。拾遺集の歌によつた。下旬「山も霞みて今朝は見ゆらむ」
 (八)白雪の消えた跡が自然と道になつてゐる。
 (九)一日頓寫の經。供養のために多勢集つて一日のうち一部に經を書寫し終へること。
 (一〇)御主人。
 (一一)氣をつけて。必ず。
 (一二)言つて。夕風に迷ふ浮雲のやうなはかないわが身の姿を、書いては塗る消す筆の跡のやうに、跡かたもなく消え失せてしまつた。夕風は「言ふ」の掛詞。「夕風迷ふ」から「筆の跡」までは「掻き消す」の有心の序。「憂き」は浮莖は身の掛詞。
 (一三)底本「運ふ」
 (一四)氣味の悪い。

もわかかなの色そへて、水も緑のなつみ川、名にしおひける若なかな。上(歌)へ木のみ春雨降るとても、く、猶消えがたき此野べの、雪のしたなる若なをば、今いくかありてつままし。春立つと、いふばかりにや御吉野の、山も霞みてしら雪の、消えしあとこそ道となれ、消えし跡こそ道となれ。

して「なうく」あの菜摘人に申すべき事の候。つれ「こなたの事候か何事に候ぞ。して「御吉野へお歸りあらば言傳申し候はん。一日經書いて我跡とひてたび給へと御申しあれ。つれ「是は思ひも寄らぬことを仰せ候物かな。届け申すべき事は安き間の御事なり去ながら、お名をばたれと申すべき。して「いや我名はなのらずとも、先此事をおことのおしう、其外社家の人々に、委しく届けてたび給へ。もしもうたがふ人あらば、其時わらはおことにつき、我名を名乗り申すべし。へかまへて能々おとどけあれと、同下(歌)へ夕かぜまよふあだ雲の、うき水莖の筆の跡、かきけすやうに失せにけり、かきけす様に失せにけり。(中入)

つれ「若菜をつみて只今歸りて候。わき「とうく歸れと申し候ひつるに、何とて還歸りて有るぞ。つれ「さん候わかかなをつみ歸り候處に、あの夏箕河

- (一〇)ここから靜の靈が憑いたのである。
- (一六)情ないなあ。
- (一七)速くから見てこそ。「よし」と餘所は頭讀。三吉野は見の掛詞。
- (一八)雲と思つたのは櫻の花であつたことが判明するのに。詞花集・平家物語などに見える頼政の歌「深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」
- (一九)底本「つけふ」
- (二〇)底本「して」と誤る。
- (二一)底本「きこふる」
- (二二)義經を守るために防戦の矢を射、偽つて切腹して
- (二三)底本「しかひ」
- (二四)底本「おさめ」
- (二五)盡きない恨みのために涙で袖を濡らしてゐる者です。袖は裏に普通の「恨み」および「包む」に通の「つつまし」の縁語。「つつまし」は恥かしの意。
- (二六)靜といふ名をほのめかした。
- (二七)底本「まふて」
- (二八)神への捧げ物として。
- (二九)精好織。練絲を經、生絲を緯、または經緯ともに練絲で織つた地厚く緻密な絹織物。多く袴に用う

のほとりにて、其様すさまじき女性の候ひしが、みよしのへ言傳申し候はん。一日經かいて我跡とひてたび給へと申し候ひつる。わき「ふしぎの事を申す物かな。左様の事あらば何とて其者の名をば問はざりけるぞ。つれ「わらはも不審に思ひ名をとひて候へば、いや我名はなのらずとも、先此事をおことのおしう、其外社家の人々に、委しく届けてたび給へと申しつれども、餘にまことしからずさふらひて。何、まことしからぬ。あらうたてやさばかり懸み參らせ、吳々申ししかひもなく、疑ひをなし給ふぞや。よし余所にてこそみよしの、花をも雲とみなせども、近くきぬれば雲と見し、へ櫻は花に顯はるる物を、あらうらめしの、うたがひやな。わき「言語道斷の事はなる女に忽ものを、あらい狂はせ候はいかに。やあ女、いかやうなる者の付きそひたるぞ名をなれ。名をなりのりたらば一日經の事申しつけうずるにて候。つれ「跡とひてたびたまはば、わらはが名をも申すべし。まことは判官殿の御内の者候よ。わき「判官殿の御うちの人ならば、忠信こそきこうる兵なれ。もしただのぶにてましますか。つれ「おう其忠信は判官殿のふせぎ矢射、空腹きり遙の谷に飛落ちて、みやこにのぼりし大剛の者、去ながらそれにては候はず。わき「さらず

(三) 糊を用ゐず水張にして干した絹で作つた狩衣のやうな衣。兒童の服や白拍子の舞衣裳に用ゐた。

(三) 「飽き」に普通の秋の序詞。

(三) 底本「るしやう」

(三) 昔が忘れられないままに、舞の衣裳を着けると本當に昔がなつかしく思ひ出され、靜が舞を舞つたあの思ひ出の時も靜かに廻つて来たのであつた。「思ひ出」は「なつかしう」と時とにかかり、「靜の」は人名と靜かにの意とを掛けてゐる。

(三) 今見てゐられるこの私を、吉野川の異名である榮摘川に普通の榮摘女と思ひなされるな。三吉野は吉野の美稱だが、見の掛詞。

(三) 底本「後」なし。

(三) 榮摘川の淀みに近い山陰の香もなつかしく匂ふ舞の袂だなあ。萬葉・新古今・吉野なるなつみの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして「香」は原歌の鴨に普通。(三) 義經は謀叛人のやうに扱はれて。頼朝が後白河法皇から義經追討の院宣を賜つたからである。

(三) 底本「少船」

(三) 底本「吹ひて」

は衣川の御さいごまで、御供と聞えし十郎權の守。つれへ兼房は判官殿の御死骸、心靜にとり納め、腹きりほのほに飛びいり、ことに哀なりし忠の者。されどもそれにはなき物を。まことは我は女なるが、此山までは御供申し、ここに捨てられ參らせて、絶えぬうらみの涙の袖、同へつつましながら我名をば、靜に、申さむ恥かしや。

わき「只今の詞の末にて聞きしりて候。扱は靜の立ちより給ひたるか。靜にたましまさば舞を舞うて御みせ候へ。まことの靜と思ひ一日經の事申し付け候べし。つれ「いにしへも我きし舞の衣裳を勝手御前の寶藏に、神物のために籠め置きたり疑ひあらばとり出しとくく我にたびたまへ。わき「さて舞の衣裝は何色ぞ。つれ「袴は精好水干は、よを秋の野の花づくし、わきへ是はふしぎの事なりと、寶藏を開き取り出し、みればげに舞の衣裳あり。是をきてとくくまひを御舞ひ候へ。(物着)つれへ恥かしや昔忘れぬころとて、さもなつかしうおもひでの、わきへ時もきにけり靜のまひ、同へ今御芳野の川の名の、後してへなつみの女と、おもふなよ。同へ川淀ちかき山陰の、香もなつかしき、たもとかな。

- (四〇) 何の罪科もなかつたのに、前世では罪科を犯したのだつたかと。「科なりけるか」との所、現行諸流何れも「科ありけるか」と一(四一)身の置きどころもない身。山に分け入るの縁語。
- (四二) 比と尾韻。
- (四三) 花の木蔭を宿として寝ても。
- (四四) 氣も落ち着かない夜嵐のために安眠も出来ず、目覺め勝ちな夢が消えるやうに花も散る。
- (四五) 榮えた者はかならず衰へる憂世の姿を自ら親しく體験して。昔公左遷の時の詩に「一榮一落是春秋」底本「一榮」と誤る。
- (四六) 逃げのびて行く。一落の縁語。
- (四七) 天武天皇。
- (四八) 明治に弘文天皇と謚された。
- (四九) 花の散る木蔭。
- (五〇) 私は漚のやうに落ちて行くのだ。落ちては漚浪は返るのだが私は歸ることはない。「落ち」と漚浪と「返る」とはおのおの縁語。
- (五一) 頼みとする木蔭には花の雪が降り、雨もなほ出ることが出来ず、風は奥山を騒がす春の夜。平家物語長門本延慶本・源平盛衰記卷三十一卷四十八・謡曲朝長などに見

二人下へ扱も判官は凶徒に准せられ、同へすでに討手むかふと聞えしかば、小船にとりのり、渡邊神崎より、押し渡らんとせしに、海路心にまかせず難風吹いて、もとの地に着きし事、天命かと思へば、二人下へ科なかりしも、同へとがなりけるかと、身をうらむるばかりなり。(クセ)下へ去程に、次第へに道せばき、御身と成りてこの山に、分け入りたまふ比は春、ところは御芳野の花にやどかる下臥も、のどか、ならざる夜あらしに、ねもせぬ夢と花もちる。まことに、一榮一落、まのあたりなる憂世とて、又この山を落ちてゆく。二人上へむかし、淨見原の天皇、同へ大どもの王子におそはれて、彼山にふみ迷ひ、雪のこかけを、憑み給ひける、櫻木の宮、神のみやたき、西河の瀧、われこそ落ちゆけ、おちても浪はかへるなり。去にてもみよしの、たのむ木蔭の花の雪、雨もたまらぬおく山の、音騒がしき春のよの、月はおぼるにて、猶あし引の山深み、分けまよひゆく有さまは、二人上へもろこしの、搦搦ははなに身を捨て、同へ遊子残月にゆきしも、今身のうへにしら雪の、花をふんでは、おなじく惜しむ少年の、春のよも静ならで、騒がしきみよしの、山風にちる花までも、追手の聲やらんと、跡をのみみよし野の、奥ふかく急ぐ山ぢかな。

える「頼む木の本来雨たまらず」との當時の比喩を用いた修辭。

(五三)山が深いので足を引きずり引きずり。足引は山の枕詞だが疲れた足を引きずる意をも含む。

(五四)唐の祚國が花に心を取られ崖から落ちて死んだとの故事。出典不明だが番外謡曲祚國に見える。

(五五)朗詠に、遊子猶行_ニ於_ニ残月_一。遊子は旅人、残月は明月。

(五六)「知る」の掛詞、花の序詞。(五七)朗詠白樂天の詩、踏_レ花同惜少年春により春の序詞とした。

(五八)「見る」の掛詞。

(五九)進まない。「疾く疾く」の縁語。(六〇)舞の袖を「返す」の掛詞。

(六一)裏に通じ「袖を返す」の縁語。(六二)伊勢物語に見える「古の賤の小環云云」の歌の初句を變へて舞のときに靜御前が詠つた歌。東鑑・義經記卷六などに見える。第二句までは繰り返しの序詞。

(六三)義經の自害した所。衣と裏に普通の「恨み」及び身とは縁語。

(六四)物の掛詞、「名をば沈めぬ」の縁語、「物毎」_トと頭韻。

(六五)松風靜かの意を掛ける。

上へそれのみならずうかりしは、頼朝に召出され、靜は舞の上手なり。とくくと有りしかば、こころもとけぬ舞の袖、返すくもうらめしく、むかし戀しき時の和歌。二人下へしづや、しづ。(序之)舞。(ワカ)上へしづやしづ、賤のをだ巻、くり返し、同へむかしを今に、なすよしもがな。

二人下へおもひかへせば、いにしへも、同へく、戀しくもなし、憂きことの、今もうらみの、衣川、身こそは沈め、名をばしづめぬ、二人下へものもの、同へ物ごとく憂世のならひなればと、思ひかへせば山ざくら、雪に吹きなす花の松かぜ、しづかがあとをとひ給へ、しづかが跡をとひ給へ。

- (一) 敬愛。
- (二) 「様々に」の音讀。
- (三) 懇に大切にしていられ。
- (四) 世話をさせなさいました。
- (五) 駿河國安倍郡にある宿驛。長は遊女を置いてゐる宿舎の女將。
- (六) 底本「ゆふに」。
- (七) 雨のなかを琴を持つて訪れるこの有様は催馬樂の東屋の風情であらう。催馬樂東屋「東屋のまのあまりの雨そそぎ我立ち濡れぬその殿戸開かせ」「音づる」は「琴の音」の縁語。東屋には東國の意を寓してゐる。
- (八) 世の榮枯盛衰を喩へた秋の夜長物語・謡曲敦盛等にも見える語。
- (九) 「見ても」と重衡とにかかると。
- (一〇) 昔は雲の上人であつたが、思ひも寄らぬ運命に翫ばれて。「懸け」は「懸け」に通じ雲の上の縁語。
- (一一) 舟に乗つて見、海上に漂ふといふつらい目を、海を去つて陸地に着けば囚はれの身といふやうな外でもない元通りのつらい境遇になつたとは恨めしいことだなあ。「寄る邊」は浪のおよび舟の。「歸る」は浪のおのおの縁語。
- (一二) 都にさへも留ることが出来な

千 壽 (千手)

シテ……………千壽の前

ツレ……………平重衡

ワキ……………狩野介宗持

わき詞 「是は鎌倉殿の御内に仕へ奉る狩野のすけ宗持にて候。扱も相國の御子三位の中將重衡の卿は、囚人となり鎌倉へ御下向候を、某あづかり申して候。此しげひらの卿と申すは、相國の末の御子とは申しながら、父母の寵愛一門の賞翫ならびなき人にて渡り候。やう／＼にいたはり申せとの御事により、昨日も御湯ひかせ申し候に、千壽の前をつかはされ价錯せさせ申され候。此千壽のまへと申すは、手越の長が娘なるが、優にやさしく候により、御身近く召しつかはされ候を、頼朝よりつかはされ候事、誠に有がたき御心ざしにて候。けふは又雨ふり御つれ／＼に御座候程に、酒をすすめ申さばやと存じ候。

いで涙が止め度なく流れるのは痛
ましいよ。「止めぬ」は「都にだ
にも」と御涙とにかかる。

(三)信夫に普通の忍ぶの枕詞。

(四)悲しさを堪へることが出来な
いやうな音を立てて雨が降りしき
るときは、心も千千に亂れ滅入つ
て涙で袖が萎れるのだが、その淋
しい風情までも今日の夕暮の趣に
類似してゐるよ。露と「散り散り」
および「萎る」「花と「萎る」およ
び色とはおのおの縁語。

(五)槿(むくげ)の花が一日限りで

しほむといふ盛りの短い譬へ。朗
詠白樂天の詩に槿花一日自爲榮
(六)かげろふは朝生れて夕に死ぬ
ところからはかなない譬へに出し
た。淮南子説林訓に蜉蝣朝生暮死

(七)蘇武。胡國に捕虜となつたが
操を全うし遂に歸ることを得た漢
の忠臣。前漢書以下諸書に見える。

(八)底本「故國」と誤る。

(九)平家物語卷二蘇武の事の條に

「昔は巖窟の洞に籠められて」

(一〇)金春と喜多は揚李、金剛は廣
利とあるが、最近觀世で改めたと
うに蘇武を救つた人として前漢書
今昔物語などに記されてゐる衛律

(次第) して次第へ琴のねそへて音づるる、琴のねそへて音づるる、是やあづ

まやなるらむ。さしこ多へ夫春の花の樹頭に榮え、秋の月の水底に沈むも、世

のはかなさの有様を、みても哀やしげひらの、其いにしへは雲のうへ、懸けて

もしらぬ身の行方、浪にただよひ舟にうき、さらばよるべのよ所ならで、有り

しにかへる、恨みかな。下(歌)へ都にだにもとどめぬ、御涙なるをいたはし

や。上(歌)へ陸奥の、忍ぶにたえぬ雨の音、く、ふりすさびたる折しもは、

思ひの露もちりくくに、心の花もしほくと、しほるる袖の色までも、けふの

ゆふべのたぐひかな、けふの夕の類かな。詞「いかに誰か御いり候。わき「誰

にて渡り候ぞ。や。千壽の前の御参りにて候。して「参りたる由御申し候へ。わ

き「それに御待ち候へ御機嫌をもつて申し候べし。

重衡へ身は是槿花一日の榮、命は蜉蝣のさだめなきにたり。心はそぶが胡

國にとらはれ、岩窟の内に籠められて、君邊を忘れぬ心ざし、それはやうりが

はかりごとにて敵をほろぼし舊里にかへる、我はいつとなく敵陣に籠められて、

縲紲の責をうくる。しらずけふもやかぎりならん。あら定なや候。わき「いか

に申し候。千壽の前の参られて候。重「何と千壽の前、只今は何の爲候ぞ。よ

の誤りらしい。平家物語延慶本長門本では永律となつてゐるから、これを「やうりつ」と誤讀した結果ではなからうか。

(二)何時までも。

(三)細目の辱しめ。

(三)底本「ましひ」

(四)御遠慮なさるゝのは尤もだが。

(五)御簾の中の重衡が衣に薫きしめてゐる香の匂ひが匂つて来る。

(六)美しい都人に。花は風の縁語。

(七)東國の果てまでも人情は厚く、その厚い人情こそ都の氣分を味はせるものだ。都で春の花秋の紅葉と楽しんでことよりも、この東人の情こそ思ひ出となるだらう。「奥深き」と東、都と花とはおのおの縁語。

(八)假初に。それとなく。

(九)出家することの許可。

(一〇)金春流だけは「しが」と濁る。

(一一)底本「をしはかり」

(一二)どんなにか。随分。

(一三)願つてもその甲斐のない。

(一四)討ち死する筈の身。「一の谷」

「生捕られ」など頭韻。

(一五)父清盛の命で治承四年十二月に奈良を焼打したことを指す。

しゝ何の爲なりとも、けふの對面は叶ふまじい由いひて御歸し候へ。わき

「御參のよし披露申して候へば、何とおぼしめされ候やらん。けふの御對面は

かなふまじい由仰せ出されて候。して「是は思ひの外なる仰せかな。是も私に

あらず、雨のうち慰め申せとの、頼朝よりの仰せにて、琵琶こと持たせて参り

たり。其よし心得て御申しさふらへ。わき「さらば其由重而申し候べし。御定

の趣千壽のまへに申して候へば、是もわたくしにあらず。雨の中を慰め申せと

の、頼朝よりの仰せにて、びはこと持たせて参りたり。よし〱御憚はさるこ

となれども、へただこなたへと請ずれば、してへ其時千壽立ちよりて、同上(歌)

へ妻戸を、きりりと押しひらく。みすの追かぜ匂ひくる、花の都人に、恥かし

ながらみみえん。げにや、東の果しまで、人の心の奥ふかき、其情こそ都なれ。

花のはる紅葉の秋、たがおもひでと成りぬらん。

重「いかに千壽の前。して「御まへに候。重「扱々きのふ白地に申したりし、

出家のいとまの事きかまほしうこそ候へ。して「其由申して候へば、御身は朝

敵の御事なるを、只かり初に預り申しながら、私として出家をゆるし申さんこ

と、思ひもよらずとこそさふらひしか。下へわらはも御心のうち推しはかり参

(三〇) 現當は現世と當來の意だが、こは現世の罪の報を現世で果たす事は前世の罪の報を現世で果たす事よりも猶恥かしいとの意。
 (三一) 花は次の春・「移り」の縁語。
 (三二) 「身の程を」と「世は憂し」との上下にかかる。
 (三三) 「憂し」の掛詞、唐衣の序詞。
 (三四) 業平が三河の八橋で都の妻を忍んで詠んだ古今・伊勢などに見える歌「唐衣着つつ馴れにし妻しあれば遙遙來ぬる旅をしぞ思ふ」馴れ親しんだ妻のある都を離れてはるばる來た旅をつらく思ふ結果衰弱したつらい我が身の成れの果てははかないことだの意。「唐衣着つつ」は「馴れ」の序詞。
 (三五) 前の歌の詞書の「そこを八橋といひけるは水行く川の蜘蛛手なれば云云」によつて蜘蛛手の序詞とした。水は憂身の縁語。
 (三六) 蜘蛛の手のやうにあれこれと千々に思ひ亂れようとは豫想しなかつたことで、そのときに思ひがけないお情けに預ることはかへつて恨めしいやうだ。「懸け」は橋の縁語。情・中中・「なるる」「なるらむ」は頭韻。

らせて、いかほどこま／＼と申し參らせてこそさふらへ。甲斐なき出家の御望
 みいたはしうこそ候へ。重「口惜しや我一の谷にていかにも成るべき身の生捕
 られ都にのぼり、面をさらすのみならず、今又東の果までも、かやうに恥をさ
 らすこと、下へ前世の報といひながら、又思はずも父命により、佛像をほろぼ
 し人壽をたちし、現當の罪をはたすこと、前業より猶はづかしうこそ候へ。し
 てへ勝々^{せつせつ}是は御理^{ごり}去ながら、かかるためしはいにしへ今に、多き習ひと聞く
 物を、ひとりとな歎き給ひそとよ。重へげによく慰め給へども、たぐひはあら
 じ憂身のはて、してへきのふは都の花と榮え、重へけふは東の春にきて、して
 へ移りかはれる、重へ身のほどを、同上(歌)へ思へただ、世は空蟬のから衣、
 へ、きつつ馴れにしつましある、都の、雲を立離れ、はる／＼きぬる、旅、
 をしぞ思ふ衰への、憂身の果ぞはかなき。水、ゆく河の八橋や、くもでに物を
 おもへとは、懸けぬ情の中へに、なるるや恨みなるらん、なるるや恨なるら
 む。

わきへけふの雨中の夕の空、御つれ／＼をなぐさめんと、樽をいだきて参り
 つつ、既酒宴をはじめんとす。してへ千壽も此よしみるよりも、御酌にたち重

- (四三)遠慮も薄らいで。
 (四四)盃を受けて。朗詠曲水の宴の賦に、牽流流過手先遮。
 (四五)あさあどつそ何なりとも。
 (四六)朗詠菅公の詩、羅綺之爲三重衣、妬無情於機婦。薄物の絹も美人には重さうなので、それを織つた機織女の不親切を恨むとの意
 (四七)底本「あやし」
 (四八)底本「らうあひ」
 (四九)北野天神、すなはち菅原道真。
 (五〇)以下二句現行諸流「重衡詠ふ」底本「重」の註記を脱したか。
 (五一)朗詠、雖十惡一分猶引擗。十惡の罪人も猶極樂に引き擗るの意
 (五二)「盡き」の掛詞。
 (五三)「聲立てて」の縁語、「牡鹿の」まで角に普通の「津の國」の序詞
 (五四)生田の縁語。
 (五五)森の下吹く風で木の葉の露が落されるやうに攻落されたのは、森と生田、露と哀れは各々縁語。
 (五六)一句隔てた「引かん」の枕詞。
 (五七)淀川の鯉。「生捕られ」の序詞。淀は世に普通で「遁れかねたる」と縁語。
 (五八)川越小太郎重房。淀鯉の縁語。
 (五九)後撰「神無月降りみ降らずみ

衡の、御前にこそ参りけれ。重へ今はいつしかはばかりの、心ならず思はずも、手先さへぎるさかづきの、心ひそかに思ふ思ひ、わきへそれいかに何にても、御着にとすすむれば、してへ其時干壽とりあへず、羅綺の重衣たる、なさけなき事を機婦に妬む。三人下へ只今詠じたまふ朗詠は、かたじけなくも北野の御作、此詩を詠ぜば聞く人までも、まもるべしとの御誓なり。去ながら重衡は今生の望みなし。ただ來世の便こそきかまほしけれとのたまへば、して下へわらは仰をうけ給はり、上へ十惡といふとも引擗すと、同へ朗詠してぞ、かなでける。(イロヘ)

(クリ)上へさても彼重衡は相國の末の御子とは申せども、兄弟にも勝れ一門にもこえて、父母の寵愛、かぎりなし。してさしこゑへされども時うつり平家の運命ことごとく、同へ月のよすがらこゑたてて、啼くやをしかの津の國の、生田の河に身をすてて、防ぎたたかふと申せども、して下へ森のしたかぜ木の葉の露、同へおとされけるこそ、哀なれ。(クセ)下へ今は梓弓、よし力なししげひらも、ひかんとするに何方も、網を置きたるごとくにて、遁れかねたる淀鯉の、生捕られつつ河ごえの、重房が手にわたり、心の外の都いり。して上

定めなき時雨ぞ冬の始なりける」
古今「神無月時雨降りおける楳の葉の名に負ふ宮のふる事ぞこれ」の二首を用ひて奈良の序詞とこれ(六)奈良の僧徒の手に渡つたならば有無を言はず殺される身が、殺されもしないで。萬葉「奈良山の兒手柏の二面にかにもかくにも倭人の友」を室町時代に「奈良坂や兒手柏の二面とにもかくにも倭人かな」と詠つた歌を引いた。(六)蜘蛛手に普通の雲居の序詞にもなつて居る。

(六)「見む」の掛詞、八橋の縁語。(六)「遠く」の意を含む。底本「とをたうみ」

(六)「開け」に通じ箱根と星月夜との連絡語。星月夜は鎌倉の枕詞。(六)馴れるとこでも物哀れにも昔を思ひ出させるやうな戀妻千手との人目を忍ぶ契りも出來た。(六)朗詠、燈暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲。重衡を項羽に千壽を虞美人に擬した。底本「暗ふ」(六七)どういふ心境で。(六)心配の色も雪に出たやうだ。(六)涙を流して雪の降るやうに美しく舞ふ廻雪の舞ひも。

へげにやよの中は、同へ定めなきかな神無月、しぐれ降り置くなら坂や。衆徒の手にわたりなば、とにもかくにも果てはせで、又鎌倉に渡さるる、爰はいづくぞ八橋の、くもゐの都いつか又、三河の國や遠江、あしがら筈根うち過ぎて、あけもやすらん星月夜、かまくらやまにいりしかば、憂きかぎりぞと思ひしに、なるれば爰もしのびねに、あはれむかしを思ひづまの、ともし火暗うしては、數行虞氏が涙の、雨さへしきる夜の空、して上へ四面に、楚歌のこゑのうち、同へ何とか返す舞の袖、おもひの、色にや出でぬらん。涙をそへて廻らすも、雪のふるえの、かれてだに花さく、千壽の袖ならば、重ねていざやかへさん。

下へ忘れめや。(序之)舞。して(ツカ)上へ一樹の陰や一河の水、同へみな是他生のえんといふ、白拍子をぞ、うたひける。

重下へ其時しげひら、興に乗じ、同下へ、びはを引きよせ、たんじたまへば、又玉ごとの、緒あはせに、して下へあはせてきけば、同へ嶺のまつかぜ、かよひきにける。琴をまくらの、みじか夜のうたたね、夢もほどなく、しのめもほのくと、明けわたる空の、して下へあさまにや成りぬべき、同へあさ

- (七〇)今様に「萬の佛の願よりも千手の誓ぞ頼もしき。枯れたる草木も忽に花咲き實なると説い給ふ」千手觀音を千手の前に言掛けた。「降る」に普通の古枝は雪の縁語。(七一)説法明眼論、宿二「樹下」汲三「河流」(中略)皆是先世結緣。(七二)拾遺「琴の音に峯の松風通ふらし何れの緒より調へ初めけむ」(七三)諸本みな「ける」(七四)あらはになつて恥かしい意の「あさま」と朝との掛詞。(七五)後朝の別れを思へば却つて契つたことも恨めしい。(七六)別別に。袖の縁語。(七七)袖および涙の縁語。(七八)涙の縁語。

まにや成りなんと、酒宴を止め給ふ、御こころの内ぞいたはしき。

へかくてしげひら勅により、く、又都にと有りしかば、もののお守護し出でたまへば、してへ千壽も、なくくたち出で、同へ何中くのうき契り、早きぬくに引きはなるる、袖と袖との露なみだ、勝、しげひらの有さま、めもあてられぬけしきかな、目も當てられぬけしきかな。

(一)底本「せうすひ」田本「瀟水」
整本による。湘水の誤りらしい。
(二)田本「居住の僧にて候」
(三)底本「とつきやう」整本田本
による。

(四)田本「栖を」

(五)底本三峽、整本田本による。
(六)底本「上」脱。整本田本で補ふ。

(七)法華經に、寂寞無人聲、讀誦
此經典。隨つて此御經は法華經。

(八)音高い松風も芭蕉に吹き落ち
て徒らにその葉を破ることだら
う。「破る」は芭蕉の縁語。夫木抄

の「風吹けば仇にやれ行く芭蕉葉
のあはれと身をも頼むべき世か」
の歌の心。この歌山家集・西行法
師家集にも見える。

(九)百聯抄解、風射破窓、燈易
し滅、月穿疎屋、夢難成。

(一〇)「知らむ」の掛詞、「古り」の
序詞。

(一一)底本「下」脱。整本田本で補ふ。

(一二)底本の「哀なる」と重韻。

(一三)容易に逢ひ難い甚深微妙の法
華經に心を打ち込むのでなかつた
らどんなにしても徒勞で、花のや
うな錦の唐衣を着る富貴の身分で
も悟はよもや開かれまい。色・花・

芭蕉

前シテ……………女(芭蕉の化身)

後シテ……………芭蕉の精

ワキ……………楚國の山居の僧

狂言……………楚國の者

僧詞「是はもろこし楚國のかたはら小水と申す所に山居する僧にて候。我讀
經の身なれば毎日怠ることなし。ことさら今は秋の半月のよすがら怠らず候。
爰に讀經の折節いほのあたりに人音の聞え候。今夜も來り候はば名をたづねば
やと思ひ候。さしこそ既夕陽にしに移り、山峽の陰すさまじうして、鳥のこ
ゑ幽に物すごき、上(歌)へゆふべの空もほのくと、月になりゆく山陰
の、寂寞たる柴の戸に、此御經を讀誦する、この御經をどくじゆする。」

「染め」・唐衣・「衣の玉」などは一連の縁語。法の花に法華の字を隠す。「いかか」と「いたつら」とは頭韻。「衣の玉」は法華經に見える悟りの譬喩。

(四) 賤しいわが身は見すばらしい袂も涙の露に濡れ勝ちで、年月は移り過ぎ廻り廻るけれどもつらく泡のやうに果敢なく、ああ昔の秋も今はない。草は露の縁語だが主人公の芭蕉であることを暗示。うたかたは「憂し」の掛詞「哀れ」の枕詞。

(五) 田本「さても」の句入る。

(六) 田本「おこたる事なき折節に」

(七) 佛道に縁を結ぶこと。

(八) どっせ。

(九) 今は何を憚ることがあらう。

田本「何をか今ははばかりの」

(一〇) 「憚り」と「草の庵」との連絡語。

(一一) 僅かの間でも露は草の縁語。

(一二) 普通の人でない。男でない。

(一三) 整本「せうすい」田本「瀟水」

(一四) 同じ洗を汲む身だとさへも御存知ないそのあなたとは前世からの宿縁のある私、だからあなたとて同じ樹蔭の庵の内をば惜しみな

(次第) して次第へ芭蕉に落ちて松のこゑ、芭蕉におちてまつマツの聲、あだにやかぜも破るらん。さしこゑへ風破窓かざやまを射て灯あかりきえ安く、月疎屋つきそくをうがちて夢なりがたき、秋のよすがら所から、物すさまじき山陰に、住むともたれかしら露の、ふりゆく末ぞあはれなる。かかる下したへ哀あはれなるも山がつの、友こそ岩木なりけれ。上うへへ見ぬ色の、深きや法の花ごころ、く、染めずはいかがいたづらに、其からきぬのにしきにも、衣の玉はよもかけじ。草くさの、袂も露なみだ、移るもすぐるとし月は、めぐり廻れどうたかたの、哀あはれむかしの秋もなし、哀昔あはれの秋もなし。

わき「我われどくじゆのこゑこゑ怠たらざる折節せつに、女人の月にさだかに見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。して「是は此あたりに住む者なるが、さも逢あひがたき法のりを受け、花を捧げ禮をなし、結縁けつ縁をなすばかり也。下へ逆さかすがたを見え参まゐらすれば、今は何をかはばかりの、言ことの葉草の庵りの内を、露つゆのまなりと法の爲は、結縁にかさせ給へとよ。わき「勝勝法しょうしょうのけちえんは、誠に切なる御事なれども去きながら、なべてならざる女人の御身に、いかでお宿しゆくを参まゐらすべき。して「其御心はさる事なれども、よそ人ならず我われも又、栖すまはここぞ小水こみづの、

さるまいな。説法明眼論に、宿^二一
樹下^一汲^二一河流^一。皆是先世結緣。
三^二月も假寝を結ぶ^一はかない宿を
惜しまず照らすだらう。

(二六)「古る」を掛ける。

(二七)崖下の寺の古さに愁ひの心が
慰められ、山路の深さに魂が感傷
になる。底本「たましる」詩本
「神」田本「玉しる」杜甫の註に

「神傷^二山行深^一愁破^二崖寺古^一」

(二八)朗詠白樂天の詩、蘭省花時錦
帳下、廬山雨夜草庵中。蘭省は中
央政府の尙書省。

(二九)田本「たのもしく」

(三〇)一心に心から喜んでの信心。

(三一)底本「女人」脱、整田本で補ふ。

(三二)法華經の藥草喻品が出来て。

(三三)萬物はそのまま眞理だとの哲
理。

(三四)「身」の掛詞。

(三五)峯の嵐や谷の水音も佛事の聲
と見立てた。

(三六)「心も澄む」の序詞。

(三七)朗詠、脊^二獨共隣深夜月^一。

(三八)心に憐みを持つたままで迷界
から脱け出る道なのだ。「思ひの
家」には火宅の語を隠してある。
(三九)自然の姿を實相と悟ること。

わき^二へおなじながれを汲むとだに、しらぬ他生の縁による。して^一へ一樹の陰
の、わき^二へ庵^一の内は、同上(歌)へ惜^二しまじな、月もかりねの露の宿、く、
軒も垣^二ほも古寺^一の、うれひは、崖^二寺^一のふるにやぶれ、魂は山行の、深きに痛ま
しむ、月の影もすさまじや。誰かいつし、蘭^二省^一の花のとき、錦帳のもととは、
ろさんの雨の夜、さうあんの内ぞ思はるる。

わき「あまりに御心ざしふかければ、御經どくじゆのほど内へ御入り候へ。
して「有がたや此御經を聽聞申せば、我等ごときの女人ひじやうさうもくのた
ぐひ迄^二た^一のもしうこそ候へ。わき「勝^二よく御聽聞候物かな。只一念隨喜の信
心なれば、一さいの女人^三ひじやうさうもくのたぐひまでも何の疑ひか候べき。
して「扱^二は取分有難^一や。扱々草木成佛の、謂^二を猶^一もしめしたまへ。わき^二へ藥草
喻品^一あらはれて、草木國土有情非情も、みな是諸法實相の、して^二へ嶺^一のあらし
や、わき^二へ谷の水音、二人^一へ佛事^二をなす^一や寺井^三の底の、こころもすめる折から
に、同上(歌)へ^二ともし火^一を、そむけてむかふ月のもと、く、共に憐^二む深き夜
の、心をしるも法^一の人の、をしへの、ままなる心こそ、思^二ひの家^一ながら、火宅
を出づる道なれや。されば、柳^二はみどり、花^一はくれなゐとしる事も、只其儘の

蘇東坡の詩、柳綠花紅眞面目。

(四〇)「ろんぎ」整本・田本で補ふ。

(四一)「知る」の掛詞、「解く」の序詞。

(四二)「有る」の掛詞、「末の闇路」の縁語。

(四三)王摩詰が偽つて雪中の芭蕉を畫いたとの筆談畫評・事文類聚などに見える故事により「偽れる」の序詞とし、自ら芭蕉の精であることを暗示した。雪は「庭の面」にもかかる。

(四四)鐘の音が諸行無常と鳴り響くうちに女の姿は消え失せてしまつた。「鳴り」は「成り」の掛詞。

(四五)芭蕉を吹く風が通つてくるやうだ。

(四六)妙法華の字を隠す。

(四七)芭蕉が逢ひ難い佛法に逢ひ得た意。法華經に、佛難し得し值如く優曇波羅華。

(四八)佛法の功德の喩。雨は露・恵みの縁語。

(四九)人に姿を變へてきたが、實は花も咲かない芭蕉で、露置きまさら

いろかの、草木も、成佛のこくどぞ、成佛の國土なるべし。

ろんぎ^{四〇}上へふしぎや扱も愚かなる、女人とみるにかく計^{はかり}、法の理^{ことわり}しら糸

の、とくばかりなるころかな。してへ中々に、何うたがひか有明^{あり}の、末の

闇路をはるけずは、今、あひがたき法をうる、身とはいかが思はん。同へ勝逢^{せつぽう}

ひがたき法にあひ、受けがたき身の人界を、してへうくる身ぞとやおぼすら

む。同へ恥かしやかへるさの、道さやかにもてる月の、影は、さながら庭の面

の、雪^{ゆき}の中の芭蕉^{うらち}の、いつはれるすがたの、まことをみえばいかならんと、思

へば鐘^{かね}の聲、諸行無常と鳴りにけり、諸行無常と鳴りにけり。(中入。狂言、雪

中の芭蕉の偽りといふ故事、芭蕉を奏者草と呼ぶ由來などを語る)

わき「扱は只今の女人は雪の中の芭蕉の、いつはれる姿と聞えしは、疑ひも

なき芭蕉の女と顯はれけるこそへふしぎなれ。(待謔)上へただ是法の奇特ぞ

と、く、思へばいとど夜もすがら、月もたへなる庭のおも、かぜの芭蕉やつ

たふらん、風の芭蕉やつたふらん。(一聲)後して下へあら物すごの庭のおもや

な、あら物すごのにはのおもやな。さしこゑへ有難^{ありがた}や妙^たなる法の教には、あふ

こと稀なる優曇^{うとんげ}花の、はなまちえたる芭蕉^{はな}ばの、みのりの雨もゆたかなる、露

る古庭や野原山陰に生えてゐる日蔭の身だ。「移る」と花、芭蕉と露とは縁語。「ふり」は「降り」と「古り」の掛詞。

(五〇) 意識的に枕にしたといふわけではないが松の根に倚りかかつてうとうとしてゐるときに、「松が根」は「顯れ」の序詞でもある。(五一) 底本「せむ」整日本による。(五二) 芭蕉が女になれないとの掙。(五三) あらむの掛詞、土の枕詞。(五四) 自分でゐるのつかない。法華經藥草喻品に、所_レ得功德不_二自覺知_一。

(五五) 「上」整本で補ふ。

(五六) さうでなくともはかないのに衣の色も薄く、露草の花で染めた破れ易くて袖が綻びてゐるのにも恥かしい。田本「おころひ」と誤る。(五七) 姿形を超越した眞實の本體。(五八) 微塵にも萬有の世界を蔽してゐるといふ心の上に。圓悟錄、「塵含_二法界_一」。底本「ちんほうかひのしんち」整本による。(六〇) 草木が供養のために一枝の花を開くのも佛法の妙理を顯すのだ(六一) 往生講式、一花開天下皆春。

芭蕉

のめぐみをうくる身の、人衣ひとえのすがた御覽ぜよ。一聲へかばかりは、移うつりきぬれど花もなき、同へ芭蕉の露の、ふりまさる、して下へ庭のもせやまかげのみぞ。

わきへねられねば枕まくらともなき松がねの、顯はれ出づるすがたを見れば、有りつる女人のかほばせ也。さもあれ御身はいかなる人ぞ。して「いや人とは恥かしゃ。まことは我は非情の精こころ、芭蕉の女と顯はれたり。わきへそもや芭蕉の女ぞとは、何の縁にかかたる女體の、身をばうけさせ給ふらん。して「其御不審は御誤、何かさだめはあらかねの、わきへ土も草木くさきもあめよりくだる、してへ雨露のめぐみを請けながら、わきへ我われとはしらぬ有情非情も、して「おのづからなる姿と成つて、わきへさも愚かなる、してへ女とて、同上ご上(歌)へさなきだに、あだなるに芭蕉の、女のきぬは薄色うすいろの、花染ならぬに、袖の、ほころびも恥かしゃ。

(クリ) 上へ夫非情草木それといつば、まことは無相眞如むさうしんこの體、一塵法界いちじんぽうがいの心地こころのうへに、雨露霜雪の、かたちを見す。してさしこゝ多おほければ一枝いちしの花をささげ、同へ御法の色をあらはすや、一華ひとひらけて四方よもの春、のどけき空の日影をえ

(六三)色香に執着した心までも、萬有がそのまま眞理の姿だとの哲理に變りはない。

(六四)宋の蘇麟の詩、近水樓臺先得月、向陽花木易逢春。

(六五)新續古今永助法親王の御歌「秋來ての風の宿りはここにのみ有り」とやそよぐ庭の萩原」

(六六)それそれこのやうな秋が來たと。「そよぐ」と頭韻。

(六七)「軒の草」は「忍ぶ草」の縁で「忍ぶ」の序詞となる。

(六八)「有らじ」の掛詞。

(六九)嵐の音だけでもろくも落ちる芭蕉葉の露、その露のやうなはかない身は置きどころもなく、住みきれないほどに蓬の下で鳴く蟲のやうな淋しい私の氣持は秋だからととどろいて變らう。露と「置く」は縁語。

(七〇)列子穆王篇に見えるところの、鹿を射て芭蕉で覆ひ隠したが、その隠し所を忘れ夢と思つたとの故事により、夢の序詞とした。小鹿もこの故事の縁語。

(七一)佛道に思ひ入る意を掛けた。金葉「戀ひわびて思ひ入るさの山の端に出づる月日の積りぬる哉」

て、楊梅桃李數々の、して下へ色香にそめるころまで、同へ諸法實相、へだてもなし。(クセ)下へ水にちかき樓臺は、先月をうるなり。陽にむかへる花木は又、春に、あふこと安きなる、其理もさまじくの、勝、めのまへに面白やな。春すぎ夏たけ、秋くる風の音づれば、庭の、萩はらまづ戦ぎ、そよかかる秋としらすなり。身はふる寺の軒の草、しのおとすれどいにしへも、花はあらしの音にのみ。芭蕉ばの、もろくも落つる露の身は、置き所なき蟲の音の、よもぎがもとのころの、秋とてもなどかかはらん。して上へよしや、思へばさだめなき、同へ世は芭蕉ばの夢の中に、をしかの、なくねは聞きながら、驚きあへぬ人心、思ひいるさの山はあれど、只、月ひとりともなひ、馴れぬる秋のかげの音、うきふししげきをざさ原、しのに、物おもひ立ちまふ、袖しばしいざやかへさん。

して下へ今宵は月も白妙の、同へ氷のころも、霜のはかま。(序之)舞。して(ワカ)上へ霜のたて、露のぬきこそ、弱からし。同下へ草のたもとは、して下へ久方の、同下へ久方の、天津をとめの、はごろもなれや。してへ是も芭蕉の、は袖をかへし。同へ返す袂も、芭蕉のあふぎの、風ばうくと、ものすこ

(七二) 繁くの意の「しのに」の序詞。
「ふし」は笹・篠の縁語。

(七三) 月光で衣や袴が氷や霜のやうに見える意。衣は白妙の縁語。

(七四) 古今「霜の経露の緯こそ弱からし山の錦を織ればかつ散る」

(七五) 天の枕詞。

(七六) 芭蕉が風にはためくのを扇に見立てた。李義山の詩、芭蕉開_二線扇_一。

(七七) 影を露に寫す僅かの間に女の面影も見えなくなつて。

き古寺の、庭のあさぢふ、をみなへしかるかや、面_かかけうつろふ露のまに、山
おろし松のかぜ、ふき拂ひく、花もちくさも、散々に、花も干草_{くさ}も、ちり
くになれば、芭蕉はやぶれて、残りけり。

定家

前シテ……………女(式子内親王の化身)

後シテ……………式子内親王の靈

ワキ……………北國の僧

ワキツレ……………從僧(二人、なしにも)

狂言……………都千本の者

(一)北山の方から降つて来る時雨は、北國から来た私と同じやうに行方も定まつてゐないだらう。
 (二)冬になるとともに旅仕度をして朝早く。「立つ」は「裁つ」に通じ、旅および衣の、朝は麻に通じ衣の縁語。
 (三)散り残つた紅葉に花のやうな美しい眺めが未だ残つてゐる美しい都に着いたのであつた。
 (四)田本「來りて候」
 (五)底本田本とも「おもしろふ候」
 (六)通りすがりの偶然の縁ながら讀經して下さつて。
 (七)時雨に感興を催したといふ宿で詠んだ歌はどの歌なのだらうか(八)どの歌とも定まつてゐない。定めなく降る時雨の季節は毎年訪れるのだから、取り立ててこの宿で詠んだ歌がそれだとは言ひ難い(九)拾遺愚草に、時雨知し時私家と詞書して「偽のなき世なりけり

(次第) 僧次第「山より出づる北時雨、山よりいづるきたしぐれ、行方や定なかるらん。詞「是は北國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に、只今都へのぼり候。(道行)上へ冬たつや、旅の衣の朝まだき、く、雲も行きかふ遠近の、山復山をこえすぎて、紅葉にのこるながめまで、花の都に着きにけり、花のみやこに付きにけり。詞「漸急ぎ候程に、是は上京とかや申し候。おもしろや比は神無月十日あまり、木々のこずゑも冬がれて、枝に残のみみち

神無月誰が誠より時雨初めけむ」
 (一〇)この世は嘘の多いものだと思つてゐたのは誤りで、嘘のない世の中だつた。神の留守といはれてゐる神無月に於ても誰の誠かはれたものか例年通り誤りなく時雨初める。神無と偽、神と誠とは縁語。
 (一一)全く時雨は偽りのないもので定家の亡き現在も舊跡は残つてゐるのだが、人の命は果敢ないもので、その果敢ない昔のことを。
 (一二)説法明眼論、宿^二樹下^一汲^二一河流^一……皆是先世結縁。
 (一三)今降る時雨も昔通りの時雨、宿も昔通りの時雨の亭(ちん)で、その亭に住んでゐた心の清い主人の風雅を知るにつけてもこの世は夢のやうに果敢ないもので。「降る」は「古る」の掛詞、昔の縁語。「澄み」は「住み」の掛詞。
 (一四)誠に無常なことだ、定家の舊宅の軒端に降る夕暮の時雨を眺めてゐると、昔に歸る心地がして涙が催されるよ。定家は定めなやと頭韻、家の掛詞。「古き」は「降る」の掛詞。
 (一五)何處が庭だか籬だかはつきり區別がつかないまでに。

定 家

の色、所とこの有様までも、都のけしきは一入いとしほの、眺ことなる夕かな。や。時雨が降り來り候。是なるやどりに立ちよりしぐれを晴さばやと思ひ候。

して「なう／＼其やどりには何とて立ちよらせ給ふぞ。わき「さん候唯今の時雨に立ちよりて候。扱此所をばいかなる所と申し候ぞ。して「是は時雨のちんとてよしある所也。其心をもしろしめして立ちよらせ給ふかと、思へばか様に申し候。わき「勝むげ是なる額を見れば時雨のちんとかかれたり。折からおもしろう候。扱是はいかなる人の立て置かせ給へる所にて候ぞ。して「是は藤原のさだ家の卿の立て置かせたまへる所也。都の内とは申しながら心すごく、しぐれ物哀なればとて此ちんをたて置き、年々歌をも詠じさせ給ひしと也。下へ古跡といひ折からといひ、逆縁さか縁の法をもとき給ひて、彼御菩提をもお弔ひあれと、すすめ參らせん其爲に委しく教へ申すなり。わき「扱は藤原のさだ家の卿の立て置かせ給へる所かや。扱々しぐれをとどむる宿の、歌はいづれのこのはやらん。して「いや何とも定めなき、時雨の比のとし／＼なれば、分きてそれとは申しがたし去ながら、時雨時をしると云ふ心を、下へいつはりのなき世なりけり神な月、「たがまことより時雨そめけん。其こと書がきに私の家にて

- (一) 露に濡れたはかない宿も草木は枯れて多景色となつてゐて。
 (二) 底本、以下の墓の字總べて「墓」と誤る。田本で訂正。
 (三) 田本「ふしきやな是なる」
 (四) 田本「わかす候。さて是は」
 (五) お退きになつてゐられたが。
 (六) 二人とも邪淫の妄執に苦しんでゐるのですから、その二人を。あと「語り參らせ」にかかる。
 (七) 昔のことは忘れられないよ。その昔心の奥深く戀ひ人目を忍んで通つた戀路のはかない戀物語が人の噂に傳へられるとは無益なことだ。奥は陸奥の掛詞、信夫山は陸奥の歌枕だが「忍び」の序詞。道芝は戀路の道の意の掛詞、露の序詞。露は世の有心の序。世語には戀物語と世間の噂話との兩意を掛けてゐるやうだ。世と「よし」とは頭韻であり、またそれぞれ節(よ)・腹に通じ互に縁語。
 (八) 新古今式子内親王の歌。未句「弱りもぞする」玉の緒は命、「絶え」は緒の縁語、「忍ぶる事の弱る」は忍び隠さうとする心が弱ること。
 (九) 秋は飽の掛詞、弱るの縁語。

とかかれたれば、もし此歌をや申すべき。わきへげに哀なることのはかな。さしも時雨はいつはりの、なき世にのこる跡ながら、してへ人はあだなる古ことを、語れば今もかりの世に、わきへ他生の縁は朽ちもせぬ、これぞ一樹のかげのやどり、してへ一河の流れくみてだに、わきへ心をしれと、してへ折からに、同上(歌)へ今ふるも、宿はむかしの時雨にて、く、心すみにし其人の、あはれをしるも夢のよの、勝、さだめなやさだ家の、軒ばの夕時雨、ふるきにかへる涙かな。庭も、まがきもそれとなく、荒れのみまさる草村の、露のやどりもかれ。くに、物すごきゆふべなりけり、物すごき夕なりけり。

して「けふは心ざす日にあたりて候程に墓所へ参り候。そと御参り候へ。わき「それこそ出家の望む所にて候へ。さらば御供申し候べし。して「なうくは是なる石塔御らん候へ。わき「勝々是なるしるしをみれば、星霜ふりたるに蘿かづらはひ纏ひて形も見えわかず。是はいかなる人のしるしにて候ぞ。して「是は式子内親王の御墓にて候。蘿かづらをばていか葛と申し候。わき「あら面白やていかかづらとはいかなる謂にて候ぞ。して「式子内親王始めは賀茂の齋の宮にそなはりたまひ、程なくおりむさせ給ひしに、定家卿忍びく御

「秋の花薄」は「穗に出で」の序詞。
 「穗に出で」は人に知られる譬喩。
 (二五)拾遺「逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり」
 (二六)「袖」まで拾遺愚草の定家の歌。賀茂社頭での述懐とある。「山藍の袖」は山藍の汁で青く染め出した舞衣の袖の意で、「振り」に通の「古り」と縁語。年とつた身を山藍草が霜に朽ちたのに譬へた歌
 (二七)古今集伊勢物語などに「戀せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな」
 (二八)神の對語。定家との契の意。
 (二九)あだの掛詞。あだなると頭韻。
 (三〇)外聞。世間の噂。
 (三一)「多し」の掛詞。大方・空・日・雲と縁語を連ねた修辭。
 (三二)古今の「天つ風雲の通ひ路吹きとちよ少女の姿暫しとどめむ」の歌を用ゐて二人の仲が絶えたことを顯した。少女は内親王を指す。
 (三三)拾遺愚草に見える定家の歌。
 末句「嶺の白雲」
 (三四)雲・かづらの縁語。
 (三五)紅葉した葛のやうに戀慕の思ひに焦がれ執着して。
 (三六)戀にやつれて亂れた髪。底本

定家

契あさからず。其後式子内親王程なく空しく成り給ひしに、定家の執心かづらと成つて、此御墓にはひまとひて互のくるしみ離れやらず。下へとも三三に邪姪の妄執を、御經をよみ弔ひたまはば、猶々かたり參らせさふらはむ。

同(クリ)上へ三三忘れぬものをいにしへの、心のおくの忍ぶ山、忍びてかよふ道芝の露の、世がたりよしぞなき。してさしこゑ三三今は玉のをよ絶えなばたえねながらへば、同へし三三のぶることの弱るなる、心の秋の花薄、ほに出で初めしちぎりとして、又かれくの中となりて、して下へ三五昔は物をおもはざりし、同へ後三三のころぞ、果てしもなき。(クセ)下へ三五哀しれ、しもよりしもに朽ち果てて、世々にふりにし山あゐの、袖のなみだの身のむかし、うき戀せじと御秋せし、かも三三の、齋三三の宮にしも、備はりたまふ身なれども、神やうけずも成りにけん、人の契りの、色に出でけるぞかなしき。つつむとすれどあだし世の、あだなる中の名はもれて、よ所の聞えは大方の、空おそろしき日のひかり、雲の、かよひち絶え果てて、をとめの姿とどめえぬ、ころぞつらきもろともに、して上へ勝三三や歎くとも、こふともあはん道やなき、同へ君葛城の嶺の雲と、詠じけんころまで、おもへばかか三三る執心の、定家かづらと身は成りて、此、御あとに

- 「をとろ」田本による。
 (三)露や霜のやうに消え果てたが
 またこの世に返つて来た妄執を。
 (三)田本「く」なし。
 (三)「暮れ」の掛詞、「あや」の序詞
 (四)「亡き」と「無き」の掛詞。
 (四)「朽ち」の序詞。肉體は朽ち
 てしまつたがの意。新古今の歌に
 「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘
 れぬ夢を吹く嵐かな」
 (四)「よしぞなき」と頭韻。
 (四)草葉の陰で忍び隠れてゐて
 も。草は「よし」の縁語。
 (四)陽炎のやうな實體のないもの
 であつて。石の枕詞でもある。
 (四)墓石、石塔の意。
 (四)田本「姿」
 (四)それとは確には見えないが實
 は葛葛であつて。田本「見えす」
 (四)「練る」に通じ葛葛の縁語。
 (四)草葉の陰にある露のやうなほ
 かない身。露は草及び玉の縁語。
 (五)念珠すなはち数珠の意だが、
 「思ひ」の掛詞、數珠の序詞。
 (五)引歌らしいが出所不明。死後
 の關路を辿る心細さを歌枕の宇津
 の山の葛の細道を辿るのに喩へた
 (五)松風や葛を照らす月を見ては

いつとなく、離れもやらで蘿つばなもみぢの、色こがれまとはれ、おどろの髪もむす
 ぼほれ、露霜つゆしもに消えかへる、妄執をたすけ給へや。

(ロング)上へふりにし事を聞くからに、く、けふも程なくくれはどり、あ
 やしや御身たれやらん。して誰ととも、なき身の跡はあさぢふの、霜に朽ち
 にし名ばかりは、のこりても猶よしぞなき。同へよしや草葉の忍ぶとも、色に
 は出でよ其名をも、してへ今はつつまじ、同へこの上は、我こそ、式子内親
 王、是までみえ來れども、まことの、すがたはかげろふの、いしに残すかたち
 だに、それとも見えぬつたかづら、くるしみを助け給へと、云ふかと思えて失
 せにけり、いふかと思えて失せにけり。(申入。狂言、式子内親王と定家との戀を
 語る)

わき(待論)へゆふべも過ぐる月かけの、く、まつかぜ更けて物すごき、草
 の陰なる露の身を、思ひの玉のかずくりに、用ふ法ぞまことなる、とふらふ法
 ぞまことなる。(一聲)して下へ夢かよ、闇のうつつのうつつの山、月にもたど
 る蘿つばなのした道、上へ昔は、松風蘿月まつかぜつづきにこと葉をかはし、翠帳紅闌すいじやうこうらんに枕をならべ、
 わきへさまくなりし情のすゑ、してへ花も紅葉も散々に、わきへあしたの

歌を詠み交し。次の句とともに江口にも見える慣用句だが出典未詳
(五)美しい閨房の中で契り結び
(五)楚の襄王が高唐で夢に巫山の仙女と契つたが、覺めたら陽臺の朝雲暮雨であつたとの文選の故事
(五)「上」日本で補ふ。

(五)「降る」と古の掛詞。

(五)草葉の陰もなかなか落着くことが出来ず、さうかといつて雜草の茂つたあばら屋ではなく。

(五)法華經藥草喻品の句。佛が平等に法を説き給ふことは雨が一樣に降ると同じだが、衆生の性によつてその受け方は不同だとの意

(五)「あだ」の掛詞、立の序詞。

(六)さうだよ、この法華の妙經に救はれないといふ草木もないから執心の臺から離脱して成佛なさいませ。「かけ」は葛の縁語。

(六)妙法華經の字を隠す。

(六)法華經藥草喻品、其淨普治三卉木叢林及諸藥草……大枝大葉。

(六)法華經方便品に、十方佛土中、唯有二乘法、無二亦無三。

(六)一樣に降る佛法の慈雨。

(六)一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛、の偈による。

定 家

雲、してゆふべの雨と、同上(歌)へふることも今の身も、夢もうつつもまほろしも、ともに無常の、世と成りて跡ものこらず。何、中々の草の陰、さらば葎の宿ならで、そとはつれなき定家かづら、是見給へや御僧。

わきへあらいたはしの御有さまやな、あら痛はしや。下へ佛平等説如一味雨、

隨衆生性所受不同。して下へ御らんぜよ身はあだ浪の立わだに、なきあとまでもくるしみの、定家かづらに身を閉られて、かかる苦しひまなき處に、有難や。上へ只今讀誦し給ふは藥草喻品よなう。わきへ中々なれや此妙典に、も

るる草木もあらざれば、執心の臺を懸けはなれて、佛道ならせたまふべし。してへあら有がたや勝もく、是ぞたへなる法の心、わきへあまねき露のめぐみを受けて、してへふたつもなく、わきへみつもなき、同へ一味の、御法の雨のし

たたり、皆うるほひて草木國土、悉皆、成佛のきをえぬれば、ていかかづらも

かかる涙も、ほろくと解けひろければ、よろくと足弱車の、火宅を、出で

たる有がたさよ。此、報恩にいざさらば、ありし雲井の花の袖、むかしを今に

返すなる、其舞姫のをみごろも。

してへおもなのまひの、同へ有様やな。(序之)舞。して(ワカ)上へおもなの舞

二四一

- (六六)機縁を得たので。
 (六七)定家葛もそれに降りかかる氷のやうな冷い涙もほろほろと解けほごれるので。「かかる」は葛の縁語。
 (六八)車輪の弱い進みの遅い車。
 (六九)苦しい住居の譬。車の縁語。
 (七〇)祭中にゐたときの美しい舞の袖を返し、昔を再現する、その舞姫の舞装束。小忌衣は五節の舞姫などの着る舞装束だから返すの縁語。
 (七一)面目のない、恥かしい。
 (七二)月のやうな美しい顔。
 (七三)三日月のやうな美しい黛。
 (七四)消え落ちの意と零落の意とを掛け、涙・露と縁語を連ねた。
 (七五)露・つたな・葛の葉は頭韻。
 (七六)葛の序詞。
 (七七)葛城の神は醜いので夜だけ現れたとの傳説による。
 (七八)「よしなや」と頭韻、「葛城の神」の縁語。
 (七九)「歸る」の縁語、「這ひ纏る」の序詞。
 (八〇)葉に通じ葛の縁語。又墓に通じ「埋もれ」の縁語。

の、有さまやな。同へ面なやおもはゆの、有さまやな。して下へ元より此身は、同へ月のかほばせも、して下へ曇りがちに、同へ桂のまゆずみも、して下へおちぶるる涙の、同へ露と消えても、つたなや蘿のはの、葛城の神すがた、恥かしやよしなや。よるの契りの、夢のうちにと、有りつるところに、歸るはくずのはの、もとのごとく、這ひまとはるるや、定家かづら、はひまとはるるや、定家かづらの、はかなくも、形はうづもれて、失せにけり。

- (一) 假作の人物であらう。
 (二) 和歌の道。
 (三) 活本「出羽國小野の良實か娘に」田本「出羽のぐんじをのの義實か娘に」各本小異。
 (四) その返歌の出来榮えによつて重ねて題を與へて歌を詠ませよとの勅命によつて。
 (五) 「の」活本・田本で補ふ。
 (六) 自分は獨りで誰を待つといふ當もなく松坂や四の宮河原や四の辻の邊をさ迷つてゐるが、何時また六道の巷にさ迷ふ身となることだらう。身ひとり。四の宮河原・四の辻・いつ・六の巷は數韻。松坂は「待つ」の掛詞。
 (七) 昔は蓮の花のやうに美しい身であつたが、今はあかざの草のやうに醜くなる。李太白詩集卷三に、昔日芙蓉花、今成蕪腸草。
 (八) 玉造小町子壯衰書、容顏顛領(中略)腐似凍梨。底本・田本「せうすひ」活本「せうすい」
 (九) 底本「なひつわらふつ」活本・田本「ないつわらふつ」
 (一〇) 捨てた命が肉體から離れず。
 (一一) 「付く」の掛詞、「かかる」の序詞。「面影に付く」は目先にち

鸚鵡あう小町こまち

シテ……………小野小町

ワキ……………新大納言行家

わき詞「抑おさ是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。扱も我君ニ數嶋の道に心をかけ、あまねく歌を撰ぜられ候へども、御心にななふ歌なし。ここに出出羽の郡司ぐんじ小野がよしざねが娘に、小野の小町かれは雙たわがなき歌の上手にて候が、今は百ももとせの祖母おばと成りて、關寺邊に有るよし聞召きこしし及ばれ、御歌を下され候其返歌により、重ねて題をくだすべしとの宣旨にまかせ、ただいま關寺邊小野の小町が方へと急ぎ候。

(一) 一聲ひとこゑして一聲ひとこゑへ身はひとり、我はたれをかまつ坂や。しのみや河原よつの辻、いつ又六むつろくの、巷ちまたならん。さしこゑこゑはふようの花たりし身なれども、今れいでうの草となる。かほばせは憔悴せうすいと衰へ、はだへはとうりの梨のごとし。

らつく意。九十九髪はつくもといふ海藻のやうに亂れた老髮。
 (二)あのやうな事はあるまいと。後拾遺「見る度に鏡の影のつらきかなかからざりせばかからましやは」
 (三)忍び音に泣く意と昔を偲びながら寝る意とを掛け夢に續けた。
 (四)夢から覺めがちの長い夜の意と長く生きながらへたこの世の意とを掛けた。つぎの「飽き」は秋に通じ「長き夜」の縁語。
 (五)引留めるの意。關の縁語。
 (六)活本「すぐ」
 (七)底本「れひけむ」田本「れひげん」活本「嶺峽」現諸流による。
 (八)底本田本「高ふ」活本「たかふ」
 (九)春霞を受け「立ち」の掛詞。
 (一〇)松風も花の薫を含み。
 (一一)それ、花が花だよと指摘出来るほど身近にある白雲のやうな花、その花の色も香も面白い氣色だなあ。白雲は「知られ」の掛詞。
 (一二)老いた一つ松を、老いて獨り残つた小町の身に比べて。
 (一三)瀬田の長橋は狂人即小町自身の情ない長命がかけられてゐる例證のやうだ。「かかる」は橋の縁語。

杖つくならでは力もなし。かかる人をかこち身を恨み、泣いつ笑うつ安からねば、物ぐるひと人はいふ。上(歌)へ去とては、捨てぬ命の身にそひて、く、面影につくもがみ、かからざりせばかからじと、昔を戀ふる忍びねの、夢は寢覺の長きよを、あき果てたりなわがこころ、あきはてたりな我ごころ。

わき「是なるは小町にて有るか。して「見奉れば雲の上人にてまします、小町と承り候かや。何ごとにて候ぞ。わき「扱このほどはいづくを柄と定めけるぞ。して「たれとむるとはなけれども、唯關寺邊に日數を送り候。わき「勝せき寺はさすがに都遠からで、閑居にはおもしろき所なり。して「前には牛馬のかよひ路あつて、貴きも行きいやしきもすぎ、わきへうしろには靈驗の山高うして、してへしかも道もなく、わきへ春は、してへ春がすみ、同上(歌)へ立出でみれば深山べの、く、梢にかかるしら雲は、花かと見えておもしろや。松かぜも匂ひ、枕に花ちりて、それとばかりにしら雲の、色香おもしろきけしきかな。北に出づればみづ海の、志賀唐崎のひとつ松は、身のたぐひなる物を、ひがしに、向へば有難や。石山の觀世音、瀬田の長橋は狂人の、つれなきいのちの、かかるためしなるべし。

(四)活本「都の」脱。方丈記による。

(五)柴と頭讀。

(六)「無し」と梨との掛詞。

(七)涙を堰き敢へずの意を關寺に掛けた。また涙と關とは縁語。

(八)田本「讀へきか」

(九)活本「百歌旋頭のましはりたりし時にこそ」田本「ももか仙洞の交成し時にこそ」現諸流「百家仙洞の交はりたりし時こそ」百千の數讀を用ゐた修辭で、百家は百官、仙洞は上皇の御所の意。

(一〇)物ごとによせなぞらへて。

(一一)尾花の穗にさらに霜がかかつたやうな白髮の老衰の有様で。古今序「花薄穗に出すべき……」

(一二)田本「候」脱。

(一三)宮中はお前のみた昔のころと變りはないが、お前は見馴れた御所の中を懐しく思はないか。この歌と返歌とは十訓抄に見え、問歌は女房答歌は成範となつてゐる。

(一四)古い時代の歌の流風を守つて歌道の源を正しいものにしよと志してはゐるが、「流れ」と水上とは縁語。古今序「小野の小町は古の衣通姫の流なり」とある心。

(一五)拾葉抄所引の阿佛鈔に他人か

(一六)拾葉抄所引の阿佛鈔に他人か

して「かくて都ミヤの戀しき時は、柴の庵二五にしばしとどむべき友もなければ、下キタへキタ便なしの杖にすがり、都ぢに立出でて物をこふ。「乞ひえぬときは涙ナミの關寺にかへり候。」わき「いかに小町。さて今も歌を讀み候べきか。して「われいにしへももかせんとうのまじはりし時にこそ、ことによそへて歌をも讀みしが、今は花ハナすずき穗に出でてそめて霜のかかれる有様にて、憂世にながらふるばかりにて候。わき「げにもつとも尤道理なり。御門カドより御憐あはれみの御歌を下されて候。是々見候へ。して「何とみかどより御憐みの御歌をくだされて候とや。あら有がたや候ミ。それにてあそばされ候へ。わき「さらば聞き候へ。して「いかにもたからかにあそばされ候へ。わき「雲のうへは、して「雲の上は、わき上へ雲の上は、有りし昔にかはらねど、みし玉だれの内やゆかしき。して「あら面白の御歌や候。下へかなしやなふる三四き流れをくみて、水上みづかみをただすとすれど、歌よむべしとも思はれず。「又申さぬときは恐れ也。所詮此返歌を只一字にて申さう。わき「ふしぎのことを申すものかな。夫歌それは三十一字をつらねてだに、心のたらぬ歌もあるに、一字の返歌と申す事、へ是も狂氣の故やらん。して「いやぞと云ふもじこそ返歌なれ。わき「ぞといふ文字とは扱あつかいかに。して「さらば御

らの歌の文字一二を變へ我が歌として返すのをいふとある。
 (三)奪ひ取り申しあげて。
 (三)天罰を蒙るかも知れない。
 (三)歌道のことだから。
 (三)五七七の片歌を二首連れた形式、即ち五七七・五七七の形の歌。
 (四)五字の言葉を一宇づつ毎句の頭に置いて詠む歌。
 (四)底本「はひかひこんほんかあふむかへしとは」田本「誹諧根本歌鸚鵡かへしとは」活本による。
 誹諧歌は滑稽味を持った歌。混本歌は五七七の形の歌と傳へられてゐる。
 (四)上から讀んでも下から讀んでも全く同じ歌。
 (四)底本・活本・田本とも「をのか」
 (四)その時代のその時代の歌集。
 (四)古今序の小野小町の歌の歌に「強からぬしはをうな(女)の歌なればなるべし」とある。底本・田本「おふな」活本「をふな」
 (四)古今眞名序によれば風・賦・比・興・雅・頌、假名序によれば添へ歌・數へ歌・なずらへ歌・譬へ歌・ただこと歌・視ひ歌の六つの歌の分類をいふ。

門の御歌を、詠吟せさせたまふべし。わき「不審ながらもさし上げて、上へ雲の上は、ありし昔にかはらねど、みし玉だれの内やゆかしき。して「さればこそ内や床しきを引きかへ、内ぞゆかしきとよむ時は、小町が讀みたる返歌也。わきへ扱いにしへもかかためしの有るやらむ。して「なう鸚鵡がへしと云ふ事は、同上(歌)へ此歌のさまを申すなり。みかどの御歌を、ばひ參らせて讀む時は、天の恐れもいかならむ。和歌の道ならば、神もゆるしおはしませ。たつとからずして、高位に、まじはると云ふ事、只わかのとくとかや、只和歌のとくとかや。

(クリ)上へ夫歌のさまをたづぬるに、長歌短歌旋頭歌、折句誹諧混本歌鸚鵡返し、廻文歌なり。してさしこゑへなかんづく鸚鵡がへしと云ふ事、もろこしにひとつの鳥あり。同へ其名を鸚鵡といへり。人の云ふこと葉をうけて、すなはちおのがさへづりとす。何ぞといへばなにぞとこたふ。鸚鵡の鳥のごとくに、歌の返歌もかくのごとくなれば、鸚鵡がへしとは、申すなり。(クセ)下へ勝やうたのさま、かたるにつけいにしへの、猶思はるはかなさよ。さればこしかたの、世々のあつめの歌人の、其おほくある中に、今の小町は、たへな

(四七) ありのままの素直な歌。古今序には例歌として讀人知らずの「儂のなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし」を出す。(四八) 餘情のある花のやうだと賞められ。底本「よてう」田本「よてう」活本「餘條」現諸流による。(四九) 玉造小町子妝書、桃顔露咲、柳髮風梳。底本・田本「とくは」活本による。活本「柳髮」。(五〇) 白氏文集、紫笋齊管各調新。紫笋は新しく出た筍で美人の形容。(五一) 美人の形容とせられてゐる梨とても名ばかりでそれよりも遙かに美しかつたが。長恨歌に楊貴妃を形容して、梨花一枝春帶雨。底本・田本「りくは」活本による。(五二) 底本・田本「せうすひ」活本は「せうすい」衰へやつれること。(五三) 身體疲瘁。體が衰へ疲れること。玉造小町子妝書、容顏頓頓、身體疲瘁。(五四) 活本「の」脱。(五五) 活本「聞しかは」。(五六) 「出で」の掛詞。(五七) 葛葉および和歌吹上の縁語。(五八) 「舞の袖」の縁語。(五九) 忍草を濃綠色に摺り込んだ狩

鸚 鷗 小 町

る花の色このみ、歌のさまさへをうなにて、ただ弱く／＼とよむとこそ、家々の、書傳にもしるし置き給へり。して上へわか、六義を尋ねしにも、同へ小町が歌をこそ、ただこと歌のためしに、ひくのみか我ながら、美人の、形も世にすぐれ、餘情の花とつぐられ、桃花雨をおび、りうはつかぜにたをやかなり。ししゆん猶うごきほこり、梨花は名のみなりしかど、今憔悴とおちぶれて、しんていひじゆつする、小町ぞ哀なりける。

わき詞「いかに小町。業平玉つ嶋にての法樂の舞をまなび候へ。(物着)して「扱も業平玉津嶋に参り給ふと聞えしかば、我もおなじく参らんと、へ都をばまだよを籠めていななりやま、くずはの里も浦ちかく、和歌吹上に差しかかり、同下へ玉津しまに参りつつ、く、なりひらの舞の袖、思ひ廻らす忍ぶ摺、とくさ色の狩衣に、大もんの、はかまのそばをとり、かざ折るほしめされつつ、してへ和光のひかり玉津嶋、同へ廻らす袖や、浪がへり。舞。して(ワカ)上へわかぬの浦に、鹽満ちくれば、かたをなみの、同へあしべをさして、たづ鳴きわたる、啼きわたる。して下へ立つ名もよしなや、忍び寝の、同下へ、月にはめでし、して上へ是ぞこの、同へ積れば人の、して下へ老と成る物を、同へか

衣。伊勢「業平信夫摺の特衣をな
ん着たりけり」。「忍ぶ」は「思ひ
廻らす」の縁語。

(六〇)大柄の紋を染め出した袴。

(六一)玉の序詞。

(六二)舞の手の名稱。玉津島の縁語。

(六三)萬葉朗詠などに見える赤人の
歌「かたをなみの」の「は」は衍字。
干瀉がなくなるとの意だが、中
世は片男浪の意に誤解してゐた。
(六四)人目を忍ぶ契りが顯れ浮名が
立つのも仕方がないよ。「立つ」
は田鶴と重韻。

(六五)忍び疑の床から眺める月を賞
しはすまい。何となればこの月が
積つて人は年をとるのなもの。古
今伊勢などに見える業平の歌に
「大方は月をもめでじこれぞこの
積れば人の老となるもの」金剛流
のみは「めでし」と濁らす。

(六六)「して上」活本・田本で補ふ。

(六七)月の縁語、時の序詞。

(六八)陶淵明の詩、歳月不待人。

(六九)「知らず」の掛詞、荒に普通
の「あら」の序詞。

(七〇)活本ここ「して」と註す。

(七一)活本ここ「同」と註す。

(七二)「堰きあへず」の掛詞。

程にはやき、光^六のかげの、時人^六をまたぬ、ならひとはしら浪^六の、あ^七ら戀^七しの、
昔^七やな。

上^七へかくて此日も、暮れゆくまゝに、さらばといひて、行家都に、歸りけれ
ば、してへ小町も今は、これまでなりと、同へ杖にすがりて、よろ／＼と、立
ち別れ、ゆく袖の涙、たち別れゆく袖の、なみだも關^七寺の、柴の庵りに、歸り
けり。

關寺小町

シテ……………小野小町

子方……………關寺の稚兒

ワキ……………關寺の住僧

ワキツレ……………從僧(二人)

(一)待つてゐた秋の七夕のときに逢ふことが出来た。七夕を急いで祭らう。「待ち得て」は星の縁語。
(二)ワキ單獨の發言。つぎのさしこゑはワキツレと同吟であらう。
(三)朗詠白樂天の詩、蕭颯涼風與二衰鬢、誰教三計會一時秋。
(四)絲は絃樂器、竹は管樂器、呂は低音、律は高音、合はせて音樂の意。
(五)和歌の道の上達を願ふために竹に五色の絲を懸けて。
(六)旗薄の序詞。旗薄は薄の韻が出て旗のやうに靡いてゐるをいふ。
(七)秋草の花をも添へて供へ、琴を掻き鳴らすばかりに吹く松風もをりからにふさはしい手向となる夕だなあ。露は草の縁語、玉の序詞。玉琴は琴の美稱。玉葉集「庭居にかはす軒の松風」

關寺小町

(次第) 僧見次第へ待ちえて今ぞ秋にあふ、待ちえていまぞ秋にあふ、星の手向を急がん。詞「是は江州關寺の住侶にて候。扱もこの山陰にわらやしつらひて老女の候が、歌などをも讀まれ候程に、幼き人々を伴なひ歌の不審の爲、只今老女の私宅に急ぎ候。さしこゑへ颯々たる涼風と衰鬢と、一時にきたる初秋の七日の夕に早成りぬ。わきへけふたなばたの祭とて、糸竹呂律の色々に、こゝとを盡してしきしまの、上(歌)へ道を願ひの糸はへて、く、織るやにしきはたすすき、花をもそへて秋草の、露の玉ごとかきならず。まつかぜまでも折

(八)一碗の食物も得られない朝があつても求めることは出来ず、粗末な衣が膚を包み切れない夕があつても綴り縫ふ手段もない。

(九)百韻抄解の詩、花因雨過紅將老、柳被風欺、綠漸低。花は雨が降るために紅の色は正しく褪せてしまひ、柳は風に誘はれて緑の枝は次第に伸びてきてゐる。

(一〇)朗詠、人無更少二時須_レ惜。

(一一)老の憂き身の意を掛けた。

(一二)ほけて。

(一三)古今序「埋れ木の人知れぬ事となりて……花薄穗に出すべき事にもあらず」「埋れ木」は「人知れず」の、花薄は「穗に出だす」の序詞。

(一四)同序「大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」

(一五)底本「をよそ」

(一六)古今序「難波津の歌は帝のおほり始なり。淺香山の言の葉は采女の戯れより詠みて、この二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしける」

(一七)同序「この歌天地の開け始まりける時より出できにけり……千早振神代には歌の文字も定まら

からの、手向にかなふ夕かな、手向に叶ふ夕かな。

してさしこゑへ朝に一鉢をえざれども求むるにあたはず。草衣ゆふべのはだへを隠さざれどもおぎぬふに便りなし。花は雨の過ぐるによつてくれなゐまさに老いたり。柳はかぜにあざむかれて緑やうやく低れり。人更に若きことなし。終には老の鶯の、ももさへづりの春はくれども、むかしのかへる秋はなし。あらこしかた戀しや、あらこし方戀しや。

わき「いかにこの内に老女のわたり候か。して「や。人の御入り候ぞや。まなこかすみ心ほれて人の近づき給ふをも知らず誰にて御入り候ぞ。わき「是は此關寺のあたりに住む者にて候が、老女の御事承り及び、歌讀むべきやうをも尋ねむとて兒達もこれへ御出でて候。して「是は思ひのほかなる事を仰せ候物かな。埋木の人しれぬ身と成りて、花すすきのほに出だすべき事にもあらず。心を種として詞の花色香にそまば、などか其風をえざらん。やさしくも幼き心にすぎ給ふ物かな。わき「およそ人の申し候は、難波づの歌を以つて手ならふ人のはじめにもすべく候よなう。して「夫歌は神代よりはじまるといへども、もじの数も定まらず、すなほにしてことの心わきがたかりけらし人の世と

ず、すなほにして事の心分きがたかりけらし。人の世となりて……」
 底本「すなを」
 (一〇)古今序の古註により仁徳天皇の御即位を指すことが分かる。
 (一一)「難波津に咲くやこの花多韻り今を春邊と咲くやこの花」古今序古註に見える。
 (一二)萬葉「淺香山陰さへ見ゆる山の井の淺き心を我が思はなくに」
 (一三)萬葉集の本歌の詞書や古今序の古註に見える。
 (一四)「合ふ」の掛詞、「さざなみ」の序詞。
 (一五)近江の枕詞だがこゝは轉倒して出した。「濱の眞砂」の序詞。
 (一六)古今序のたとへ歌の例歌「我戀はよむとも盡きじ荒磯海の濱の眞砂はよみ盡くすとも」
 (一七)古今序「たとひ時移り事去り樂しび悲しびゆきかふともこの歌の文字あるをや。青柳の絲絶えず松の葉の散り失せずしと眞柝の葛長く傳はり鳥の跡久しくとどまれらば……」。「鳥の跡」は文字の意。
 (一八)「育子は夫。「さざなみ」は蜘蛛の枕詞。古今集に見える歌。
 (一九)底本「そとをり姫」

關 寺 小 町

なりて、目^め出^でき世^よつぎを讀み定めし故に、難^た波^な津^つの歌を^も翫^もび候。わき「又^{また}あさか山の歌は、大^お君^のの心をもやはらげ、是又目^め出^でき詠^よ歌^かよなう。してハ勝^かよくこころえ給^{たま}ひたり。此二歌を父母として、わきハたかき賤^せしき人をもわかず、してハ都^{みやこ}鄙^び遠^{とほ}國^{くに}のひな人や、わきハ我等ごときの庶^そ人^{じん}までも、してハすける心に、わきハあ^あふ^ふみ^みの海^{うみ}の、同上^{どうじょう}(歌)ハさ^さざ^なみ^みや、濱^{はま}の眞^ま砂^{すな}は盡^つくるとも、
 〳、讀^よむことのははよもつきじ。青^{あお}柳^{やなぎ}の絲^{いと}たえず、松^{まつ}のはの散^ちりうせぬ、種^{たね}はこころとおぼしめせ。縦^たひ^ひ、時^{とき}う^うつ^つりこと去^いるとも、此歌のもしあらば、鳥の跡も盡^つきせじや、鳥の跡もつきせじ。

わき「世の中に歌よみおほしと申せども、女の歌は稀に候に、老女の御ことたぐひすくなくこそ候へ。わ^わが^がせ^せこ^こが^がく^くべ^べき^き宵^よ也^やさ^さが^がに^にの、くものふるまひ兼^かて^てし^しるしも。是は女の歌候か。して「是は衣^い通^と姫^{ひめ}の御^ごう^うた^た也。衣^い通^と姫^{ひめ}とは允^{いん}恭^{こう}天皇^{てん}の后^ごにて渡^{わた}らせ給^{たま}ふ。わ^わら^らは^はも^も形^{かたち}のごとく其^{その}風^{かぜ}を學^{まな}び候^うよ。わ^わき「扱^あは^は衣^い通^と姫^{ひめ}の流^{なが}を御^ご讀^よみ候^うか。近^{ちか}代^{だい}きこえし小^こ野^のの小^こ町^{まち}こそ、衣^い通^と姫^{ひめ}の流^{なが}と承^うり及^{およ}びて候^うへ。佗^たび^びぬ^ぬれば身^みを浮^う草^{くさ}の根^ねをたえて、さそふ水^{みづ}あらばいなんとぞ思^{おも}ふ。是は小^こ町^{まち}が歌^{うた}候^うか。して下^{した}ハ是^{こゝ}は^{こゝ}大^{おほ}江^えのこ^これ^れあ^あき^きが^が心^{こゝろ}が^がは^はり^りせ^せし^し時^{とき}、よ^よの

(二〇)古今序に「小野小町は古の衣通姫の流れなり」とあるによる。
 (二一)古今集に見える歌。浮草は「憂き」の掛詞。「いなん」は「去なん」の意。

(三〇)底本「よ」脱。
 (三一)「降る」と古との掛詞。

(三二)古今集小町の歌「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」

(三三)古今の歌。末句「涙なりけり」「人を見ぬ」は愛人に逢へない意。

(三四)底本「しほれ」

(三五)涙の白露が昔の名残りを止めてゐるのはどういふわけかしら。何白露は「何か知らん」の掛詞。

(三六)古今集小町の歌。下句「夢と知りせば覺めざらましを」

(三七)「成り」の掛詞。

(三八)文選吳都賦、露往霜來日月其除。身の終の近い喩へ。

(三九)底本「性命」
 (四〇)朗詠白樂天の詩、權花一日自爲樂。盛り過ぎの短い喩へ。

(四一)新古今に見える小町の歌。

(四二)何時までも變らないといふ名

中物うかりしに、文屋の康秀が三河の守になりてくだりし時、田舎にて心をも慰めよかして、我をさそひし程によみたりし歌なり。かかるへ忘れて年をへし物を、きけば涙のふるること、又あらはるる悲しさよ。わき「是は小町が歌にては候はぬか。して「勝忘れて候小町が歌候よ。わき「ふしぎやな小町が歌物語に侘びぬればの歌は、わが讀みたるといひもあへず涙にむせぶけしき、又衣通姫の流と云ふも小町也。げに年月を勤がふるに、縦こまちながらふるとも、いまだ此世に有るべき年也。今は疑ひ不審もなし。御身は小町が果ぞとよ。へさのみなあらそひ給ひそとよ。してへはづかしや小町とは。色見えでとこそ讀みしものを、同上(歌)へ移ろふ物か世の中の、く、人の心の花やみゆる、恥かしや侘びぬれば、身を浮草の根をたえて、さそふ水あらば、今も、いなんとぞ、思ふ恥かしや。

(クリ)上へ勝やつつめども袖にたまらぬしら玉は、人を見ぬめのなみだの雨、花しをれたる身の果まで、何しら露の名残ならん。してさしこゑげにや思ひつつねればや人の見えつらんと、同へ讀みしも今はいにしへに、ながらへきぬるとし月を、送り迎へて春秋の、露ゆき霜きたつて草葉變じ蟲の音もかれた

- を持つてゐる壁生草の花も散り。
 (四三)草・葉・残るなどの縁語。
 (四四)初老。初めて老を感じたころ。
 (四五)玉造小町子壯表書の、家装二 玳瑁一。玳瑁三丹青。戸浮二水精一などの語を引いた。玳瑁は鱉甲、水精は水晶。底本「きんくは」
 (四六)天子の輿。
 (四七)現行諸流は「屬車」
 (四八)美しい衣。玉は飾の縁語。
 (四九)「敷き」の掛詞、枕の枕詞。
 (五〇)妻屋の枕詞。妻屋は閨房。
 (五一)小屋と「是や」との掛詞。
 (五二)上懸は「とこ」下懸は「ゆか」
 (五三)涅槃經の四句の偈文に、諸行無常、是生滅法。
 (五四)逢坂の山風は是生滅法の理を示すといふことだが、私にはそんな理法は到底得られない。
 (五五)墨をすつて。「鳴らす」は戸の縁語。
 (五六)詠草を書く。藻鹽草は掻き集めるものだから「書く」の縁語。
 (五七)生氣がなくて。草・葉の縁語。
 (五八)古今序に小町の歌を評して「哀なるやうにて強からず……強からぬは女の歌なればなるべし」
 (五九)底本「おふな」

り。して下二生命一すでにかぎりと成つて、同二只一槿花三一日の、榮におなじ。
 (クセ)下二有一はなく、なきはかずそふよの中に、哀いづれの、日まで歎かんと、詠ぜしことも我ながら、いつ迄草のはなさんじ、葉おちても残りけるは、露三の命なりけるぞ。戀しの昔や、しのばしのいにしへの身やと、思ひし時だにも、又ふること成りゆく身の、せめて今は又、はじめの老ぞ戀しき。哀三げにいにしへは、一夜二とまりし宿までも、玳瑁一をかざり、かきに金花をかけ、とには、水精二をつらねつつ、鸞輿一、飾車の玉ぎぬの、色をかざりてきたへの、枕三づく、つまやの内にしては、花の、にしきのしとねの、起臥なりし身なれども、今ははにふの、こや玉を敷きし床二ならん。して上二關寺の鐘のこゑ、同一諸行、無常と聞くなれども、老耳二には益一もなし。逢坂三の山かぜの、是生滅法の、理二をもえばこそ。飛花、落葉の折々は、すける道とて草の戸に、硯一をならし
 つつ、筆を染めて藻二しほ草、かくや、言の葉もかれ一に、哀二なる様にてつよからず、強からぬはをう一な歌なれば。いとどしく老の身の、弱二り行く果ぞかなしき。
 わき「いかに老女七夕の祭迎へに御入り候へ。して「いや思ひも寄らぬ事に

(六〇)七夕に絲竹や管絃を手向け
て。織るは七夕と絲との連絡語。

(六一)小野の枕詞。老耄の意を暗示。

(六二)七夕「及ぶ」の縁語、雲の序
詞。

(六三)麻衣と頭韻。

(六四)ともかくも。

(六五)つれて。七夕祭には五色の絲
を竹に懸けて願をかけたから絲竹
と縁語。絲竹には管絃の意もある。

(六六)廻雪の舞の意。「廻らす」は
前の「廻らす」と重韻。

(六七)「ふし」の枕詞だが、類似音
の年の枕詞に轉用したのだらう。

上懸では「吳竹の代代を経て」と
ある。

(六八)古今・朗詠などに見える凡河
内躬恒の歌。初句「年毎に」

(六九)堀川百首大江匡房の歌「百年
は花に宿りて過ぐしてきこの世は

蝶の夢にぞありける」

(七〇)舞のさす手の意。枝の縁語。

(七一)底本「たたえふ」

(七二)「立ち」の序詞。

(七三)「あらばこそ」と頭韻。

(七四)朝と顯(あらは)の意の「あ
らば」の掛詞。

て候。わきへただく御手を引き申せ。同上(歌)へたなばたの、織る糸竹の手

向草、く、いく年へてかかげるふの、をの、小町が百とせに、及ぶや天津

星合の、雲の、うへ人になれくし、袖も今はあさ衣の、あさましや痛はし

や。めも當てられぬ有様。下へとてもこよひは七夕の、く、手向の數も色々

の、あるひは糸竹に、かけて廻らすさかづきの、雪をめぐらす、童舞の袖ぞお

もしろき。兒へ星まつるなり、同へくれ竹の、舞。兒(ワカ)上へ年待ちて、逢

ふとはすれど、たなばたの、同へぬる夜のかずぞ、すくなかりける。

してへあら面白の童舞の袖やな。「傳へきく五節のまひこそ、五かへし返し

しか。下へ是はたなばたの祭なれば、七かへしにてや有るべき。ももとせは、

(序之)舞。(ワカ)上へ百年は、花になれこし、胡蝶の舞。同へあはれなりく、

老木のはなの枝、して下へさす袖もた忘れ、同へもすそも足弱く、して下へただ

よふ浪の、同へ立ちまふたもとは、ひるがへせども、昔にかへす、袖はあらば

こそ。あら戀しのいにしへやな。

上へ去程にく、初秋のみじか夜、して下へ早明けがたの、同へせき寺のか

ね、して下へ鳥もしきりに、同へ告げわたる篠のめの、あさまにもならば、

(七五)羽束師の森、山城にある歌枕。
「恥かし」の掛詞、木隠の序詞。

して下へは七五づかしのもりの、同下へ恥かしの森の、木隠れもよもあらじ。いと
ま申してかへるとて、杖にすがりてよろくと、本の藁屋に歸りけり。百とせ
のうばと聞えしは、小町がはての名なりけり、小町が果の名なりけり。

(一)活本「檜垣」

檜^ひ垣^{がき}
(檜垣)

前シテ……………老女(檜垣の軀の化身)

後シテ……………檜垣の靈

ワキ……………肥後岩戸山の僧

狂言……………岩戸の者

- (二)活本「住居の」
- (三)底本「れひけんしゆせう」活本による。
- (四)底本「地景」活本による。
- (五)海も空もひろびろと開けて。
- (六)太古の趣を存分に味はふことが出来る。底本「万固」活本による。
- (七)人里から離れてゐる。
- (八)活本「來候はは」
- (九)月影の白く水に映る白河の水を汲むと、月までも私の袂を濡らすやうだ。白河は白の掛詞。
- (一〇)平家物語卷十屋島院宣の條

僧詞「是は肥後の國岩戸と申す山に居住^ニの僧にて候。扱も此岩戸の觀世音は、靈驗^ニ殊勝の御事なれば、しばらく逗留し所の致景^ヲをみるに、下へ南西は海^ニ雲まん／＼として萬古心のうちなり。人稀にしてなぐさみおほく、致景^ヲあつて郷里^ニをさる。誠に住むべき靈地とおもひ、みとせがあひだは居住つかまつて候。「爰にももに及ぶらんとおぼしき老女、毎日あかの水もちて來り候。又きたりて候はば、いかなる者ぞ名を尋ねばやと思ひ候。

(次第)して次第へ影^カしら川の水くめば、かげしら河の水くめば、月もたもと

「籠鳥の雲を戀ふる思ひ……歸鴈友を失ふ心」 謡曲教盛にも類句が見える。

(一) 本朝文粹橋在列の文、家貧親知少、身賤故人疎。

(二) 霜のために散り落ちる葉。

(三) 時の經つのは流水のやうに早く、この世は水の上の泡のやうにはかないものだとの道理を白川の流れを汲んで悟る。「哀れ」は泡の掛詞。

(四) 悟る意の「知る」の掛詞。

(五) 水と罪と兩方にかかる。

(六) 活本「其罪を」

(七) 水の縁語。

(八) 値遇を求めて重い足を引きずりながら歩を選び。足引は足を引きずる意だが山の枕詞でもある。

(九) 活本「の」脱。

(一〇) 活本「は」「い」と誤植。

(一一) 活本「御」脱。活本で補ふ。

(一二) 活本「たふ」

(一三) 活本「く」なし。

(一四) 白髪の掛詞、水に普通の「みつわくむ」の序詞。

(一五) 老衰を表す語「みつわくむ」

(一六) 水を汲む意を含ませた。

(一七) 檜の薄板を網代に組んだ垣。

檜 檜

やぬらすらん。さしこゑへ夫籠鳥は雲をこひ歸鴈は友をしのぶ。人間も又是此おなじ。貧家にはしんちすくなく賤しきには故人うとし。老悴衰へ形もなく、露命きはまつて、霜葉きらくはににたり。下(歌)へながるる水の哀世の、其理ことわりを汲みてしる。上(歌)へここはところも白川の、く、水さへふかき此罪を、うかびやすると捨人に、値遇たぐひをはこぶ足引の、山下いほりに着きにけり、山したいほに着きにけり。

詞「いつものごとく御水みづあげて参りて候。わき「毎日の老おいのあゆみかへすく痛はしうこそ候へ。して下へせめてはか様の事にてこそ、すこしの罪をも遁るべけれ。なからん跡を弔ひ給ひ候へ。上へあけば又参り候はん。「おいとま申し候ひて。わき「しばらく。毎日の御心ごこころざし有がたう候程にさてく尋ね申し候。御身の名を御名乗り候へ。して「何と名をなれと候や。わき「中々の事。して「是は思ひの外なる事を承り候物かな。彼後撰集の歌に、下へとしふれば我黒かみもしらかはの、「みつわぐむまで老いにけるかなと、讀みしもわらはが歌なり。むかし筑前の太宰府に、いほりに檜垣ひのきしつらひてすみし白拍子、後には衰へ此白川のほとりに住みし也。わきへげにくおもひ出だした

- (二) 活本「返り」と誤植。
- (三) 底本「こわせ」活本で訂正。
- (四) 「みつわくむ」の語源については諸説があるが、本曲では三勾屈(みつわく)むの意すなはち年老いて脊腰膝などが折れ屈まつた意にとつてゐる。
- (五) 夕闇に紛れて。「言ふ」の掛詞。
- (六) 活本「女」現諸流も「女」。
- (七) 火(ほ)に通じ燈火の縁語。
- (八) 回向文。どうか幽霊よ、生死の迷界を離れ出て早く成佛せよ。
- (九) 詩の引用らしいが出典不明。
- (一〇) 風が緑の野に吹き止んで霞に煙つて見える柳の枝は眞直に垂れてゐる。雲は岩の邊りに固定して月が丸く照らしてゐる。底本・活本とも「おさまつて」。
- (一一) 朗詠藤原義孝の詩、朝有二紅顏^二誇^一世路^三暮爲^二白骨^一朽^二郊原^一。
- (一二) 萬物の諸現象の有様。
- (一三) 萬物の無常である眞理。
- (一四) 生死の時期は何時とは限定し難いのが世の常ではないか。
- (一五) 老少不定で、老少といふ區別は生死とは何の關係もない。
- (一六) 轉變の時が生死の轉期なのだ。
- (一七) 生者必滅を豫期しないものは

り。其白河の庵りのあたりを、してへ藤原の輿則通りし時、わきへ水やあるとこはせ給ひしほどに、してへ其水くみて參らするとて、わきへみつわくむとは、してへ讀みしなり。同上(歌)へそも三輪ぐむと申すは、く、只しら川の水にはなし。老いて、かがめるすがたをば、みつわくむと申すなり。其しるしをも見給はば、かのしら河のほとりにて、我あととひてたび給へと、ゆふまぐれして失せにけり、ゆふまぐれして失せにけり。(中入。狂言、檜垣の女(三)の故事を語る)

わき「扱はいにしへのひがきの姫(三)かりに顯れ出でけるぞや。へいざや其あととふらはんと、(待詠)上へ出づればやがて日の暮れて、く、河霧ふかく立ちこむる、かげに庵りのともし火の、ほのかに見ゆるふしぎさよ、ほのかにみゆるふしぎさよ。下へ南無幽靈出離生死頓證菩提。(一聲)後して下へあら有がたの御とふらひやな、あら有難の御弔ひやな。さしこゑへ風縁野(三)に收まつて煙條直し。雲岩頭にさだまつて月桂まどかなり。あしたに紅顏(三)あつてせいろに誇るといへども、ゆふべには白骨となつて郊原(三)にくちぬ。わきへうるの有様無常(三)のまこと、してへ誰か生死の、同下へ理(三)を論ぜざる。いつをかぎる習ひぞや。老少と、いつば分別なし。かはるをもつて期とせり。たれか必滅(三)を期せざらむ、

誰もない。

(四) 娑婆への執着心からと思はれる水汲む業をしてゐるので、生死の迷界に輪廻する迷ひの姿にお見えになりますね。

(四三) 活本「は」脱。

(四四) 底本「くろしひ」

(四五) 三途川。水の意をも含ませた。

(四六) 焦熱地獄で苦しみを受ける様

(四七) 因果の理を悟り意。亡者が水を汲んでゐる縁で「水を汲み」といひ、その縁で「浮かみ」を出した。

(四八) 懸繩で汲み上げる水。元來は

「懸繩の水」の意。つぎの「浅く」

「深き」は何れも水の縁語。

(四九) 小夜の掛詞。以下袂・露・玉と縁語で連ね玉禪の序とした。

(五〇) 「懸け」の掛詞。

(五一) 月影の白い意を掛ける。

(五二) 詩句らしいが出典未詳。「残星の鼎」は曉に鼎で湯を湧かすこと。

(五三) 夜更けの圍爐裡の意。底本

「午夜」活本による。

(五四) 荀子の、青取之于藍、而青於藍、氷水爲之而寒、於水より出た諺。

誰かは是をごせざらん。

わき下へあら痛はしの御有さまやな。今も執心の水をくみ、輪廻の姿に見えたまふぞや。あらいたはしや候。して「われいにしへは舞女の響世にすぐれ、

其罪深き故により、今もくるしみおほきみつせ河に、熱鐵の桶をになひ、猛火

のつるべをさげて此水をくむ。へ其水湯と成つてわが身をやく事ひまもなけれ

ども、「此程はお僧の値遇により、つるべはあれども猛火はなし。わきへさら

ば因果の水をくみ、其執心をふり捨てて、とくく浮かひ給ふべし。して「い

でくさらばお僧の爲、此かけ水をくみほさは、わきへ罪もやさくなるべき

と、してへ思ひも深きさよ衣の、わきへ袂の露の玉だすき、してへかげしら川

の月のよに、わきへ底すむ水を、してへいざくまん。同へつるべの水に影落ち

て、たもとを月やのぼらん。

(クリ) 上へ夫残星のかなへには北溪の水をくみ、後夜の爐には南嶺の柴をた

く。してさしこゑへそれこほりは水よりいでて水よりもさむく、青きこと藍よ

り出でてあむよりふかし。同下へ本のうきみの酬ならば、今のくるしみ去りも

せで、して下へいやまさりする思ひの色、同へくれないの涙に、身をこがす。

(五七)前世のつらい身の報なら、來世に當る今の苦しみはなくなるべきなのに、なくなりもしないで。

(五八)歎き。色はつぎの紅涙の縁語。

(五九)「繰り」の序詞。

(六〇)活本「夢に」

(六一)底本「向顔」活本「好顔」

(六二)誠に切に。大變高くて。

(六三)活本「紅顔も」

(六四)川蟬の羽のやうに美しかつた髪も色艶がなくなつて、三日月のやうな眉も白くなつて。鬘と桂とは重韻。花・桂・霜は互に縁語。底本「ひすひ」活本による。

(六五)濁水に汚れた藻屑。

(六六)芥川の川を通はした。

(六七)藤の花を藤波といふので浪かけしを藤の序詞とし、藤原興範が言葉を掛けた意を含ませた。

(六八)粗末な衣。「淺き」の掛詞。

(六九)俊秘抄に見える古歌「陸奥の狭布の細布程せばみ胸合ひ難き戀もするかな」を引いて舞女らしくない不似合ひな姿を恥ぢる意を表した。陸奥は身の掛詞。

(七〇)「調べん」の掛詞。

(七一)麻衣の袖。「あさまし」と頭韻。

(七二)下へつるべのかけなは、くりかへしうきいにしへも、紅花の春のあした、
黄葉の秋のゆふぐれも、一日の夢とはや成りぬ。紅顔のよそほひ、舞女の譽も
いとせめて、さもうつくしき紅顔の、翡翠のかづら花しほれ、桂のまゆも霜ふ
りて、水にうつるおも影、老悴かげしづんで、みどりに見えしくる髪は、土水
のもくづ塵あくた、かはりける、身の有様ぞかなしき。勝や古ことを、思ひい
づればなつかしき、其白河の浪かけし、して上へ藤原の興則の、同へ其いにし
への白拍子、いま一ふしと有りしかば、昔の花の袖、今さら色もあさ衣、みじ
かき袖を返しえぬ、こころぞつらき陸奥の、けふの細布胸あはず、何とかしら
びやうし、其面かげの有るべき。よし／＼それとても、むかし手なれし舞なれ
ば、まはでも今は叶ふまじと、して上へ興則、しきりにのたまへば、同へあさ
ましたながら麻の袖、露うちはらひ舞ひ出だす。

してへ檜垣の、同へ姫の身の果を、(序七)舞。して(ワカ)上へ水はこぶ、つる
べの繩の、つるべの繩の、くり返し、同へ昔にかへれ、白河のなみ、白川の浪、
しら河の、して下へ水の哀をしる故に、是まで顯れいでたるなり。同へはこぶ
あしたづの、音をこそたゆれ浮草の、水ははこびて参らする、罪をうかへてた

び給へ、罪をうかへてたび給へ。

(七〇)袖の露紐と涙の露との兩意。

(七一)活本・現諸流とも「女」

(七二)「釣瓶の繩の」まで「繰り返し」の序詞。

(七三)泡に普通の「哀れ」の序詞。

(七四)活本ここより「同」とある。

(七五)運ぶ・足・芦田鶴・音・根絶

ゆ・浮草と縁語を續け、水に身を掛
け、水の縁で「浮めて」といつた。

伯母捨

前シテ……………女(老女の化身)

後シテ……………老女の靈

ワキ……………信夫(しのぶ)某

ワキツレ……………信夫某の從者(二人)

狂言……………伯母捨山麓の者

- (一)中秋の名月も近い秋だから。「月の名」は名月の戲語。
- (二)觀世・寶生・喜多は都方の者とあり、金剛は底本通り、金春には伯母捨はない。
- (三)このほどは暫く旅にあつて草を枕の假寝を續け、旅中の中休の宿をまた立ち出でて。
- (四)地名の明石を通はせ中宿の縁語になつてゐるやうだ。
- (五)底本「たいらか」
- (六)萬里の果ての空まで近く目前にあるやうな心地がして、月がさぞよいであらうと思ひやられる今宵の空を、早く來ないかとなほ待

(次第) わき次第ハ月の名ちかき秋なれや、月の名ちかき秋なれや、をば捨山に急がむ。詞「是は陸奥しのぶのなにかしにて候。我此ほどは都にのぼり、洛陽の名所舊跡一見して候。又是よりも北陸道にかかり善光寺に參り、秋の半の折にあひて候程に、承り及びたるをば捨山にのぼり、月をながめばやと思ひ候。(道行)上ハ此程の、しばし旅の草まくら、く、又たち出づる中宿の、あかし暮らしてゆく程に、ほどなく爰ぞ更科や、伯母捨山に着きにけり、をば

ち兼ねる心地がして、心も上の空に浮き立つときではある。

(七)名月などので常よりも暮れるのを待ち遠しく思ふ意。

(八)底本「おさまる」

(九)古今集に讀人知らずとある。大和物語・今昔物語などは姨を捨てた男の歌としてあるが、本曲では俊祕抄と同様捨てられた姨の歌としてある。更科は「更に」の掛詞。

(一〇)桂は月中に生えてあるといはれるところから月の縁で出した。

(一一)捨てられた姨の亡くなつた跡

(一二)「埋れ」の掛詞、「刈り」に通の假の序詞。

(一三)秋の寂しい感じ。

(一四)前記の姨の歌を引いた。

(一五)雑木のなかに交つてゐる松や桂などの常磐木は緑色を残して居り。

(一六)屋代町の南嶺、地藏峠邊の山の稱で、姨捨山十三景の一。一重の縁で次の薄の縁語でもある。

(一七)雲がなくなつて暗れ渡り。

(一八)「住む」と棲家の掛詞。

(一九)この山の名となつてゐる姨捨の、その捨てられた姨だと。

捨山につきにけり。詞「我此山にのぼりてみれば、山そびえ嶺平らかにして、萬里の空目前にまぢかく、月のさこそと思ひやる、こよひの空のいつしかに、下へ猶待ちかぬるこちちして、心そらなる折からかな。「あら面白や此ま暮らして月をながめ、故郷の物語にせばやと思ひ候。

して「なう／＼旅人何とて此山にはやすらひ給ひ候ぞ。わき「ふしぎやな草木の陰も更になくて、山路も見えぬ方よりも、女性一人來りつつ、我等に言葉をかくるぞや。いかなる人にてましますぞ。して「是は此さらしなの里に住む者なるが、けふはこと更秋の半、くるるを急ぐ月の名の、兼ねてしらるる空のけしき、雲も收まる夕日影の、ことに照りそふ天の原、くまなき空のけしきかな。「いかに今宵の月のおもしろからんずらむ。わき「扱は此里人にてましますかや。承り及びたるをば捨山の其跡はいづくの程にて候ぞ。して「伯母捨山の其跡と問はせ給ふはこころえず。下へわが心なぐさめかねつ更科や、「をば捨山に照る月をみてと、詠めし人のあとならば、あれに見えたる桂の木の、陰こそ昔のをば捨の、其なき跡にて候へとよ。わき「扱は此木のほとりにて、捨て置かれにしむかしの人の、して「其ま土中のむもれ草、かりなる世とて

- (三〇)「澄む」に通じ名月の縁語。
 (三一)月の縁語。
 (三二)「言ふ」の掛詞。夕闇の迫る木陰の意。
 (三三)夕暮時も過ぎ月の光が早くも照らし始めて面白ことだ。
 (三四)上の秋と下の心との兩方にかかると。「澄む」の縁語。
 (三五)夜通し月を詠めようの意。
 (三六)朗詠白樂天の詩、三五夜中新月色、二千里外故人心。三五夜は八月十五夜、新月は空に昇り初めた月、故人は友人の意。
 (三七)底本「後」なし。
 (三八)新勅撰定家の歌。下句「かたぶく月の惜しきのみかは」
 (三九)「持つ」に望月との掛詞。
 (四〇)今までに見たこともないと思はれる程の見事な満月が曇りなく照らしてゐる姨捨山の秋の空。底本「見し名にも」と誤る。「た」を「な」に誤つたためだらう。
 (四一)たまらないほどに面白こと。
 (四二)昔のやうな気分は全くしないことだ。
 (四三)月の光も照り増る月の夜に。
 (四四)月宮に白衣の天人があるとの

今ははや、わきへ昔がたりに成りし人の、猶しうしんやのこりけん。してへ物すさまじき此原の、わきへ風も身にしむ、してへ秋のころ、同上(歌)へ今とても、慰さめかねつ更科や、く、伯母捨山の夕暮に、松もかつらもまじる木の、縁も、残りて秋の葉の、早色づくか一重山、薄霧も立ちわたり、かぜすさまじく雲つきて、さひしき山のけしきかな、さひしき山のけしきかな。

して「いかに人々いづくより來り給ふぞ。わき」是は遙の遠國の者にて候が承り及びたる名所也。しかも今夜は名月の折に逢ふこと、稀なる時節に候へば、月をみんとて態來りて候。して「やさしの旅人やな。げに心ある御事とて、名所の月を御覽ぜんとや。さあらば我も月と共に顯はれ出でて旅人の、へ夜遊をなぐさめ申すべし。わき」そもや夜遊を慰めんとは、御身はいづくに住む人ぞ。して「わらははむかし更科の者。わきへ扱今は又いづ方に、してへすみかといはんは此山の、わきへ名にしおひたる、してへ伯母捨の、同上(歌)へそれといはんも恥かしや、く。其いにしへも捨てられて、只ひとり此山に、住む月の名の秋ごとに、執心の闇をはらさんと、こよひ顯はれ出でたりと、夕影の本に、かへると見えて失せにけり、かへるとみえて失せにけり。(中入。狂

傳説があるから月の縁語になる。

(三五)「うつつか」と尾韻。

(三六)夕暮に一度顯はれ出た身だが、昔の姿で。夕暮は「言ふ」の掛詞。

(三七)月下の夜の舞樂。

(三八)何の恥かしいことがあるものですか。

(三九)元來所も媿捨て、その媿捨の山は老女の住居であり、近所に住む月見の友達が團樂して。[すみこは「澄み」に通じ月の縁語。]

(四〇)秋草の花の上に坐つたり臥したりして袖は露に濡れ、多くの夜遊びの人人に何時の間にか親しくなつたのか夢のやうだ。「起き」は

「置き」に通じ色と共に露の縁語。

(四一)女盛りの過ぎた老女の喩へ。

(四二)粗末な衣も涙や露に濡れて。草は女郎花の縁語。

(四三)「照し」の掛詞。

(四四)月に照らされて見えるのもの。

(四五)言つたり思つたりしない方がかへつてよいやうだよ。

(四六)女郎花・露草・紫花などの異名。「思はじな」と頭韻。

(四七)月に馴れ親しんで。

(四八)宵書に宵の王子猷が月明かり

言、伯母捨の故事を語る)

わき(待語)へ夕^{三三}かけ過ぐる月影の、く、早出で初めておもしろや。萬里の

空も隈なくて、いづくの秋もくもりなき、こころも澄^{二四}みてよもすがら。下へ三^{二五}

五夜中の新月の色、二千里の外の故人のこころ。(一驛)後^{二七}して下へあらおもしろ

の折からやな、あら面白の折からやな。さしこゑへ明^{二八}けば又秋の半も過ぎぬ

べし、今宵の月の惜しきのみかは。さなきだに秋待ちかねて類なき、名^{二九}をもち

月の見^{三〇}しだにも、覺えぬ程に曇なき、伯母捨山の秋のそら、あま^{三一}りにたえぬこ

ころとや。む^{三二}かしただにも覺えぬぞや。

わきへふしぎやな影^{三三}も照りそふ月のよに、白衣^{三四}の女人あらはれ給ふは、夢か

うつつかおぼ^{三五}つかな。して「夢とはなどや夕暮^{三六}に、顯はれ出でしむかしの姿、

はづかしながら來りたり。わきへ扱^{三七}はうつつの夕暮に、有りつる人にてましま

さば、かほどくまなき月の夜遊の、友人とならせ給へとよ。してへ勝^{三八}や夜遊の

月と共に、猶執心はこのれども、老のすがたは恥かしや。わきへ何^{三九}をかつつま

せ給ふらん。もとより所もをば捨^{四〇}の、してへ山は老女がすみ所の、わきへ月の

友人まとわして、してへ草をしき、わきへ花^{四一}におきふす袖の露の、二人へさも

に乗じて戴安道を訪ねたが、門前で引き返したので人がそのわけを問ふと、乘_レ興_ニ而來_ニ興_ニ盡_ニ而_レ歸_一、何必見_ニ安道_一 耶と答へたとある。

(四七)所で。

(五)どこそこといふなかにも特に

(五)賈島の詩、團團離_ニ海嶠_一、冉冉出_ニ雲衢_一、此夜一輪滿、清光何處無によつた。一輪は一つの圓い月、團團は圓い形、海嶠は海邊の峻しい山の意。

(五)世にすぐれた慈悲の誓願。無量壽經重誓の偈、我建_ニ超世願_一。

(五)恵みの意。光明の緣語。

(五)阿彌陀佛をいふ。阿彌陀經に、彼佛光明無量照_ニ十方國_一、無_レ所_ニ障礙_一、是故號_ニ阿彌陀_一。

(五)日・月・星。佛教ではさらに日天子・月天子・明星天子をも指す。

(五)阿彌陀佛の右の脇士は大勢至菩薩であり、月天子は勢至菩薩の垂跡だとの佛教思想によつた。

(五)佛縁のある衆生。

(五)无上を天上と誤讀したのでらう。觀經、令離_ニ三途_一得_ニ無上力_一、是故號_ニ此菩薩_一、名_ニ大勢至_一。

(五)觀經、此菩薩天冠、有_ニ五百寶

色々の夜遊の人に、いつなれそめてうつつなや。同上(歌)へ盛_ニふけたる女郎_一花の、_レ草衣_レほたれて、むかしだに、捨てられし程の身をしらで、又伯母すての山に出でて、面をさらしなの、月にみゆるも恥かしや。よしや、何ごとも夢のよの、中々いはいし思はじな。思ひ草はなにめで、月にそみて明かさん。

上(クリ)してへげにや興に引かれて來り興つきて歸りしも、同へ今の折かと思知られたる、今宵の空の氣色かな。してさしこゑ然るに月の名どころ、いづくはあれど更科や。同へ伯母捨山のくもりなき、一輪みてる清光のかけ、團々として海嶠をはなる。して下へしかれば諸佛の御ちかひ、同へいづれ勝劣なけれども、超世の悲願あまねき影、彌陀光明に、しくはなし。(クセ)下へさる程に、三光西にゆく事は、衆生をして西方に、すすめいれんが爲とかや。月は彼如來の、右の脇士として、有縁をことにみちびき、重き罪をかるんずる、てんじやうのちからをうる故に、大勢至とは號すとか。天冠の間に、花の光かかやき、玉の臺のかず_レに、たはうの淨土をあらはす。玉珠樓のかぜの音、糸竹のしらべとり_レに、心ひかるる方もあり。蓮色々に咲きまじる、寶の池のほとりに、たつや、なみ木の花ちりて、芬芳しきりに亂れり。して上へ迦陵、

華…………。

(六〇) 他方の淨土。彌陀の西方淨土以外の十方諸佛の淨土の總稱。

(六一) 珠玉のやうに美しい樓閣。

(六二) 絲の縁語。

(六三) 極樂淨土にある八功德池。

(六四) 淨土にある七重寶樹。波に通じ「立つ」の縁語。

(六五) かんばしい香り。

(六六) 極樂に住む妙音で鳴く鳥。

(六七) 眞似して。

(六八) 尾に通じ鳥の縁語。

(六九) 底本「を」しなへて」

(七〇) 大勢至菩薩の異名。

(七一) 雲間の月。

(七二) 有爲轉變。諸現象の變化して一定しないこと。無常と同義。

(七三) 前の花にかかり、露の序詞。

(七四) 僅かの暇なのに何と思つて現れて胡蝶のやうに舞ひ遊んだのか

今はかへつて恨めしい。莊子が夢に胡蝶になつたとはいふ故事に依つた。中中と何とは頭韻。

(七五) 遊び戯れて舞ふ舞ひの袖を返すやうに、昔の秋を返せや返せ。

(七六) 底本「おれは」

(七七) 明けてあらはに成つたので。

(七八) 昔はともかく、今もまた。

頻伽のたぐひなき、同へ聲をたぐへてもろともに、孔雀鸚鵡の、おなじく、さへづる鳥のおのづから、光も影もおしなへて、至らぬ限もなければ、無邊光とは名付けたり。然れども雲月の、有時は影みち、又ある時は影かくる、うゐ、てんべんのよの中、の、定めなきをしめすなり。

して下へ昔こひしき、同へ夜遊の袖。(序之)舞。して(ワカ)上へ我こころ、慰めかねつ、さらしなや、同へ伯母捨山に、照る月をみて、照る月をみて、して下へ月にめで、花にたはふるる秋草の、へ露のまに、同へ露のまに、中々何しに、あらはれて、胡蝶のあそび、して下へたはふるる舞の袖、同へかへせや返せ、して下へむかしの秋を、同へ思ひ出でたり。妄執の心、やる方もなき、こよひの秋かぜ、みにしみじみと、戀しきは昔、忍ばしきは闇浮の、秋よ友よと、思ひ居れば、

してへ夜も既にしらくと、はやあさまにも成りぬれば、同へ我もみえず、旅人も歸る跡に、してへ獨、すてられて老女が、同へむかしこそあらめ今も又、をば捨山とぞ成りにける、伯母捨山となりにけり。

- (一) 葛城の神の古跡を尋ね求めて
- (二) 活本客僧「客僧は山伏の意。
- (三) 篠懸の麻の袖には寒い朝には霜が置き、岩を枕にし松陰を宿とする起き臥しも度重り、樹木の繁茂した嶺續きの山また山を越え過ぎて。篠懸は山伏の常用する上衣。「あざ」は麻と朝の、「おき」は「置き」と「起き」の、「しげき」は度重る意と樹木の繁茂する意とのそれぞれ掛詞。
- (四) 笑止。困つたことだ。
- (五) 歸りがけ。
- (六) 山の様子を知らない旅人の、その行先はどこだか知らないが、雪の降る山邊に。雪は行の掛詞。
- (七) 山伏が修行の爲に入山する事
- (八) どうしてよいか茫然としてゐるときに。
- (九) 懐しい山腹を傳はつて行つた彼方にある谷の下の庵が私の住居で、その庵は見苦しいけれども。
- (一〇) 長く降り續くらしいこの雪の降り止むまで。「ふる」は「経る」と「降る」との掛詞。
- (一一) 「言ふ」の掛詞。
- (一二) 一日中日光の當らない陰地。
- (一三) 吹雪でなくても。

葛城かづらぎ

前シテ……………女(葛城の神の化身)

後シテ……………葛城の神(女姿)

ワキ……………羽黒山の山伏

ワキツレ……………同行の山伏(二人)

狂言……………葛城山麓の者

(次第) 山伏次第へ神のむかしの跡とめて、神のむかしのあととめて、葛城山かづらぎに参らむ。詞「是は出羽のはぐるさんより出でたる僧にて候。われ宿願の子細あるにより、只今かづらきの明神へ参詣仕り候。(道行)上へ三すずかけの、袖のあさ霜おきふしの、く、岩ねのまくら松陰の、やどりもしげき嶺つづく、山又やまをこえ過ぎて、行けばほどなく大和ぢや、かづらき山に着きにけり、かづらき山に着きにけり。詞「急ぎ候程に、かづらき山に付きて候。あらせうし四

(一)巴詩人玉屑、笠重吳天雪、鞋香楚地花。原詩は吳國では笠も重しと積る雪に惱み、楚國では香しい落花を香で踏んで感慨にふけるとの意。こゝは雪を花に見立てた。
 (二)三詩らしいが出典不明。頭の上の笠には無影の月ともいふべき雪を頂き、肩にかついだ柴には不香の花ともいふべき雪を載せ。肩と擔頭は頭上。擔肩とあるべきをわざと入れ變へた一種の修辭。月と「傾け」花と「手折る」とは縁語。
 (三)昔家御集の歌。末句「谷の下道」「雪こそ下れ」は、雪の塊が山を下りて行くやうだの意。
 (四)蕪樹。標。細い木の枝。柴。
 (五)柴の字を分けた洒落。
 (六)今更らしい愚かな仰せですなね
 (七)結び束ねた。底本「ゆい」活本による。
 (八)いふまでもない。
 (九)柴を結び束ねた葛といふ意を萬城山の地名にひかけたのだ。
 (一〇)大和地方の風俗舞踊から起つた舞らしく、大嘗會や鎮魂祭に倭歌に合せて舞はれた儀禮舞踊。
 (一一)古今集に古き倭舞の歌と題して見える。第三句「降る雪の」。

葛城

や俄に雪の降りきたり候はいかに。是なる岩陰にたちより雪を晴らさばやともひ候。

して「なうく山ぶしたちはいづかたへ御通り候ぞ。わき」是は葛城の明神へ參る山臥にて候が、ただ今の雪にたたずみ候。扱々御身はいかなる人ぞ。して「是は此かづらき山に住む者なるが、柴とる道のかへるさの、家路をだにもわきまへぬに、下へ増てやしらぬ旅人の、末いづくにか雪の山べに、まよひ給ふはいたはしや。「わらはが庵りの候に立ちよりて雪を御はらし候へ。わき「我此山に嶺入し、度々かよひし道なれども、にはかに降りくる雪のふぶきに、前後を亡じて候處に、うれしくも承り候物かな。さて御やどりはいづくの程ぞ。して「此そはづたひのあなたなる、谷の下庵見苦しけれども、程ふる雪のたえま迄、へ御身を休めおはしませ。わきへさらば御供申さんと、ゆふべの山の常陰より、してへさらでもさがしき岨づたひを、わきへ道しるべする山人の、二人へ笠は重し吳天の雪、香はかうばし楚地の花。同上(歌へけんしやうの笠には、く、無影の月をかたふけ、擔頭の柴には、不香の花をたをりつつ、歸る、すがたや山人の、笠も薪もうづもれて、ゆきこそくだれ谷のみちを、たどり

「標結ふ」は萬の枕詞「降る雪は」までは「間なく時なく」の序詞。

底本・活本とも「しもといふ」

(三〇) 歌詞につれて舞ふ大和舞の廻雪の袖の美しさも、古い時代のよそ事とばかりは思ふまい。「古き」

は「降る」に通じ雪の縁語。「見し」には「見じ」を掛けた。

(三一) 新古今「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」昔人が及びもつかない高いところにあるものと見てゐた高間山の嶺の白雲、その白雲かかる高間

山の嶺にある柴屋の夕の煙に松の枝を添へて燃さうよ。柴屋と「結ふ」に普通の夕、煙と松とは縁語。

(三二) 底本・活本とも「たかふよ」

(三三) この歌夫木抄に見えるが第二三句「木蔭に光る稻妻」とある。

(三四) 漢書蘇武傳に、人生如一朝露。賈玉論に、人生在世、如三石火電

光。人生の極めて短い喩へ。

(三五) わが身の愚痴をも一緒にして、眞柴ともいふや増しに募る機みをも焚かとうよ。「敷き」に「投げ木」、眞柴に「増し」を掛けた。

(三六) 世捨人の墨染衣。

(三七) 「澄み」の掛詞。「染め」は

く歸りきて、柴の庵りに着きにけり、柴のいほりに付きにけり。

して「是にしもとの候を焼いて御すずかけをほさせ申し候はん。わき「あら

おもしろや管とは此木の名にて候か。して「ことあたらしき仰かな。此かづら

き山の雪の内に、ゆひ集めたる木々の梢を、しもとしろしめされぬは、御

情なきころかな。わき「あら恥かしや扱はこの、管と云ふ木は葛城山に、由

緒ある木にて候よなう。して「申すにや及ぶ古き歌にも、管をゆひたるかづら

なるを、かづらき山の名によせたり。是やまと舞の歌といへり。わき「勝げ

にふるき大和まひの、歌のむかしを思ひでの、して「折から雪も、わき「降る

物を、同上(歌)「しもと結ふ、葛城山にふる雪は、く、まなく時なく、おも、

ほゆるかなとよむ歌の、ことのはそへて大和舞の、袖の雪もふるき世の、よ所

にのみ、見ししらくもやたかま山の、嶺のしばやの夕煙、まつがえそへてたか

うよ、松がえそへてたかうよ。

(クセ) 下「かづらきや、木のまにひかるいなづまは、山伏のうつ、火かそこ

そみれ。げにやよの中は、電光朝露石の火の、ひかりのまぞと思へただ、我身

の、なげきをも取りそへて、おもひましばをたかうよ。して上「捨人の、苔の

「色深く」を受けてゐる。

(三三)山伏の異名、「染み」の掛詞。

(三四)篠懸衣にも一際寒さを感じ。

「牙えまざる」は寒風にもかかる。

(三五)火(くわ)の掛詞、山伏の序詞。

(三六)山伏といふ名の通りに、袖を片敷いて枕として。

(三七)祈禱して佛力をもつてお救ひ下さい。

(三八)佛教で女は罪深くて梵天・帝釋・魔王・轉輪王・佛の五つになれないことをいふ。

(三九)役行者の咎を受け法力をもつて呪縛せられたことをいふ。

(四〇)この葛城山の名物の。

(四一)長阿含經に見える龍の三患、熱風熱沙・惡風暴起・畏金翅鳥をいふが、それを神の苦に轉用した。

(四二)役の行者が葛城の神に葛城から大峯まで岩橋を架けるやうに命じたが、神は容貌の醜いのを恥ぢて夜だけ仕事をしたので行者の怒に觸れて呪縛せられた日本靈異記や今昔物語に見る傳説を言ふ。

(四三)不動明王の縛り綱。

(四四)「盡き」だが「築き」に通じ石の縁語。

(四五)活本ここ「して」とあり、以

ころもの色深く、同へ法にこころは墨染の、袖も、さながら白妙の、雪にや色
をそみかくだの、篠懸もさえまさる、しもとを集め柴をたき、寒風をふせぐか
づらきの、山ぶしの名にしおふ、かたしく袖の枕して、身を休め給へや、御身
をやすめたまへや。

わき「はや夜に入りて候程につとめをはじめうざるにて候。して「御つとめ
とは有がたや。我に惱める心ちあり。つとめの次而に祈り加持してたび給へ。
わき「そも祈り加持せよとは何と申したる事にて候ぞ。して「さなきだに女は
五障の罪重きに、法のとがめの呪咀をうけて、此山のなにしおふ、つたかづら
にて身をいまして、猶三熱のくるしみあり。へ此身を扶けおはしませ。わき
へそも神ならで三熱の、くるしみといふ事有るべきか。して「恥かしながら葛
城の、神の岩橋かけざりし、其とがめとて明王の、さつくにて身をいまして、
今にくるしみ絶えぬ身なり。わきへふしぎや扱はかづらきの、神のくるしみつ
きがたき、いしはひとつの神體として、してへ蘿かづらのみかかるといはほの、
わきへなづともつきじかづらは、してへはひひろごりて、わきへ露に置か
れ、二人へ霜にせめられおきふしの、立るも重き岩戸のうち、同下(歌)へあく

下底本と「して」「わき」が入れ
 變はり、「露に置かれ」も脇が詭
 ひ、以下は底本と同じ。神體の石
 像が昔縛られたときと同じく今も
 葛葛にからめられ、掻き撫でても
 取り盡くされさくにもなぐの意。
 拾遺「君が代は天の羽衣稀にきて
 撫づとも盡きぬ巖ならなむ」
 (四六)「置き」に通じ露・霜の縁語。
 (四七)岩戸の縁語。夜が明けて顔を
 見られるのがつらぬい意。拾遺
 「岩橋の夜の契も絶えぬべし明く
 るわびしき葛城の神」
 (四八)天人の命の終の時に現れる五
 つの衰相だがそれを神に轉用した
 (四九)岩に「言は」を掛け、言ふ詞の
 終るか終らない中に意を用ゐた
 (五〇)苔の序詞。「苔の衣」は法衣。
 (五一)説法の場をととのへ。
 (五二)永久に功德のある妙經を手向
 けて。とこは床に通じ筵の縁語。
 (五三)彼葛城の神が心を寄せてゐる
 夜の勤行。夜は「寄る」の掛詞。
 葛城の神は夜だけ現れるからその
 縁語となる。底本「活本」をこなひ
 (五四)佛を禮拜するときの詞。法華
 懺法、一心敬禮十方一切常住佛。
 (五五)神佛が威光を和らげて衆生を

るわびしきかづらきの、神に五衰四五のくるしみあり。祈り加持してたび給へと、
 岩橋四九のすゑたえて、神がくれにぞ成りにける、神がくれにぞなりにける。(中
 入。狂言、役の行者が葛城の神を縛めた故事を語る)

わき(待謔)へ岩橋五〇の、苔の衣の袖そへて、く、法五一のむしろのとことには、
 法味をなしてよもすがら、彼かづらきの神ごころ、よるの行ひ聲すみて、下
 へ一心敬禮五二。(出端)後してへ我葛城五三のよもすがら、和光五四の影にあらはれて、五
 衰五五のねふりを無上正覺五六の月にさまし、法性眞如五七の寶の山に、法味五八に引かれて來
 りたり。よくくつとめおはしませ。

わきへふしぎやな峨々たる山の常陰五九より、女體のしんとおぼしくて、玉のか
 んざし玉六〇かづらに、猶懸けそへて蘿六一かづらの、はひまつはるるをみ衣六二。してへ
 是みたまへや明王の、さつくはかかふる身をいましめて、わきへ猶三熱六三の神ごこ
 ろ、してへ年六四ふる雪や、わきへしもとゆふ、同上(歌)へかづらき山の岩はし
 の、よるなれど月雪六五の、さもいちしるき神體の、みぐるしきかほばせの、神す
 がたは恥かしや。よしや、芳野六六の山かづら、懸けて通へや岩はしの、高ま六七の原
 もこれなれや。かぐら歌はじめて、大和舞いざやかなでん。

救ひ給ふその御光の中に現れて。
 (五六)正覺は悟。それを月に喻へた。
 (五七)悟境の實相。それを寶に喻へ
 葛城山の異名寶の山に續けた。
 (五八)妙法の滋味に引かれて。
 (五九)玉を緒で貫いて頭にかける髮
 飾。「玉の髮さし」と對語。
 (六〇)齋服。こは神の着てゐる衣。
 (六一)「經る」と「降る」の掛詞。
 (六二)葛の枕詞、霜に通じ雪の縁語。
 (六三)月や雪の明るさにあんなにも
 はつきり見える神體。
 (六四)身の掛詞。體・顔の縁語。
 (六五)ええままよ、構はない。「恥
 かしや」と尾韻、吉野と頭韻。
 (六六)「懸けて」の序詞。
 (六七)「架けて」の意だが、「吉野から
 葛城に懸けて」の意をも匂はす。
 (六八)葛城山の最高峯高間山の俗稱
 だが、高天原に見立て岩戸神樂を
 聯想させた。高は岩橋の縁語。
 (六九)雪がしもとに白く降りかかつ
 て木棉花を附けた白和幣のやうだ
 「しもと」は霜に通じ雪の縁語。
 (七〇)面目ないよきまりが悪いよ。
 (七一)朝になつてあからさまにもな
 つてしまふであらう。「あさま」
 は「淺まし」と頭韻、朝間の掛詞。

して下へ降る雪の、同へしもとゆふ花の、しらにぎて。(序之)舞
 上へ高間の原の、岩戸のまひ、^(高間の)天のかぐ山も、むかひに見えたり。月
 白く雪しろく、いづれも白妙の、けしきなれども、なにおふかづらきの、神の
 かほがたち、おもなやおもはゆや、はづかしや淺ましや。あさまにも成りぬべ
 し。明けぬさきにと、かづらきの、明けぬさきにと、葛城のよるの、岩戸にぞ
 入りたまふ、岩戸の内にぞ、入りたまふ。

(一) 佛法の教への道も唯一筋であつて、南無阿彌陀佛といふ一聲の稱名だけで成佛出来る佛法を四方に弘めよう。一聲は一の掛詞。
 (二) 念佛宗を修行してゐる。
 (三) 本宮・新宮・那智の熊野三所權現。證誠殿は本宮をいふ。
 (四) 阿彌陀如来にお縋りしての祈願も満たされた熊野三山を今日旅仕度をして立ち出で、關守が手に弓を持つて立つてゐる紀の關を越え、明け暮れ日を重ねて、時節も丁度花の咲く春の頃、花の都に着いたのであつた。「みつ」は「満つ」と「三つ」の掛詞、彌陀と頭韻。今日は昨日に普通の「紀の」と對語。「立ち」は「裁ち」に、紀は着に、春は「張る」にそれぞれ通じ「重なり」と共に何れも衣の縁語。手束弓は今鏡の「あさもよひ紀の關守が手束弓云云」の歌によつて「紀の關守」の縁語であり、「射る」の縁で「出で入る」の序詞でもある。

誓願寺

前シテ……………女(和泉式部の化身)

後シテ……………和泉式部の靈

ワキ……………一遍上人

ワキツレ……………一遍上人の從僧(二人)

狂言……………都小川表の者

(次第) 僧次第へをしへの道も一聲の、をしへの道も一こゑの、みのりを四方にひろめん。詞「是は念佛の行者一遍と申す聖にて候。我みくま野證誠殿に參籛申して候へば、神託に四句の文を給はりて候程に、國土にひろめん爲、ただ今都へのぼり候。(道行)上へ彌陀憑む、願ひもみつの御山を、く、けふ立ちいづる旅衣、きの關守がたつかゆみ、出でいる日數かさなりて、時もこそあれ春の比、花の都に着きにけり、花のみやこに付きにけり。さしこゑへ有難やげ

(五) 參詣人がつぎつぎに續いて來る形容。色は袖の縁語。底本・田本とも「つひて」「をしなへて」とある。

(六) 所は文字通りの花の都だが、私は今更花のやうな美しい衣を着ようとは思はず、利欲を捨てた空の心境で心は澄み、墨染の衣を纏ひ。洛陽は花の縁語。墨染の衣を表はし「澄み」の縁語。空染の「は「澄み」の掛詞、夕の枕詞。

(七) 鐘。底本・田本とも「ふせう」

(八) 底本・田本とも「をのれく」

(九) 「一つ」の掛詞。一聲の念佛の内に極樂の蓮臺に生まれる。

(一〇) 古今集僧正遍照の歌、下句「何かは露を玉とあざむく」

(一一) 念佛の衆生を漏らさず濟度するとの阿彌陀佛の誓願。

(一二) 頂いて大切に保持しよう。

(一三) かならず極樂に往生する。

(一四) 洛陽誓願寺緣起に見える。南無阿彌陀佛の名號は一切の法界に遍滿し、全世界の物心萬有の本體は總べて阿彌陀佛であり、念佛によつて總べての行業から妄念を除く證悟を得、念佛の行者は人間の中での最上位で蓮華のやうだ。

に佛法の力とて、貴賤群衆の色々に、袖をつらねくびすをついで、しるもしらぬもおしなへて、念佛三昧の道場に、出でいる人の有がたさよ。

してさしこゑへ所は名におふ洛陽の、花の衣のいまさらに、心は空にすみ染の、わきへゆふべの鐘のこゑく稱名の御法、してへ臈鐘のひびき、わきへ聴衆の人音、してへ軒の松かぜ、わきへおのれくと、してへかはれども、同上(歌)へ彌陀憑む、こころは誰も一こゑの、く、内に生まるる蓮葉の、にごりにしまぬ心もて、何うたがひの有るべき。有がたやこのをしへ、もらさぬ誓まのあたり、受けよろこぶや上人の、御札をいざやたん、御札をいざやたん。

して「有難や此御ふだをみれば、南無阿彌陀佛六十萬人決定往生とかかれたり。六十萬人より外は往生にもれさふらふべきか。わき「おもしろくも御不審候物かな。是は三熊野證誠殿より四句の文を給はりて候ほどに、其四句の文の上の字を取りて、證文のために書き付けたり。只南無阿彌陀佛決定往生と此文ばかりを御たのみ候へ。して「扱其四句の文はいかなる事にて有るやらん。ぐちのわれらにしめし給へ。わき「いで語つて聞かせ申さん。六字名號一遍

(一五)「晴る」と春との掛詞。
 (一六)觀無量壽經の句。彌陀の光明が十方世界を遍く照らすの意。
 (一七)十方世界に救ひに漏れるものは一つもないといふ御法。

(一八)一遍上人語錄普願寺緣起等に見える歌。末句「聲ばかりして」
 (一九)觀無量壽經に見える淨土の三心。至誠心は眞實心、深心は深く彌陀の本願を信ずる心、廻向發願心は善根を積んで極樂往生を願ふ心。至誠心には「して」を掛けた。
 (二〇)念佛は十聲でも一聲でもその數に關係なく彌陀の利益があり。
 (二一)女は罪深くて轉輪王・梵天王・帝釋・魔王・佛の五つになることが出来ないとの佛敎思想。それを月を妨げる雲に喩へた。
 (二二)現世と來世にわたる極樂に。
 (二三)やすやすと往生出来る。
 (二四)底本「ささな」田本で訂正。
 (二五)「見る」の掛詞。

法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、此四句の文のうへの字なれば、六十萬人とは書きたるなり。して有がたや今こそ不審はるのよの、闇をも照らすみだのをしへ、わきへ光明遍照十方世界に、してへもるる方なき御法なるを、わきへ纒に六十萬人と人數をいかで定むべき。してへ扱は嬉しやこころえたり。此御札の六十萬人其人數をば打ちすてて、わきへ決定往生なむあみだぶと、してへ只一すちに念ずならば、わきへそれこそ則決定する、二人へ往生なれや何事も、みなうち捨ててなむあみだぶと、同上(歌)へとなふれば、佛も我もなかりけり、く、南無阿彌陀佛のこゑばかり、至誠心深心廻向、發願のかねの聲、耳にそみて有がたや。まことに、妙なる此をしへ、十聲一こゑ數わかで、さとりを迷ひをも、迎へたまふぞ有難き。下へさるほどに、夕陽雲に移ろひて、西にかけろふゆふ月の、よるの念佛を急がむ、夜念佛をいざや急がむ。

(ロンギ)上へはや更けゆくや夜念佛の、聽衆の眠さまさんと、かね打ちならし念佛す。してへ有がたや、五障の雲のかかる身を、助け給はば此世より、三世、安樂の國にはや、生まれゆかんぞ嬉しき。同へ勝安樂の國なれや。安く生

- (二六) 極樂への道。
- (二七) 念佛の利益は無量の罪を滅し
- (二八) 他の經典の亡びたのちの世でも阿彌陀經一つだけは残る。
- (二九) 八萬四千の法門の諸聖教も皆これ阿彌陀佛に歸一するの意。
- (三〇) 衆生濟度の御誓願を誓願寺に掛けた。
- (三一) 底本「せきたう」田本による。
- (三二) 底本「御基」田本「みはか」
- (三三) 値遇。ここは縁の意。
- (三四) 「住む」と「澄む」の掛詞。
- (三五) 新千載、朗詠などに「下くぐる水に秋こそ通ふらし」擧ぶ泉の手さへ涼しき」春は秋の縁語。
- (三六) 「擧ぶ」は「泉」の、「泉」は水に普通の「自ら」の序詞。泉に和泉式部の名をほのめかした。
- (三七) 「流す」は水の縁語。
- (三八) いや恥かしくても構はない。
- (三九) 「無き」と「亡き」との掛詞。
- (四〇) 石塔の蔭に石の火のやうに忽ちに消えてしまつた。石の火は石塔の縁語。
- (四一) あらたかなことよ。
- (四二) 阿彌陀佛の御名を一心に稱へ、彌陀の慈悲の心だけを頼んで。
- (四三) 「出で」の掛詞。

まるる運はたすばの、うてなの縁ぞまことなる。して下へ有難や、有がたや。さぞな始めて彌陀の國、すずしき道ぞたのもしき。同へたのみぞまこと此をしへ、或は利益無量罪、してへ又はよきやうの後の世も、同へ彌陀一教と、してへ聞く物を、同下へ有難や有がたや。八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛なるべし。此御本尊も上人も、只おなじ御誓願寺ぞと、佛と上人を、一體に拜み申すなり。

して「いかに上人に申すべき事の候。わき「何事にて候ぞ。して「此誓願寺と打ちたるがくをのけ、六字の名號に御なし候へ。わき「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。昔より誓願寺とうちたる額をのけ、六字の名號になすべき事、其うへ此法師が手跡、旁おもひも寄らぬ事にて候。して「いや是も御本尊の御告にて候物を。わき「そも御本尊の御つけとは、御身はいづくにすむんぞ。して「わらはが柄もよ所ならず、あの石塔こそ柄にてさふらへ。わき「ふしぎやなああの石塔は、和泉式部の御墓とこそ聞きつるに、そも柄とは不審なり。して「さのみな不審したまひそ。へ我も昔は此寺に、ちぐのあればすむ水の、春にも秋やかよふらし。同下(歌)へ結むすぶいづみのみづからが、名をながさんも恥かしや。よし、それとても上人よ。我いつはりはなき跡の、いづみ式部は我

(四三)彌陀來迎の時に従ふ二十五の菩薩。

(四四)御法だが、御乗の意も句はせてある。

(四五)常夜燈。影の縁語。

(四六)底本「せかひ」田本による。

(四七)クワリの全文と殆んど同文が誓願寺縁起に見える。

(四八)春日明神の菩薩説。

(四九)佛師稽文會・稽主勳兄弟の作と傳へられたのを、彼らが河内の春日に住んでゐたところから飛鳥朝の佛師春日と混同され、さらに春日明神に附會されたのである。

(五〇)神と佛とはただ水と波との差があるだけで本来一體だ。

(五一)威光を和らげて廣く俗塵に交はり、本来一體のもの、が身を分つて種種の姿に現じて。

(五二)「來迎引續の一」まで誓願寺縁起に殆んど同文が見える。

(五三)彌陀四十八願の一つで、衆生命終るとき來たり迎へて極樂へ引き寄せるとの誓願。

(五四)續本朝往生傳以下諸書に見える寂照の詩、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。誓願寺縁起にも見える。底本「せひか」田本による。

(五五)續本朝往生傳以下諸書に見える寂照の詩、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。誓願寺縁起にも見える。底本「せひか」田本による。

ぞとて、石塔のいしの火の、ひかりと共に失せにけり、光とともに失せにけり。
(中入。狂言、誓願寺の縁起、和泉式部の信心のことなど語る)

わき「御本尊の御告にまかせ、昔より誓願寺とうちたる額をのけ、六字の名號に引きかへ、佛前に移したてまつれば、(待語)上へふしぎや異香薫じつつ、
く、花降りくんだり音楽の、こゑする事のあらたさよ、是に付けても稱名の、
こころひとつを憑みつつ、かねうちならし同音に、下へ南無阿彌陀佛彌陀如來。
(出端)後してへあら有がたのがくの名號やな。末世の衆生濟度の爲、佛のみな
をあらはして、佛前にうつすありがたさよ。我もかりなる夢のよに、和泉式部
といはれし身の、佛果をうるやごくらくの、歌舞のぼさつと成りたるなり。二
十五の、同へ菩薩聖衆のみのりには、紫雲たなびく夕日影、してへ常のともし
火幽かにて、同へさながら爰ぞごくらく世界に、生まれけるかと、有がたさよ。
(クリ)上へ抑當寺誓願寺と申したてまつるは、天智天皇の御願、御本尊は
慈悲萬行の大ぼさつ、春日の明神の、御作とかや。してさしこゑへ神といひ佛
といひ、只是水波のへだてなり。同下へ然れば和光のかけ廣く、一體分身あら
はれて、衆生濟度の御本尊たり。して下へされば毎日ひとたびは、同へ西方淨

(五) 朝長に見える覺運の本覺の
 偶を和らげた。一六二頁参照。
 (六) 慈眼視衆生。慈悲の眼をもつ
 て衆生を視るために現れて。
 (七) 慈悲深い御誓願。
 (八) 彌陀四十八願の各願の始めの
 段我得佛を善導大師が譯した語。
 ここでは彌陀の誓願の意。
 (九) 自力では往生し難い。
 (一〇) 身の掛詞。佛法といふ他方に
 よつて、自力で棹をささないでも
 極樂の彼岸に渡りの意。舟は乘に
 普通の法・水刷竿・渡るなどと縁
 語。御法・御舟・水刷竿は頭韻。
 (一一) 「迷ひ」を雲に、悟りに喩ふ
 べき萬物の本體である眞如を月に
 なぞらへ、その縁で「空晴れ」と
 いひ、月は西に行くから西方と續
 けた。西方は西方極樂の意。
 (一二) 淨土は唯自らの心の中にある
 の意。
 (一三) 一遍上人語録に見える上人の
 詠歌。實盛・佛原・敷地物狂にも見
 える。參詣の人は各々歸つたが自
 分は猶獨り残つて念佛をしよう。
 上卷一四九頁・中卷二九四頁参照。
 (一四) 底本「せうみやう」田本による
 (一五) 廻雪の舞の袖。

土にかよひ給ひて、來迎らいごう引攝いんせつの、ちかひをあらはし、おはします。(クセ)下へ
 笙歌やぶが、はるかに聞ゆ、孤雲の上なれや。聖衆來迎す、落日のまへとかや。昔在しやざい
 靈山りやうざんの、みなは法華一佛、今さいはうの彌陀如來、じげん五六じしゆじやう顯は
 れて、しやばじげん觀世音、三利益同一體、有がたや、われらが爲の悲願ひつな
 り。して上へ若我成佛わががわがの、ひかりをうくるよの人の、同へわが五九からには行き
 がたき、御法みほの、御舟のみなれ棹、ささでもわたる彼岸ひがんに、いたり、いたりて
 樂しみを、きはむる國の道なれや。十惡萬邪じふあくばんじやの、まよひの雲も空はれ、眞如の
 月の西方も、爰を去ること遠からず、唯心ただこころの淨土とは、此誓願寺を拜むなり。
 して下へ歌舞のぼさつのさまへに、同へ佛事をなせる、心かな。(序)舞。
 して(ワカ)上へひとり猶、佛のみなを、たづねみん。同へ各々かへる、法のに
 は人、法のには人、法の場ば人の、して下へこゑも妙なり、稱名なをなのかずへ。同
 へ虚空にひびくは、してへ音楽のこゑ。同へ異香くんじて、して下へはなふる
 雪ゆきの、同へ袖をかへすや、返すがへすも、たつとき上人の、利益りやくかなと、菩薩
 聖衆は、めんへに、御堂みだうにうてる、六字のがくを、皆一同に、禮らいし給ふは、
 あらたなりける、奇瑞かな。

- (一) 田本「もとは」なし。
 (二) 底本・田本とも「をくれし」
 (三) 田本「又故郷なつかしう候程に、たた今思ひたち都に上り候」
 (四) 源氏鏡の巻の歌、下句「親を忘るる例ありやと」「身を變へて」は、生を變へての意と出家して姿を變へての意とを持ち、「此の世」には「子の世」を掛けてゐる。
 (五) 「切りたる」は「思ひ」と黒髪との兩方にかかる。
 (六) 「亂れ」の序詞でもある。
 (七) 續千載「受け難き身をしぼりてぞ迷ひこし本の悟りの道は知りける」「悟り」は里の掛詞。
 (八) 田本「是ははや都にのほりて候。此あたりは一條大みや佛心寺とかや申候。あらせうしや。俄に時雨の降來り候。是なる寺に立より時雨を晴さはやおもひ候。まがきをみれば……」
 (九) 咲き場所を争つて咲いてゐる

あさがは
 謹 (朝顔)

前シテ……………女 (朝顔の化身)

後シテ……………朝顔の精

ワキ……………旅僧 (元は都の者)

狂言……………都一條大宮邊の者

僧 詞「かやうに候者はもとは都の者にて候が、親に後れし愁歎により、もとゆひ切り諸國を廻り候。又此程は何とやらん故郷なつかしく候間、此秋おもひ立ち都に上り候。(道行)上へ身をかへて、後も待ちみよこの世にて、く、親を忘れぬならひぞと、思ひ切りたるくる髪カの、みだれ心をふりすてて、迷セはぬ法の道とへば、本のさとの名にしおふ、都と聞くぞたのもしき、都ときくぞたのもしき。詞「急ハぎ候間ほどなく都に着きて候。都にてもこのあたりは一條大みや、是なる御寺をば佛心寺とかや申すげに候。俄に村雨のふり來りて候ぞ

そのなかに。

(一〇) 田本「此花を一えた」

(一一) 新古今の歌。月草の花摺衣は

露草の花を摺りつけて染めた衣。

(一二) 田本「萩の」なし。

(一三) 田本「詠し給ふそ」

(一四) 田本「其」なし。

(一五) 源氏物語の作者紫式部、露草

の花色の紫色、地名の紫野などを

掛けてゐる。

(一六) 田本「いや是はた何となく

思ひよりて口ずさみ候よ」

(一七) 源氏物語夕顔の巻の歌。源氏

が六條御息所のところから朝歸り

のとき御息所の侍女中將の君を朝

顔に見立て戯れて詠んだ歌。

(一八) 田本「今朝の」脱。

(一九) 葎に通じ浦に普通の恨の縁語

(二〇) 法華の字を隠す。

(二一) 田本「扱々かやうに承る、御

身はいかなる人にてましますそ」

以下直ちにシテの詞に續く。

(二二) 底本・田本とも「せひ」

(二三) 花の名を喩へごとにする。前

の源氏の歌で朝顔を朝起きの顔に

喩へたことを指す。

(二四) この句點底本脱、田本で補ふ。

(二五) 田本「殊は」寶永八年戸藏屋

權

や。此寺に立ちより雨を晴らし通らばやと思ひ候。あらうつくしの草花や候。

籬をみれば秋の草、所あらそふ其中に、わきて萩蘆の今を盛と咲きみだれて

候。此萩を一もとたをらばやと思ひ候。下へ萩はぎを折らでは過ぎじ月草の、

「花すり衣露にぬるともと、ふることながら思ひ出でられて候。

して「なう／＼あれなる御僧。其萩の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候

ぞ。其萩の歌にてさふらはずとも、所につきたる古歌は有るべきぞかし。下へ

むらさきのゆかりのありて秋萩を、「折らではすぎじとのたまふやらん。わき

「いやゆかりなどと申す事は候はねども、ただ何となく思ひよりたるふること

也。して下へ咲く花にうつるてふ名はつつめども、折らで過ぎうき今朝の朝が

ほと、「もてはやさるるも有る物を、へただ萩のみを御賞翫の、同下へうらみ

は、數々おほけれど、よし／＼申すまじ。此花を、御法の花になしたまへ。

わき「扱はこの寺は故ある所にて候ひけるぞや。又御身もいかなる人にてま

しますぞ。御名をなりの給ひ候へ。して「今は何をかつつむべき。我は蘆の花

の精なるが、假初もこの花を、佛の前の手向草ともなす人はなくて、名になぞ

らふる事とし、ことばれんば愛執の種となる事、歎きの中のなげき也。下へた

版下懸語本は「或は」講曲評釋は觀世流の古板により「事は」とある。寶永版が最も通じ易いが、車屋本では田本の宛字に従ふべきかと思はれ、言葉懸慕すなはち和歌に託しての戀慕の意を掛け、葉に通ずる言葉をも木に通ずる「歎き」の縁語としたのではなからうか。

(二七)汝陽王李璿が帽子を被つて羯鼓を打つたとき、叔父の玄宗が自ら紅繖を帽子の上に置いたが、一曲が終つても花は墜ちなかつたといふ羯鼓録に見える故事。底本・田本とも「ほうしやうのこうきん」寶永八年戸藏屋版による。

(二八)白氏文集より出た語で、戯れ飾つた言葉の意だが、ここは語ひ舞ひなさいませといつた意。

(二九)狂言綺語と聞かされた言葉。(三〇)包む、重ねて、着などと縁語。

(三一)着と來との掛詞。

(三二)籬の有心の序詞。源氏朝顔の巻「秋果てて霧の籬に結ばげれあるかなきかてうつる朝顔」

(三三)霧の縁語。

(三四)桃の縁語。

(三五)桃園に住んだ桃園式部卿の宮

ま〜御僧に逢ひたてまつるうれしさに、一句をも聽聞申し、佛果をえむと思ふ故、かやうに顯れ出でたるなり。わき「扱は槿の花の精にたましますかや。佛果のえんとなる事も、懺悔にすぎたる事あらじ。たうてうのいにしへも、帽上の紅繖とて、紅の朝顔を簪のうへにかざりつつ、曲をなしつるためしあれば、へ急ぎ衣冠を着しつつ、狂言綺語をなしたまへ。して上へ恥かしやかかりと聞きし言の葉を、今あらためて申すならば、いさむる神のありやせん。下へよし〜それはともかくも、顯れ出でて言のはを、たがひにかはすこのうへは、何をかさのみつつむべき。同下(歌)へ花ごるも、かさねてきつつかたらん。其程は、しばらく、待たせ給へとて、霧のまがきに、立ち隠れ失せにけり、跡立ちかくれ失せにけり。(中入。狂言、光源氏と朝顔齋院との戀物語、朝顔齋院が朝顔の花を愛したことなど語る)

わき(待語)へいにしへに、是やなるてふ桃ぞの、〜、あとほる〜の遠き世を、今聞くことのふしぎさよ。しばらく爰にやすらひて、其朝がほの色深き、花のゆかりをたづねん、花のゆかりをたづねん。(一聲)後してへあらうれしや衣冠を着し、かぶの菩薩のごとくになりて、うたふ心や法の花の、臺に至

の娘が植だからかういつた。

(三〇) 田本「すかたとなりて」

(三一) 底本「田本とも」「たふ」

(三二) 田本「此寺の謂、又は御身の

妄執なんとも」

(三三) 田本「申しし」

(三四) 田本「折々の」

(三五) 朝顔の縁語、情の序詞。

(三六) 「掛け」の掛詞、「忝し」の序

詞。「かけまく」「忝し」「かごと」

は頭韻。

(三七) 齋院といふ神に仕へる身を口

實として。

(三八) 女色に溺れ苦しんだ御心も。

紫は色および「碎き」の序詞。

(三九) 「浅からず」の掛詞、頭韻を

介してつぎの「浅からぬ」の序詞。

(四〇) 牽牛・織女の二星の契り。

(四一) 曾我物語卷二・鴉聲合戦物語・

雑和集などに委しくに見え、謡曲

鶺鴒にも簡単に見える傳説。

(四二) 遊子十六歳伯陽十二歳の時に

夫婦の契りを交はしたことをいふ

(四三) 月の異名。

(四四) 謡抄および江戸時代の諸版本

の東横とあるのに従ふべきだ。

(四五) 遠境。鴉聲記には遠き里。

(四六) 田本「さすらひ」

らん有難さよ。いよ／＼佛果をさづけ給へ。わきへ勝や懇め置きつる言の葉かへず、重ねて顯れ給ふ事、妄語のなきこそ有がたう候へ。「同じくは此寺の謂、又御身の妄執などを、くはしくかたり給ふべし。

(クリ) して上へ、抑この寺と申すは、桐壺のみかどの御おとと、同へ式部卿と申せし人の住み給ひし、ももぞののみやの、御舊跡。してさしこまへ其御息女のましますは、賀茂の齋に備はりて、同へあさがほの齋院と申しし也。光源氏は折々に、露の情をかけまくも、かたじけなしと神職に、かごとをなしてなびかず。して下へ然りとは申せども、同へたはふれにくむらさきの、色に碎きし御こころも、朝がほの浅からぬうらみとかや。又は牽牛花とも申せば、星の契りも、よそならず。(クセ) 下へ遊子、伯陽といつし人、偕老を契ること、二八三四の旬なり。共に、玉兔を愛して、夜もすがら、とうろの、ほとりにまします。夕には、出づべき月を待ちて、ゑんきやうにさざらひ、あかつきはいりがたの、月を、惜しみて先峯の、高きによぢのぼる。して上へ伯陽、このよを去りしかば、同へ遊子はふかく歎きて、月のまへにたたずむに、互に、すがたを見みえし、其執心に引かれて、牽牛、織女の二星となり、烏鵲紅葉の、橋

(三) 謡抄寶永八年戸藏屋版等は尖峯、謡曲評釋は山峯又は前峯、千峯も考へられるが尖峯がよいやうだ
 (四) 七夕の夜二星が逢ふとき鳥と鶴とが羽を並べて橋とし、二星が別れるとき血の涙を流して鶴の羽を紅に染める故事より天の河に七夕の夜架けられる橋をいふ。この傳説(五)に記した諸書に見える。
 (六) 底本・田本とも「もとひ」
 (七) 事文類聚後集に見える僧紹隆の詩「朝開暮落渾閑事、祇要人知色是空」。閑事は徒事の意。
 (八) 庄子、朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋。蟪蛄は夏蟬。
 (九) 玉心朗詠白樂天の詩、松樹千年終是朽、蘊花一日自爲榮。底本つゝめには「田本による」。
 (一〇) 拾遺「三千年なるてふ桃の今年より花咲く春に逢ひにけるかな」との西王母の故事を詠んだ歌により桃園の有心の序とした。
 (一一) 草木國土悉皆成佛といふ偈文を佛心寺に掛けた。田本「佛心」

をたのむことも、かかふるあさましき、執心の基なりけり。

上(歌)へ去ながら、朝開暮落すべて閑事、只、ようすひとしき、是空なることをしると、作れる詩のころは、色即是空なり。あらおもしるの心や。へおもしろや。(序)舞。して(ワカ)上へ朝菌は晦朔をしらず。蟪蛄は春秋を期せず。かやうにあだなる響なれども、よし／＼それも、厭はじやいとほじや。同へ千年の松も、終には枝くちぬ。して下へみちとせになるてふ、桃菌の宮もなし。同へ一日の蘊花も、して下へ一たびの榮は、あるものを／＼。同へかれも是も、よく／＼思へば、夢の中なる、夢の世ぞや。してへ只うれしきは、御僧に、あひたてまつりて、同へ御法に値遇の、えんとなれば、草木國土、悉皆佛身の、此御寺は、あひにあひたる、のりの場かな、法のにはかなと、うたひ捨て、野分のかげに、袖をひるがへし、松のこずゑに、かかると見えしが、其まますがたは、木のまの日影、其まますがたは、木のまの日かげに、色きえ／＼とぞ、なりにける。

- (一) 夕方になる毎に假寢の夢を結ぶ宿は。假は借りに通じ宿の縁語。
 (二) 私はいつも同じつらい漂泊の旅寢の身で、美濃・尾張を過ぎるにつけても、はかないわが身の終りを観じつつ、三河の國に着いたのであつた。「うきは浮と憂き」の、「みのをはり」は美濃尾張と「身の終り」の、參河は「見る」の掛詞。
 (三) 底本・活本「おはり」
 (四) 時節を忘れずに咲くこの杜若の花の美しい色、異名に貌佳花ともいふやうだ。色香といふ熟語により色は貌佳花の序詞でもある。
 (五) 何といつても。
 (六) 名所の花。
 (七) 普通のありふれた紫色の花と同様な紫花だとは思ひなしたさらないで。ゆかりの色は紫色。
 (八) 蜘蛛の手のやうに八方に分流してゐることをいふ。
 (九) 「唐衣着つつ」までは「馴れにし妻」の序詞。妻は褌に、「はる／＼」は「張る」に、「來ぬる」は着に通じ衣の縁語。
 (一〇) わかり切つた事をおつしやいますね事・此・此處・心は頭韻。

杜 若

杜 若かきつばた

シテ……………杜若の精(女姿)

ワキ……………都の僧

僧詞 「是は都がたより出でたる僧にて候。われいまだ東國を見ず候程に、只今思ひ立ち東國修行と心ざし候。(道行)上へゆふべくのかりまくら、く、宿はあまたにかはれども、おなじうきねのみのをはり、參河の國に着きにけり、三河の國につきにけり。さしこゑへ勝や光陰とどまらず春過ぎ夏もきて、草木心なしとは申せども、時を忘れぬはなの色、かほよ花とも申すやらむ。あらうつくしのかきつばたやな。

して「なうく旅人何とて其澤にはやすらひ給ふぞ。わき「さん候是なる澤の杜若に眺めいりてやすらひ候よ。して「さすがに此八橋の杜若は、古歌にも讀まれたる名におふ花の名所なれば、へ色も一入こむらさきの、なべての花の

(一) 歌に寄せる奥深い心から陸奥の遙かの名所を尋ねたが、その名所名所もその名のやうに國國に名のあるところは多いのだが。
 (二) 心中に思をかけた訪れたいと願つてゐたのは三河の八橋だが、その八橋の澤邊の杜若を見て「はる／＼來ぬる旅をしぞ思ふ」といふ歌を詠み、妻を忍ぶ戀情をこの世に残して。掛け渡りは橋の色は杜若の縁語。三河は見の掛詞。
 (三) 歌の作者業平は過去の人となつたが。業平は「成り」の掛詞。
 (四) 「有り」の掛詞、跡と頭韻。亡き在原の業平の舊跡ともいふべきこの杜若を分け隔てなく眺めて昔を忍んで下さい。「隔て」は垣に普通の杜若の縁語。
 (五) 杜若の縁語、淺からずの序詞。
 (六) 業平が契つた人も八人あり。
 (七) 「八」の掛詞、蜘蛛の序詞。
 續古今「戀せよとなれる三河の八橋の蜘蛛に物を思ふころかな」
 (八) 蜘蛛の手のやうに千千に思ひ亂れることだ。
 (九) 昔業平の愛人が業平に馴れ親しんだが現在とても同様で、旅人に昔の事を語つてゐる中に、今日

ゆかりとは、思ひなぞらへ給はずして、取分なぐめ給へかし。あら心なの旅人
 やな。わき「げに／＼此八橋のかきつばたは、古歌にも讀まれけると也。去な
 げら、いづれの歌人の言のはやらん承り度くこそ候へ。して「是は在原の業平
 の歌にあり。伊勢物がたりにいはく、三河の國八橋と云ふ所に至りぬ。爰をや
 つはしとは水ゆく川の蜘蛛なれば、橋をやつわたせるなり。其澤に杜若いとお
 もしろくさけり。ある人このかきつばたと云ふ五もじを句の上に置きて、旅の
 心をよめといひければ、下「から衣きつつ馴れにしつましあれば、「はる／＼
 きぬる旅をしぞ思ふ。是在原の業平の、此かきつばたをよみし歌なり。わき
 ちあらおもしろや扱は此、あづまの果の國々までも、なりひらは下り給ひける
 か。して「こと新しき仰かな。此八橋のこのみか、猶しも心の奥深き、名所
 々も名のごとく、わき「國々ところはおほけれど、取分こころの末かけ
 て、して「思ひ渡りし八橋の、わき「三河の澤のかきつばた、して「はる／＼
 きぬる旅をしぞ、わき「思ひの色をよに残して、して「主はむかしになりひら
 なれど、わき「形見の花は、して「今爰に、同上「歌」へありはらの、跡な隔て
 そかきつばた、／＼、澤邊のみづのあさからず、契りし人も八橋の、くもでに

も暮れるにつれていつの間にか旅人に馴れ親しんでしまつた私心だなあ。今とてもはやがて馴れぬるにかかる。今・昔・今日は縁語。やがてのやは夜に通じ暮の縁語。馴れは唐衣の歌の縁で出した。(三〇)額に透かしのある冠。底本「透ひたひ」活本による。(三一)清和帝中宮高子。(三二)五節舞見物ときの冠。(三三)とにかくとしてさて置き。(三四)底本「せひ」活本による。(三五)後撰所見の變心の愛人への義方の歌「いひ初めし昔の宿の杜若色ばかりこそ形見なりけり」を作り替へた歌らしく、謠言粗志には伊勢物語の古註に「植言置きし」とあるとあり、謠曲拾葉抄には雲玉集を引きこの返歌を杜若の精が男に返したことを記してゐる。(三六)草木の縁語、「恵み」の序詞。(三七)「成り」と業平の掛詞。(三八)本来の住家である寂光浄土。(三九)衆生を濟度し利益する爲の道の唐衣の袖を返して舞ひ、寂光の都へ歸るよすがとした恨みの種。恨みは裏に通じ衣・返すの縁語。

杜 若

物ぞ思はるる。今一九とても旅人に、昔をかたるけふの暮、やがてなれぬるころかな、やがて馴れぬる心かな。

して「わらはが庵いはほりの候に立ちよりて一ひとよを御あかし候へ。(物着)「なうく」是なる冠からきぬ御覽候へ。わき「ふしぎやないやしき賤がふしどより、色もかかやくきぬをき、透額すきごの冠を着し、是をみよと承はるは何といひたる事やらん。して「是こそ歌に讀まれたるからころもたかきこの後の御衣にてさふらへ。又此かふりは業平の、豊の明あかりの五節の舞の冠なれば、かたみの冠からころも、身にそへ持ちてさふらふ也。わき「冠からきぬは先々まづまづ置きぬ。扱々御身はいかなる人ぞ。して「今は何をかつつむべき。我は杜若の精也。殖うゑる置きし昔のやどのかきつばたと、よみしも女の杜若に成りし謂いはれのころなり。又なりひらは極樂の、かぶの菩薩の化現なれば、讀み置く歌のことばも皆、發心説法の妙文なれば、草木きうもくまでも露つゆのめぐみの、佛果の縁をとふらふ也。わき「ははふしぎの御ことかな。正ただしき非情の草木に、言葉をかはず法のこゑ、して「佛事をなすや業平の、むかし男のまひの姿、わき「これぞ則すなはちかぶのぼさつの、して「かりに衆生しゆじやうとなりひらの、わき「本地寂光の都をいでて、して「あまねくさ

(三) どういふわけで戀の思ひに涙を流したのか分らず、唯戀の思ひを忍び隠して通ふ戀路の物語であつて、發端もなく結末もない。露は涙の露の意で、思ひ・忍草に露通の信夫山・道芝等の縁語。信夫山は頭韻より來る忍びの序詞。山と道とは縁語。道芝は道の方に意味があり、芝は葉に通ずる始めの序詞。伊勢に「信夫山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」
 (三) 底本「うゝ冠」活本による。
 (三) 領地を所有してゐて。
 (三) 霞の立つと出立つとの掛詞。
 (三) 春の縁語。
 (三) 殿上で初めて冠を着けたといふ意味からを補つて見ればよい。底本「うゝ冠」活本による。
 (三) 大鏡道眞の詩、一榮一落是春秋。王充論衡、一壽一閻一盛一衰。莊子天運篇、萬物循生、一盛一衰。
 (三) 眞理であつたことを業平自身の運命が證明したのであつて。
 (四) 「行く」と「浪」との連絡語。
 (四) この邊伊勢の本文を引く。
 (四) (四) 伊勢物語の歌。「羨まし」は浦・山に通じ浪の縁語。

いと、わきへ利生の、してへ道に、同(次第)へはるくきぬるからころも、遙々きぬる唐衣、きつつや舞をかなづらん。してへ別れこし、跡のうらみのから衣、同へ袖を都に、返さばや。(イロハ)

(クリ) 上へ抑この物がたりはいかなる人の何事によつて、思ひの露の忍ぶ山、しのびて通ふみちしばのはじめもなく終りもなし。してさしこゑ昔男初冠して奈良の京、かすがの里にしろよししてかりにいにけり。同下へ仁明天皇の御宇かとよ、いともかしこき勅をうけて、大内山の春霞、たつや彌生の始めつきた、春日のまつりの勅使としてすきびたひの冠をゆるさる。して下へ君のめぐみの深き故、同へ殿上にての元服の事、當時其例まれなる故に、初冠とは申すとかや。(クセ) 下へ然れども世の中の、一たびは榮え、ひとたびは、衰ふる理の、まことなりける身の行方、住みどころ求むとて、あづまのかたに行く雲の、いせや尾張の、海づらに立つ浪をみて、いとどしく、すぎにし方のこひしきに、浦山しくも、かへる浪かなと、うち詠め行けばしなのなる、あさまの獄なれや、くゆる煙の夕げしき。して上へ扱こそ信濃なる、浅間の嵩にたつけふり、同へ遠近人の、みやは、とがめぬと口ずさみ、猶はるばるの旅ごるも、

(四四) 遙遙は「張る」に三河は身に
通じ共に衣の縁語。

(四五) 花はゆかりの色といはれる紫
色なので、紫のゆかりの語からふ
と都に残した妻は鍵在かと思ひ出
す意。「や」を疑問に解せず咏嘆
となれば「妻があるのだよ」の意
となる。紫・ゆかり・妻は縁語。

(四六) 「底ひなく」にかかる副詞。

(四七) 「水の」迄「底ひなく」の序詞。

(四八) 深く。底本・活本「そこる」。

(四九) 伊勢物語所見の紀有常の娘。

(五〇) 伊勢四十四段の病死の女か。
葛の袴は長谷雄の娘とす。

(五一) 六十三段の女の渾名。

(五二) その簾に光を亂して飛ぶ螢の
やうに亂雑に無秩序に書かれてゐ
るが、主人公の私(業平)は實は飛
ぶ螢と同様雲の上に住んでゐるの
であつて。伊勢の物病の女の段の
歌に「飛ぶ螢雲の上までいぬべく

は秋風吹くと雁に告げこそ」
(五三) 又私は世を死後迷はないや
うにと導く光普き有明の月にも譬
へられるのであつて。伊勢物語難
儀抄「知るや君我に馴れぬる世の
人の暗きに行かぬ便りありとは」
(五四) 伊勢の業平の歌。月もない、

三河の國に付きしかば、爰ぞ、名にある八橋の、澤べに匂ふかきつばた、花、

むらさきのゆかりならば、つましあるやと、思ひぞ出づるみやこ人。そもく

此物がたり、その品おほき事ながら、とりわき此八橋や、みかはの水の底ひな

く、ちぎりし、人々の數々に、名をかへ品をかへて、人まつ女、ものやみ玉す

だれの、光も、亂れて飛ぶ螢の、雲の、うへまでゆくべくは、秋かぜふくと、

かりに顯れ、衆生さいどの我ぞとは、しるやいなやよの人の、して上へくらさ

に、ゆかぬ有明の、同へひかりあまねき月やあらぬ、春や、むかしの春なら

ぬ、わが身ひとつは、本の身にして、本覺、眞如の身をわけ、陰陽の神といは

れしも、只なりひらのことぞかし。か様に申す物がたり、疑がはせ、給ふなた

び人、はるくきぬるから衣、きつつや舞をかなづらん。

してへ花前に蝶まふ、紛々たる雪。同へ柳上にうぐひすとぶ、片々たる金。

(序乙) 舞。して(ワカ)上へ殖を置きし、昔のやどの、かきつばた、同へ色ばかり

こそ、むかしなりけれ。色ばかりこそ、むかしなりけれ。色ばかりこそ。

して下へ昔男の名をとめし、花たち花の、へにほひうつる、あやめのかづら

の、同へ色はいづれぞ、してへ似たりやにたり、同へかきつばた花あやめ、梢

春も昔のとは違ふが、私獨りだけは普通通りの自分だと私が嘗て詠んだやうに、私は本の菩薩に戻り。
 (五七)佛教哲學的に見れば、正覺を先天的に覺知する真如體たる佛菩薩の身を分けの意とすべきだが、萬有の本體の體の面と相の面とを別別に分け現しての意であらう。

(五七)男女の和合を司る神。

(五七)百聯抄解、「花前蝶舞粉粉雪、柳上鶯飛片片金」。

(五八)昔男といはれた業平の名を留めた橘、その橘の匂が移つてゐるやうに思はれる菖蒲の髪飾、その色は杜若に似るも似たり何れが何れとも分別し難く、杜若も花菖蒲も何れも濃い紫色だ。伊勢「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」梢は濃の掛詞。

(五九)蟬の迄殻に普通の唐衣の序詞

(六〇)袖は白くて卵の花のやうにまた雪のやうに美しく。白妙・卵の花・雪・しらしらは何れも白の縁。

(六一)朝になつて東の空は薄紫色に白み。淺紫は朝の掛詞。

(六二)花の縁語。

(六三)中陰經の句と傳へる偈文。底本「しつかひ」活本による。

はなくは、してへ蟬のからころもの、同へ袖^{六四}しろたへの、うの花の雪の、夜もしらくと、あくる^{六五}しののめの、あさむらさきの、かきつばたの、花もさとり、こころ^{六六}ひらけて、すはや今こそ、草木國土、すはやいまこそ、草木國土、悉皆成佛の、御法をえてこそ、歸りけれ。

羽衣はつころも

シテ……………天人
ワキ……………漁夫白龍りゅう
ツキツレ……………漁夫(二人、なしにも)

(一) 醒) わき一せいへ風かぜはやの、三保の浦うらを漕ぐ舟ふねの、うら人騒ぐ、浪路かな。さしこゑへ是はみほの松原まつはらに、はくれうと申す漁夫りゅうにて候。萬里まんりの高山たかに雲たちまちにおこり、一ろうの明月めいげつにあめ始めてはれり。げに長閑なる時ときもや。春はるのけしき松まつばらの、浪たちつづく朝霞あさぎり、月つきものこりの天あまの原はら、及びなき身の心こころにも、ながめことなる氣色きしきかな。下しも(歌)へ忘わすれめや、山やまちを分わけて清見しみがた、遙とほにみほの松原まつはらに、たちつれいざやかやはん、立ちつれいざや通とほはむ。上うへ(歌)へ風かぜむかふ、雲くものうき浪なみたつとみて、く、釣つりせで人ひとやかかへらん。ましてしばし春はるならば、吹ふくものどけき朝あさかぜの、松まつはときはのこゑぞかし。浪なみは

(一) 萬葉・夫木などに見える歌。
下句「舟人騒ぐ波立つらしも」
(二) 底本「うらは」
(三) 漁師たちが海上で大聲で騒いでゐるよ。「騒ぐ」は浪の縁語。
(四) 現行曲では「白龍」
(五) 底本「漁父」
(六) 詩人玉屑の、千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴を變へて引いた。
(七) 樓上に明月が出て、雨が初めて晴れた。
(八) 春景色を待つてゐた松原は波のやうに連り、波は立つてゐるが朝霞は消え、月も空に残り。松は「待つ」の月は「盡き」の掛詞。
(九) 天の原の縁語。私のやうな賤しい風流ふうりゅうの分わらない者の眼まなこにも。
(一〇) 續古今「忘れずよ清見關の浪間より霞みて見えし三保の松原」
(一一) 前の「や」と連韻。
(一二) 來の掛詞。
(一三) 見の掛詞。
(一四) 謡曲拾葉抄に冷泉爲相の遠浦歸帆を詠んだ歌として「風向ふ雲の浮波立つと見て釣せぬ先に歸る舟人」を擧げてゐる。風を受けて浮んでゐる白雲を波が浮き立つてゐるのかと見間違へての意。

(一五)松は常磐の調べを奏でてゐるぞ。松は風の、聲は音の縁語。

(一六)底本「をんかく」

(一七)さうだ。

音なき朝なぎに、釣人おほきを舟かな、釣人おほきを舟かな。わき「我みほのまつばらにあがり、四方のけしきを眺むる處に、虚空に花ふり音楽聞え、靈香よにも薫す。是唯事ともおもはぬ所に、これなる松をみればうつくしき衣かかれり。よりに見れば常の衣にあらず。いかさまとりて歸り古き人にも見せ、家の寶ともなさばやと存じ候。

- (一八)底本「と」脱。
 (一九)ともかくも。
 (二〇)どつした物かかうした物かと
 (二一)「無く」の掛詞。涙は露とこぼれて露に玉を飾り、頭に挿した花も萎れ自らも力なくの意。涙・露・玉・鬘・挿頭・花・しをれと順次縁語を連ねた。
 (二二)天人命終の時に現れる五種の衰相。
 (二三)丹後風土記の羽衣傳説のところに見える天人の歌に「天の原ふりさけ見れば霞立ち家路までひて

して「なう其衣はこなたの衣にて候何しにめされ候ぞ。わき「是ははくれうがひろひたる衣にて候ほどに取りて歸り候よ。して「それは天人のは衣とて輒く人間にあたふべき物にあらず。本のごとくに置きたまへ。わき「扱は天人にましますかや。然らば衣をとどめ置き、國の寶となすべきなり。衣をかへす事あらじ。して「悲しやなはごろもなくては飛行の道もたえ、天上に歸らん事も叶ふまじ。去とはかへしたび給へ。わき「此御こと葉を聞くよりも、いよはくれう力をえ、かなふまじとて立ちのけば、して「今はさながら天人も、はねなき鳥のごとくにて、わき「あがらんとすれど衣なし。して「地に又すめば下界なり。わき「とやあらん、して「かくやあらむとかなしめども、わき「はくれう衣を返さねば、して「力及ばず、わき「せんかたも、同(上歌)へなみ

行方知らずも

(二) 雲の中の路も分らず行くべき方も分らないことだ。

(三) 何時になつたら行けようかと思ふと、空行く雲も羨ましい、眺た。

(四) 常に聞き馴れた迦陵頻伽や天路を歸つて行く雁等の幽かな聲を聞くと、今更のやうに懐しいよ。

(五) 迦陵頻伽は極樂に住む美聲の鳥。

(六) 千鳥や鴨が沖の波の上を行くのか歸るのか飛んでをり、春風が空に吹いてゐる、さうした自然の風物までもなつかしいことだ。

「歸る」は波の縁語、「行く」の對語。

(七) 同じ舞ふならいつそのこと、人間の遊樂界への記念の舞ひとして、月宮殿を取りまいて舞ふ舞曲があるが、それをただいまここで演奏して憂き世の人に傳へよう。

(八) 唐樂玉樹後庭花の別名だが、ここは天人の奏する舞曲の意に用ゐた。底本「けひしやうづゝふ」

(九) 天の羽衣を風に靡かせ、雨に潤ふ花のやうな美しい袖を飄し。

(一〇) もと東國の郷土舞踊だつたらしいが平安朝期に典禮化した組踊りや駿河舞はその組踊りの一つ。

(一一) 伊弉諾・伊弉册二神。

羽衣

だの露の玉かづら、かざしの花もしほくと、天人の五衰も、目のまへにみえてあさましや。

して下へ天のはら、ふりさけみれば霞たつ、雲路まどひて行方しらずも。

同下(歌)へ住みなれし、空にいつしかゆく雲の、うら山しき氣色哉。上(歌)

へ迦陵頻伽の馴々し、く、聲今さらにはつかなる、鴈がねのかへりゆく、天路をきけばなつかしや。千鳥、かもめのおきつなみ、ゆくか歸るか春かぜの、空に吹くまでなつかしや、空にふくまでなつかしや。

わき「いかに申し候。餘に御歎き候程に衣を返し申さうずるにて候。して

「あらうれしやさらばこなたへ給はり候へ。わき「暫候 承り及びたる天人の舞樂、ただ今ここに奏し給はば、衣をかへし申すべし。して「安き間の事

此よるこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみのまひ、月宮をめぐらす舞曲あり。只今ここに奏しつづ、世のうき人に傳ふべし去ながら、衣なくては叶

ふまじ先かへしたび給へ。わき「いや此ころもをかへしなば、舞曲をなごで其

ままに、天にやあがりたまふべき。して「いや疑ひは人間にあり。天に偽なき物を、わきへあら恥かしやさらばとて、ころもをかへしたふれば、してへ

(三三) 所で。さて。
(三四) 玉の斧で永久に破損しないやうに修築してあつて。

(三五) 月宮には白衣天人十五人黒衣天人十五人があるが、その中十五人が常に奉仕し、一日から十五日までは一日に一人づつ白衣が宮中に入り、代りに黒衣が退出し、十五日には白衣ばかり十五人となつて満月となる。十五日から卅日まではその逆になり、卅日には黒衣ばかり十五人となつて闇月となるとの恵心僧都の三界義の註に見える思想に基づいた。三五は十五夜の聯想で月の縁語。

(三六) 一月中夜毎夜毎に天少女は役目をきめて奉仕する。法事は奉仕。
(三七) 月宮から別れて。身は實に通じ桂の、桂は鬘に通じ「分け」の縁語。

(三八) 後撰の歌、末句「花や咲くらん」

(三九) 天人の頭に挿した花鬘。

(四〇) 古今の歌、末句「暫し止めむ」

(四一) 「見よ」の掛詞。

(四二) 崎と尾韻。月・雪・花は縁語。

(四三) 「清き」と浪の掛詞。

(四四) 「無き」と浪の掛詞。

乙女は衣を着しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、わきへあまのは衣かぜに和し、してへ雨にうるほふ花の袖、わきへ一曲をかんで、してへまふとかや。同(次第)

へ東あそびの駿河舞、あづま遊のするが舞、此時やはじめなるらん。

(クリ) 上へ夫久かたの天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、久かたの、そらとは名付けたり。してさしこ

ゑへしかるに月宮殿の有さま、玉ふのしゆりとこしなへにして、同へ白衣黒衣

の天人の、數を三五にわかつて、一月ややのあま乙女、法事をさだめ役をな

す。して下へ我も數ある天乙女、同へ月のかつらの身を分けて、かりにあづま

の駿河まひ、世に傳へたる、曲とかや。(クセ) 下へ春がすみ、たなびきにけり

久かたの、月の桂の花やさく、勝はなかつら、色めくは春のしるしかや。おも

しろやあめならで、爰もたへなり天津かぜ、雲の通ひち吹きとぢよ。乙女の

姿、しばしとどまりて、此松ばらの、春の色をみほが崎、月、清見がたふじの

雪、いづれや春のあけぼの、たぐひなみも松かぜも、のどかなる浦の有様。其

うへあめつちは、何を隔てん玉がきの、うちとの神のみすゑにて、月もくもら

ぬ日のもとや。して上へ君が代は、あまのはごろも稀にきて、同へなづとも盡

- (四五)「隔て」の縁語、内外の枕詞。
 「内外の神」は伊勢の内宮外宮。
 (四六)日本國の意。月の縁語。
 (四七)拾遺の歌、末句「巖なるらん」佛説の天人劫の傳説を借りて御代の長久を壽いだ。着は來の掛詞。
 (四八)のちの東歌にもかかる。
 (四九)東遊の歌詞。
 (五〇)大江定基(寂照)の詩、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。空篋と孤雲とは「こ」の連韻。
 (五一)須彌山だがこは富士山の意「染め」に通じ紅の縁語。
 (五二)「浮き」を掛け、浮島原を「拂ふ」に言ひ掛けた。
 (五三)廻雪の舞を柔げたいひ方。
 (五四)南無は梵語、歸命は漢語で、ともに祈願の意。月天子は月宮の天子で、大勢至菩薩の化身。
 (五五)廻舞の手振りの形容。それを颯颯に掛けた。底本「さゆうさ」
 (五六)宮人の草體の誤りらしい。
 (五七)満月の掛詞。満月となつて願ひの満ち足りた真如の光となり。上懸の「満月(まんぐわつ)」がよい
 (五八)御誓願は圓滿に國土と共に成就し、七寶の充滿した寶を降らし。
 (五九)浮・足・高などの縁語。

羽衣

きぬ岩ほぞと、^{四八}開くも、妙なりあづま歌、こゑをへて數々の、^七簫笛琴箏篔簹、^{五九}孤雲の外にみちくして、落日のくれなゐは、^五そめいろの山をうつして、みどりは浪に浮嶋が、はらふあらしに花ふりて、げに雪を廻らす、白雲の袖ぞたへなる。

して下へ南無歸命月天子、本地大勢至。同へあづまあそびの、舞の曲。(序之)舞。して上へあるひは、天津み空の、みどりのころも、同へ又は春たつ、霞の衣、してへ色香も妙なり、乙女のもすそ、同へ左右左、左右さつくの、花をかざしの、天のは袖、なびくも返すも、舞の袖。(破之)舞

上へあづまあそびの、數々に、^(あづま)其名も月の、^{五六}色人は、三五夜中の、空に又、^{五七}滿願真如の、かげとなり、^{五八}御願圓滿、こくど成就、七寶充滿の、たからをふらし、こくどに是を、ほどこし給ふ、去程に、^{五九}時移つて、天のはごろも、浦かぜにたなびき、たなびく、三保の松原、うき嶋が雲の、あしたか山や、ふじの高ね、^{六〇}幽に成りて、天津み空の、かすみにまぎれて、うせにけり。

湯谷 (熊野)

シテ……………熊野

ツレ……………朝顔

ワキ……………平宗盛

ワキツレ……………宗盛の従者(太刀持)

(一)女將。女主人。

(二)病氣。

(三)底本「太刀持」脱。

(四)夢の間も惜しまれる春ではある。散らないうちに都を訪れて花を見よう。花を湯谷に、花の散るのを老母の死に譬へた。花には「花の都」の意をも掛けてある。

(五)底本「とをたうみ」

(六)この間からの旅の日數も重なり、幾晩旅宿に泊つたことだらう。假寢の夢も數重なり。「日も」は紐に通じ衣の縁語。

(七)どうぞ。順序を踏んで。

わきこゑ「是は平の宗盛也。詞「さても遠江の國池田の宿の長をばゆやと申し候。ひさしくとどめ置き候處に、老母のいたはりとして度々暇を乞ひ候へども、此春ばかりの花見の友と思ひ未暇を出さず候。いかに誰かある。太刀持「御前に候。わき「ゆや暇の事を申さばこなたへ申し候へ。太刀持「畏つて候。

(次第) 朝がは次第「夢のま惜しき春なれや、夢のま惜しき春なれや、さく比花をたづねん。さしこゑ「是は遠江の國、池田の宿の長者の御うちに、朝顔と

(一) 草木は雨露の恵みによつて育つのであつて、育て上げて見れば雨露は花の父母である。本朝文粹源順の賦、草樹皆告二雨露之恩一。

(二) 養得自爲「花父母」。

(三) 困つたことだ。どうしよう。

(四) 死期を待つやうに書かれてゐる。

(五) 底本「太刀持」脱。

(六) 底本「たふ候」

(七) 底本「もろ友」

(八) 漢の武帝が李夫人とともに結んだ甘泉殿の春の夜の甘い夢も夫人の死によつて武帝傷心の發端となり、唐の玄宗が楊貴妃とともに陸じく驪山宮の秋の夜の月を眺めた幸福も貴妃の横死によつてつひに終つた。ここ平家物語卷十維盛

入水の事の條の文章を借りてある

(九) 末世一世代を通じての教主である釋迦如來。末世の衆生濟度のための一代法を説き給うた釋迦如來と見る説もある。

(十) 生ある者はかならず死ぬとの理法。底本「をきて」

(十一) 老母を朽木櫓に花を湯谷に譬

申す女にてさふらふ。「扱も池田の宿の長をばゆやと申し候。宗盛卿にめし置

かれたまひ、久しく御下りもさふらはぬ處に、老母の御いたはり以外に御入

り候程に、此たびは權が御迎にのぼり候。(道行) 上へ此ほどの、旅の衣の日

もそひて、く、いく夕暮の宿ならん、夢も數そふかり枕。あかしくらして程

もなく、都に早く付きにけり、都にはやく着きにけり。詞「いかに此内にたれ

か御入り候。池田の宿より權が御迎にのぼりたる由それく御申し候へ。

(アシラヒ出シ) してさしこゑへ草木は雨露のめぐみ、養ひえてははなのふぼた

り。増て人間に於いてをや。あら御心もとなや候。朝がほ「池田の宿より朝が

ほが御迎に参りて候。して「あさがほと申すかあら珍しや。扱老母の御いたは

りは何と御入りあるぞ。朝がほ「以外に御入り候。して「御暇の出でぬによ

り久しく下ることもなし。扱お文の有るか。朝「さん候御文の候。して「あら

咲止や此御文にも時を待つやうに見えてある。是をかみの御めに懸けて御暇の

ことを申さうずるにて候。いかにたれか御入り候。太刀持「誰にて御座候ぞ。

や。ゆやの御参りにて候。して「参りたる由御申し候へ。太刀持「いかに申し

候。ゆやの御参りにて候。わき「こなたへと申せ。太刀持「こなたへ御参り候

へ、さらに花の縁で老鸞を老母に譬へた。鸞と逢とは音の上の縁語。

(二〇)「無く」の掛詞。

(二一)さうぞ、出来る事なら。

(二二)さうでなくてさへ。私が重病でなくてさへ。

(二三)古今・伊勢などに見える業平の母の歌。「さらぬ別れ」は「避り得ぬ別れ」すなはち死別の意に解かれてゐるが、文法的には「さらぬ別れ」と見るべく、この意味からさうでもない別れすなはち何でもないことが原因で死ぬいはゆる老衰の自然死と見る説もある。私は「さらぬ別れ」は「さうではない別れ」と見て、「普通の別れではない特別の別れ」と解し、結局死別といふ意になると考へた。

(二四)思ひ出され、あなたを戀しく思ひ出す涙を流しながら。

(二五)古今・伊勢などに見える業平の返歌。初句「世の中に」末句「人の子の爲」。

(二六)なるほど尤もだが。

(二七)特別變つたことがあるわけではない。

(二八)おそれ多いことだが。底本

へ。して「老母のかたより文をのぼせて候程に、是をそと御めに懸けたう候。

わき「何と老母の方よりの文と候や。さらば諸共一五に讀み候べし。へ甘泉殿一六の春

のよの夢ころをくだくはしとなり、二人へ驪山宮一七の秋の夜の月をはりなきに

しもあらず。末世一八一代教主の如來も、生死一九のおきてをばのがれ給はず。過ぎに

しきさらぎの比申しごとくに何とやらん此春は、としふりまさる朽木櫻二〇、こ

とし計の花をだに、待ちもやせじと心弱き、老のうぐひすあふ事も、涙二一にむせ

ぶばかりなり。ただ然るべくはよきやうに申し、しばしの御暇を給はりて、今

一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世二二の中なるに、おなじ世にだにそ

ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし。ただ返すくも命二三のうち二四に今一たび、

見參らせ度二五こそ候へとよ。して下へ老ぬれば、二人へさらぬわかれのありとい

へば、いよ／＼見まくほしき君かなと、古こと迄も思ひでの、同へなみだなが

ら書きとどむ。上二六歌へそも此歌と申すは、く、在原の業平の、其身は朝に

際なきを、長岡に住みたまふ、老母のよめる歌也。さてこそなりひらも、さら

ぬ別のなくもがな。千世もと祈る子の爲と、讀みし事こそ哀なれ、よみし事こ

そ哀なれ。

「をそれ」
 (二六)はかない人の命であつて、永久の別れとなつたらどうしよう。「緒の」は「永き」の序詞。
 (二七)餘りにも氣の弱いお前の勝手にさせてはなるまい。
 (二八)是非とも心を慰める花見をして、その花見車と一緒に乗つて。
 (二九)宗盛とも家に居ては惱みのある身で、その惱みの家——火宅——を立ち出る。従者は湯谷にもうお出掛けですと勸めるが、思ひの家——に法華經の火宅を掛けた。
 (三〇)足弱車のやうに氣の進まない。
 (三一)名も清水といはれてある清い流れに沿つて訪ねて行くと。古今「花散れる水のまにまにとめ來れば山にも春はなくなりけり」
 (三二)「山は」と尾韻。底本「をとは」
 (三三)老母のゐる東國といふのも東山その東だ。さう思ふと氣の進まない東山の方もなつかしいわ。
 (三四)百聯抄解、春前有雨花開早、秋後無霜落葉遲。
 (三五)底本「なふ」
 (三六)百聯抄解、山外有山山不盡、路中多し路路無窮。

して下へ今はかやうに候へば、御暇を給はりさふらへ。「東へくだりさふらはん。わき」老母のいたはりはさる事なれどもさればとて別のこと有るべきか。此春ばかりの花盛、いかでか見捨てたまふべき。してへ御ことばをかへすは恐れなれども、「はや此まにも何とか成りてさふらふらん。へ都の花は去事なれども、花は春あらば今にかざるべからず。是はあだなる玉のをの、永き別はいかならん。ただ御暇給はりさふらへ。わき「いや」餘に心弱き、身に任せては叶ふまじ。いかにも心をなぐさみの、花みの車同車にて、へ共に心をなぐさまんと。同上(歌)へ牛飼車よせよとて、へ、是も思ひの家の内、はや御出でとすすむれど、こころはさきに行きかぬる、足弱車の、力なき花見なりけり。

上へ名も清き水のまにくとめくれれば、山は音羽の、花盛。してへ東路とともひがし山せめて、そなたも、なつかしや。同さしこゑへ春前に雨有つて花のひらくる事はやし。秋後に霜なうして落葉遲し。山外にやま有つて山盡きず。路中に道多うして道きはまりなし。して下へ山青く山しろくして雲來去す。同へ人たのしみ人愁ふ是みな、世上の有様也。下(歌)へ誰かいつし春の色、げ

- (四〇) 底本「おほふして」
 (四一) 常磐木の山は青く、櫻の咲いてゐる山は白くてその山間を雲が往来してゐる。百勝抄解、山青山白雲來去、人樂人愁酒有無。
 (四二) 朗詠、誰言春色從東來。
 (四三) 四條五條の橋の上を老若男女貴賤都鄙の雑多の人人が花やかな花見衣の袖を連ねて行く、その行先東山の方は雲かともがふばかりに入重一重と咲き亂れてゐる九重の花の花盛りで、さすが九重の花の都の名にふさはしい春の景色だなあ。四五八一九の數韻がある。
 (四四) 賀茂川原の道。
 (四五) 地名。五條の東大和大路。車は「急ぐ」の縁語。底本「おふち」
 (四六) 觀音は不成佛としての救世主だから、そのあらたかな御利益で。底本「せんたひくせ」
 (四七) まことに、一途に觀音の御守護にお縋りするその命は今も今日も知られないと心配してゐるうちに。白玉は「知らず」の掛詞、緒に通ずる愛宕の序詞。底本「をたき」
 (四八) 小野篁がここから冥途に通つたといふ傳説によつた。
 (四九) 鳥部山から立ち昇る火葬の煙

にのどかなるひがし山。上(歌)へ四條五條の橋のうへ、く、老若男女きせん
 とひ、色めく花ごころも、袖をつらねて行末の、雲かと見えてやへ一重、さくこ
 このへの花ざかり、名におふ春のけしきかな、名におふ春のけしきかな。

(ロンギ)上へ河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六はらの、地藏堂よとふし拜む。してへ觀音も同座あり。闍提救世の、方便あらたに、
 たらちねをまもり給へや。同へ勝やまもりのすゑすぐに、憑む命はしら玉の、
 愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。して「勝おそろしや此道は、冥途にかよふなる物を、こころぼそ鳥べやま。同へ煙のすゑも薄がすむ、聲も旅鴈の
 横たはる、してへ北斗の星のくもりなき、同へ御法の花もひらくなる、してへ
 經かくだうは是かとよ。同へ其たらちめを尋ねなる、子安の塔も過ぎ行けば、
 してへ春のひまゆく駒のみち、同へはや程もなく是ぞこの、してへ車やどり、
 同へ馬とどめ、下へ爰より花ぐるま、おりわのころもはりまがた、しかまのか
 ちに清水の、佛の御前に、ねんじゆして、ははの祈誓を申さん。
 して下へ南無や大慈大悲の觀世音、母にあはせてたび給へ。わき「いかにた
 れかある。太刀持「御前に候。わき「ゆやはいづくにあるぞ。太刀持「未御堂

も末は薄く霞み、その空を聲もかすれた呂聲の旅雁が鳴いてゐる。「霞む」に「かする」旅雁に呂聲を掛けた。

(五)朗詠の、北斗星前横_二旅雁_一を借り、北斗堂を詠み込んだ。

(五)法華經の利益もあらたかな。

(五)「春の日」の掛詞。「早程もなく」の序詞。

(五)西清水寺門前の地名。

(五)「下り居」の掛詞、衣の序詞。

(五)花見衣の裳裾をかかけ、徒歩で来て。播磨湯は「張り」の掛詞、飾麿の序詞。飾麿は絹織（かちおり）に通ずる徒歩の序詞。清水は來の掛詞。

(五)底本「きせひ」

(五)底本「太刀持」脱。

(五)「う」底本「ふ」

(六)即詠の和歌。

(六)孟子告子下、淳子皃曰、思有_二於内_一、必形_二於外_一。中卷九三頁参照

(六)仕方がない、どうにもならないのが憂世の習ひ、よし」の頭韻。

(六)百聯抄解、花前蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金。

(六)入相の鐘の意。春の一日を晚くまで楽しむ事を諷した。

に御座候。わき「こなたへと申せ。太刀持「いかに申し候。かみ様は地主の花の本に御酒宴のはじまりて候。急ぎ御参りあれとの御事にて候。して「あら面白とさいたる花ども候や。いつの春よりも面白う見えて候。わき「勝いつの春よりもおもしろう見えて候。して「皆々御短冊を参らせられ候ひて當座をあそばされ候へ。

(クリ)上へ勝やおもひうちになれば色外に顯はる。同へよしやよしなきよのならひ、歎きても又、あまりあり。してさしこゑへ花前にてふまふ紛々たる雪、同へ柳上に鶯とぶ片々たる金、はなは流水に随がつて香のきたることとし。鐘は寒雲を隔ててこゑの至る、事遅し。(クセ)かかる下へ清水寺のかねのこゑ、きをんしやうじやをあらはし、諸行無常の聲やらん。地主権現の花の色、しやらさうじゆの理なり。生者、必滅の世のならひ、勝ためしあるよそほひ。佛も本は捨てし世の、なかばは雲にうへみぬ、鶯のお山の名をのこす、寺はかつらの橋ばしら。たち出でて嶺の雲、花やあらぬ初櫻の、きをん林しもがはら。して上へ南を、はるかにながむれば、同へ大悲、おうこの薄がすみ、ゆや権現のうつります、みなもおなじ今熊野、いなりの山のうすもみちの、青か

(六六)平家物語冒頭「祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色盛者必衰の理を顯す」

(六七)中の枕詞。

(六八)鶯の枕詞。

(六九)釋迦の説法した靈鷲山。

(七〇)靈鷲山桂橋寺の寺名を詠み込んだ。「立ち」は「柱」の縁語。

「嶺」は「見」の掛詞。中巻二九

四頁参照。

(七一)嶺には雲がかかつてゐるが、

あれは花ではなからうか。祇園林

や下河原には初櫻が咲いてゐる。

(七二)平家巻十熊野詣の條に「大悲

擁護の霞は熊野山にたなびき」觀

音が大慈悲をもつて衆生をいたは

り給ふかのやうに薄霞が擲引く、

そのあなたには熊野權現を勧請し

た御同名の今熊野が拜され、また

その先には青かつた葉が薄紅葉に

染まる紅葉で名高い稻荷山が望ま

れる。それは秋の眺めだが、櫻咲

く春は何といつてもこの清水であ

つて、ただ自分に頼れと頼もしい

託宣を下された清水觀音は春も色

とりどりの花盛だ。沙石集巻五

「時雨する稻荷の山の紅葉葉はあ

をかりしより思ひそめてき」同書

りし葉の秋、又花の春はきよ水の、ただ懣めたのもしき、はるもちぢの花ざかり。

上へ山のなの、音はあらしの花の雪、ふかきなさけを、人やしる。して「ひ

とつきこしめされ候へ。わき「何とひとつのめと候や。さらば舞を御まひ候

へ。して「何と舞をまへと候や。わき「中々の事。(中之)舞。して「なうく只

今の村雨に花の散り候はいかに。わき「げにただ今の村雨に花のちり候。あら

にくの雨候や。して「今まではさかりと見えつる花をちらすは。へあら心なの

急雨やな春雨の、同へ春雨の、降るはなみだか、ふるは涙かさくら花、ちるを惜

しまぬ、人やある。(イロへ)

わき「ふしぎやなよし有りげなること葉の種とり上げ見れば、下へいかにせ

ん、都の春も惜しけれど、して下へなれしあづまの花やちるらん。わき「勝あ

はれなり道理也。この上ははやく暇とらする也。とくくあづまにくだるべ

し。して「何御いとまと候や。わき「中々の事とくくくだり給ふべし。して

下へあら有難やうれしやな是、觀音の御りしやうなり。かかるへ是までなり

や、同下へうれしやな。是までなりやうれしやな。かくて都にお供せば、又も

同卷「ただ頼め標茅が原のさしも
草我世の中にあらん限りは」
⑦③古今「春雨の降るは涙か櫻花
散るを惜しまぬ人しなれば」
⑦④この歌平家卷十海道下の條に
見える。
⑦⑤「言ふ」の掛詞、東の序詞。
⑦⑥東國への道をたどつて出かけ
はしたものの、すぐまた宗盛戀し
さにためらひながら、逢坂の關で
休息し、氣をつけて明けてくれる
その逢坂の關も過ぎて行き、跡を
振り返へると、曉の空に明け行く
うしろの山山が望まれ。「明け」
は「關の戸」の縁語。

や御意のかはるべき。只このままにおいとまと、ゆふ付^{ユフツキ}の鳥がなく、東路^{東路}さし
てゆくみちの、く、やがてやすらふ逢坂の、關の戸さしも心して、あけゆく
跡の山見えて、花を、見すつる鴈がねの、それは越路われは又、あづまにかへ
る名残かな、あづまにかへる名残かな。

- (一)須磨は「澄み」に通じ明石と共に月の縁語。底本「出ふよ」
- (二)諸國を見物して歩く僧
- (三)底本「短尺」田本による。
- (四)名はのちまでこの世に残る、その名の世の形見として。
- (五)秋になつても縁を残してゐる
- (六)底本・田本とも「なふ」
- (七)汐汲車を引いて僅かな時間しか生きられない憂世にあくせくしてゐる妾たちのはかないこと。「僅か」は輪に通じ「廻る」とともに車の縁語。
- (八)浪がそば近く打ち寄せて來るこの須磨の浦では、浪だけでなく月の光までも見ればもの悲しくて袂を濡らすよ。源氏須磨卷「波ただこもるとに立ち來る心地して」
- (九)底本・田本とも「くまふよ」
- (一〇)妾たちの心を淋しくする秋風が吹くので。この句は「浦浪の音が毎夜近く聞える」にかゝる。源氏須磨卷「心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦浪、夜はげにいと近く聞えて」
- (一一)海は「巻み」の掛詞。
- (一二)續古今「旅人の袂涼しくなり

松風村雨 (松風)

シテ……………松風の聲
ツレ……………村雨の聲
ワキ……………旅僧
狂言……………須磨の浦人

(次第) 僧次第、須磨やかあしの浦づたひ、すまや明石のうらづたひ、月もろともに出でうよ。詞「是は諸國一見の僧にて候。我いまだ西國を見ず候程に、此秋思ひたち西國にくだり、須磨あかしの月をもながめばやと思ひ候。漸急候ほどに、津の國須磨の浦とかや申し候。是なる磯べに一本の松の候に、札をうち短冊をかけられて候。謂のなき事は候まじ尋ねばやとおもひ候。(狂言、ワキに尋ねられて松風村雨といふ二人の海女の舊跡であると答へる)さしこゑへ扱は此松はまつかぜ村雨とて、兄弟の女人のしるしかや。其身は土中に埋もるれど

にけり關吹き越ゆる須磨の浦風
 (一) 夜夜「寄る」に通じ浪の縁語
 (二) 巴人里から離れてゐるので往き來する人はなく、月よりほかに友もない。月は「盡き」の掛詞。
 源氏須磨卷「今はいと里離れ心すどくて海士の家だに稀に」金葉集
 「草枕この旅寝にぞ思ひ知る月より外の友なかりけり」
 (三) 海士と「渡り」の連絡語。
 (四) 「曇し」の掛詞、汐の序詞。
 (五) 汐波車に命をかけて、頼るべき人もない妾たちは、海士の袖が汐に濡れて乾く間もないのと同様に、心の悩みの涙を乾す間もないつらい心境だよ。「寄る」は車の縁語で「頼る」の意を掛けた。
 (六) 拾遺の歌。下旬「羨しくも澄める月かな」澄むは住むの掛詞。
 (七) 月の出につれてさしてくる汐
 (八) 底本・田本とも「くまふよ」
 (九) 水に映る影。汐の縁語。
 (一〇) 人目を忍んで波車を引いてゐるが、引き忍ぶの跡に残つた溜り水がいつまでも澄み得ないやうに妾達はいつまでも住みおほせることが出来る。「引く」は車と汐にかかると。「溜り水」は車の縁語。

松風村雨

も、名は残るよの形見とて、かはらぬ色の松一木、緑の秋をのこすらん。「かやうに經念佛して弔ひ候へば、勝秋の日のならひとて程なう暮れて候。今夜は此海士の鹽屋にやどをかり、明けなばあの山本の里までゆかばやと思ひ候。

(眞の一聲) 一聲二人へ鹽波車わづかなる、憂世に廻る、はかなさよ。つれなみ爰元やすまのうら、二人へ月さへぬらす、袂かな。次第へ秋に馴れたる須磨人の、秋になれたるすま人の、月のよじほを汲まうよ。さしこゑへこころ盡しの穂かぜに海はすこし遠けれども、つれへかの行平の中納言、二人へ關吹きこゆるとながめたまふ、浦半のなみのよるよるは、勝音ちかきあまの家、里離れなるかよひ路の、月より外は友もなし。つれへげにや浮身の業ながら、殊につたなき海士を舟の、二人へわたりかねたるよの中に、住むとやいはんうたかたの、鹽波車よるべなき、身はあま人の袖ともに、思ひをほさぬ、こころかな。同下(歌)へかくばかり、へがたくみゆる世の中に、浦山敷もすむ月の、でじほをいざや汲まうよ、でじほをいざや汲まうよ。上(歌)へ影恥かしき我がすがた、影はづかしきわがすがた、忍び、車を引くつほの、跡に残れるたまり水、いつまですみははつべき。野中の草の露ならば、日影に消えもうすべきに、是

- 「すみ」は澄みと住みとの掛詞。
 (三)妾たちは、磯邊に打ち寄せられた藻を掻き寄せて拾ひ集める海士が拾ひ残して捨てた藻の徒らに朽ちて行くやうなもので、袂は涙でいたづらにますます朽ちて行くばかりだよ。謠言粗志所引の古歌「我が戀は海士の捨草徒らに朽ち増り行く果を見せばや」
 (三)「住む」を掛けた。
 (三)巴沖には小さい漁船の火影が幽かにちらつき、月影が涙のために腫に見え。源氏須磨巻「沖より船どもの謠ひのしりて」「月の顔のみまもられ給ふ」
 (三)「假の姿」の掛詞。雁・友千鳥・野分みな須磨巻に見える。
 (三)須磨巻「又なくあはれなるものはかかる所の秋なりけり」
 (三)汐の満ち引く汀に汐汲衣の。
 (三)「まあそれにしても、か弱い女手に引く車ですもの」。
 (三)萬葉「和歌の浦に汐満ち來れば瀉をなみ芦邊をさして田鶴鳴き渡る」「かたをなみ」は瀉を無みだが、當時は片男波と解く俗説が流行してゐた。寄せ」は車の縁語。
 (三)源氏須磨巻「四方の嵐を開き

は磯べにより藻かく、海士の捨草いたづらに、朽ちまさりゆくたもとかな、朽ちまさりゆく袂かな。

して「月の夜鹽をくんで家路に歸り候はん。さしこゑへおもしろや馴れてもすまの夕まぐれ、あまの呼聲かすかにて、二人へ澳にちいさきいさり舟の、影幽なる月のかほ、かりの姿や友ちどり、野分鹽かぜいづれもげに、かかる所の秋なりけり。あら心すごのよすがらやな。してへいざ／＼鹽をくまんとて、汀に満干の鹽衣の、つれへ袖を結んで肩にかけ、してへしほくむためとは思へども、つれへよしそれとても、してへ女車。同上(歌)へよせては歸るかたをなみ、く、あしべの、たづこそは立ち騒げ、四方のあらしも、音そへて、夜寒何とすごさん。更けゆく、月こそさやかなれ。汲むは影なれや。やく鹽けふり心せよ。さのみなど海士人の、うき秋のみをすごすらん。下(歌)へ松嶋や、をしまぬあまの月をだに、影をくむこそ心あれ、かげを汲むこそこころあれ。(ロンギ)上へはこぶは遠きみちのくの、其名やちかの鹽竈。二人へ賤が鹽木をはこびしは、阿漕がうらに引くしほ。同へ其伊せの海のふたみの浦、二たびよにも出でばや。二人へ松のむらだち霞む日に、鹽ちや遠くなるみがた。同へ

給ふに」
 (三) 汐焼く煙も月を曇らせないやうに氣をつけてね。
 (三) 松島の雄島の海士にも似た妾たちが汐とともに惜しげもなく月影を汲むのは誠に奥ゆかしい。建仁元年八月十五夜撰歌合「松島や雄島の蟹も心あらば月にや今宵袖濡らすらむ」を「しまぬ」は雄島の掛詞、底本・田本とも「おしまぬ」
 (四) 汐を運ぶので有名なのは、所は遠い陸奥でも名を聞くといかにも近い感じのする千賀の鹽竈。
 (五) 阿漕が浦の引き汐どき。阿漕浦の鹽木は古來よく歌に詠まれてをり、さらに古今六帖の「逢ふ事を阿漕の島に引く網の度重ならば人も知りなむ」によつて續けた。
 (六) 二見浦の名に因んで二度世にも出たものだ。金葉「玉櫛箱二見の浦の貝しげみ蒔繪に見ゆる松の村立」
 (七) 「成る」の掛詞。鳴尾と頭讀。
 (八) 蘆葦の家の意だが地名の蘆屋を掛け、惡しに通じ障るの縁語。
 伊勢「芦の屋の藪の鹽焼いとま無み黄楊の小櫛もささす來にけり」
 (九) 告げの掛詞、さしの序詞。

それは鳴海がた、爰は鳴尾の松陰に、月こそさはれ蘆のや。二人へなだの、しほくむ憂身ぞと、人にや誰もつけのくし。同へ差しくる鹽をくみ分けて、みれば月こそ桶にあれ。二人へ是にも月のいりたるや。同へ嬉しやそも月あり。二人へ月はひとつ 同へ影は 二人へふたつ、同下へみつしほの、よるの車に月をのせて、うしとも思はぬ、鹽ぢかなや。

わき「鹽屋のあるじの歸りて候。宿をからばやと思ひ候。いかに此うちへ案内申し候。つれ「誰にてわたり候ぞ。わき「行き暮れたる修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。つれ「それに御まち候へあるじに其由申し候はん。いかに申し候。旅人のわたり候が一夜のおやどと仰せ候。して「われだにいぶせき所に何とてお宿を参らすべき。叶ふまじい由申し候へ。つれ「其由申して候へば、お宿はかなふまじい由仰せ候。わき「あら笑止や。ゆき暮れて前後をばうじて候。其うへ出家の身に候へば、別の御利益に一夜を明させて給はり候へ。つれ「いやかなひ候まじ。して「暫へ月の夜影にみたてまつれば「勝も是はよを捨人。下へよし／＼かかる磯屋のうち、松の木はしらに竹のかき、夜寒きこそと思へども、蘆火にあたりておとまりあれと申し候へ。つれ「さらば

(四〇)打ち寄せる夜の満汐を汲み入れた汐汲車に月影をも載せてゐるので、つらいとも思はない汐汲の歸り路だよ。「みつ」「よる」は三・四に通じ前の一・二とともに數讀。夜は「春る」の掛詞。

(四一)底本・田本とも「ましひ」(四二)「はり」田本で補ふ。

(四三)夜影・世をよしよし・夜裏は「よ」の頭韻。「よ」は節に通じ、般に普通のよしよし・竹・蘆の縁語。

(四四)源氏須磨巻「竹編める垣し渡して、石の階松の柱……」

(四五)自ら進んで佗住するやうだ(四六)古今の歌。たまさかにでも私のことを尋ねる人があつたなら、須磨の浦で汐に濡れ泣きながら佗びしく暮してゐると答へてくれ。

(四七)三〇一頁の(六三)参照。

(四八)娑婆に執着心の残るための涙(四九)底本田本とも「なつかしひ」

(五〇)たまにでも弔ひ慰めてくれる人もない今は亡き跡となつた妾たちの契り、それは色戀ひの浮世に執着して性懲りもしなかつた須磨の浦での契りであつたが、そんな契をさせた執着心が恨めしいよ。

世は男女の契の意をも兼ね、「こ

こなたへ御入り候へ。わき「かう参り候。して「見ぐるしう候へどもお宿を参らせてこそ候へ。わき「出家と申し旅といひ、とまりはつべき身ならねば、いづくを宿と定むべき。惣じて此すまの浦に心あらん人は、われとも佗びてこそ住むべけれ。下へわくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、「藻鹽たれつつわぶと答へよと、行平も讀ませ給ひけると也。ゆきひらの次に誠やあの磯への松は、松風村雨二人のあまの舊跡とかや申し候程に、いたはしく思ひ逆縁ながら弔ひて通りてこそ候へ。あらふしぎや。松かぜ村雨ゆきひらの事を申して候へば、二人共に御愁歎候。是は何と申したる事にて候ぞ、してへげにやおもひ内にあるれば色外にあらはれさふらふぞや。わくらはに問ふ人あらばと讀み給ひし、其歌人の御物語あまりになつかしうさふらひて、猶執心の闊浮の涙、ふたたび袖をぬらしさふらふ。わき「さればこそ猶執心のえんぶの涙とは、今は此世になき人の詞也。又わくらはの歌もなつかしいなど承り候。いかさまにも二人共に名を御名乗り候へ。して「何と名をなのれ。わき「中々の事。二人上へ恥かしや、申さんとすればわくらはに、こととふ人もなき跡の、世に鹽じみてこりずまの、うらめしかりけるちぎりかな。(クドキ)へ此上は何をかさのみつつむべ

りずまの恨めしは「須磨の浦」の掛詞。須磨卷「世にしほじみぬる齡の人」同卷の歌「こりずまの浦の見る目もゆかしきを云云」

(五)「澄ます」の掛詞。

(五)姉妹。底本田本共「おととひ」

(五)月は村雨および「澄む」に普通の須磨の縁語。月のやうに立派な雲の上人である行平の意。新後撰「汐風の波かけ衣秋を経て月に馴れたる須磨の海士人」

(五)着古した汐焼衣を脱ぎ捨て、美しい絹物に薫物までも炷きしめてよい匂ひを漂はすといつた按配だ。馴るるは汐焼衣にもかかるやうだ。織は香取に通じ色および空炷きの縁語。色はまた衣の縁語。

(五)「待つか」の掛詞。

(五)新勅撰「朝な朝な蟹の棹さす浦深み及ばぬ戀も我はするかな」水無瀬殿戀十五首歌合「戀をのみすまの關屋の板庇さして袖とも波は分かじを」同書「打忘れ藻に住む蟲はよそにして須磨のあまりに恨みかねつつ」

(五)「す」の掛詞、海士に普通の「餘り」の序詞。

(五)戀しさに涙も思ひも亂れなが

き。是はすぎつる夕暮に、あの松かげの苔の下、なき跡とはれ參らせつる、松かぜ村雨二人の女の、幽靈是まで來たりたり。扱も行平みとせのほど、御つれづれの御舟あそび、月に心はずまのうらの、夜じほをはこぶ海士乙女に、おととい撰はれ參らせつつ、折にふれたる名なれやとて、松かぜ村雨とめされしより、月にもなる須磨の海士の、して下へ鹽焼ごるも色かへて、二人へ練のきぬの空だき也。して下へかくて三年も過ぎ行けば、ゆきひら都にのぼり給ひ、つれづれ程なくて世をはやう、二人へ去りたまひぬと聞きしより、してへあら戀しや去にても、二人へ又いつのよの音づれを、同下(歌)へまつかぜも村雨も、袖のみぬれてよしなやな。身にも及ばぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪ふかし。わが跡とひてたび給へ。

上(歌)へ戀草の、露も思ひも亂れつつ、く、心きやうきになれ衣の、巳の日の、はらひやゆふしでの、神のたすけも浪のうへ、哀に消えしうき身かな。(クセ)下へあはれいにしへを、思ひ出づればなつかしや。行平の中納言、みとせは爰に須磨のうら、都へのぼり給ひしに、此程の形見とて、御立ゑぼし狩衣を、のこし置きたまへども、是をみるたびに、彌増のおもひ草、葉ずゑに結ぶ

- ら。露は草の縁語で涙の意。
 (五)「成り」の掛詞、巳の序詞。
 (六)三月上旬の巳の日の祓にも幣帛を飾つて祈つたが。「木綿四手の」は神の枕詞でもある。巳の日の祓は源氏須磨巻に見える。
 (六)無くの掛詞、泡に普通の哀の序詞。憂きは浮に通じ浪・泡の縁語
 (六)「住み」の掛詞。
 (六)金葉「思ひ草葉末に結ぶ白露の適適来ては手にもたまらず」
 (六)古今・伊勢等に見える歌。「下句」忘るる時もあらましもを」
 (六)狩衣まで「かけて」の有心の序。古今「宵宵に脱ぎて我がぬる狩衣かけて思はぬ時の間もなし」
 (六)將來にかけて又行平に逢ふ望があるならばだが、行平はもはや同じこの世には亡く、随つて妾達はこの世に住む甲斐もないから。
 (六)古今「枕より後よみ戀の責め來ればせむ方なみぞ床中にをる」
 (六)「無し」の掛詞。
 (六)出所不明の歌。三途の川には涙の絶えないつらい瀬があるが、そこにも心を掻き亂すやうな惱ましい戀の淵はあつたのだ。
 (六)底本・田本とも「らふ」

露のまも、忘れればこそあぢきなや。形見こそ、今はあだなれ是なくは、わする除も有りなんと、讀みしも理や、猶思ひこそは深けれ。して上へ宵々に、ぬぎてわがぬる狩ころも、同へかけてぞ憑む同じ世に、住むかひあらばこそ、忘れがたみもよしなしと、捨てても置かれず、とれば面影に立ちまさり、おきふしわかで枕より、跡より戀のせめくれば、せんかた涙に、ふし沈む事ぞかなしき。

(物着) して下へみつせ川、たえぬなみだの憂瀬にも、亂るる戀の淵は有りけり。上へあらうれしやあの松かげに、行平の御立ちあるが、松かぜとめされさふらふぞいで参らう。つれへあら浅ましやさやうの御こころ故にこそ、執心の罪にも沈み給へ。下へしやばにての狂亂を猶忘れ給はぬぞや。あれはまつにてこそ候へ。行平は御立ちもさふらはぬ物を。してへ愚かの人の云ひ事や。あの松こそは行平よ。たとひしばしはわかるるともまつとしきかば歸りこんと、「つらね給ひし言のははいかに。つれへげになう忘れてさふらふぞ。縦しばしはわかるるとも、待たばこんとの言のはを、してへこなたは忘れず松かぜの立ち歸りこむ御音づれ、つれへ終にも聞かば村雨の、袖しばしこそぬるるとも、

- (七二)古今に見える後出の「立別れ」の歌をさす。待つに松を掛けた。
 (七三)松風のもとへ歸つて來ようとお便りを。松風は待つ掛詞。
 (七四)村雨の縁語。
 (七五)待つてゐるのに對し約束を違へずに。「變らで」は松の縁語。
 (七六)古今行平の歌。因幡に「往なば」、松に「待つ」を掛けた。
 (七七)「かかる」田本で補ふ。
 (七八)底本「浦は」田本「うら半」
 (七九)「待つ」の掛詞。
 (八〇)馴れ睡ばうの意を掛けた。續後拾遺「須磨の浦や渚に立てる磯馴松下枝は波の打たぬ日ぞなき」
 (八一)松に吹いて來る風だけでなく松風自身も狂ひ亂れ。松風の名を詠み込んだ。
 (八二)妾のこの世に残る執着心が夢にお目にかかるのだ。「妄執の夢」と解し、執心にひかれて夢の姿を現はしお目にかかるのだとも。
 (八三)「暇申して」と浪とにかかる。
 (八四)「澄む」の掛詞。
 (八五)源氏須磨卷「後の山に柴といふものふすぶるなり」
 (八六)田本「聞きしも」

松風村雨

して^{七四}まつにかはらで歸りこば、つれ^{七五}へあらたのもの、して^{七六}へ御歌や。同^{七七}へ
 たち別れ、(中之)舞。して(ワカ)上^{七八}へいなばの山の、嶺におふる、まつとし聞か
 ば、今歸りこん。かかる^{七九}へそれはいなばの、遠山まつ、同下^{八〇}へ是はなつかし、
 きみ爰に、須磨の浦^{八一}わの、松^{八二}の行平、立ちかへりこば、我もこかげに、いざ立
 ちよりて、そなれ松^{八三}の、なつかしや。(破之)舞

上^{八四}へ松^{八五}に吹きくる、かぜも狂じて、須磨のたかなみ、はげしき夜すがら、妄^{八六}
 執の夢に、見みゆるなり。我跡とひて、たび給へ。暇申^{八七}して、歸^{八八}る浪の音の、
 すまのうらかけて、吹くやうしろの山おろし、關路の鳥もこゑ^{八九}くに、夢も跡
 なく夜もあけて、村雨と聞きしを、けさみれば、松かぜばかりやのこるらむ。

源氏供養

前シテ……………女(紫式部の化身)

後シテ……………紫式部の靈

ワキ……………安居院の法印

ワキツレ……………法印の從僧(二人)

狂言……………石山寺門前の者

- (一)着てゐる衣も苔の衣といはれる僧衣、行く道も苔の生えてゐる道で。苔と石とは縁語。
- (二)源氏物語表白の作者と傳へる安居院法印聖覺のつもりだらう。
- (三)田本「あよみ」
- (四)嵐につれて立つ夕浪の白い白川に沿つた道を。白河は白の掛詞。
- (五)古今「音羽山音に聞きつる逢坂の關のこなたに年をふるかな」
- (六)琵琶湖の別名。匂ふの掛詞。
- (七)志賀の枕詞。
- (八)辛の縁語。志賀と頭韻。
- (九)慰みに記した文章が名を後世に残す形見とはなつたけれども。
- (一〇)供養を営み。
- (一一)名は苔の下には埋もれずの意。白氏文集、龍門原上土、埋骨不埋名。苔はつぎの石と縁語。

(次第) 僧次第へ衣もおなじ苔の道、衣もおなじこけの道、いし山寺に参らむ。
 詞「是は安居院あきいんの法印にて候。我石山をしんじ常にあゆみをはこび候。けふも
 又参らばやと思ひ候。(道行)上へ時も名も、花の都をたち出でて、く、あ
 しにつるるゆふ浪の、しら河おもて過ぎ行けば、音羽の瀧をよ所にみて、せき
 のこなたのあさ霞、されどものこる有明の、影もあなたににほの海、げにおも
 しろきけしきかな、勝かちおもしろき氣色かな。下へさざ浪や、志賀から崎のひと

- (一)紫雲の意を掛けた。
 (二)紫といふ名前が露顯したか。
 紫雲の棚引くといふ極樂淨土も夕日のさす西の方かといひながら、はつきり名ざして誰とも各乗り得ず。色と紫とは縁語。夕日は「言ふ」の掛詞。「さして」は夕日の照射と名指すとの意を兼ねてゐる。
 (三)念願の佛事を勤行し。
 (四)底本・田本とも「おはり」
 (五)先ほど聞いた源氏についての話。
 (六)底本「問ふ」田本「とふ」
 (七)わきわきつれ同吟の意だらう
 (八)はかない世のことゆる萬事夢のやうに移ろひ、紫草の美しい花の色もすぐに見せるやうに、才媛紫式部も間もなくはかなく死んでしまつたがその紫式部の書いた昔の光源氏の物語のことを聞くにつけても眞實性に乏しいやうだな。
 「移ろふ」と色・花、「消え」と光とは縁語。
 (九)紅葉が散ると、その紅葉を散らした憎かつた松風も思ひ出の形見となるのなもの。
 (一〇)紫の縁語、色に出での序詞。
 (一一)紫式部といふ名を現して。

つ松、鹽やかねども浦のなみ、たつこそ水の煙なれ、たつこそ水の煙なれ。

してへなう法印に申すべき事の候。わき「法印とはこなたの事にて候か何事にて候ぞ。してへ我石山にこもり、源氏六十帖をかきしるし、なき跡までの筆のすさび「名の形見とは成りたれども、下へ彼源氏に終にくやうをせざりし科により、いままでもうかふことなくさふらへば、然るべくは石山にて、源氏のくやうをのべ、又わが跡とひてたび給へと、此事申さん爲に是まで参りて候。

わき「石山に於いて源氏の供養をなすべきことは、安き間の御事也。扱々御身はいかなる人ぞ。して「先石山に参りつつ、源氏のくやうをのべ給はば、其時我もあらはれて、共にげんじを弔ふべし。わきへうれしやそれこそ奇特なれ。

いで源氏を書きしは。してへ恥かしや此身は浮よの土となれども、わきへ名をば埋まぬ苔のした、してへ石山寺にたつ雲の、わきへむらさき式部にてましますな。して(上歌)へはづかしや、色に見ゆるかむらさきの、同へ、雲もそなたか夕日影、さしてそれとも名乗りえず、かきけす様に失せにけり、かきけす様に失せにけり。(中入。狂言、紫式部が源氏物語を書いた事情について物語る)

わきへさて石山に参りつつ、念願をつとめこと終り、夜も深がたの鐘のこ

(三)暮れに通じ「日も」を受けた。
 (四)莊子が夢に胡蝶になつて舞ひ
 戯れたとの故事によつた。
 (五)露草の花色で染めた衣。
 (六)この二句歌占にも見える。
 (七)朗詠白樂天の詩、槿花一日自
 爲_レ榮。槿花が朝咲いて夕に凋む
 のと全く同じだ。
 (八)「世にしほじめる御住居」ま
 で底本なし。田本で補ふ。
 (九)源氏が朧月夜の内侍と通じた
 ために須磨に佗住居をしなければ
 ならなかつた事を婉曲にいつた。
 朧月夜と曇る夜、ながめと涙、涙
 と曇るなどはおのおの縁語。ながめ
 と長雨、須磨の浦と住居とは重韻。
 (四〇)観音の大慈悲の誓願。
 (四一)安居院法印に逢つた縁をいふ
 (四二)悟り得ずに迷ふのを眠に譬へ
 た。
 (四三)等正覺(悟り)を成ぜよ。成佛
 せよ。
 (四四)以下源氏物語表白の文を取捨
 して源氏の巻名を讀み込んである
 (四五)桐壺の更衣は夕の煙のやうに
 はかなく亡くなられたが、速やかに
 迷ひを晴らして成佛なさつた。

してへおきもせず、同(上歌)へ寢もせて明かす此夜はの、月もころせよ。石
 山寺のかねのこゑ、夢をもさそふかせのまへ、消えしはそれか灯の、ひかる源
 氏の跡とはん、光げんじのあととはむ。

して下へあら有がたの御事やな有難の御事や。なにをか布施に参らせさふら
 はん。わき「いや布施などとは思ひもよらず。逆も此世も夢の中、むかしにか
 へる舞の袖、へただ今まうて見せ給へ。して「恥かしながら去とは、おせを
 ばいかで背くべき。いで／＼さらばまはんとて、わきへ本より其名もむらさき
 の、してへ色珍しきうす色の、わきへ日もくれなわのあふぎをもち、してへ恥
 かしながら弱々と、わきへ哀こてふの、してへ一あそび、同(次第)へ夢の中な
 る舞の袖、夢の中なるまひの袖、うつつに返へすよしもがな。

してへ花染ぎぬの色重ね、同へむらさきにほふ、たもとかな。(イロへ)
 (クリ)上へ抑無常といつばめのまへなれども形もなく、一生夢のごとし。

誰あつて百年のよはひをうくる。槿花一日ただおなじ。して(サシコエ)へ然れ
 ば春の夜の朧月夜をながめしに、同下へなみだのとがかくもる夜の、長雨ふる
 やすまの浦、世にしほじめる御住居。してさしこゑへ爰にかずならぬむらさき式

(一〇) 帝木の卷の雨夜の品定めめ論はつひに悟りの花を開いて散つた
 (一一) 空蟬のやうな空しいこの世を厭つては、夕顔の花に置く露のやうなはかない命を感得し。
 (一二) 底本「くはんし」日本による。
 (一三) 秋の落葉もたとへ美しくとも唯一時のはかないもの。
 (一四) 丁度運よく佛法に逢つたのだからこの機を遣さずそれと名指して極樂往生を願ひなさい。「瓣葉の」は、さしての序詞、又頭韻。
 (一五) 愛してゐる者に別れる苦痛。
 (一六) 宜しく須磨の流浪のやうな生死の迷界を脱出して佛果を得る四智を圓滿に明らめるべきだ。
 (一七) 明石の浦に身を苦しめて住んでもいつまで生き長らへられようか。底本「みおつくし」日本による。
 (一八) 罪障を作つて正道を妨げることを雲に譬へた。田本五鐘と誤る。
 (一九) 紫磨(上等の精金)の肌(慈悲忍辱)恥辱を忍んで柔和なこと)の衣を召された佛を仰ぎ、自分は藤袴の粗末な衣を纏つて。
 (二〇) 梅の香に惹かれるわが心は、藤の裏葉に置く露、その露の玉に

部、憑たのみをかけていし山寺、悲願ひがんをたのみこもり居て、此ものがたりを筆にまかす。同下へされども終つひに供養をせざりし科しなにより、妄執の雲も晴れがたし。して下へ今逢いまひがたき縁にむかつて、同へ心中の所願を起し、ひとつの巻物に寫し、無明むみのねむふりを覺ます。して下へ南無や光げんじの幽靈、同へ成等正覺。(クセ)下へ抑おさ桐壺の、ゆふべの煙すみやかに、法性の空にいたり、ははきぎのよることのはは、終つひに覺樹の花ちりぬ。空蟬くせみの、空しき此よをいとひては、夕がほの、露の命を觀じ、若わかむらさきの雲の迎へ、末、摘花てつげの臺うたにさせば、紅葉の賀がの秋あきの、落葉もよしや只ただ。たまたま、佛意ぶつぎにあひながら、瓣葉はなづの、さして往生を願ふべし。して上へ花ちる里にすむとても、同へ愛別離苦あいべつりの理ことわり、まぬかれがたき道とかや。只ただすべからくは、生死流浪の、須磨のうらを出でて、しちゑんみやうの、明石あかしの浦に身をづくし、いつ迄も有りなん。唯よもぎふの宿ながら、菩提の道をねがふべし。松かぜの吹くとても、業障ごうじやうのうす雲は、晴るる事更になし。秋のかぜきえずして、しまにんにくのふぢばかま、上品蓮臺じんぴんれんたいに、心を懸けてまことある、七寶莊嚴の、眞木まぎはしらの本にゆかん。梅うめがえの、匂におひに移るわがころ、藤のうら葉に置く露の、其玉かづらかけしばし、朝顔

縁のある玉鬘を飾つた朝顔のやうにしばらくも頼みとはならない。光は玉の縁語。

(五七)一時は梅檀の木蔭に宿るやうな高位高官に上つても、それを捨てて東屋のやうな粗屋に籠り。

(五八)蜻蛉のやうなはかない身。

(五九)夢のなかの浮橋のやうなはかないこの世を離脱して、聖衆がわが身を極樂に導くために來迎して下さるやうに願ふがよい。

(六〇)源氏物語のやうな虚飾の言葉を振り切つて。

(六一)「ろんぎ」日本で補ふ。

(六二)ほんとに面白いなあ舞人は。

その舞人の名残も今はこれまでと鶏が鳴くので、鳥の夢を破るやうに、袂を蹴す舞の夢も覚めるなあ。

「返す」は夢と袂とにかかると。

(六三)私も迷界から浮かび出て蓮華の臺上に生まれるとの縁は願もしいよ。「花の縁」に源氏の巻名花の宴を掛けてゐる。

(六四)害かると斯かるの掛詞。

(六五)考へて見れば夢の浮橋の巻で終る夢中の浮橋のやうなはかない源氏物語もまたはかない夢中の言葉なのだ。

のひかり恋なまれず。して上まへあしたには梅檀うめだんの、同なへかげにやどりき名もたかき、つかさ位を、あづまやの内に籠めて、樂しみ榮さかえを、浮舟にたとふべしとかや。是もかげろふうの身なるべし。夢ゆの、うき橋をうちわたり、身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來、狂言綺語きごをふりすてて、むらさき式部が後のよを、扶け給へともろともに、かね打ちならして、ゑかうも既すでをはりぬ。

ろんぎ上かみへ勝面かたかほ白や舞人の、名残今はとなく鳥の、夢をも返す袂かな。して

光源氏の御あとを、とふらふ法のちからにて、我わがもうかまん蓮の、花の縁はたのもしや。同なへ勝かたやあしたは秋のひかり、してへゆふべにはかげもなし。同なへ朝がほの露いなづまの影、いづれかあだならぬ。定めなの憂世や。下しもへよく物ものを案ずるに、むらさき、式部と申すは、彼石山かたの觀世音、かりに此よに顯はれて、かかろげんじ六四のものがたり、是も思へば夢の世と、人にしらせん御方便、げに有難きちかひかな。思へば夢ゆのうきはしも、夢の間のことばなり、夢のあひだのこと葉なり。

大原御幸おほはらごきょう
(小原御幸)

シテ……………建禮門院(前後とも同じ)

ツレ……………後白河法皇

ツレ……………大納言の局

ツレ……………阿波の内侍

ワキ……………萬里小路中納言まのしち

ワキツレ……………後白河法皇の臣下(大臣奏)

ワキツレ……………輿丁(二人)

狂言……………大臣の從者

- (一) 生き甲斐のない。
- (二) 無事に。
- (三) 行幸の山道の下拵へをも。
- (四) 古今の歌。未句「住みよかりけり」底本「浮よりは」このさし

大臣詞「抑おとど是は後白川院に仕へ奉る臣下なり。扱も此たび先帝二位殿を始め奉り、平家の一門九州長門の國はやともの浦にしてことごとく果てたまひて候。女院も御身を投げさせ給ひ候を取上げ奉り、かひなき御命たすかりおはしまし候。三河守のりより、九郎大夫の判官義經兄弟供奉し申し、三種の神寶ニこ

ことゝ下歌・上歌のところ平家小
 原御幸の文章を多くとつてゐる。
 (五)扉。門。「音づれ」の縁語。
 (六)音信の稀なことを垣の結び目
 の間隔の廣いことにいひかけた。
 底本「ま」とを。
 (七)竹または木で作つた低い籠。
 また柴で作つた垣とも。間遠と頭
 韻。
 (八)つらい節の多いのに譬へられ
 る竹の柱の庵で。節は竹の縁語。
 柱は次の立の序詞でもある。
 (九)人に見られることのないのが
 (一〇)妾を訪ひ慰めるといふ心があ
 るのではないが、訪れるものは。
 (一一)薪を切る斧の音。妻木は爪木。
 (一二)真折の葛青葛。共に葛草の名
 で、繰るに普通の「来る」の序詞。
 (一三)朗詠、飄簾屢空、草滋、顔淵
 の巷、藜藿深鎖、雨濕、原憲の樞。
 原詩は孔子の弟子顔淵原憲の家の
 貧しい様を詠んだのだが、それを
 譬へにとつて、草は顔淵の家のや
 うに生ひ茂り、雨は原憲の家のや
 うに扉を濡らす、さういふ粗末な
 家に居るので、物思ひが多い結果
 涙で袖を濡らすことだせう。
 (一四)石し上り物に致しませう。

大原御幸

と故なく都に納りたまひ候。と程に女院は都に移らせ給ふべかりしを、先帝安
 徳天皇の御跡御弔ひの爲に、大原の寂光院にうきよを厭ひ御座をなされ候を、
 法皇御幸をなされ御訪おんたむひなさるべきとの勅定にて候間、御幸ごきんの山路をも申し付
 けばやと存じ候。いかにたれかある。(狂言「御前に候」といふ)をはらへ御幸
 有るべきなれば、行幸の道をも作り其清めを仕り候へ。(狂言、大臣の命令を觸れ
 る)

女院さしこゑこゑやまざとは物のさひしき事こそあれ、世の憂きよりは中／＼
 に、住みよかりける柴のとぼそ、都の方の音づれば、間遠にゆへるませがき
 や、憂うれきふししげき竹ばしら、立むにつけてもの思へど、人めなきこそ安かり
 けれ。下(歌)へ折々に、心なけれどとふものは、上(歌)へ賤が妻木つまぎのものを
 音、く、梢のあらし猿の聲、これらの音ならでは、まさきの、かづら青つづ
 ら、くる人稀に成りはてて、草、顔淵が巷に、しげきおもひの行方とて、雨原
 憲が樞とせとも、うるほふ袖の涙かな、うるほふ袖の涙かな。

女「いかに大納言のつぼね、うしろの山にのぼり権しきみをつみ候べし。大納言
 「わらはも御供申し、爪木わらびを折り供御に備へ申し候べし。女さしこゑへた

- (一) 不都合な。不適當な。
 (二) 平家小原御幸からとつた。
 (三) 法華經提婆品、即隨^二仙人^一供^二給所須^一、採^レ葉^レ汲^レ水^レ拾^レ薪^レ設^レ食。
 (四) 「取り」と「とりどり」との掛詞。
 (五) 成佛得道。佛道成就。
 (六) 御花籠を手に取つて、互に。「とりどり」は「取り」の掛詞。
 (七) 散つた都の花の名残りを尋ねて、青葉を慕ひ山路を行くのだよ。
 (八) 分け行く道も露深く、草深い大原への行幸を急がう。深見草は牡丹の異名だが、ここは草の意で深しを掛け、露・原などの縁語。「をはら」は「多し」の掛詞。
 (九) 以下上歌の終まで平家物語小原御幸の文を多く引用。
 (十) 青柳の枝は絲を亂したやうであり。
 (十一) 幾重にも重つた。歎冬の縁語。
 (十二) 平家小原御幸に見えるが、元來は千載集に載せられた歌。
 (十三) 緑の葛の纏きついた垣。
 (十四) 翠の黛のやうな遠くに霞んで見える美しい山。
 (十五) 繪に畫くことも文に綴ることも難しい。繪には畫けても文には

とへばびんなきことなれども、悉達太子は淨飯王の都をいで、檀特山のさかしき道をしのぎ、茶つみ水くみ薪、同上(歌)へとり、様々に難行し、仙人に、仕へさせたまひて、終に成道なるとかや。我も佛の爲なれば、御花がたみとり、猶山ふかく入りたまふ、猶山ふかくいらたまふ。(中入)

(一聲) 法皇御供衆一聲へ九重の、花の名残をたづねてや、青ばをしたふ、山路かな。次第へ分けゆく露も深み草、わけゆく露も深み草、をはらのみゆき急がん。わき「行幸を早め申し候間をはらに入御候。さしこゑへかくて大原にみゆきあつて、寂光院の有様を見わたせば、露結ぶ庭の夏草茂りあひて、青柳糸をみだしつつ、池のうき草浪にゆられて、錦をさらすかと疑がはる。岸の歎冬さき亂れ、やへたつ雲のたえまより、山ほととぎすの一聲も、君のみゆきを、待ちがほなり。法皇へ法皇池のみぎはを觀覽あつて、上へ池水に、汀の櫻ちりしきて、浪の花こそ、さかりなりけれ。同上(歌)へふりにける、岩のひまより落ちくる、水の音さへよしありて、綠蘿の垣翠黛の山、繪にかくとも、筆にも及びがたし。一字のみだうあり。薨破れては霧不斷の、香をたき、樞おちては月も又、常住の、ともしびをかかぐとは、かかる所か物すこや、かかる所かもの

綴り難いの意ではなからう。

(三) 屋根瓦が破れてゐるので霧が堂内にまで入つて絶えず香を焚いてゐるやうに見え、扉が腐つてゐるので月もまた堂内にさし込んで常夜燈を挑げてゐるやうだとは。

(三) 藜藿。あかざ。前出の朗詠の詩によつた平家物語の文章をさらに引いた。

(三) 萬里小路中納言。平家諸本にも見えない謡曲作者創作の人。

(三) 底本「あらふ」

(四) 尼御前の略。

(三) 底本「しんせひ」

(三) 法皇がお見忘れになつたのを恨みには少しも思ひません。

(三) 極重悪人である末世の衆生は他の方便では救はれない。唯阿彌陀の御名を稱へることによつて極樂に生まれることが出来るの意。

惠心僧都の往生要集に見える。

(三) 等正覺(悟り)を成就して下さい。成佛して下さい。

(元) この本文現金剛流に一致。

(四) 嶮岨な山路傳ひを。

(四) 容易に。「忘れもやらで」にかかる。「猶」と頭韻。

(四) 妄執の多い娑婆。金剛流も「え

すごや。

わき「是なるこそ女院の御庵室にて有りげに候。下へ軒には蘿あさがほはひかかり、れいでうふかくとざせり。あら物すごのけしきやな。「いかに此庵室のうちへ案内申し候。内侍「誰にて渡り候ぞ。わき「是はまでのこうぢの中納言にて候。内侍「それはさて人目稀なる山中へは何とて渡り候ぞ。わき「さん

候女院の御住む御訪の爲、法皇是まで御幸にて候。内侍「女院はうへの山へ

花摘に御出にて今は御留守にて候。わき「御幸の由を申して候へば、上の山へ

花つみに御出にて今は御留守のよし候。暫此所に御座をなされ、御歸りを御

待ちあらうするにて候。法皇「やあいかにあのあまぜ。汝はいかなる者ぞ。内

侍「勝々御見忘れは御理。是は信西が娘あはの内侍がなれる果にて候。下へ

かくあさましき姿ながら、あすをもしらぬ此身なれば、うらみとは更に思はず

さふらふ。法「女院はいづくに御わたり候ぞ。内「女院はうへの山へ花摘に御

出にて候。法「さて御供には。内「大納言の局。今すこし待たせおはしましたさ

ふらへ。やがて御歸りにて候べし。

(アシラヒ出シ)女院大納言へきのふもすぎけふも空しく暮れなんとす。あすを

ぶ」とあり、閻浮の約まつた詞。
 (四三)入水して死に損つたといふ浮名の上に、また法皇にお目にかかつたといふ浮名を世間に漏らすと(四四)こぼれる涙に泣き濡れた袖の有様も恥かしい。色と袖、袖と包むに音通の「つつまし」とは各々縁語。

(四五)法皇も出家の御身ゆゑ、同じ道に志すお方と頼もしく思ふのだ
 (四六)窓の前で阿彌陀を念じては念佛する衆生を攝取して捨てないとの光明のやうな御慈悲を待ちながら。觀經に、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨。この上歌は平家六道の沙汰のことの文を引く。
 (四七)柴の扉の下で十念を唱へては聖衆のお迎へを待つてゐたのに。
 (四八)思ひ掛けなかつた行幸をお迎へ申し上げた今日の暮は。
 (四九)お恵み深い御心の末を大いにおかけ下さつて、物のあはれもさぞかし多いこの大原や。「あはれ」は法皇のお憐みと物のあはれとを掛け、大原には多しを掛けた。
 (五〇)芦生・臈の清水ともに地名。臈の清水は細道が臈に見えの意を掛け、臈の清水には月影ではなく

もしらぬ此身ながら、ただ先帝の御面影、わするる障はよもあらじ。極重悪人無他方便、唯稱彌陀得生極樂。主上を始めたてまつり二位殿一門の人々、成等正覺。なむあみだぶ。や。庵室のあたりに人音の聞え候。暫これに御休み候へ。

内「只今こそあの岨つたひを女院の御歸りにてさふらふ。法「さていづれが女院大納言の局はいづれぞ。内上「花がたみ臂にかけさせたまふは、女院にてわたらせ給ふ。妻木に蕨折りそへたるは、大納言のつぼねなり。「いかに申し候。法皇の御幸にてさふらふ。女院下「中々に猶妄執のえぶのよを、忘れもやらでうき名を又、もらせばもるる涙の色、袖のけしきもつつまじや。同下(歌)「とは思へども法の人、おなじ道にと憑む也。上(歌)「一念の窓のまへ、く、攝取の、光明をごしつ、十念の柴のとぼそには、聖衆の、來迎をまちつるに、思はざりけるけふの暮、いにしへにかへるかと、猶思ひでの涙かな。下(歌)「げにや君爰に、歡慮の恵みすゑかけて、哀もさぞな大原や、せれうの里の細道、おぼろのしみづ月ならで、御影や今も残るらん。ろんぎ上「扱や御幸の折しもは、いかなる時節なるらん。して「春過ぎ夏も

法皇の尊い御姿を今でも映し残してゐるだらうの意に續く。

(五二)以下のろんぎ平家小原御幸の文によつた所が多い。

(五三)來の掛詞。北祭は四月の中の酉の日に行はれる賀茂の例大祭。

(五四)どこといふあてもなく分け入り遊ばしたその果て、ここへお出でになつたのでして。

(五五)こことてなるほど寂光院の名の通り寂光淨土さながらの寂(しづ)かな光、その光の陰—光陰—をただ惜しみなさい。

(五六)明かるい光のさす松の枝に。玉は美稱、光・明きらけきなどの縁語。

(五七)藤の花。浪は池・かけの縁語(五七)春から夏にかけて。

(五八)平家の文によつたのだが、本歌は金葉の「夏山の青葉交りの遅櫻初花よりの珍ら下さきかな」

(五九)叡慮におもひかけ下さるのも長い意と行幸の畏い意とを掛けた。

(六〇)この柴の庵はしばらくの間でも身を置くべき住居だらうか。少しの間でも身を置けたものではない。柴と「暫し」は重韻。

(六一)平家小原御幸の歌。初句「思

はや、^{五三}北祭の折なれば、青葉にまじる夏こだち、春の名残ぞ惜しまるる、同へ

遠山^上にかかるしら雲は、してへ散りにし花のかたみかや。同へ夏草の、しげみ

が原のそことなく、分け入りたまふ道の末。して下へ爰^{五四}とてや、く、げに寂

光の靜なる、ひかりのかけを惜しめただ。同へ光^{五五}のかけもあきらけき、玉松が

えに咲きそふや、してへ池の藤^{五六}なみ夏^{五七}かけて、同へ是もみゆきを、してへ待ち

がほに、同へ青葉^{六八}、隠れの遅櫻、はつ花よりもめづらかに、中々、やうかはる

有様を、あはれと、叡慮^{五九}にかけまくも、かたじけなしや此みゆき、柴^{六〇}の樞^上のし

ばしが程も、あるべき住むなるべしや、有るべき住居なるべしや。

女下へ思^{六一}はずも、み山の奥のすまゐして、雲々の月をよ所^{六二}にみむとは。かや

うにおもひ出でしに、此山里までの御幸、返すくも有^{六三}がたうこそ候へ。法

「さいつごろ有人^{六四}の申せしは、女院は六道^{六五}の有様まさに御覽じけるとかや。佛

菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこそ候へ。女^{六六}勅定はさる御事なれど

も、つらく我身を案じみるに、(クリ)上へ夫身^{六六}を觀ずれば岸^{六七}の額^{ひたひ}に根を離れ

たる草、いのちを論ずれば、江のほとりに繋^{つな}がざる舟。さしこゑへされば天上^{六七}のたのしみも、身にしら露^{六八}の玉^{六九}かづら、同下へながら果^{七〇}てぬ年月も、終に五

ひきや

(六三)底本「たふ」

(六四)先だつて。この間。

(六五)地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界をいふ。

(六七)仰せは御尤もですが。

(六八)朗詠、觀身岸額離根草、論

命江頭不鑿舟。岸額は聳えてゐる岸のかど。

(六九)高倉帝の中宮時代を指す。

(七〇)知られぬ掛詞、玉の序詞。

(七一)「長らへ」の序詞。

(七二)永い年月を経ないうちにつひに天人の五衰のやうに落ちぶれ、消えることも出来ないこの命のある間に。五衰は天人命終時の五種の衰相。

(七三)波の縁語。

(七四)倦みをきかせてゐるやうだ。

(七五)底本「いんすひ」

(七六)汀に打ち寄せ荒波が舟を荒磯に轉覆させるやうな心地がして舟中の人全部が泣き叫ぶ。荒は磯と波とにかかると返字は浪の縁語。

(七七)叫喚地獄。八熱地獄の一。

(七八)底本「女」脱。毛利本「ろくの」

(七九)右の餓鬼・地獄・修羅・畜生などの苦しみを見聞くわが身も人

衰の衰への、消えもやられぬ命のうちに、六道の巻に、迷ひし也。(ハクセ)下へ先一門、西海の波に浮きしづみ、よるべも、しられぬ舟のうち、海にのぞめども、うしほなれば飲水せず。餓鬼道のごとくなり。又有時は、汀のなみの荒磯に、うち、返すかのこちして、舟こぞりつつ泣きさけぶ、こゑは叫喚の、罪人もかくやあさましや。女上へ陸の、あらしひ有時は、同へ是ぞ誠にめのまへの、修羅道のたたかひ。あらおそろしやかずくの、駒の蹄の音きけば、畜生道の有さまを、見きくも同じ人道の、くるしみとなりはつる、憂身の果ぞかなしき。

法「まことに有がたき事どもかな。さて先帝の御最期の有さま、何とかわたり候ひつる御物語り候へ。女「其時の有様申すに付けてうらめしや。長門の國はやともとやらんにて、筑紫へ一先おちゆくべきと一門申しあひしに、緒方の三郎心がはりせし程に、薩摩がたへや落さんと申せし折節、のぼり鹽にさへられ、今はかうよとみえしに、能登の守教経は、安藝の太郎次郎兄弟を左右のわきに挟み、さいごの供せよとて海中にとんでゐる。下へ新中納言とももりは、「澳なる舟の碇を引きあげ、甲とやらんにいただき、めのと子の家長が、弓と

問界の同様の苦しみになつてしまふ、そんなつらい身のなれの果てが悲しい。

(六七) 上げ汐に妨害されて、もはやこれまでと思はれたときに。

(七八) 兜とかいふものの上に載せて(八九) 教經と家長とが互に相手の弓を握り交はしての意。

(九〇) 薄墨色の二枚襲ねの衣。

(九一) 練絹で作つた袴の股立を高く挟みからげて。

(九二) 南無阿彌陀佛を十度稱へる御爲に。

(九三) 平家長門本・延慶本・源平盛衰記などに見える歌。何れも第四句「浪の下にも」長門本は第三句

「御流れ」御裳濯川は伊勢内宮の前を流れる川。天照大神の子孫にとつては浪の底にも都があるといふことを今こそ知つたの意。

(九四) 天子の御顔。こは法皇の御顔。底本「龍眼」と誤る。

(九五) 思はず涙を流して袖を濡らすのが恥かしい。

(九六) 名残りはいつまでも盡きることがないの意。

(九七) 遙々と頭韻。

(九八) 柴と重韻。

大原御幸

くをとりかはし、其儘うみに入りにけり。下へ其時二位殿にぶ色のふたつきぬにねりばかまのそばたかくはさんで、我身は女人なりとても、かたきの手にはわたるまじ。主上の御供申さんと、安徳天皇の御手をまり舟ばたにのぞむ。いづくへ行くぞと勅定ありしに、此國と申すに逆臣おほく、かく淺ましき所なり。極樂世界と申して、目出き所の此浪のしたにさふらふなれば、みゆきなしたてまつらんと、泣々奏し給へば、扱は心得たりとて、東に向はせ給ひて、天照おほんがみに御暇申させたまひて、同下へ又十念の御爲に、西に向はせおはしまし、女上へ今ぞしる、同へみもすそ河のながれには、浪の底にも、都ありとはと、是をさいごの御製にて、干尋のそこにいり給ふ。みづからも、續きて沈みしを、源氏の、武士取りあげて、かひなき命ながらへ、二たび、龍顔に逢ひたてまつり、ふかくの涙に、袖をしほるぞ恥かしき。

下へいつ迄も、御名残はいかで盡きぬべき。早還幸とすすむれば、く、おこしをはやめ遙々と、寂光院を出でたまへば、女上へ女院は柴の戸に、同へしばしが程は、見送らせ給ひて、御庵室にいりたまふ、御庵室にいりたまふ。

追 記

解説四〇・四一頁に述べた車屋本の中、高安六郎氏の所蔵本は、今回の戦禍で、全部烏有に歸した。また、吉川元光氏蔵本中、曲舞三十番附き百十二番本(寫本)、整版七十一番本、同三十五番本の三種は、江島伊兵衛氏の所蔵に歸し、百二十番本(寫本)は目下行方不明。

補 正

- 〇一一一頁六行「同下」は原本通りだが、不必要の註記故、省いた方がよかつた。
- 〇一一五頁頭註六「浪と霞とは縁語で尾韻」を補ふ。
- 〇一八五頁頭註五「澄める」は「住める」に通じ「宮所」の縁語を補ふ。
- 〇一八五頁頭註六「花は源氏の寵愛を意味する」を補ふ。
- 〇一八七頁頭註九「淺芽が原・」は「淺芽が原・草葉・」と補正。
- 〇一八八頁頭註三〇「子を慕つて伊勢まで母が連れ添つて」は「伊勢に行つた人のことまで誰が思つてくれようかとの歌を詠みながら、子に連れ添つて母が伊勢まで」と訂正。
- 〇同右「川波の」は「身(水)」の序詞。「かけて」と「川」は縁語であり頭韻でもある。「桂」も頭韻。「行方」は「行く」の掛詞を補ふ。
- 〇一八九頁頭註三五「名の御息所」には「のみ」を掛けたを補ふ。
- 〇一九〇頁五行「哀」に「感動詞あはれの掛詞」と註をつける。
- 〇一九〇頁頭註五三「身」は「露」を受けるを補ふ。
- 〇一九〇頁頭註五四「風情の」は「風情の小柴垣があるが、その」と補正。
- 〇二〇三頁頭註二「霞んで」は「ほのかに霞んで」と補正。
- 〇二〇八頁頭註四九「六感官」は「六感官(六根)」と補正。
- 〇三〇一頁頭註六二「籠太鼓頭註一八参照」を補ふ。
- 〇三〇四頁頭註八「悲しくて」を「悲しく涙を催して」と訂正。
- 〇三〇五頁頭註一五「浮」の縁語を補ふ。
- 〇三〇七頁五行「うし」に「牛に通じ車の縁語」と註す。
- 〇三〇七頁註三四「鹽籠」「賤」「鹽木」は頭韻を補ふ。
- 〇三〇一頁頭註六七「枕は戀の縁語」を補ふ。
- 〇三一頁四行「爰」に「これは」と頭韻」と註す。
- 〇同右「行平」に「雪に通じ松の縁語」と註す。
- 〇三一頁終行「あけて」に「關」の縁語」と註す。